

---

# ファンタジアナイツ

氷上 悠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファンタジアナイツ

### 【Nコード】

N8928D

### 【作者名】

氷上 悠

### 【あらすじ】

オンラインゲーム「ファンタジアナイツ」のプレイヤーの神代樹。樹はちょっとした騒動により、メインキャラの使用を自粛し、2ndキャラクターでゲームをプレイすることになる。そんな中、エルナというプレイヤーに出会い・・・

## ブローグ

「さて、どうするかな・・・」

パソコンモニターの前に座り、少年は独り呟く。モニターに映し出されているのは、オンラインゲーム『ファンタジアナイツ』のゲーム画面だ。そこには彼　　神代　樹の操作キャラクターが、街の入口付近のフィールドに、一人座っていた。キャラクターの下には『ラシル』の文字。これが樹のキャラクターネームだ。樹は少し途方に暮れていた。とは言っても、何をしていたかがわからないなどといったことではない。樹がこのゲームを始めて、かれこれ一年近くは経つ。古参とまでは行かなくても、そこそこ古株のプレイヤーだ。やりたいことは色々あるものの、することがないということはなかった。それでは、一体何が原因となっているのか？それは彼の今の環境にあった。

数日前のことだ。樹は彼の所属するギルドのメンバー達と、ちょっとした騒ぎを起こしたのだった。これにより、周りに結構な迷惑を掛けることとなり、それまで使っていたキャラクター、及びギルドの活動を自主規制することとなったのだった。本来ならば、ギルドの解散や、キャラクターの削除となっても不思議はないのだが

　　実際周囲ではそれぐらいの騒ぎになっていたのだが　　樹達は、自分たちの一方的な過失ではないとし、しばらくの間、自主規制となったのだ。もともと、樹からすれば自主規制すらする気はないのだが、流石にこれ以上反抗すると、ゲームマスターまで出てくるような事態に発展しかねない。そうなると面倒なのは目に見えているので、渋々ではあるものの、メンバー達の意見に賛成したのだった。そんな訳で、現在では以前に作成して、しばらく放置していた、2ndキャラクターのラシルを使用してゲームをプレイしているのだった。そして、この現状が樹を途方に暮れさせる原因でもあるのだった。キャラクターに不満はほとんどない。育成関係に面倒

臭さを感じはするものの、苦になるほどではないし、装備だって充実しているほうだ。むしろ困っているのはソロプレイということだ。元々、樹は社交的な方ではない。そのため、ソロプレイがメインと言ったほうがいいだろう。だが、それもギルド内でのチャットをしながらという前提の下でだ。それもなくなった今となっては、物足りなさを感じてしまい、ダンジョンに行ってはすぐに戻ってくるということを繰り返していた。ギルドのメンバーを呼ぼうにも、自粛ということで一旦ゲームから離れている者たちを呼ぶわけにもいかず、かといって、自分もゲームから離れようとするも、お金を払っている以上、アカウントの有効期限が残っている現状ではそんな気にもなれず、こうして、毎日途方に暮れながらゲームをプレイしているのだった。因みに、オンラインゲームである以上、知らない者達とパーティーを組んで冒険ということも、勿論可能だ。むしろそれこそが醍醐味と言ってもいいだろう。MMORPGに

分類されるこのゲームなら尚更だ。だが、樹はお世辞にも社交性が高いとは言えず、人見知りもするため、そういったパーティーには数えるほどこしか参加したことがなかった。そのため、現状を少しでも改善するために、そういったパーティーに参加するという選択肢が存在しないの言うまでもない。

「やっぱオレも少し離れるかな・・・」

やはり、モニターを前に独り呟く。結局のところアカウントなんだと言っても、今ひとつやる気が起きないのは、やはり友人の存在だ。彼らが居ないのなら、自分も離れてみるのもいいかもしれない。そう思い始めたころ、一人のプレイヤーがラシルの側を通りかかる。ここは街の入り口付近だ。それ自体は珍しいことではない。だが・・・

「あんだ、最近いつもこの辺に一人でいるね。もしかして、ギルドも入ってないとか？」

いきなり声を掛けられる。もつとも、ラシルに樹というプレイヤーがいるように、このキャラクターにも、当然プレイヤーはいる。

だからこんなことが起こっても不思議ではないのだが。

ここ数日、ダンジョンに行っては、この場所に一人でしばらく座り、またダンジョンへの繰り返しだ。しかも、ダンジョンにいるよりはここで座っているほうが遥かに長かった。これなら、タイミング次第では延々と一人寂しく座っているだけのように見えなくもない。毎回帰ってくる場所を変えるべきだったか？軽く悔やみながらも相手の名前を確認する。どうやら、この女性型キャラクターは『エルナ』というらしい。だが、樹には見覚えはない。友人の内の、だれかの別キャラクターの可能性もあるが、十中八九初対面だろう。「見てのとおりだけだ」

素っ気無く返す樹。このゲームは相手のキャラクターにカーソルを合わせることで、相手の名前とギルドに所属していれば、そのギルド名が表示されるようになっていた。そんな意味も含めての返答だった。

「だったらウチのギルドに入らないか？」

「はあ!？」

突然の誘いに戸惑う。普通ギルドとは、仲のいい者達が集まったり、同じ目標を持った者達が集まるところだ。無作為に募集を掛けて、と言うことも勿論なくはないが、少なくとも、こんな唐突に誘われるものではないだろう。少なくとも樹にはそう思えた。

「いきなりわけわかんねえ。それじゃ」

相変わらず素っ気無く返し、これ以上用はないと言うように、キーを叩きラシルを立ち上がらせる。たしかに、ラシルはギルドには入っていない。彼女のギルドに入ることも可能だ。だが、それは今だけのことだ。しばらくして、他のメンバーが戻ってくれば、樹は元居たギルドに戻らねばならない。そういう意味でも、樹はこのギルドに入るわけにはいかなかった。

樹はキーボードの横に置いてあったコントローラに手を伸ばす。そして、そのままラシルを移動させる。特に当てはなかったが、気晴らしにダンジョンにいくのもいいか、などと考える。それに、こ

ここに戻ってこなければ会うこともほとんどなくなる。

「あ、ちよつと待った」

そんなセリフの後に、ギルドの勧誘ウィンドウが表示される。『  
空の円舞曲<sup>フルツ</sup>』。それが彼女の所属するギルドの名前だった。

あのなあ・・・

そうタイピングして、エンターキーを叩く。が、その寸前にある  
ことに気づくがもう遅い。キーを押す指を止められるはずもなく、  
そのまま押し込まれる。そしてウィンドウには『ギルド「空の円舞<sup>フル</sup>  
曲」に加入しました』の文字。それと「あのなあ・・・」と流れる  
チャットの文字。エンターキーで受諾出来ることを忘れていた訳で  
はない。これは樹の癖だった。そして、樹がよくするミスの1つで  
もあった。

「すまん、すぐに抜ける」

そう言った直後、他のメンバーもラシルの加入に気づいたのか、

「お、新人入ったんだ」

「よろしく」

などと、次々に声を掛けてくる。お世辞にも社交性は高いとは言  
えず、人見知りもする樹であつたが、実は結構お人好しだったりも  
する。そのため、このまま間違いでしたで、抜けてしまうのも少し  
気が引けた。我ながら面倒な性格だ。そんなことを思いながら少し  
苦笑する。

「実は少し訳ありで、すぐに抜けないといけなくなる。だから、こ  
のギルドには入れない」

事情を話して抜けることにした。いきなり抜けるよりはいいだろ  
うと、樹なりの配慮だった。ただ、包み隠さず、というわけにはい  
かないが。そもそも、自粛中となつている身としては、ヘタに話し  
て、話が広がり面倒事になるのだけは避けたかった。

「それならそれでかまわないさ。まあ、細かい事情はあとで聞くと  
して。とりあえず、私はエルナ、このギルドのマスターだ。よろし  
く」

だが、まるで後のことなど関係ないと言っている様だった。一瞬反論しようとする樹だったが、折角だし、このまま楽しんでみるのもありなのではと思う自分もいることに気づく。たしかに、抜けることなど、そのときになって考えればいい。これはゲームなのだ。楽しまなければ損だろう。そう考えると、意地でも抜けようとする自分はいなくなっていた。だから、

「ラシルだ、よろしく」

そう答えていた。

こうして、樹は空の円舞曲ワルツのラシルとして、ゲームを続けることになるのだった。

## プロローグ（後書き）

はじめまして、氷上 悠と申します。初投稿で、拙い文章なファンタジアナイツを読んでくださってありがとうございます。しばらく色々書いていくつもりなので、オリジナルのオンラインゲームで展開する樹たちの話にしばらくお付き合いくださいませ。



## Chapter 1 - 1

ファンタジアナイツ 現在数多くあるオンラインゲームのひとつ、それがこのゲームだ。ゲーム人口は多すぎず、かといって少なすぎるわけでもなく、中規模と言ったところだろうか。だが、公式の発表を見る限りでは、着々とアカウント数は伸びているようだ。その様子はいずれ有名タイトルのオンラインゲームと肩を並べることになるでは、と思わせる。そんな有名タイトルに一步遅れる形になっているこのゲームだが、周囲の認知度だけなら、有名タイトルにも引けを取らなかった。正式サービスが開始されたころ、高いアクション性と特徴的なシステムから、周囲の注目を浴び、様々な雑誌で紹介されることとなった。そのため、ゲームユーザーのほとんどが、一度はこのゲームのタイトルを聞いたことがあるだろう。だが、高いアクション性故に、パソコンに高スペックを要求されることと、オンラインゲームであること オフラインでのゲームが主流の現状では、どうしてもみんな、一步引いてしまうのだ があり、爆発的に大ヒットというには至らなかった。だが、先にも述べたように、アカウント数は着々と伸びている もつとも、アカウント数とゲーム人口はイコールにはなりえないのだが 辺り、注目度の高さが窺える。そんなゲームのプレイヤーの中に神代 樹の名もあった。

辺りは薄暗い洞窟のような場所だ。時折、呻き声の様なものが聞こえてくる。そんな場所にラシルの姿があった。ギルド『空の円舞曲<sup>フル</sup>』に入って、既に2ヶ月近くが経っていた。2ヶ月前、ギルドに入ったあの頃と同じように、ラシルは一人、洞窟内で座っていた。ただ、ラシルの心境や、周囲の環境はあの頃とは全然違うものにな

っていたが。

「あ、そだ。ラシル、グレートソードって持ってない？」

ギルドのメンバーの一人、アルタスがギルドチャットで問いかける。環境の違いの最たるものの一つがこのチャットだろう。空の円舞曲に入るまでは、会話でチャットが賑わうことなどなかった。

「グレートソードならどつかに売ってなかったっけ？」

「アレ、ランク3の武器だって」

このゲームには武器や防具には5段階のランクが設定されている。そして、店で売っているものはランク2までの装備で、それ以上はモンスターからのドロップ（落とす）アイテムや、イベントなどでの作成でのみ入手可能となっている。ただし、他のプレイヤーが商店やオークションで販売している分は例外だが。ただ、アイテムの入手が運に左右されることから、どうしても多少の値は張る事になる。とは言っても、ランクや入手のしやすさ、特殊効果などにも左右されるので、ランク3以上の武具と言っても、値段はピンキリなのだが。

「あとで、倉庫探してみよう」

ラシルはそう返事をする、立ち上がる。減っていたHPも回復し、プレイヤーである樹も、疲労感が抜けたので狩りを再開させようとしたのだった。その時、複数の魔物の物と思われる呻き声が聞こえてくる。丁度いいことに上手く湧いてくれたのだろうか？そんなことを思いながら、座っていたところを中心に、適当に移動してみる。声だけで、魔物のいる方向を見極めることは出来ないため、こうするより他に手はない。

少し移動すると、すぐに、先ほどの声の主と思われる、魔物を発見出来た。だが、ラシルがこの魔物に攻撃することは出来なかった。既に一人のプレイヤーが交戦中だったのだ。交戦中のモンスターに攻撃を仕掛ける、いわゆる横殴りと呼ばれる行為は、ノーマナーとされている。勿論ラシルもそれは承知の上だ。攻撃が仕掛けられないのはそのためだ。交戦しているプレイヤーは女アーチャーだろう

か。このゲームはいくつかのクラス（職業）があり、そのクラスはそれぞれ3段階に分かてている。アーチャーは1段階目のクラスだ。ただ、このゲームは転職はいつでも可能なので 当然ながら上位クラスへの転職は条件がついてくるが クラスと強さは結びつかない。このプレイヤーも別のクラスからアーチャーに転職したプレイヤーなのだろう。ラシルはそう思いながらすこし眺めていたが、どうも様子がおかしい。アーチャーのプレイヤーは攻撃する様子が一切ないのだ。否、ひたすら逃げて、距離が開いたときに思い出したかのように攻撃していた。この方法は、遠距離攻撃が出来る者の特有の戦い方としてはたしかに存在するが、それにしては、このアーチャーはかなりお粗末だ。そしてラシルが気になったのはそのダメージだ。基本的にはMiss表記な上、たまに命中したかと思うと今度は0の表記。もしかして、このプレイヤーは見た目通りの強さなのではないだろうか？そんな考えが樹の頭をよぎる。このダンジョンはそこそこのレベルのダンジョンだ。レベル60のラシルですら、現状の装備と、樹のプレイヤースキルがなければ、ソロプレーなどまず難しいだろう。とはいえ、少しのミスが命取りになり得ることに変わりない。基本的に不死系のモンスターが多く、この系統のモンスターは総じて足が遅いとは言え、アレでは敵に捕まるのも時間の問題だろう。モンスターは5匹。出来ることなら、お相手はご遠慮願いたいところだ。

「・・・仕方ないか」

樹はそう呟くと、スキルウィンドウを開く。

スキルは大きく分けて、二種類に分けられる。一つはアクションスキル。魔法や、特殊な攻撃方法の総称だ。そしてもう一つはサポートスキル。覚えるだけで、効果が発揮されるものだ。このゲームでは、プレイヤーそれぞれに五つのスキルスロットと呼ばれるものが、用意されており、一つは現在のクラスのクラス、残り四つを他のクラスで覚えた、アクションスキルやサポートスキルを自由にセレクトすることが出来る。これにより、プレイヤーによって様々な個

性を出せるのもファンタジアナイツの売りの一つだった。

回復と支援をメインとする白魔法とサポートを3つ。これがラシルの基本スタイルだった。この内、白魔法を攻撃や障害魔法をメインとする黒魔法に入れ替え、スキル使用のショートカットにいくつか登録する。そして今度はチャットに文字を打ち込み、アーチャーのプレイヤーを追いかける。

「攻撃しないでそのまま逃げろ」

モンスターから少し離れた位置から、相手のプレイヤーに話しかける。その直後魔法の詠唱を開始する。アーチャーのプレイヤーは、ラシルの行動を察したのか、または攻撃する余裕がなかったのか、攻撃する素振りは見せずそのまま移動する。そして、少しの間を置いて、ラシルが唱えた魔法『ファイアーボール』が炸裂する。丁度、敵の群れの中心近くで、魔法が炸裂し、アーチャーのプレイヤーを襲っていた魔物たちは今度はラシルへと、ターゲットを移す。ここでもう一発と、行きたかったが意外と距離は離れていない。恐らく詠唱中に追いつかれる。瞬時にそう判断すると、先頭の一体に素早く近づき、攻撃を2発叩き込む。その後バックステップで距離を取った瞬間、後続のモンスターからの攻撃が、今までラシルが居た地点に繰り出されていた。これを見越してのバックステップだ。

（さて、どうするか・・・）

ラシルは少し迷っていた。先ほどの攻防で、後続の敵が追いついてしまい、ちよつとした塊の様な状態になっているのだ。こんな状態で、攻撃に行けば、敵の一斉攻撃の前にあつさり撃沈するだろう。かと言って魔法では追いつかれる。いや、それ以前に、スキルを使うためのSPがさっきの一発でほとんどなくなってしまっている。

スキルポイント

あと1発は撃てるものの、それではこのモンスター達を倒すには程遠い。では他のスキルではどうか？他のスキルを再セットする時間はないので、現在使えるのは、ラシルの現在のクラスのス��のみだ。ラシルは現在忍者だ。だが、つい先日忍者に転職したばかりなのだ。そのため、スキルはほとんどが使えない状況だ、それなら、

魔法で戦った方が賢明だろう。『詰み』そんな言葉が思い浮かぶ。  
このままでは八方塞がりだ。

(・・・試してみるか)

少し考えた後、すこし長めに敵との距離を取る。敵がついて来ているのを確認し、魔法の詠唱を開始する。距離もSPもギリギリな一種の賭けだった。

モンスターとの距離は若干の余裕を持ち、『グラビティ』の魔法が発動する。その後、ラシルはモンスターのターゲットが自分から離れない距離を保ちつつ逃げ回る。少しすると、状況に変化が現れる。グラビティの効果によりモンスターの一体が塊から遅れだしたのだ。こうなれば、あとは簡単だった。追ってくるモンスターの塊に気をつけながら、集団からはぐれたモンスターと一対一で戦っていけばいいだけだ。モンスターの集団から十分に引き離れたのを確認すると、そのモンスターの元へと近づき、連続で攻撃を叩き込む。3発、4発と攻撃を仕掛けた後、敵の反撃が来る。しかし、ラシルはそれをあっさりとかわすと、カウンター気味にまた攻撃を重ねていく。これによりまずは一撃破。この頃には残り4体となったモンスターの集団も間近に迫っていた。あとは、また距離を取り同じ事を繰り返すだけだった。

10分後

ラシルは、5匹のモンスターを全て倒しきっていた。だが、SPは空<sup>から</sup>と言っても過言ではないほど減り、1つのミスからHPも大きく削られ、最早瀕死の状態ではあった。

(今襲われれば間違いなくやられるな)

そんなことを思いながら樹は苦笑する。苦勞して、あの絶対的に不利な状況を切り抜けた末にやられたとなつては流石に洒落にならない。

アイテムを使いとりあえずHPを回復させると、先ほどのアーチャーを探す。既にどこかに行ってしまっただろうか？そんな考えが浮かぶが、それはすぐに否定される。探し始めて間もなく向こうか

らこちらに近づいてきたのだ。恐らく先の戦闘を遠目に見ていたのだろう。

「危ない所をありがとうございます」

「いや、気にするな」

チャットに慣れていないのか、少し間を空けて彼女は礼を言う。

『ハルカ』それが彼女の名前だった。

「それより、アンタのレベルじゃここは厳しいぞ。戻ったほうがいいんじゃないか？」

相変わらずのお世辞にも愛想がいいとは言えない態度で忠告する。ダメージを与えられない、ハルカの現状を考えれば、尤もな意見だ。そもそも彼女はどうかやってこんな所まで来たのだろうか。ふと樹の脳裏にそんな疑問が浮かぶ。見たところほかにパーティーメンバーがいる様子もない。そしてこの場所は地下3層目。3層目に限定すれば、前述の通り、レベル60で、そこそこに装備が揃っているラシルでもやられる危険性がある場所だ。1層目や2層目はここに比べればまだマシとは言え、初心者がソロで来られるような場所ではない。

（逃げ回れば無理でもないか？）

このダンジョンは街の教会の地下に広がるダンジョンだ。そのため、街を散策している際にうっかりと迷い込む初心者はめずらしくない。彼女もそんなプレイヤーなのだろう。そしてこのダンジョンは初心者には敷居が高く、普通は簡単にやられてそれで終わるのだが、彼女の場合は上手く逃げ回ることが出来、モンスターに囲まれることなく、奇跡的にここまで来られたのだろう。樹は内心そう納得する。

「他の方と一緒に来まして、その方達を探さないといけないんで・  
」

ハルカのこのセリフに一瞬固まる樹。パーティー単位で動いているとは予想外だった。大抵パーティーとは同じレベル帯で組むものだ。つまり集団で逃げ回り、ここに来たことになる。なんともはた

迷惑なパーティーだ。そこまで考えて、自分がかなりおかしな考えになっていくことに気づく。よくよく考えてみれば、全員が初心者ということはまずない。むしろ、他のメンバーは全員経験者という確立のほうで遥かに高いだろう。それならこんな状況になることはまずないはずだ。だが、そうだとすると、彼女の言うことと矛盾することになる。考えても答えは出ない。樹はこのことは一旦置いておくことにする。

「それで、他のやつらはどこにいんの？」

「それが、ここに着いたときにログアウトしまして・・・」

ますます要領を得なくなる。パーティーで移動して、ここに着いた途端ログアウト。この様子から察するに恐らく全員だろう。樹にはなにをしたいのかさっぱりわからなかった。

「・・・とりあえず、最初から話してくれ」

話が全く見えなくなってしまうたので、はじめから聞くことにした。

ハルカの話はこうだった。

ハルカはこの日初めてこのゲームをプレイした初心者だ。普段ゲームなどしないため、慣れない操作に苦戦しながらも、なんとかレベルを少し上げ、街で休んでいるときにある2人組みに声を掛けられたようだ。

「初心者向けのいいダンジョンがある」

どう見てもかなり怪しい。オンラインゲームの経験者なら、この手の輩はまず相手にしないだろう。とは言え、ハルカは初心者。あまり深くは気にしないまま、この2人の誘いに乗り、街の教会の地下へと進む。1層目、2層目は彼らの護衛もあり、簡単に進むことが出来た。そして3層目。ここに辿り着いたときに、彼らは少し用があると言いだしたのだ。そして、すぐに戻るからと言い残し、そのままログアウトしたのだ。言われた通りにそこで待つハルカだったが、5分経つても10分経つても一向に戻ってくる気配はない。どうしたものかと途方に暮れていたとき、1匹のモンスターが近づ

いてくる。このままいればやられるだろう。そう判断したハル力は相手を攻撃するが、表示はMiss。2発、3発と続けるが表示はやはり全てMiss。そうしている間に敵との距離はほとんどなくなっている。咄嗟に移動をし、距離を開ける。そして再び弓を2連射。1発目は当たらなかったものの、2発目は命中する。だが、ダメージは0。自分では倒せない。ハル力はここで初めてそのことを悟る。本来ならばこの場所で待っていなければならないのだが、流石にそうも言っていない。後で戻ればいい、そう判断したハル力はモンスターから逃げることにする。一定の距離を開ければ、モンスターのターゲットは外れるのだが、今日始めたばかりのハル力が当然そんなことを知るはずもない。ハル力にはどうすればいいのかわからず、距離が開けば攻撃し、なんとか倒そうと試みる。だがダメージを与えられる様子はない。そんなことを繰り返すうちに1匹、また1匹と追ってくるモンスターは増え、ラシルと出会う頃には5匹に追いかけられる状況になっていたのだった。

どこから突っ込めばいいのだろうか？樹は一瞬そんなことを考える。（いや、待て。今はそっちじゃなくて）

突っ込みを入れたい衝動を抑え、なんとか言葉を選ぶ。

「多分、そいつらもういないぞ。探すだけ無駄だと思っただが・・・」

最近ネットで噂になっている初心者に対する悪戯。初心者プレイヤーを高レベルのダンジョンに連れて行き、そこに放置すると言うものだ。今回のケースはまさにそれだ。樹も小耳に挟んだ程度には知っていた。尤も、自分がその被害の現場に居合わせることになるとは思っていなかったが。しかし、どうにもわからないのが相手の真意だ。この手の悪戯は大抵は、金品を巻き上げるか、初心者プレイヤーの反応を見て楽しむことだろう。この場合なら後者だろうか？だが、ログアウトしてしまっているのなら、当然反応など見られるはずもない。

「そつえば、パーティーは組んでないのか？」



「パーティー……ですか？」

どうやらよくわかっていないようだった。

「えっと……要請とかこなかったか？」

「いえ、特には……」

パーティーを組んでいるなら、あとで難癖をつけて金品を巻き上げる、ということもありえるのだが、その様子もないようだ。そもそも、初心者からアイテムやお金を奪い取ったところで、ほとんど足しにはならない。そうになると、ますます相手の真意がみえなかった。

「あの、初対面の方にこんなことを頼むのも失礼だとは思うのですが、もしよければ、あの方たちを探すのを手伝っていただいてもいいでしょうか？」

これからどうするか、悩んでいたところに、ハルカの申し出。彼女は律儀な性格のようだし、恐らく何を言っても無駄だろう。それに、こんなところに放置しては、彼女の連れの2人組みと変わらない。

「ああ、かまわないよ」

だから、承諾することにした。

まずハルカをパーティーに誘う。これで、ハルカのHPと現在地が確認出来るようになる。とは言え、ハルカが確実に一撃でやられてしまふ以上、HPが見られることに意味はない。はぐれたときの保険程度にはなるだろうと考えての処置だ。今度はスキル。サポートスキルの1つを外し、代わりに先の戦闘で外した白魔法を入れる。そして、最後にショートカット。回復と支援魔法をショートカットに登録し、これで準備は完了する。だが、まだ問題はあ。まずハルカが一切戦力にならないことだ。これに関しては逃げるとしか言いようがない。そして、ラシル自身もそこまで強くはないということ。ソロで狩るならまだしも、ガード、しかも一切攻撃を喰らわせ

るわけにはいかないとなるとかなり厳しい。1匹、2匹ならまだ引き受けられるものの、それ以上となるとどうにもならない。更にはモンスターの来る方向次第では、どうにかしようもない。この辺はもう運に頼るしかなかった。

「とりあえず、逃げることを考えてくれ」

出発前にそれだけは念を押しておく。下手に攻撃されて、ターゲットが移ろうものなら余計に厄介なためだ。

ラシルを先頭に、この階層の入り口を目指して移動する。やや距離があるため、無事辿り着けるか微妙なところではあった。少し移動したところに早速モンスターを発見する。数は1匹。問題ない。それを確認すると、迷うことなくモンスターに駆け寄る。一気に距離を詰めて、まず一撃。モンスターが攻撃モーションに入ったのを見て、一旦距離を開け、攻撃が終わったところに再び攻撃をしかける。先の戦闘でも見せた攻撃方法だ。そして、これが、ラシルの主な攻撃パターンなのだ。

スキルとは別にアビリティというものが存在する。これは、攻撃は出来ないが、特殊な移動や行動が出来るもので、複数の中から、2つ登録できる。その中でも、前後左右に瞬時に移動出来る、『フリーステップ』をラシルは好んで使っていた。先ほどから、瞬時に移動しているのもこのアビリティによるものだ。

あっさりとモンスターを撃破すると、そのまま先に進む。少し進むと再びモンスター。だが、これも難なく撃破。移動を再開しようとしたその時、ハルカの後方からモンスターが接近してくるを確認する。大鎌を携え、フードを被った死神を連想させるモンスターだ。(また厄介なのが・・・)

攻撃範囲が広く、攻撃速度もなかなか速い。そのため、攻撃が避け辛いのだ。しかも、こちらの攻撃もたまに当たらず、この階層では樹のもつとも苦手とするモンスターだ。普段なら放置するところだが、このまま放置して、別のモンスターとの戦闘中に偶然後ろから、という事態は避けたかった。尤も、倒したモンスターは一定時

間経過すると、マップのどこかにランダムで復活するため、ここで倒したところで、完全に安全とは言えないのだが、それでも、放置したほうが遥に危険だった。

モンスターとの距離はまだある。それならと、ラシルは呪文の詠唱を開始する。その行動にハルカは一瞬立ち止まるが、敵との距離が近いのを見て、そのままラシルの横をすり抜ける。それとほぼ同時に『グラビティ』の魔法が発動する。これにより、モンスターの移動、及び行動が遅くなる。回避能力も下がるので、戦いやすくなるはずだ。だが、実際にはそうはいかない。ある程度近づき、フリーステップで一気に距離詰め一撃。だが、この時点で既に敵は攻撃モーションに入っている。そのまま少し後ろに下がってから距離をフリーステップで開ける。その直後、敵の大鎌が振り下ろされる。だが、それで終わらない。そのまま鎌が切り返され、再びラシルに襲い掛かる。厄介なことに、切り替えしでは攻撃範囲が前方に少しではあるが伸びるため、ギリギリの距離で回避をしている、ラシルの位置では当たるのだ。だが、ラシルはフリーステップの硬直ですぐには動けずにいた。時間にしてコンマ数秒だが、現状ではこれが命取りになりかねなかった。樹はボタンを連打し、なんとか、ギリギリで切り返し回避する。最初にグラビティの魔法がかかってなければ恐らく回避は不可能だっただろう。だが、今度はモンスター側に硬直が発生する。しかも、魔法の効果で、若干延長されている。勿論それを見逃すラシルではない。一気に距離を詰め攻撃を叩き込む。1発、2発、3発……。こちらの攻撃で、更に硬直が延長される。だが、ラシルも無限に攻撃出来るわけではない。攻撃回数はクラスにより異なるが、攻撃の最後には当然プレイヤー側にも硬直が発生する。そうなれば、逆に反撃に会うのはラシルの方だ。だが、そんなのはお構いなしと言わんばかりに攻撃を重ね、攻撃回数全ての攻撃を繰り出す。そしてそのまま、フリーステップで硬直をキャンセルし、そのまま距離を取る。あとはそのまま後ろに下がり、敵の攻撃をやり過ごす。そして再び、距離を詰めて、攻撃。4回ほ

ど繰り返したところで、ようやく撃破する。無傷で倒せたのは樹にも意外だった。

（でもレベルは上がらないんだよね・・・）

ラシルからすれば結構上位の狩場になるので、経験値は結構入っているのだが、それもすぐにレベルアップと言っわけにはいかない。勿論それは樹も理解しているのだが、やはり、苦勞して倒して、何もなしでは寂しさを感じていた。因みに、モンスター側にミス判定があるように、プレイヤー側にも当然ミス判定は存在する。しかもラシルはスピードを重視したキャラクターなので、回避能力は結構高いほうだ。だが、いかに回避能力が高いと言っても、このダンジョンではせいぜい5割と言った所だろうか。そのため、あそこまでのプレイヤースキルを駆使して戦っているのである。勿論適切な狩場に赴けば、こんな戦い方をしなくていいのは言うまでもない。

先ほどの戦闘からはモンスターにも遭遇せず、驚くほど順調に進んでいる。入り口まであと三分の一のぐらいの距離だろうか。だが、そこに問題が発生する。モンスターだ。しかも1匹2匹ではない。7匹近くのモンスターが通路を占領してしまっているのだ。ここを避けるとすれば、かなり戻って大きく迂回するしかない。とは言え、そんなに広くはない通路を、戦闘を避けて通るのは不可能だ。

「どうかしたんですか？」

後ろに居たハルカが問いかける。どうやら彼女からの視点ではまだこの状況が見えないらしい。

「モンスターハウスになってる」

モンスターハウス・・・モンスターが1ヶ所に大量に固まっている、つまりは現状のようなことを表す言葉だ。ハルカは初めて聞く言葉だったが、それぞれの単語からその意味を理解していた。

「しょうがない、迂回するか」

流石に、この数はどうにもならない。ラシル達は来た道をまた戻るのだった。

なんとか3層の入り口まで辿り着く。途中意外と時間は掛かってものの、通路で迂回路を取るために、道を戻ってからは特に何事もなく進むことが出来た。だが、その場所にハル力を連れてきた2人組みの姿はなかった。予想していたことだったが、いざとなると、何を言えればいいか、口を閉ざしてしまふ。2人の間に少しの沈黙が訪れる。

「だれもいませんね」

沈黙を破ったのはハル力の方だった。だが、ラシルは何を言っていないかわからず口を閉ざしたままだ。

「帰っちゃったんでしょか・・・」

「・・・かもな」

肯定する。そして、その後に再び訪れる沈黙。気まずい。樹の頭の中はいつのまにかそれだけでいっぱいになっていた。なにか声を掛けたほうがいいのだろうか、なにも思い浮かばない。

「わざわざ、突き合わせちゃってすみませんでした。それじゃ、私そろそろ戻りますね。あ、今度お礼しますね」

「ちよつと待った」

咄嗟に呼び止める。だが、その先は続かない。その時、丁度チャットウィンドウにエルナの名を見つける。そして閃く。

「明日暇か？」

「え？ええ、まあ・・・」

突然の質問に戸惑うハル力。いきなりこんな質問をされれば誰だっただろう。

（これじゃあ、ただのナンパだ）

変な聞き方をしたことに軽く自己嫌悪しつつ、先を続ける。

「ギルド、紹介してやるよ。それなら、怪しいやつにも引つかからなくなるだろうし、色々と聞けるだろ」

相変わらずハル力はラシルの意図が見えないといった様子だった。樹自身もそれに気づいてはいたが、構わず続けることにする。

「オレ明日は学校だから夕方ごろには連絡つくと思うから」

そう言っただけにキャラクターアドレスを送る。が、一向に受信の様子はない。突然のことによほどパニックになっているのだろう。

「OKクリック、あとオレにも送信」

ラシルの言葉に反応して、反射的に受信を承諾する。そして、ハルカもラシルにキャラクターアドレスを送信する。

「これで連絡が取りやすくなったから」

そう言っただけのことを説明しておく。ここまでの様子からして、どこまで理解しているかわかりかたのだが、自分からも連絡できるので、この機にしないことにする。更に言うなら、ラシル自身も先ほどのナンパのような誘いにさっきまでとは別の気まずさを感じ、早くこの場を後にしたいというのもあったのだ。

「じゃあ、オレそろそろ落ちるわ」

「は、はい」

本来ならば、街まで送ったほうがいいのだろうが、先ほど、自分で帰ろうとしたことと、目的を達成したので、仮にやられてしまっても問題ないだろうということで、そのままログアウトすることにしたのだ。勿論、前述した気まずさが一番の理由だったのは言うまでもない。

（アホだ、オレ）

パソコンの電源を落とし、ベッドに入ってから更に自己嫌悪に陥る樹だった。

## Chapter 1 - 1 (後書き)

すっかり遅くなりました。微妙に書く時間がなくて・・・。

最初の予定ではここまですべてをプロローグに入れる予定だったのですが、1話に持つてきて正解でしたねえ。長すぎ。

途中主人公のことを樹と表記したり、ラシルと表記したりでややこしくてすいません。一応、思考関係は樹、行動関係はラシルとしたのですが、ネットとリアルで完全に分けたほうがよさそうですねえ。他のキャラのリアルのことは表記してないし。反省反省

次回以降もまたしばらく間があくとは思いますが、気長にお待ちくださいませ。あとがきも次回辺りかなはっちゃけてみるかなww

## Chapter 1 - 2

樹の家から徒歩で15分ほど。そこにこの場所があった。私立星しりつせい想学園そうがくえん。2 - Bと書かれた教室にある自分の席で、樹は一人項垂れていた。いや、この場合寝ていたと言ったほうが正しいのかもしれない。尤も、HRホームルームが始まる前の喧騒の中、意識が沈んでいくわけもなく、ただ机の上に伏せているだけの状態なのだが。

昨夜、ログアウトしたあと、布団に入りはしたものの、静けさの中ではそれまで以上に、気恥ずかしさと後悔が押し寄せ、更に、ギルドメンバーへの紹介もしなければならぬことに気付く。そしてよくよく考えてみれば、ギルドの入団の条件なども知らない。樹自身はマスターであるエルナに誘われた身なので今まであまり気にしていなかったが、こうして考えてみると少し軽率すぎたかもしれない。だが、今更どうなる訳でもなく、

(まあ、なるようになるか)

そう開き直り何も考えないことにしたのだが、静かになればなるほど色々なことが頭の中を駆け巡り、結局ろくに眠ることも出来ず、気晴らしにとゲーム機の電源を入れ、しばらくプレイし、いい具合に眠気が出てきたころには既に明け方だった。恐らく母親に起こされなければ、昼過ぎぐらいまでは寝ていただろう。

「おはよう、マイマスター」

不意に声を掛けられる。そこには見知った顔があった。橘 湊斗たちばな みなと。樹とは1年のところからのクラスメイトで、彼もまたファンタジアナイツのプレイヤーということで、特に仲のいい友人だ。

「なにがマイマスターだよ」

気だるそうに答える。この2人、同じファンタジアナイツのプレイヤーというだけでなく、所属ギルドも同じなのだ。勿論、空の円舞曲ワルツではなく、樹が本来所属するギルドの方だ。そして、樹はそのギルドのマスターを勤めていた。



「最近お呼びも掛からないしそろそろ忘れてるんじゃないかと思つてね」

「お呼びも何もお前ら全員自粛中だろうが」

勿論、湊斗は本気で言っているわけではない。樹もそれはわかっているが、とりあえず突っ込んでおく。2人のやり取りは大抵こんな感じだ。いや、普段はもつと笑えない冗談　もちろん本人達以外にだ　を言い合っていることを考えると、これは文字通り挨拶程度だろう。

「しかし、もう2ヶ月か。まだ騒いでるやつっていの？」

樹はラシルを使用するきっかけとなった騒ぎを思い出す。キャラクターとギルド活動の一定期間の自粛という形でとりあえずの収束をつけたものの、実際のところ、それで納得していない者達もいることは確かだ。だが、既に2ヶ月が経過している。それならもうほとぼりも冷めているのではないか？そんな期待が樹の頭をよぎる。

「一部ではまだって感じかな・・・」

この手の情報は樹よりも湊斗の方が確かだ。そのため、樹は周囲の状況にはかなり疎い部分がある。　これは樹自身がほとんど

興味がないせいでもあるのだが　ゲームをしている限りでは、既にほとぼりも冷めているように感じられた樹としてはこの結果は少し残念なものでもあった。

「未だにウチが活動していないかその辺見て回ってたり、逆にウチを探し回ってるプレイヤーもいるみたいだよ」

「どんだけ暇人なんだか・・・」

樹は心底あきれたように言ってみせる。一部とは言え、未だにそんなことをしているプレイヤーが居るのは流石に予想外だった。ここまで来ると憧憬の念すら抱きなくなってくる。もつと有意義な過ごし方もあるだろうに。そんなことを思いながら、その原因を作った内の1人である自分が言えたことではないかと内心苦笑する。

キンコンカンコン。

その時、HRの開始を告げるチャイムが鳴り響く。湊斗も「それ

じゃ」と声をかけ自分の席へと戻っていく。チャイムが鳴り終わると同時ぐらいに担任の教師が姿を現す。点呼を取り連絡事項を話しているようだが、樹の耳にはほとんど入ってこなかった。担任教師の話を子守唄に樹はそのまま眠りへと落ちていくのだった。

昼休み。

「……ろ。……しろ！」

ゆさゆさと体を揺すられ、樹の意識が徐々に覚醒する。ゆっくりとした動作で顔を上げると、そこには湊斗の姿があった。なぜ起こされたのだろうか？朝のHRから今に至るまで、ずっと寝ていたため、寝ぼけていたこともあり状況が把握できない。

「あ……なに？」

「お昼。弁当食べよ」

そう言つて、樹の前の席を反転させ、机をくつつける。人の席なのだが、お互い承知の上なので、今更気にはしない。これもいつもの光景だ。その様子を見て、ようやく理解したのか、樹も鞆から弁当を取り出す。

「しかし、よく寝てたねえ。また徹ゲー？」

樹はよく登校前にゲーム雑誌を購入し、学校で読んでいることがあるため、周囲からはかなりのゲーム好きという認識を持たれている。そのせいか、授業中に居眠りをしていると、よくこういう風に言われている。因みに、授業中の居眠りの原因が徹夜でのゲームだったことは、ほとんどない。だが、今回は過程はどうであれ、徹夜でのゲームが原因なので、敢えて反論はしなかった。

「まあ……そんなとこ。あ、あとでノート頼むわ」

「ん、りょーかい」

特に気にした風もなく、あっさりと了承する。どちらかが寝ていた時はいつもこんなやり取りをしているので、今更気にするようなことではないようだ。

弁当を食べながら、雑談で盛り上がる2人。そして、ファンタジアナイツの話題が出たときに、樹にふとした疑問が浮かぶ。そういえば湊斗はどうしているのだろうか？今まで、ファンタジアナイツの話題が出ることもあり、特に気にはしていなかったが、よくよく考えてみると、今目の前に座っている友人の状況を知らないことに気付く。ギルドとキャラクターの使用を自粛となっている現状では、当然以前使用していたキャラクターでログインしているとは思えないが、自分のように他のキャラクターでログインをしているかもしれない。基本的に、特別用事でもない限りリアルで直接連絡を取ることもないので、他のメンバー達の状況もほとんど把握はしていないが、自分と同じようなことをしていると言うことも十分に考えられる。それは湊斗にも言える事だろう。丁度話題にも出ているので折角なので聞いてみることにする。

「そういえばさ、橘ってログインしてんの？」

「・・・まだ寝ぼけてる？今自粛中」

呆れたように返される。勿論未だに寝ぼけている訳ではない。

「いや、別キャラとかで」

「ああ。そっちもないかな」

今度はやつとわかったという風に返ってくる。この返答には少し意外だった。湊斗自身から話題を振られることもよくあるので、自分と同じように別キャラでログインしているものだと思っていたのだが、どうも違うらしい。恐らく、サイト等から情報を拾ってきているだけなのだろう。

「って言うか、多分やってるの神代ぐらいじゃないかな？」

「マジで？」

これは更に意外だった。メンバーはそんなに多くないとは言え、まさか、だれもやっていないとは思っていなかった。

「なんか意外だな。だれか1人ぐらいは同じことやっているとってたのにな」

「確かにそうかも。でもみんな折角だしリアルで色々するって言っ

てたよ」

そう言われて、今までの状況を思い返す。改めて思い出してみれば、みんなほぼ毎日ログインしていたように思う。そう思うと、今回のことはそんなに意外でもないのかもしれない。そして、あくまでネットにこだわり、別キャラを使ってまで、ゲームが続けている現状を思うと、内心苦笑するしかなかった。

「んで、橘のほうはなにやってんの？」

「僕は最近出た・・・」

あまり自分の現状を省みたくないこともあり、話題を移す。湊斗が話始めたとき、丁度後ろから声が掛かる。

「あんた達の話題、相変わらずゲームばっかねえ」

半ば呆れたようなそんな声。声の主の方を振り向くと、そこには1人の女子生徒の姿があった。綾瀬<sup>あやせ</sup> 咲希<sup>さき</sup>。樹達のクラスメイトの1人だ。特別親しいというわけでもないが、彼女の方から話しかけられることもあり、それなりの交流はあった。話しかけられるといつても、大抵は咲希がプレイするゲームの攻略を聞きに来る程度なのだが。今回のように、樹達の話題に乗ってくることは珍しかった。「いい年頃の男子なんだからもつとなんかないの？女の子の話題とか」

「ないな」

樹が即答する。興味がないわけではないが、特別彼女が欲しいと思っているわけでもない。むしろ、わざわざ自分から作ろうと努力するぐらいなら、趣味に没頭したいというのが樹の考えだ。湊斗もよく似た考えなのだろう。愛想笑いを浮かべ、誤魔化しているのが見て取れる。そんな2人から女子の話題など出るはずもなかった。

「うわ、即答。年頃の男子とは思えない発言ねえ」

少し大げさに驚いてみせる。樹のことを知る友人の1人としては、勿論予想出来た返答だ。

「ちよつと遥歌も言つてやんなよ」

「え？いや、その辺は人それぞれだと思っし・・・」

不意に後ろにいた女生徒に声を掛ける。楠木<sup>くすき</sup> 遥歌<sup>はるか</sup>。彼女もクラスメイトだ。尤も、樹や湊斗との交流は全くと云っていいほどなく、咲希が樹達のところに来たときに、彼女がいるのは珍しいというよりも初めてだった。だが、咲希とは仲がいいらしく、よく2人でいるのを見かける。活発なイメージを持つ咲希と大人しいイメージを持つ遥歌。なんと対照的な2人だった。

遥歌という名前に、樹は、ふと昨日のことを思い出す。あのアーチャーのプレイヤーもハルカだった。尤も、そんなに珍しい名前でもない。

（ま、偶然か）

つくづくこの名前に縁がある。そんなことを思いながら遥歌の方に視線を向けてみる。見た目にはゲームをするようには見えない。尤も、咲希と仲がいいようなので、彼女と2人でやることはあるかもしれないが、咲希自身も滅多に言うわけでもない。どちらにせよ、自分からゲームをやると言うタイプではないだろう。そもそも、ネット上で自分の本名を使う者はそうそう居まい。そう考えると自分でもマヌケな発想だと思えてしまう。

「あ、そうだお二人さん」

そんなことを考えていると、不意に咲希に話しかけられる。

「あんた達がよく話してるゲーム私も始めたのよ。だから今度手伝つてよ」

「オレら2人は自粛中だつーの」

樹はゲームへのログインへの自粛はしていないのだが、かまわず答える。勿論それを見逃す湊斗ではない。

「神代でいいならいつでも貸し出すよ」

「うん、ありがと」

どうやら湊斗と咲希の2人には、樹の言い分は聞き入れられないようだった。咲希はそのまま、遥歌を連れて戻っていく。樹には拒否権すら与えられないようだった。そこで昼休みの終了を告げるチャイムが鳴る。

「んじゃ僕も戻るね」

そう言って、机を戻し去ろうとする湊斗。その姿をジト目で睨んでみるものの、特に気にする様子もなく、その場は解散となるのだった。

学校が終わると、真っ直ぐに家に帰り、ファンタジアナイトへとログインする。普段なら、友人達と帰りにどこかに寄って帰るということもあるが、昨日のハルカとの約束がある手前寄り道をするわけにもいかなかった。彼女がいつログインするかわからないが、下手をすれば数時間単位で待たせることになりかねない。自分から誘ったこともあり、流石にそれは避けたかった。

モニター映し出される画面は、薄暗いダンジョン。昨日ハルカと出会った教会の地下ダンジョンの上層部への入り口付近だった。あのときあわててそのままログアウトしたのを思い出す。自分が先にログアウトしてしまったので、彼女があれからどうしたかわからないが、あのあとそのままログアウトしたなら、まだ近くに居るかもしれない。そう思い周囲を探してみるが、それらしい影は見当たらない。元々期待はしていなかったので、探索はあつさり切り上げる。（とりあえず戻るか）

ここに居ても仕方がないので、ラシルは上層を目指すのだった。

ライラックの街。ファンタジアナイト内で最もプレイヤーの集まる街であり、ラシルの所属するギルド空の円舞曲の拠点もこの町にあった。ラシルが先程まで居たダンジョンの入り口でもある教会もまた、この街に存在する。街に戻ったラシルはハルカに連絡を入れようとしたとき、待ち合わせ場所を決めていないことに気付く。慣れたプレイヤー同士なら現在地さえ伝えればほとんど問題ないのだが、ハルカは初心者だ。昨日まで居たダンジョンの入り口とはいえ、連れてこられたのなら場所を覚えていない可能性もある上、教会付

近は、人通りや個人で商店を出しているプレイヤーも多い。待ち合わせをするにはあまり向かないだろう。それなら、とラシルは街の北を目指す。最も人の集まる街とはいえ、人の集まる場所、人気のない場所というのはどうしても出てくる。そして街の北側は主だった施設等もないためほとんど人は居なかった。そんな場所の壁際の一角を陣取る。壁際で人影もなく、待ち居合わせ場所としては最適だろう。次にウィンドウを開いていき、ハルカにチャットの1つであるメッセンジャーで呼びかけてみる。だが、相手には届かない。どうやら彼女はまだログインしていないようだった。ギルドのメンバーもまだ誰も来ていないこともあり、内心ほつとする。だが、時間だけはしっかりと決めておくべきだったと、内心少し後悔するものの既に後の祭りだ。ハルカがいつ来るかわからない現状では、どこかに行かないほうがいいだろう。そう判断するとその場で時間を潰すことにするのだった。

30分ほどが過ぎただろうか。樹は本を読みながら幾度目かのモニターチェックをする。だが、彼女から連絡が来る様子はない。そんなに急ぐ必要もなかっただろうか。改めて時間を決めなかったことを後悔する。だが、自業自得なので気にしないことにする。それにある意味助かっている部分もあったのだ。樹がログインしたころは、ギルドのメンバーはだれも居なかったのだが、今では数人口グインしている。マスターのエルナはまだ来ていないが、彼女もその内来るだろう。ギルドを紹介するのであれば、彼女が居たほうが何かと都合がいい。そういう意味では、ハルカから未だ連絡が来ないのはありがたかった。とはいえ、今読んでいる本も読み終わり、少し退屈になってくる。ここを動くわけにもいかないしどうしたものかと考えながら、モニターから目を逸らし本棚を物色する。が、特に読みたい物があるわけでもなく、ベッドに先程まで読んでいた本を放り投げ、モニターに向き直る。相変わらず変化はない。しばらくぼけーっとモニターを眺めてみる。ラシル自身、この辺りには滅多にこないが、驚くほど人通りというものはない。時間のせいもある

るのだろうか、ここまでの過疎地帯だとは思ってなかった。

（まあ、初心者との待ち合わせには丁度いいけどな）

そんなことを考えていると、メッセンジャー用のウィンドウに変化が現れる。

「こんにちは」

ハルカだ。昨日の様子ではうまく理解出来ていたか少し不安があったが、どうやら大丈夫だったようだ。

「うつす」

「もしかしてお待たせしましたか？」

「時間も決めてなかったんだ。気にするな」

直接的にはないにしろ、素直に待っていたと言う辺りなんとも樹らしかった。尤も、それでも樹としては気を使っているつもりなのだが。

「ライラックの北側に居るからそこまで来てくれ」

「わかりました」

そう言うマップにパーティーメンバーの位置を示すマーカーが動き始める。どうやらどうやらハルカはあれから街に戻っていたようだ。

少しして、女アーチャーのキャラクターがラシルの元に近づいてくる。ようやく待ち人が来たようだ。

「んじゃきのう言ってたギルド案内するよ」

挨拶もそこそこに歩き出す。

ライラックの街の西側に位置する建物内。そこに空の円舞曲の溜まり場となっている場所がある。建物内と言う事でマップ移動があるため、若干利便性に欠けるものの、周囲に主だった施設があることと、他所のギルドと被らないということもあり　これはほんどのプレイヤーがマップ移動の不便さを嫌うためだ　そういつた意味ではいい場所と言えるだろう。

（どうしたもんかな・・・？）

ハルカを案内するのはいいのだが、肝心のエルナはまだ来ていな



い。そもそも、ギルドの誰にも話していないので、彼女の耳に入  
ことはまずない。みんなと面識のある者ならまだしも、ハル力は誰  
とも面識などないはずだ。そんな人物を勝手に紹介していいものか  
樹は少し迷うが今更どうしようもないので、そのまま溜まり場とな  
っている建物内へと入っていく。

「おかえり」

「なんかレア出た？」

ラシルの姿を確認するとそれぞれに声を掛けてくる。今居るのは  
ロードのアルタスとプリーストのウィシュナの2人だった。このギ  
ルドは暇があれば狩りに行ってレベルを上げるといような者は少  
なく、むしろまったりと雰囲気の良いギルドだった。この2人も恐らく  
雑談に花を咲かせていたのだろう。

「お、だれ？」

「新人さん？」

もう1人の存在に気付くとやはりそれぞれに質問が飛んでくる。  
どう説明したものか？少し悩んでいるとキャラのログインを表すエ  
フェクトと共に1人のキャラクターが現れる。女ジェネラル。エル  
ナだ。丁度いいタイミングで現れラシルは内心ほっとする。

「お、珍しくお客さん？」

ハル力の姿を確認すると、早速反応する。ここは建物内というこ  
ともあり、基本的に人が来ることはない。そのため見慣れないキャ  
ラクターというのはどうしても目立ってしまう。

「ああ、実は・・・」

ラシルは昨日の経緯を説明する。それを聞き悩むエルナ。このギ  
ルドは基本的には来るもの拒まずだ。だから、ハル力が入る分には  
全然申し分はない。だが、入るだけ入って、すぐにゲームをやめら  
れるのも困るのも確かだ。相手が初心者なら尚更その可能性は高い  
だろう。だから1つの提案を出すことにした。

「じゃあ、入団試験やろう」

「やっぱりやるのか」

「お、やるんだ」

「マスターも好きですねえ」

この提案にそれぞれが反応を示す。基本的にこのギルドに入ろうとする者がいるときは入団試験をやっている。勿論ここにいる全員が体験している。ただ、そんなに難しい課題が出される訳でもないので、ラシルもそのことはあまり気にしていなかった。

「えっと、ハルカ・・・ね。そう言う訳だけいい？」

「え・・・あ、はい」

盛り上がるメンバーとは逆に、何が起こっているのかわからず一人取り残されるハルカだった。

## Chapter 1 - 2 (後書き)

ラシル(以下ラ)「ファンタジアナイツなんでもQ&A!」

ハルカ(以下ハ)「唐突に始まったこのコーナー。ここでは読者の皆様が疑問に思っているであろう事を勝手に予想して答えてみようというコーナーです」

ラ「本編同様無駄に長いので興味のない人はすつとばしちゃってください」

ハ「では最初の質問。今回はなぜこんなにアップに時間がかかったんでしょうか？」

ラ「それは単純に作者の力不足により全然書けなかったからです。はい次」

ハ「早！会話広げないんですね。じゃあ、次は・・・そろそろ意識不明者とか出ないんですか？」

ラ「出ません。h a kじゃないんだから。c 2さんに怒られますよ」

ハ「このコメントも結構マズイ気が・・・」

ラ「気にせず次行ってみよう」

ハ「ここまで読んだ人はみんな気になってると思うんですが、私達の性格変わってませんか？」

ラ「それはそれ。これはこれ。気にしちゃ負けです」

ハ「何に負けるのかよくわかりませんが気にしないことにします。それじゃあ、最後。前回作者があとがきではっちゃけるとか言ってたけどまさか・・・」

ラ「そのまさか。ずばりこれ。あの人この手のボキャブラリってないからこれが限界なんです」

ハ「地味に酷いこと言いますね」

ラ「まあ、こんな感じでやっていくんでまたよろしくお願いします」

ハ「次回もまた見てくださいね」

## Chapter 1 - 3

「じゃあ、入団試験やろう」

エルナの一言に、空の円舞曲<sup>ワルツ</sup>メンバー達が盛り上がる。入団試験をやるかどうかはエルナ次第だが、新しいメンバーが入る時は毎回開催されているため。もはや定例行事の様なものになっている。

「んじゃ、試験の説明するよ」

周りの状況を見捨ててエルナが話を進める。ハルカも未だ状況が把握出来ずに混乱しているが、そんなことも構いなしだ。

「まずはこれ」

エルナにアイテムを渡される。それはNPCの店で買える極々普通のポーションだった。それも最安値でランクも1の物だ。尤もハルカのレベルを考えれば回復アイテムにはこれで十分なのだが、数は1つ。流石に回復アイテムとして使うには心許ない数だ。エルナの意図が見えない。

「ルールは簡単。それを使って入れるランダムダンジョンをクリアすること。期限は一週間。あと、ギルドのメンバーを一人は連れて行くこと」

手早く説明されるものの、始めたばかりのハルカにとって今ひとつ理解が追いつかない。

ランダムダンジョン。通常のダンジョンとは異なり、アイテムを使用することで生成され、構造、階層、モンスターの種類及び数、レベルの全てをランダムで決定されるまさに文字通りのダンジョンだ。とはいえ、アイテムの種類やランクによってある程度方向性はあるため、ゲーム性そのものが極端に破綻しなくなっている。これもまた、このゲームの特徴的なシステムだ。

「でもマスター、一人じゃ厳しくね？」

ラシルがふと浮かんだ疑問を問いかける。いくらランク1のアイテムから生成されたダンジョンとは言え、モンスターの最高レベル

は20〜30程度はあるだろう。それに数も規模もわからない。そんなダンジョンをクリア、しかもソロでとなればそれ以上のレベルが欲しいところだ。それも挑戦者が初心者なら尚更だろう。ラシルの疑問ももつともだ。

「うん。だからラシル、あんた手伝いな」

「は!!?」

予想していなかった答えに驚く。と言うよりは、思考が止まる。

「そりゃ、あんたが連れてきたんだから当然でしょう」

「それはそうだけど・・・レベル合わねえぞ?」

ラシルはやはりもつともな意見を切り出す。ラシルのレベルは60。ハル力は始めた時期にもよるだろうが、どんなに高く見積もっても10には満たないだろう。いくら1週間の期限があるとは言え、この差が埋まるとは思えない。かと言って、このまま試験を開始したのでは、最早試験にすらならない。それでは受験者がラシルで監督がハル力と、完全に立場が逆転してしまう。それでは意味がない。「やだな、ラシルくん。アレがあるじゃないかw」

エルナがニヤツとする。とはいってもモニター上では確認出来ないのだが。あくまで樹の感覚だ。だが、普段は呼び捨てなのに、わざわざくん付けまでして、更に最後にwまで付けている。最早確信すら持てていた。

「でもアレ結構レアなんだけど・・・」

「どーせ大量に持ってるでしょ」

「いや、そんな大量ってほどじゃあ・・・」

「男なら細かいこと気にしない」

「マジでやんの?」

「マジもマジ。大マジ」

何度か反論を試みてみるが、見事なまでに全て玉砕する。2人の会話からも見て取れる通り、ラシルは確かにこの状況をなんとかする手段を持っていた。なので、そこを突かれると、どうしても立場が弱くなってしまう。その為、もう折れるしかないのだった。

「わかった。んじゃ準備してくるよ」

そう言っただけでラシルは立ち上がり外へと出て行くのだった。

ラシルが拠点の建物を出て数分。拠点では、雑談でも盛り上がっていた。とは言っても、その話の主なことといえば、ハルカに対する質問攻めだったのだが。その様子は、ある日急にクラスにやってきた転校生を思わせる。更に、まだログインしていなかった最後のメンバーの女ウィザードのリシュリーまでやってきて、質問攻めは更に盛り上がることになる。ハルカ自身、どうしたものかと困惑するものの、内心、急に押しかけて拒絶されるのではないかと心配していたのだが、彼女らの反応を見る限りその様子もなく、安堵するのだった。

「しかし、アイツはどこほつつき歩いてるんだろうね？」

ふとエルナが漏らす。先程出て行ったラシルのことだ。先程の会話の流れから、恐らく倉庫に預けたアイテムを取りに行ったのだろう。空の円舞曲の拠点となっているこの建物は、周囲に大抵の施設がある。その「大抵」の中には倉庫も含まれている。ラシルが出ていってもう10分は経つだろうか。「大抵」に含まれない、少し離れた施設を使ったとしても少し遅い。ギルドチャットで呼びかけたほうがいいだろうか。そう考えたころ。

「すまん、だれか300kほど貸してくれ」

丁度、ギルドチャットでラシルからの呼びかけがあった。しかもいきなり金の催促だ。買い物でもしているのだろうか？だが、基本的に物には無頓着なラシルが、人から金を借りてまで買うとは思えない。そんなに急ぎで欲しがっているアイテムもなかったはずだ。少なくともエルナは知らない。だが、どうやらそれはほかのメンバーも同じようだ。だれも即座に反応しない辺り、みんな頭に「？」が浮かんでいるのだろう。

因みにラシルの言った300kとは300,000のことだ。“”が付くたびにk、m、tと言った具合に一種の略字のような物が付けられていく。とはいえ、このゲーム上において、tと付けるこ

とはまずないだろうが。

「どうしたのさ、唐突に」

誰も反応しきれていないのでいる中、エルナが返事をする。

「いや、ちよつとスキル関係でな」

それを聞いて全員の頭に浮かんでいた？は解消されるのだった。

スキルの習得。勿論なんらかのクラスにつけば、スキルを使うことも習得することも出来る。では、どう習得するのか？1つは使い込むことだ。これはアクションスキルに適用されている。アクションスキルにはそれぞれ0～10のレベルが設定されており（但し上限が10以下のものも存在する）一定回数使用することにより、レベルが上昇する。そして0から1になることにより習得となり、他のクラスでも使用出来るようになるのだ。但し、他のクラスのスキルを使用してもカウントはされないので、レベルは上昇しない。

そして、もう1つは特定の条件を満たすこと。こちらの条件はサポートスキルに適用されている。このゲームではギルドと呼ばれる施設がある。ここでは、他のクラスへの転職や、サポートスキルの習得といったことが出来る。ここでスキルごとに提示される条件をクリアすることが出来れば、習得となるのだ。因みに条件のほとんどがアイテムの収集や、一定の金銭の支払いとなっている。

今回のラシルの場合は後者だ。準備のついで（一環かもしれないが）にスキルの習得に行ったが、お金が足りなくなったのだろう。

「じゃあ、オレが貸すよ。その代わり、あとでなんか剣1本な」

アルタスだ。彼は騎士系統の2ndクラスのロードなのだが、そのクラス故か、剣系統の武器に関しては蒐集癖しゅうしゅうへきのようなものを持っており、現状では使わない、あるいは使えない剣などでも平気で購入していたりするのだ。本人曰く後々のためだそうだが、実際のところは不明である。

「おっけー」

「うし、交渉成立w」

ラシルが承認すると、アルタスは早速出て行くのだった。



「あ、そだ」

何かを思い出したようにエルナが口を開く。

「ハルカ、あんた先にギルド入っちまいな」

「え・・・？まだ試験受けてませんよ」

ハルカの困惑は当然だった。これから、このギルドに入るために試験を受けるのに、先に入れとはどういうことだろうか？それでは試験の意味がなくなってしまう。

「気にしない気にしない。ラシルもそうだったし」

「はあ・・・そうなんですか」

ハルカは要請を承諾し、そのまま空の円舞曲の一員となる。因みに、ラシルも当時、この場所に案内されてから、急に入団試験と言われて困惑していたのだった。エルナのこの突然の行動だが、ほかのメンバーは既にいつものことと、すっかり慣れている様子で、今回のことも特に驚いた様子もない。ラシルのときもそうだが、エルナの突然の行動は多々・・・というほどではないにしろ、実は結構ある。あるときはギルドメンバー全員で狩りに行き、またあるときはひたすらレアアイテムを探し、またまたあるときは高難度のダンジョンの制覇に挑んでみたり・・・等々。どれもギルドメンバー全員がログインした時に突然に始まるのだった。だが、基本的にメンバー達が不利益を被ることはなく、むしろ皆楽しんでいる。今回のこともまた同じだ。そのため、彼女を咎める者は誰も居なかった。そこに、外出していた2人がようやく戻ってくる。そこに居たのは先程出て行ったアルタスと、すっかり外観が変わったラシルだった。

「わゝ、転職したんだ」

「相変わらず転職速度速いわねえ」

「もう転職したんだ」

その姿にそれぞれが反応を示す。ラシルの姿は先程までの忍者ではなく、マジックナイトのクラスの姿へとなっていた。

「欲しいスキルは取ったからな」

先程の300kのことだろう。ラシルにとって忍者のクラスは、そのクラスでのゲームのプレイというよりは、スキル習得のためのものだ。そのため、欲しいスキルさえ習得してしまえば、忍者のクラスになっている理由はなかった。まして、ラシルはずっとマジックナイトのクラスを目指しプレイしてきたので尚更だろう。

「それにしてもここまでかなり早かったねえ」  
リシュリーが感嘆とも取れるセリフを漏らす。

各種系統のクラスはそれぞれ3段階階存在する。そして、キャラクターとは別にクラスそのものにもレベルが設定されており、そのレベルを最大限に上げることによって上位のクラスが出現するようになっていいる。3段階目のクラスのレベルを最大限に上げたところで、その系統はマスターとなる。これには、スキルの習得は

関係ない。そして、先程までラシルがなっていた忍者や、現状のクラスのマジックナイトは複数のクラスをマスターしてなれる、4段階目とも言えるクラスだ。クラスのレベルは比較的上がりやすくはなっているものの、忍者、マジックナイトの2つの条件を満たすだけでも、結構な数のクラスをマスターせねばならない。わずか2ヶ月ほどでここまでとなると、かなりのスピードと言える。それも、ほとんどのスキルの習得を無視し、豊富な装備と持ち前のプレイヤースキルがあつてこそその芸当だろう。

「んじゃ、どっか行つてみるか？」  
「え、でも・・・」

ハル力を誘つてみるが、どうも乗り気ではないようだ。ギルドにも入ったばかりだし、もう少しここで話でもしていた方がいいだろうか？それとも、急にこんなことになって、慣れない事だらけで流石に疲れただろうか？

「明日ぐらいからにするか？」  
「いや、そうじゃなくて、その、レベルが・・・」

そう言われてやっと気付く。ハル力は2人のレベル差を気にしていたのだ。先程、準備に出かけたときにそのことも解決してき

ただ、ハルカからすれば、単にクラスチェンジしてきたようにしか見えないだろう。その辺りの事情は解決した。そう伝える意味も込めて、パーティーメニューを開き設定を変えてみる。

「あ・・・」

どうやらハルカもそのことに気付いたようだ。

『経験値の配分設定を変更しました』の文字。パーティーのリーダーとのレベルが誤差5以内なら、同じマップにいるパーティーメンバー全員で経験値を分配出来るようになる。これにより、極端な話、一切の戦闘に参加しなくても経験値が入るようになる。そして、この設定が有効になったということはラシルとハルカもこの条件を満たしたということになる。ハルカも、事前に読んでいた説明や、チュートリアルによりこの条件は知っていたので、レベル差の問題は解決されたということだけは理解出来た。

「でもなんで・・・？」

先程までかなりのレベル差があったのだ。それがものの数分程度でハルカとのレベル差が5以内になったのだ。疑問に思うのも当然だろう。

『転生の宝珠』というアイテムがある。その名の通り使用するとに転生し、レベルを1に戻すという効果がある。勿論、ただレベルを1に戻す訳ではない。若干ではあるが、ステータスにプラス修正がかかるのだ。そのため、通常のレベル1のキャラクターよりは少し強いキャラクターになる。先程、ラシルとエルナが言っていたアレとは、まさにこのアイテムのことだ。そして、ラシルが使用に関して若干渋っていたのにも理由がある。1つはこのアイテム自体がかなりレアなアイテムなこと。たしかに複数個所持はしているが、それともかなりの期間、以前のギルドのメンバーと集中的にドロップ（落とす）するモンスターを狩り続けての成果だ。そしてそのモンスターも強力なの言うまでもない。現状での撃破はまず無理だろう。その為増やすことも無理だ。他のプレイヤーから買うという手段も無いが、値が張る上、そもそもあまり出回らないので、

これもやはり無理だ。物が物だけに、増やせないという現状では、使用は慎重にしたかったのだ。そしてもう1つ。それは使用時のレベルだ。前述の通り、このアイテムは使用することにより、レベル1に戻るが、ステータスにプラス修正が付き、通常よりもパラメーターの高いキャラクターが完成する。尤も、これは1回や2回使ったぐらいでは、大差ないのだが。それはさておき、このパラメーターの修正だが、より高レベルで使ったほうが修正値も大きくなるのだ。その為、もう少しレベルが上がってからと考えていたラシルとしては、出来ることなら控えたかったのだ。

因みに、エルナが　と、言うよりはギルドのメンバー全員が、なのだが　なぜラシルがそのようなアイテムを所持しているのを知っているかという点、実はラシルは以前にもこのアイテムを使用していたのだった。その時にその辺りの話をした為に、今回エルナに突っ込まれる原因となったのだ。レベル60というレベルで、複数のクラスをマスターしているのもそのためだ。

ラシルはハルカに『転生の宝珠』のことを説明する。どうやらハルカも理解したようだった。

「それで、どうする？どっか行くか？」

「はい」

改めて誘ってみる。今度は渋ることなく肯定の返事が返ってくるのだった。

ライラックの街から南にいくつかのマップを越えた場所。そのフィールドの一角にラシル達の目的地はあった。滝の裏側に洞窟が見える。勿論中はダンジョンとなっている。フィールドにもモンスターはいるし、街周辺ならそんなに強いモンスターもいない。レベル1桁の2人にはそれでも十分なのだが、数が少ないことと、街の周りだけあって人も多いことからここに來たのだった。

「ここ・・・ですか」

ハル力は若干躊躇い気味だった。前日のことを考えれば無理もないだろう。

「流石に昨日みたいなことはないから安心しろ」

それを察してか、軽く諭してから中へと入っていく。ハル力もそれに続くのだった。

滝裏のダンジョン。全体的に強力なモンスターは存在せず、数も多すぎず少なすぎずと、非常にプレイしやすいダンジョンだ。また、1層から3層はそれぞれ、1stクラス、2ndクラス、3rdクラスとクラスチェンジ出来るころに来ると敵の強さも丁度いいので、以前はラシルもよく利用していた。だが、転生してしまえば、あまり利用することもなくなる上、全体的に経験値はあまり稼げないことから、人はあまりいないのだった。尤も、1週間という期限の中で、少しでもレベルを上げておきたい2人にとっては人がいないのは、むしろ好都合なのだが。

ラシルはハル力が入ってきたのを確認すると、支援魔法を使おうとする。が、

（その前に・・・）

1つ確認を取るために、コントローラを離しタイピングを始める。

「インカムって持ってる？」

「ありますよ」

「それならそれならボイスで行きたいんだけど、大丈夫」

「はい、大丈夫です」

チャットにはいくつかの種類がある。まずはオープン。一定範囲内にいるプレイヤー全員に聞こえるタイプで、通常はこれである。次にクローズ。簡易のチャットルームを作り、その中でのみ会話は可能なタイプだ。そして、先程から空の円舞曲の面々が使っていたギルド。その名の通り、ギルドのメンバー同士のやり取りが出来る。ラシルがハル力との合流に使ったメッセンジャー。1対1での会話が可能だ。そして、最後がパーティー。これも名前の通り、パーテ

イー内でのやり取りが可能となっている。そして、パーティー用のチャットには、通常のチャット以外にボイスチャットも用意されていた。これにより、意思伝達が素早く出来るため重宝されている。当然、インカムを用意しないと使用出来ない訳だが。ただ、自分の性別や、場合によっては性格等も相手に伝わってしまうため、その辺りのことを嫌うプレイヤーには敬遠されがちだが、樹は元よりその辺りのことは一切気にしない性格だし、どうやらハルカのプレイヤーもその辺りは大丈夫なようだ。コントローラを使うというゲームの性質上、タイピングでは面倒な上、状況次第ではタイピングすら不可能な場合もある。そのことを考えると、ボイスチャットを了承してくれたことは、ありがたかった。

「聞こえる？」

「はい、大丈夫です」

一応確認をしておく。相手は初心者だ。しゃべる余裕がないということもあるだろうが、ボイスチャットに慣れていなくて、自然と無口に、ということになっても不思議ではない。普段ならそれでも構わないが、いざというときに実は通じていなかったでは意味がない。尤も、このダンジョンで意思疎通が出来なくて全滅などということはまずないだろうが。

（どこかで聞いたような・・・）

先程のやり取りで、一言声を聞いたただだが、どうも聞いたことのあるような声だった。ハルカの声を聞くのは初めてだ。それに、ヘッドフォンから聞こえてくる彼女の声は少しくぐもって聞こえる。恐らく気のせいだろう。そう思うのだが、どうにも気になってしまふ。一瞬、何かのゲームで聞いた声優の声だろうかとも思うが

ここでアイドルや、芸人などの考えが浮かんでこないのはなんとも樹らしい。その考えもあつさりと否定する。流石に職業上あまり周囲に感付かれる様な事はしないだろう。バレればちよつとした騒ぎになりかねない。そうならないためにも、ボイスチャットには応えないだろう。

「あの、どうかしましたか？」

「あ、すまん、なんでもない」

「どうやら、考え事に集中しすぎて不自然に黙ってしまったようだ。  
(ま、気にしても仕方ないか)」

樹はこの疑問を頭の隅へと追いやるのだった。

素早くラシルとハルカの2人に最低限の支援魔法を掛ける。スキルの習得をほとんど無視していたラシルも、支援魔法は極力使うようにして、なんとかレベルを上げはしたものの、やはりそんなにレベルは高くはない。だが、現状ではこれでも十分な効果を発揮するのだった。

「あれ・・・？」

「ん？どうかした？」

呟くように聞こえるハルカの声。独り言だっただろうか。それなら反応しないほうがよかったかもしれない。だが、そんな考えもすぐに杞憂に変わる。

「いえ、そのスキルが・・・」

先程ラシルが使ったスキルのことだろう。なにかおかしいことでもしたのだろうか。少なくとも、自分に掛かった支援のアイコンを見る限りでは、特におかしなことにはなっていない。同じようにハルカにもスキルを使ったはずなので、彼女もおかしな部分はないはずだ。意外と抜けている部分のあるラシルと言えど、流石にそこまでは抜けていない。

「戦闘ってしてなかったですよね？」

「ああ、そういうことか」

ハルカのその一言でようやく、ラシルの疑問が解決する。彼女はスキルよりも、スキルを使ったことそのものに疑問があったのだ。

「魔法使い系のクラスやるとSPが勝手に溜まるスキルを覚えられるんだ」

基本的に、スキルを使用しようとすると、スキルポイントSPを消費することになる。だが、そのSPは本来戦闘をしないと増えることはない。攻

撃を当てる、もしくは攻撃を食らうことによって、SPが徐々に上昇していくのだ。その最大値は100で固定されており、1stクラスで3本、2ndクラスで6本、3rdクラスで9本のSPをストック出来るようになっていく。因みにラシルのような最上位クラスは、ストック数は3rdクラスと同じ9本だが、ストック9本プラス、通常のSPゲージがマックスの場合のみ、クラスにより違いはあるがステータスにプラス修正が与えられる。

ラシル達はここに来るまで、一切の戦闘行為をしていなかった。その為、本来ならばお互いまだスキルの使用など不可能のはずだ。街に入るとSPはリセットされてしまうので、事前に溜めておくということも不可能だ。それでもラシルがスキルを使用していたことへの疑問だったのだ。魔法使い系の職業は直接戦闘には向かないため、攻撃をする機会というのはあまりない。逆に、攻撃を食らうとなればSPゲージが溜まる前にやられるだろう。その救済処置とも言えるのが、現在ラシルが装備しているスキルだ。徐々にはあるが、時間の経過でSPが溜められるため、戦闘を行わなくてもSPを溜めることが可能だ。とは言っても、相手を攻撃したほうが早いのは言うまでもない。その為ラシル自身も今回のように、移動距離が長い場合以外はまず使っていない。

「謎も解けたところで行くとするか」

謎というほどのものでもないのだが、そんなことは気にせずダンジョン中を歩いていく。しばらく来ていなかったこともあり、ちょっとした懐かしさのような物を感じる。懐かしさついでに、改めて要注意のモンスターなどがいないか自分の記憶で確認しておく。

「じゃあ、オレが前で引き付けるから、後ろから撃ってくれ。あ、それと自分の方に来る敵優先な」

特に、注意することが無いのを確認し、ハルカに指示を出しておく。

少し歩くと早速モンスターが現れる。ラシルが近付いていくと、モンスターも気付いたのか、ラシルへと向かってくる。そして、1



撃。その1撃はあっさりとモンスターを撃破する。なんともあつかなかった。昨日まで、自分のレベルでは厳しいようなダンジョンに居たせいもあるのだろうが、なにより、ラシルの武器はレベルの制限により、攻撃力の低い武器を装備しているものの、それでも現状は十分強力だ。

「・・・・・・」

思わず立ち尽くしてしまう。予想はしていたが、なんとも物足りない。この際、2層に行ってみるか？などと思い浮かべるが、結果が見えているので却下する。流石に無茶すぎる。そこにハル力が寄つて来る。

「どうかしましたか？」

「あー、すまん。ちとスキルの変更をな」

勿論なにもしていないのだが、とりあえずそう言つて誤魔化しておく。まさか、もつと敵の強い所に行くことを考えていたなどと言う訳にもいくまい。

「でも、私あまり役に立てそうにないですね」

寂しそうに呟く。先程の戦闘の状況を見れば、誰でもそう思うだろう。

「いや、もつと湧いてくればそうでもないさ」

「そうなんですか？」

「そうなんだ」

モンスターの数はそこそこにいるが、固まっていることは滅多にない。それはラシルもわかつているのだが、ここはこう言っておくことにする。それで彼女が楽しめるなら、十分だろうと思つたからだ。それに、稀ではあるが、結構な数が固まっていることもなくはない。あながち嘘という訳でもないのだ。

それから順当に狩りを続け、一時間ほどが経過した。

2人ともいくつかレベルをあげて、今は休憩を取っていた。

「あのさ・・・」

樹が口を開く。先程から考えていた疑問だ。頭の隅にやりはした

ものの、彼女の声を聞く度に、自分でもわからないがどうしても気になってしまう。そして、1人の人物がふと思い浮かぶ。ハルカと同じ名前をしたクラスメイト。そんなはずはないと思いつつ、どうも色々イメージが被ってしまい、やはり同一人物ではないかと思えてきてしまったのだ。そんな自分に呆れながらも、ここまで来るとどうしても気になってしまうので、思い切って聞いてみることにしたのだ。勿論「あんた、楠木 遥歌？」などと聞くわけにもいかないのです、遠まわしにだ。

「星想学園って知ってる？」

だが、いざ聞いてみるとなると、なにも浮かんでこない。そもそも、遠まわしと言ってもどう聞いたものか？住所を聞くわけにもいかない、というか聞いてもわからない。かと言って遥歌と親しい訳でもないのです、どんなことを聞いても決定打に欠ける。そこで、思いついたのが学園のことだった。これなら知っていればそれはそれで話題を広げられるし、知らなければ他人の空似ということがわかる。尤も、相手が正直に話してくれているという前提の元でだが。

「知ってますよ。私その2年なんです」

自分からこんな話題振っておいてなんだが、こんなにペラペラと自分のことを喋っていいのだろうか。樹はかなり不安になってくる。勿論、樹自身ハルカの個人情報はどうしようというつもりはないが、あまりにも無防備すぎる。信用されていると思えば、悪い気はしないが、それ以上に他人事ながら心配で仕方なかった。

それよりも、気になったのは、2年という言葉だ。星想学園自体はそんなに大きな学校という訳ではない。それでも1学年辺り250人近くはいる。男子や、数少ない女子の知り合いを除けば半数ぐらいにまで下がるが、それでも100人以上いるのだ。普通に考えれば、確率はかなり低いのだが、もはや確信に変わっていた。なので、更に突っ込んだことを聞いてみる。

「もしかしてB組・・・とか？」

「そうなんです、よくわかりましたね」

どうやらハルカは一切気付いていないようだ。

（もしかして、結構天然か？）

大抵はここまで来ると、クラスメイトからよく似た声の人間を探しそうなものだが、そんな様子は一切ない。このまま黙っているのも面白そうではあったが、彼女の友人　咲希のことだ　にバレたとき、何をされるかわかったものではないので素直に白状することにする。

「そりゃ、同じクラスだからな。楠木だろ？」

「え、えつと・・・はい」

少し戸惑いながらも、観念したように応える。まさか本当に本名でやってたとは・・・。今更キヤラを消して来いなどとも言えないので、そこには触れないことにする。本名だと言わなければ、HNハンドルネームとしか思わないだろう。

ハルカの方は、未だにラシルがだれかわかっていないようだった。やはり黙っておこうかと改めて思ってしまうが、やめておく。流石に可愛そうだ。

「神代だよ。神代　樹」

「え・・・ええええー！！！！」

全く想像していなかったようだ。普段の大人しい印象のあるというか、実際大人しいのだが　彼女からは想像出来ないような叫び声が聞こえる。そんな様子を見ながら、というか聞きながら樹はハルカの慌てっぷりを楽しんでいたのだった。

その後、またしばらく2人でダンジョンの探索をする2人だったが、最後までハルカのぎこちなさは取れることなく、そして、樹はそんな様子を楽しみながらそのまま解散するのだった。

## Chapter 1 - 3 (後書き)

ラシル(以下ラ)「ファンタジアナイツなんでもQ&A!」

ハルカ(以下ハ)「またやるんですね、このコーナー」(汗)  
ラ「やるみたいだねえ」

ハ「意外にも好評だったとか?」

ラ「いや、全然」

ハ「即答で全然って・・・」

ラ「そんなことは置いて、早速質問いってみよう」

ハ「前回無駄に長いって言ってたこのあとがき、それでもなかったように感じるのは気のせいですか?」

ラ「アレは作者もびっくりしてた。スクロールせずに画面内に収まったのは予想外だったらしい。だから今回はもつと長くするとか」  
ハ「相変わらず行き当たりばったりですねえ。しかもなんか迷惑宣言してるし」

ラ「それが作者。はい次」

ハ「昔の話はいつやるんですか?」

ラ「予定は未定。まあ、その内書くんじゃない?」

ハ「かなり適当ですね・・・。まさか実は考えてないとかですか?」  
(汗)

ラ「一応、オレがゲームを始めてからプロローグまでのことは大まかには考えてあるらしいけどな」

ハ「微妙に安心できませんね」

ラ「無駄に話を広げるの好きだからな・・・」(汗)

ハ「それでは次です。クラスはどれくらいあるんですか?」

ラ「いっぱい」

ハ「ちょ・・・それ答えになってませんよ」

ラ「いや、作者曰く、クラスの設定はある程度決まってるけど、全

貌を出すと後々変更加えたい時に困るから出さない、だとか」

ハ「なんで変更を加えるのを前提なんですか」(汗)

ラ「適当だからな」・・・」

ハ「じゃあ、次行きますね。今回出てきたランダムダンジョンって  
でいs・・・」

ラ「それ以上は言っちゃダメ!」

ハ「へ・・・?」

ラ「一ソフトウェアさんに怒られる」

ハ「ラシル君の方が危なすぎる気が・・・」

ラ「作者冒険しすぎ!はい次」

ハ「これで最後です。このゲームの設定関係で参考にしたゲームと  
かってありますか?」

ラ「あるねえ。スキルなんかほぼパクリになってるし」(汗)

ハ「某有名RPGのシミュレーション版ですね」

ラ「今回は結構長々とやったな」

ハ「ですねえ。最後まで読んでくださった皆さん、本当にありがとう  
ございます」

ラ「こつちもまた続くと思うので、本編同様次回もまた見てやって  
ください」

ハ「それでは、また次回でお会いしましょう」

## Chapter 1 - 4

朝8時15分。樹は学校の自分の教室へと到着する。ホームルームHRが8時30分からということを見ると、随分と余裕のある登校と言えるだろう。徒歩で登校出来る生徒の中では早い方だろう。実際、クラスメイト達もまだまばらで、この時間に教室に居るのは、人ごみを避け、1本早い電車に乗って登校する生徒や、部活の朝練に出ていた生徒がほとんどだ。勿論、早めに登校している者もいるが、全校単位で考えても極少数だろう。そんな光景も樹からすればいつものことなので、特に気にする様子もなく教室へと入っていく。自分の席へと向かう途中、見知った顔を見かける。昨日判明したハルカのプレイヤー、楠木 遥歌だ。

「おはよう・・・楠木」

前日の流れでうつかりハルカと呼びそうになり、変に間が空いてしまう。ハンドルネームHNで呼んでも、彼女の場合本名をそのまま使っているの  
で、問題はないのだが、流石に、本名と意識して呼ぶには気恥ずかしい。咄嗟に出てしまいそうになったその名をなんとか押さえ込む。「あ、お、おはよう、神代君」

返事が返ってくるものの、見る見る顔が紅潮し、そのまま俯いてしまう。恐らく前日のことをまだ引きずっているのだろう。ちよつとマズかっただろうか？内心苦笑するが、もう手遅れだ。

（まあ、すぐに慣れるだろ）

そう思い直すと、自分の席に向かうことにする。というよりは、この様な状態の遥歌の側にいては、あらぬ誤解を受けそうなので、とりあえず離れたかったというのが本音だった。

それから10分もすると、見慣れた顔が続々とやってくる。湊斗ととりとめの無い話題で盛り上がり、咲希に突っ込まれ、そうしてまた樹の日常が始まるのだった。

## 昼休み。

いつものように目の前には見慣れた友人、湊斗の顔があった。だが、視線を少し横にやると普段の食事時には見慣れない顔が2つ。咲希と遥歌だ。

「お前ら、なんでここにいる？」

樹が呆れたように聞いてみる。

「まあまあ、たまにはいいじゃないの。あんたも両手に花で嬉しいでしょ？」

「両手に・・・ねえ。一輪しかない気もするけどな」

「どういう意味かしらね・・・!？」

予想通りまともな答えは返ってこなかったので、代わりに皮肉を返しておく。咲希は樹のセリフの意味を察し、怒気・・・というよりは殺気に近いものを樹に向けてみるが、このようなやり取りはよくあることだ。樹も全く意に介すこともなく咲希の視線を流している。

「で、本当に2人とも今日はどうしたの？」

先ほどまで、咲希と遥歌が居ることにも全く気にしていない様子で、黙々と食事をしていた湊斗も聞いてくる。

基本的に彼女らも2人で食事をしている。といっても、時折他のグループに混ざっていることもあるので、樹達のように常に2人ということもないのだが。とはいえ、男子のグループに入っていることなどまず無い。樹や湊斗とは交流があると言っても、そんなに頻繁に話すわけでもない。一見、全く気にしていないように見えた湊斗だが、彼なりに今回の状況は気にしていたようだ。

「どうも遥歌の様子がおかしくてねえ。どうもこいつが原因っぽくて」

今度は話を逸らすこともなく答える咲希。最後に樹を睨み付けることも忘れない。

「オレかよ・・・」

勿論心当たりがないわけではない。だが、未だにあんな調子だったのは予想外だった。チラリと視線を送ってみると、ただただ苦笑しているのだった。

「そう、あんた。一体なにしたのよ、さっさと吐きなさい」

「いや、吐けつつわれてもな・・・」

どうしたものかと考える。再度遥歌の方を見てみると、言わないでくれと言っているオーラが全身から出ていた。そんなのを見てしまつと、つい悪戯心に火がついてしまう。

「実は昨日・・・」

深刻な事態になっている。そう思わせるような重々しい口調で話し始める。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だが、そのあとが続かない。湊斗と咲希は次の言葉を待っている。  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やはり、樹の口が開くことはない。流石に2人もかなり怪しんでいる。そして、遥歌は、何を言われるのかと、ずっと落ち着かない様子だった。

「ねえ、神代。実は何も考えてないでしょ？」

「おう！」

実はその通りだった。正直に話してもよかったのだが、流石にそれも可哀想に思えたので、なにかくだらないことでも言つて、場を誤魔化そうとするものの、いざとなると、結局のところ何も浮かんでこなかったのだ。湊斗はそんな様子をあつさりと言破する。

「あ・ん・た・ねえ！！」

咲希の殺気が、再び樹に向けられる。咲希自身、何が語られるのか期待していた部分もあっただけに、先ほどまでより、尚強いものになっている。少し冗談が過ぎただろうか？内心苦笑する樹だったが、咲希から怒気や殺気の類を向けられるのは今に始まったことではない。むしろ、2人のやり取りは大抵こんな感じなのだ。なので、今更氣にしても仕方が無いので、今回も氣にしないことにする。



「わりいわりい。とりあえず、オレから言うことは無いよ。ってか本人目の前にいるんだから、こんな回りくどいことしないで直接聞けばいいだろうが」

「え!!?」

突然話を振られ、心底驚く遥歌。そもそも、遥歌が話さないから、樹達のところに來たのに、それを遥歌に聞けというのは、無茶な話だ。樹もそれはわかっていた。実際自分が話してしまってもいいのではないかとも思ったのだが、この場に本人が居るのなら、本人が話したほうがいいだろう。そう思っただけのことだ。

「昨日のことだろ? そんな隠すようなことでもないだろ」

大したことではない。まるでそう言うかのように先を促す樹。確かに大したことではない。前日にあったことと言っても、オンラインゲームで偶然助けられたプレイヤーにギルドに誘われ、そのままパーティーを組んでみたら、偶然にもクラスメイトだったというだけの話だ。確かに、確立としてはすごいことだが、樹と湊斗はファンタジアナイツのことは勿論、自分達がプレイしているサーバーやキャラクター名など気にせず話しているので、周囲には意外と知られているのだ。その為探そうと思えば、意外と容易に探し出せる。そう考えると、『偶然』という要素さえ除外すれば、オンラインゲーム上でクラスメイトと出会うことなど、取り立てて珍しいことではない。むしろ話の話題としては丁度いいぐらいのようにすら思える。そのため、樹にはそこまで隠したがる理由はわからなかった。

「そう・・・だね。じゃあ、これ以上咲希が迷惑掛ける前にちゃんと話してくね」

「ちよつと遥歌。迷惑ってなによ」

遥歌にしては珍しい言い回しに、内心驚きながらもツツコミを入れる咲希。恐らく先ほどの樹と咲希のやりとりの影響だろう。

遥歌は2日前のことから話し始めた。ファンタジアナイツを始めたこと、ダンジョンで偶然樹と出会い、ギルドに誘われたこと、パーティーを組んだこと、そして、それにより、お互いのプレイヤー

のことが判明したこと。

話を聞く限りでは、樹は先ほど思い出していたことと、なんら変わり無い。やはり、樹には、そこまで隠したがっていた理由がわからなかった。それは湊斗も同じようで、樹と同じように隠すほどのことには思えないという感じだ。しかし、咲希だけは少し反応が違っていた。

「そっかそっか。よかったね、遥歌」

どうも一人だけ納得しているようだった。しかも何がよかったのだろうか？以前、咲希自身もやっていると云っていたので、彼女に会ったならまだしも、樹に出会っていいことというのはあるのだろうか？考えても一向に答えは出ることはなく、樹と湊斗の頭には、ずっと“？”が浮かぶのだった。

「そういえばさ、昨日ずっと気になってたんだけど」

考えても答えは出ないので、話題を振ることにする。因みに、樹の中で聞くという選択肢はない。と、いうよりはそこまでの興味もないと言った方が正しいだろう。

「なんで本名使ってたんだ？」

ハンドルネーム

前日からの疑問。それは遥歌のHNだ。基本的にオンライン上では、個人情報の開示というのはまずしない。その為に使うのがHNだ。だからこそ、本名を使っても、みんなHNとしか思われないだろう。そういう意味では、確かに問題ないといえはそうかもしれないが、オンライン上で、易々と本名を名乗るべきではないと考える樹としては、彼女の行動は疑問だった。

「えっと、その・・・、思いつかなくて」

照れるように遥歌が答える。どんな理由があるのか、実のところ内心楽しみにしていた樹だったが、やはり内容は普通だった。

（マンガなりドラマなりのキャラ名でも使えばいいのに）

内心そう思う樹だったが、それを口に出すことはなかった。今更そんなことを言ってもどうしようもない。

「そーいえばさ」

「」

咲希が別の話題を振り、そのままその話で盛り上がる。そうしている内に、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴るのだった。

それから1週間。ラシルとハルカは順調にレベルを上げていた。とは言っても、オンラインゲームでの1週間だ。オフラインゲームと違い、基本的にレベルというのはそうそう上がる物では無い。序盤こそレベルは順当に上がってはいたものの、徐々にレベルが上がっていくにつれて、ハルカのプレイ時間があまり長くないことも合わさって、樹が当初立てていた目処ほどは上がっていなかった。数字にして、ラシルが27、ハルカが28。ランダムダンジョンの内容を考えると、もう少しレベルが欲しいところだが、今日がエルナの出した期限ギリギリだ。これ以上望むのは無理だろう。

ここは、ランダムダンジョンの入り口。そこに空の円舞曲ワルツのメンバーが集合していた。

「これで全員集合したかな？」

樹がボイスチャットで話しかける。ランダムダンジョンに入るためには同じパーティーに居ることが条件だ。その為、ギルドメンバー全員でパーティーを組んでいるのだった。

「おっけー」

「大丈夫」

「問題なし」

等々。それぞれに答えが返ってくる。が、当然全員がボイスチャットなため、若干聞き辛さを覚えた樹だったが、特に否定意見がなかったことに加え、モニター上でも自分を含め6人いることから、問題なしと判断する。

（しかしみんな物好きだよな）

エルナが出した条件は2つ。1つは彼女に渡されたアイテムを使用したランダムダンジョンを1週間以内にクリアすること。そして

もう1つは、ギルドのメンバーを最低1人は連れて行くことだ。つまりギルドメンバー全員を連れてくる必要はなかったのだが、溜まり場に居たメンバーに声を掛けたとき、その場に居たメンバーは全員付いて来ると言い、更にはまだログインしていないメンバーを待つてから出発ということになったのだった。樹自身がテストを受けたときも同じような状況だったので、こうなる事は予想していたのだが、改めて思い返すと、なんとも可笑しいのだった。

（まあ、あんま人のことは言えないか）

自分が同じような状況なら、間違いなく同じことをするだろう。そう思うと内心苦笑するしかなかった。

「じゃあ、ハルカ、よろしく」

ハルカの試験なので、移動は彼女に任せることにする。

ここ1週間で、遥歌をHNで呼ぶのにも随分慣れた。それは遥歌も同じだった。最初は、樹が遥歌のHNを口にするたびに、お互い気恥ずかしさのようなものがあつた。それ故に、苗字で呼んでいたぐらいだったのだが、流石にそれでは、他の者とパーティーを組んだときに困るので、結局お互いが慣れるしかなかったのだった。当初はぎこちない感があつたものの、今ではそれもなくなくなり、むしろ学校の教室で会った時にすっかり名前呼びかけてしまうほどだ。しかも、1週間前は本名と意識することで、言えなくなっていたのが、今となつては意識していても関係なく出かけてしまうので、余計に性質が悪い。

数秒のロード画面のあと、ランダムダンジョンの画面に切り替わる。それと同時に他のメンバーもエフェクトと同時に姿を現す。全員ダンジョンに入ったのを確認すると、少し辺りを見回してみる。ランダムダンジョン内にはマップが存在しない。そのため、あちこち歩き回って次の階層へのワープポイントを探すしかない。どうやら現在地はダンジョンの端に位置するようだ。だが、ワープポイントは見当たらない。地道に探していくしか無いようだ。

「んじゃ行くか」

樹の掛け声と共に皆動き出す。と、言っても樹と遥歌以外は見物なので、後ろを付いて来ているだけだが。

「ハルカ、予定通り一気にワープポイントを目指そう。敵は邪魔になるヤツ以外は全部無視で」

「はい」

この試験において、敵を撃破する必要は無い。目的はあくまでダンジョンのクリアだ。なので、最下層にあるダンジョン脱出用のワープポイントにさえ入ればそれで問題ない。それを考えれば、まだ敵の弱い上層での戦闘ならまだしも、敵が強くなってくる下層での戦闘は、自分の首を絞めることになりかねない。自分達がやられてしまつては元も子もない。勿論、ラシルはその辺りのことも考えて復活アイテム等も準備しているが、それとて無限にあるわけではない。ラシル自身が支援に回ることも出来るが、それも基本的にはソロプレイを考えてのスキル構成だ。他者復活用のスキルなど持ち合わせては居ない。ギルドのメンバーでは、プリーストのウィシユナが使用することが出来るが、彼女を含め、ラシルを除く空の円舞曲のメンバーは、あくまで見物人だ。彼女達が手を貸すことは無い。とは言つても、モンスターのターゲットは彼女達にも向くので、ラシル達の安全性は若干ながら上昇する。そういう意味でも、ラシルにとってみんなが着てくれたのはありがたかった。

ワープポイントを探索している内に、何度か戦闘もこなす。基本的にモンスターは放置と言っても、進路上にいるモンスターや遠距離攻撃を仕掛けてくるモンスターは放置しておく、逆にダメージが増えるためだ。とはいえ、安価なアイテムで来たランダムダンジョンの、しかも上層部だ。特に問題もなく、軽々と撃破していく。そうしている内に、10層目に到着する。

「一体どれだけあるんだ・・・」

げんなりした様子で、樹がインカム越しに話しかける。

基本的にランダムダンジョンは、通常のダンジョンに比べると、かなりの階層から成っている。通常ならどんなに多くても、5層程

度だろう。それに比べ、ランダムダンジョンは今回使ったアイテムなら大体10〜20階層ぐらいだろう。と言っても、運が悪ければ1階層しかない、という状況にもなり得るので、絶対ではないが。因みに、ランクの高いアイテムだと50階層というところでもない階層数も確認されている。

「愚痴らない、愚痴らない。あと半分ほどじゃないか」

エルナはなだめるように、というよりはこの状況すら楽しむかのように、樹を諭す。探索、戦闘をこなす、ラシル、ハルカの2人と違い、基本的にこの2人に追従しているだけだ。それ以外では、ボイスチャットでメンバー同士盛り上がっている。この状況でどこか楽しげに聞こえるのは、楽しむというよりは、実際楽しいと言ったほうが正しいだろう。

再び探索を開始する。やはり、先に発見するのは、ワープポイントではなくモンスターだ。ラシルは発見すると同時に攻撃を開始する。モンスターは放置と決めていても、意外と邪魔になるモンスターというのは多い。周囲を探索しながらということも手伝って、無視出来るモンスターというのは、むしろ少ないと言える。

まず1撃。それから2発、3発と攻撃を叩き込み一旦距離を取る。敵の反撃に備えてだ。だが、そんなラシルの後ろから、今度はハルカの矢が飛んでくる。勿論、その矢がラシルに当たることは無い。ラシルをすり抜け、そのままモンスターに命中する。その後も、数発の矢が命中しそのままモンスターを撃破する。

初めこそモンスターも大して強くもなく、転生し、装備も整ったラシルは勿論、まだ装備も十分とはいえない。と言っても1stキャラクターなら十分と言える装備だが。ハルカでも1撃で倒せるモンスターがほとんどだった。だが、2層前辺りから状況はかなり変わってくる。元々1層進む度に、敵が強くなっているのは感じていたのだが、8層目辺りからは、それまで以上にモンスターの強さが増している。そのため、樹はそろそろ最下層ではないかと予想していたのだが、その目論見も外れ、ますますげんなりとする

のだった。

「ハルカ、大丈夫か？」

「う、うん」

時間になるとそんなに時間は経ってはいないものの、ダンジョンの雰囲気も階層を進む速度も普段とは全然違うと言えるだろう。そんなことから、疲れを気にするが、どうやら大丈夫そうだ。

「お熱いことで」

「熱い熱い」

「羨ましいねえ」

「ホントだねえ」

「ちげえよ！」

そんな様子に、他のメンバーから冷やかしが入る。そしてその冷やかに即座にツツコミを入れる樹。こんな光景もはやお馴染みだ。

いつものやり取りを繰り返しながら、順調に階層を下っていく一行。幸い、ここに来るまで自分達では対処出来ないような数や強力なモンスターに遭遇するといったことはなかった、樹はもう少し厳しくなると予想していただけに、この現状に安堵する。

14階層目。次の階層へのワープポイントを発見するも、周囲にモンスターが湧いているため、なかなか次の階層へと進めないでいた。ラシル一人なら、多少強引にでも突っ切ることも可能だが、ハルカのことを考えればそれもマズイだろう。下手なことをして彼女がやられるという事態はなんとしても避けねばならない。

ある程度のモンスターを撃破し、なんとかワープポイントへの道が開ける。

「ハルカ、突っ込むぞ」

樹はボイスチャットで指示を出すと共に、ラシルをワープポイントに向けて移動させる。ハルカも無事に着いてきているのを確認すると、そのまま次の階層へと移動する。

画面が暗転し、若干のロード画面のあと、ラシルが1人表示され

る。少しして、エフェクトと共にハルカ、そしてエルナ達も次々と姿を現す。無事全員辿り着けたようだ。

「ん？」

まず初めに気付いたのはアルタス。そして、それに反応するかのようになんかある事に気付く。

「やつとか・・・」

ようやく、といった感じでラシルが呟く。現在の階層は15階。

そこは、今までと違うものが1つあった。ダンジョンにながれるBGMだ。

「何かあつたんですか？」

一人、現状がわからないという風のハルカが問いかける。

今流れているBGMは通常、ボスモンスターとの戦闘フィールドで流れるものだ。だが、それ以外にも使われる場所がある。それは、ランダムダンジョンの最下層だ。つまり、今ラシル達の居るこの15階層目で終了ということになるのだ。

「ここが最下層なんだよ。がんばりな」

一人置いてけぼり状態のハルカにエルナが答える。

話が一段落したところで探索が再開される。だが、今回はラシルの様子が少し違う。先程までは探索がメインだったのが、戦闘メインになっている。

「あれ？ラシル君、ワープポイント目指さないの？」

「あ、そっか。知らないんだっただな」

ランダムダンジョン最下層には、通常の間まではワープポイントは存在しない。代わりにボスモンスターとも言える通常より強力なモンスターが存在する。そして、そのモンスターを倒すことによってワープポイントが出現する。だが、見た目には通常モンスターと違いはなく、違いはモンスターの強さだけだ。そのため、見かけるモンスターを次々と倒していくしかない。

そのことをラシルは説明する。

探索を始めて10分ほど。戦闘を中心に進んでいるため、思うよ



うに進まない。この辺りまで来ると、すんなりと倒せるモンスターも少ない、と言うよりは居ないと言ってもいいだろう。ペースが落ちてしまうのも仕方ないことだった。

更に10分。依然として目標のモンスターは見つからない。尤も、そんなに多くのモンスターを倒している訳でも無いので、仕方が無いと言えば仕方がないのだが。

「いねえな……」

樹が呟く。樹からすれば、これほどまでに見つからないということとはまずなかった。そもそも、基本的にソロプレイヤーな樹がランダムダンジョンに入るのは滅多にないのだが、それでもギルドでの狩りなどで、来ることはある。そして、その時にはもつとあっさりが見つかったのだった。尤も、メンバーが全然違うので、効率は遥かにいいせいもあるのだが。また、前回の自分の試験の時も見つけるのにそんなに苦労した覚えもない。その為、簡単に見つかるかと踏んでいた樹には、これほどでこずるのは少し堪えていた。

少し飲み物でも取ってきて休憩を挟もうか？そう考えた時、近くに数匹のモンスターが固まっているのが見えた。

（とりあえずアレを潰してからでいいか）

そう判断すると、手前のモンスターに攻撃し、来た道を少し戻る。後ろのモンスター達のターゲットにされないためだ。

モンスターを引き寄せ、相手の攻撃をかわしてから反撃に移る。ハルカの弓での支援もあり、難なくこれを撃破する。そして2体目と行きかけたが、モンスター達は固まって、周囲に広がる様子は無い。数は4匹。出来ることなら同時には相手にしたくはない。とは言え、ここで倒しておきたいというのもまた本音だ。どうしたものかと考える。

「どうする？やめとく？」

そんな樹の様子を察してか、ハルカが問いかける。

「……いや、行こう」

少し間を置き答える。どうやら腹をくくったようだ。

まず、目標としたのは最も手前に居たゲル状のモンスターだ。ラシルが近付くと、モンスター達もそれに気付く、ラシルをターゲットに定め一斉に向かってくる。まず、ラシルが先制で1撃攻撃を加える。そして、そのまま距離を取る。周囲のモンスターのことを考えてだ。ラシルが距離を取ると同時に4匹のモンスターの攻撃が先程までラシルが居た位置に降り注ぐ。そんな様子などお構いなしと言うかの用にハルカが弓を放つ。2発、3発と矢を打ち込み、最後にスキルでの2連射。その全てが命中する。だが、未だ倒すには至らない。

その場に居た全員が異変に気付く。倒せないこと自体は不思議ではない。モンスターのレベルの詳細は不明だが、ラシルやハルカとほぼ同等と言ってもいいだろう。それなら、あれぐらいの攻撃で倒せるモンスターは少ない。なにより、ゲル系統のモンスターは通常攻撃が効き辛く設定されている。倒せないとしても仕方が無い。それではおかしな部分とは何か？それはダメージだった。先ほどまで、悠々と3桁のダメージを出していた、ラシルの攻撃が、わずか30ほど。ハルカに至っては1桁だ。最後に放ったスキルでようやく10の文字が見えた程度だった。先にも述べた通り、ゲル系統のモンスターには通常攻撃は効き辛い。だが、ここまでダメージが下がるということはない。考えられるとすれば、それは、このモンスターのレベルがラシル達より高いということだろう。それはつまり、このモンスターこそが、このダンジョンのボスモンスターであことこの証でもあった。

「見つけた！こいつだ」

そのことに、樹が気付く。それと同時に後ろの見物組みも気付いたようだ。

「厄介なものになったね」

「でもラシルは魔法いけただろ？問題ないんじゃないか？」

エルナとアルタスだ。

確かにゲル系統のモンスターは通常攻撃だけでは倒し辛い。その

傾向は高レベルになればなるほど、より顕著になっていく。だが、逆に魔法には弱いという性質も持ち合わせている。その為、アルタスには、魔法が使えるラシルがいる分、楽に戦えると思えるようだ。」「でも詠唱間に合うかな？」

「ちよつと支援してあげたほうがよくない？」

こちらは、ウイシユナとリシユリー。2人とも魔法を主とするジョブだけに、懸念材料があることを素早く見抜く。

相手がゲル1匹だけなら問題はない。ラシルほどのプレイヤースキルがあれば、あっさりと撃破出来るだろう。だが、現状は他にも3匹のモンスターも同時に相手にしなければならぬ。これが問題だった。他のモンスターに比べ、少し足の遅いゲルだけなら、少し距離を取れば魔法の詠唱も間に合うだろう。だが、他にもいるのは、そうもいかない。恐らく、詠唱が完了するまえに追いつかれ、そのままキャンセルされるのがオチだろう。

「大丈夫。まあ、見てなつて」

2人の心配をよそにラシルが答える。インカムから聞こえてくるラシルの声は、全く問題ないとも言つかの様に聞こえる。

まずラシルは4匹のモンスターから距離を取る。少し距離が開けばモンスターを待ち、近付いてくれば、また離れる。この動作を数回繰り返す。これにより、ゲルが少しではあるが、集団から離れ、孤立した状態になる。それを確認すると、今度は残りの3匹に向かって攻撃を仕掛ける。こちらには、通常通りダメージが与えられる。それを確認した、ラシルとハルカは確実に、1匹ずつ仕留めていく。周囲のモンスターを倒すのに、そんなに時間はかからなかった。

他に新たなモンスターが出現していないのを確認すると、ゲルと対峙する。とはいえ、このままでは対処の仕様が無い。

「ハルカ、あいつの相手頼む」

ラシルは、そう言うと同時に、後ろに下がる。

「え？え？」

ラシルの意図が読めず混乱するハルカ。だが、こちらに迫るゲル

を確認すると、距離を取りながら攻撃をしていく。ダメージは相変わらずだが、何もしないよりはいいだろうと判断してのことだ。ゲルもターゲットをラシルからハルカへと変更し、そのままハルカを追いかける。

一方ラシルは、少し距離を置き、スキルを入れ替える。スキルスロットに設置していた白魔法を黒魔法に置き換え、新たにショートカットに黒魔法を登録する。これで準備は完了だ。ラシルはハルカのほうにいる方へ戻り、モンスターを確認する。そしてそのまま呪文の詠唱を開始する。教会の地下でも使用していた『ファイアーボール』だ。詠唱が終了し、魔法が炸裂する。先程までとは打って変わって、今度はまともなダメージを与えられる。SPがなくなるまで魔法を打ち込み、それから、通常攻撃、SPが溜まればまた魔法と繰り返し、ようやくゲルの撃破に成功する。幸いなことに、近くにワイプポイントも出現し、そのまま、ダンジョンをあとにするのだった。

「お疲れ」

溜まり場に戻り、皆が一斉に互いの苦勞を労う。ハルカのギルド入団試験も無事終了となった。

「これでハルカも晴れて正式にウチの団員となったわけだ。ってな訳で一言挨拶！」

「え？あ、挨拶ですか？」

エルナの突然の一言に戸惑うハルカ。誰か止めてくれないかと、一瞬期待するものの、すぐにそれはないということに気付く。そして、予想通り、誰もそんな様子はない。

挨拶と言われても、どうやっていいかわからない。どうしたものかと考え、しばらく沈黙してしまう。だが、他のメンバー達は、そんな様子を気にすることもなくただハルカの言葉を待ち続ける。そして、意を決するように口を開くのだった。

「みなさん、改めてよろしくお願ひします」

こうして、正式に空の円舞曲に新たなメンバーが加わるのだった。

## Chapter 1 - 4 (後書き)

ラシル(以下ラ)「ファンタジアナイツなんでもQ&A!!」

ハルカ(以下ハ)「相変わらず続くこのコーナー。今回も無駄に長いです」

ラ「いらねえよって人はすっ飛ばしてくださいね。じゃあ今回もいつてみよ」

ハ「じゃあ、まず最初の質問。レベルの上がり方がおかしくないですか？特にジョブ関係」

ラ「作者がその辺ちゃんと考えて無いのでおかしいです。はい、次ハ「え！？ここはもうちょつと広げましようよ」

ラ「めんど・・・ゲフゲフ。まあ、真面目に答えると、ジョブは高レベルになればなるほどあげやすくなるからとも思ってください」ハ「キャラクターのレベルは？今回の話を見る限り、2ヶ月で転生してレベル60まで上げたラシル君とは思えないペースだけど」

ラ「そっちは単純にハルカに合わせてたからってことで」

ハ「めずらくまともな返答がもらえた所で次です。の影が薄いんです。あ、の中には影が薄いと思えるキャラ名を入れてください」

ラ「仕様ですってことで。気をつけてはいるらしいけどな・・・」

ハ「今回私の試験のはずなのに、私の影が薄いのも仕様ですか？」

(泣

ラ「うん、仕様。もしくは作者の力不足」

ハ「じゃあ、次の質問・・・」(沈んだ声で

ラ「頼むから露骨にへこまんでくれ」(汗

ハ「ラシル君って廃ですか？・・・廃です」

ラ「ちよつと待て!!」

ハ「え？違うんですか？」

ラ「違う！断じて違う!!」

ハ「でも装備と言い、プレイ時間と言い、プレイヤースキルと言い、どこに出しても恥ずかしくない廃だと思っんですが・・・」

ラ「単純にやってる期間が長いからだ。プレイ時間も睡眠時間削つてまでやってないし」

ハ「・・・じゃあ、そーゆーことにします。次の質問です」  
ラ「納得されてないし」

ハ「ランダムダンジョンの階層がありえないですか？」

ラ「フィクションだから細かいことは気にしない」

ハ「いいのかな・・・？じゃあ、次の質問です。あとかきのゲームメーカーネタはいつまで引つ張るんですか？」

ラ「アレは前回で終了」

ハ「そうだったんですか。そういえば今回は出てきてませんねえ」

ラ「たまたま続いただけだしな。しかもネタもないし」

ハ「それでは次です。ゲル状のモンスターの表記が途中からゲルだけになってたのはなぜですか？」

ラ「それ作者の怠慢。予想以上にゲル状のモンスターって表記が出てくるもんだから、毎回毎回そう書くのもめんどくさくなって表記はゲルだけにしたらしい」

ハ「でもゲルじゃないですよね？」

ラ「一応設定上はゲルってモンスターの亜種だね」

ハ「作者さんはなんで名前付けて無いんですか？」（汗

ラ「なんも浮かばなかったからだ」

ハ「相変わらず適当な人なんですね・・・」

ラ「一応フォローしておく、名前を決めるのが滅茶苦茶苦手つてもあるんだがな」

ハ「じゃあ、最後の質問です。1話目っていつ終わるんですか？」

ラ「今回で1話目は終了だ」

ハ「やつとですか。でも4つて半端ですねえ」

ラ「1話目のエピソードで5を入れてもよかったんだけど、これ以上ひっぱるのもなんだし、なによりかなり短くなりそうだった

たしな」

ハ「意外とまともな理由ですね」

ラ「そんなわけで今回も無事終了」

ハ「相変わらずのアップはまったりペースですが、まだまだ続くので、お付き合いよろしくお願いします」

ラ&ハ「それではまた次回」



## Chapter 2 - 1

「さてと、今日もがんばるとしようかな」

少女は部屋に入りながらそう呟く。

風呂上がりなのだろう。パジャマ姿で、まだ湿り気のある髪を首にかけたタオルで、器用に片手で拭きながら、部屋の中を移動していく。もう片方の手には、湯気の立つコーヒーカップ。カップを机に置き、机に置かれたパソコンに電源を入れると、自身も椅子に座り、コーヒーを一口、口に含む。

次第にパソコンが立ち上がり、デスクトップ上に置かれたソフト・  
・ファンタジアナイツを起動させる。

いくつかのウィンドウが表示され、その後画面はまるで電源が落ちてしまったかのようにブラックアウトする。だが、それもほんの数秒のことだ。すぐに、先ほど起動させたファンタジアナイツがようやく立ち上がり、その画面がモニターにフルスクリーンで表示される。

IDとパスワードを入力し、自身のキャラクターを選択。少しのロードのあと、画面は街中へと変わる。そこに表示されているキャラクターは、ソレルという名の女性タイプの商人だった。

「たしか、アイツが今はラシルってキャラで、あと遥歌はそのままってこないだ言ってたっけ」

まるで確認するかのように、そう呟く。

「まあ、簡単に見つかるとは思えないけど」

更に、苦笑気味にそう呟く。

少女が今居る街はライラック。そして、彼女が探す2人組みが拠点とする街もまた、ライラックだ。普通なら、同じ街にいるなら簡単に見つかりそうだが、どうやら、少女の様子から察するに、未だその目標は、達成出来ていないようだ。

この少女がいつ頃から探しているのかはわからないが、ラシル達

の拠点は、建物の中にある上に、最近までは、ハルカのレベル上げのため、街にいることはあまりなかった。

また、彼女のキャラクター・・・ソレルのレベルはラシルやハルカのレベルと大差はない。それなら、フィールドやダンジョンで会うこともあるかもしれないが、ラシルはレベルアップを優先していたので、ワンランク上の場所に行っていた。その為、街意外でというのもやはり難しい。

なかなか目的が達成出来なくても仕方のないことだろう。

「今日もがんばるとしますか」

改めてそう言つと、少女はソレルを操作し、ライラックの街中を移動するのだった。

ハルカのギルド入団試験から1週間。ラシルは、ソロに戻ることもなく、そのままハルカと組んでいるのだった。

ハルカを連れてきた当初は、入団試験が終われば再びソロに戻るつもりだったのだが、互いにレベルが近いことと、目標としていたクラスに転職出来たので、ペースダウンも兼ねて結局の所、このままの状態で落ち着いているのだった。

ハルカはというと、入団試験の1週間前からマスターであるエルナの誘いもあり、既に入団はしていた。そのこともあり、既にギルドには馴染んでいる様だった。

入ったばかりの頃はギルドのチャットにも、あまり積極的に参加することもなく、せいぜい話を振られればそれに答えるといった程度だった。試験までにレベルアップ急がなければならなかった都合上、他のメンバーとどこかにというのは厳しいとしても、チャットぐらいはと、ラシルは内心心配になっていたのだった。だが、今ではそんなこともなく、チャットどころか、他のメンバーと共にどこかに出かけている姿すら見受けられる。そんな様子にラシルは素直

に安堵するのだった。

ラシルとハルカの2人はライラックの街を散策していた。

場所は街の南側。以前待ち合わせに使った街の北側とは違い、南側は人が溢れているのだった。その理由の1つに、他のプレイヤーによる個人商店が並んでいることが挙げられるだろう。

ノンプレイヤーキャラクター

個人商店はNPCが販売するランク2までのアイテムと違い、ランク3以上のアイテムを取り扱っていることが多い。また、同じアイテムでも、モンスターのドロップ（落とした）アイテムの方が性能が高く設定されていたり、消費アイテムがNPCよりも安価で販売されているため、これはスキルさえ持っていればアイテムを通常よりも安価で購入出来るためである。買ひ物は個人商店がメインとなる。人が溢れる理由に個人商店が挙げられるのも当然といえるだろう。

NPCが販売していないアイテムを購入するのなら、オークションも存在する。こちらを利用するものも少なくは無い。だが、どうしても時間がかかってしまうのと、なにより値段が一定でないことが大きく要因し、個人商店を利用する者が減ることはない。

そんな個人商店が並ぶ街の南側、通称“商店街”を歩くラシルとハルカの2人の目的もまた、あちこちに並ぶ個人商店にあった。

1件覗いてはまた次の1件と、数ある商店の中を次々と覗いていく。どうやら目的の品はなかなか見当たらないようだ。

事の始まりは15分ほど前。

この日、ラシルのプレイヤーである樹は、友人の湊斗を含めた数人のクラスメイト達と、学校帰りに遊びに行っていたため、普段より帰りは遅くなっていた。そして帰宅後、いつものようにフアンタジアナイツにログインすると、そこにはハルカを除く空の円舞曲フルツのギルドのメンバー達が既にログインし、溜まり場となっているライラックの街の一画にある建物内で談笑しているところだった。

「お、ちょうどいいところに来たね」

挨拶もそこそこに、エルナが早速話しかけてくる。みんなで狩りにも行くのだろうか、そんな期待が頭をよぎる。

「ハル力がウチに入ってもう1週間だろ？だから記念になんかあげようかって話してたんだ」

「ああ、いいんじゃないか」

予想とは違っていたことに、内心少しがっかりとするラシルだが、表に出すことなく、エルナの意見に賛成する。ラシルが入団したときも、やはり同じように剣を1本貰ったことを思い出す。

「で、モノは決まってるの？」

「銀弓あたりでどうかってちょうど話してたところだよ」

銀弓・・・正式名称はシルバーボウなのだが、チャットで打つと少し長いので、こう略されることが多い。

武器としても、現在ハル力が使っているものよりも強く、ランクが3なので、ドロップ（落とす）アイテムに限定されるため、少し値は張るが、それでもお手ごろな価格と言える部類だ。特に反対する理由もないので、ラシルもその意見に賛成する。

「じゃあ、あんたから渡してやりな」

そう言ってラシルにお金を渡すエルナ。

「マスターからじゃなくていいのか？」

受け取りながらも疑問を感じるラシル。ギルドの行事というには少し大げさだが、それでもギルドで動いてのことには変わりない。それなら、マスターであるエルナから渡すのが筋というものではないだろうか？

「今まで面倒見てきたのはアンタだしね。別に構わないさ」  
特別気にはしていないとでも言うようにエルナが答える。

丁度そのとき、ログイン時のエフェクトと共にハル力が現れる。

「こんにちは」

「丁度よかったじゃないか。2人で行ってきな」

やはり挨拶もそこそこに、先を促すエルナ。ハル力は突然のこと

で理解出来ないでいる。そんな様子を気にする様子もなく、ラシルはハルカに「行くぞ」と一声掛けて出て行くのだった。

道中で、ハルカに説明しながら、しかし、ギルドからのプレゼントとは言えないので、その部分は適当な理由をつけて誤魔化し、現在に至っているのだった。

「見つからないね」

商店街の半分辺りまで来たところで、ハルカがパーティー用のチャットで話しかけてくる。

個人商店を開くと、キャラクターの頭上に吹き出しのようなアイコンが現れる。そしてその吹き出しの中には、各プレイヤーがそれぞれ商店の名前や販売している商品が書いてある。中には空白にしているプレイヤーもいたりするのだが。だが、最近は商品名を書いているプレイヤーが多いため、大抵の商店は見た目で判断出来る。そのため、ラシルとハルカが直接見て回っているのは、それ以外の商店となるため、意外と数は少ない。

「いつもは大抵あるんだけどな・・・」

2人の探し物であるシルバーボウはランク3のアイテムだ。その為、NPC経由での販売はなく、モンスターを倒した際に得られるドロップアイテムでの入手となる。その為、大量に出回るといふことは無い。だが、このアイテムを落とすモンスターは比較的倒しやすい上に、確立も低いほうではない。勿論、数字だけを見れば、まず出ることにはないような数字なのだが、それでも、他の武器や防具と比べれば比較的高いほうだ。その為、大抵の場合は、誰かしらが手に入れ、そのまま商店街で売られていることがほとんどなのだが、この日に限っては、どうやらそうではないらしい。ラシル自身も、商店街を利用するときは、見かけることが多かっただけに、この状況は少し予想外だった。

（出来れば今日中に渡したいんだけどな）

そんなことを考えながら更に商店を眺めていく。何が何でも今日に渡さなくてはいけないという訳ではない。それはラシルも理解し

ている。だが、ハルカを連れて買い物に来ていることと、なにより丁度節目になっていることからなんとなくか今日中にと考えていたのだった。

「でも、なんだか意外だね」

そろそろ商店街も終点に辿り着くだろうかという時、ハルカガバーティーチャットでそんなことを呟く。なにか意外なことでもあっただろうか？確かにシルバーボウがここまで売ってないのはラシルにとっては意外だが、ハルカが普段は割りと売られていることが多いアイテムだとは知らないはずだ。それならなんだろうか？ラシルは一人延々と考えながらハルカの言葉を待つ。

「マスターがアーチャーになるうとしていたなんて」

「ああ、そのことが」

この一言でラシルは全て納得する。

先にも述べたように、この買い物の目的であるシルバーボウはギルドからハルカへの入団祝いのプレゼントだ。その為、ハルカ本人に本当のことを言えるはずもなくラシルが適当な理由を言ったのだ。その理由は、“エルナが最近アーチャーに興味を持ったようだから、この際転職してしまう”ということだった。

エルナと出会った時から、ずっと騎士姿を見ていただけに、彼女がアーチャーになるといいうのはかなり意外なのだろう。むしろ、この話が本当のことならラシルは勿論、それより前から知り合いのほかのメンバー達も同じ感想を抱くだろう。

ラシルはエルナのアーチャー姿を想像し、口元を緩めてしまう。

ラシルがエルナと出会ったとき、彼女は騎馬系統の3段階目のクラスのコニコンナイトだった。余談だが、男プレイヤーだと

騎馬系統の3段階目はナイトマスターとなる。そして現在は騎士系統の3段階目のクラス、ジェネラルだ。ずっと前衛、しかも鎧姿のキャラクターを見てきたラシルにとって、彼女のアーチャー姿はなんとも似合わず、ついつい笑ってしまうのだった。

そうしている内に、商店街も終点へと到着してしまった。結局探

していたシルバーボウも見つからずじまいだ。勿論、この通り以外にも商店を出しているプレイヤーもいるが、ここ以外では、装備品よりも、消耗品やクエスト用のアイテムを売っているプレイヤーが多く、ここで見つからないのなら、他の場所で発見出来る確立はかなり低いだろう。

（他の街に行ってみるかな）

ここ、ライラックの街は、大陸の首都という設定になっている。その為か、ここを拠点にしているプレイヤーは多く、また、アイテムの流通もここが一番多い。だが、他の街にも、この街ほどではないが商店を出しているプレイヤーはいる。それに、ここでは見つからなくても、他の街で見つかるということも多々ある。ライラックから離れた場所で入手出来るアイテムなら、尚更だ。

（たしか銀弓は・・・）

ラシルはシルバーボウを落とすモンスターが配置されているマップを思い出す。そのマップの近くの町ならば、案外売っているかもしれない。そう考えていたときだ。

「あ、あつたよ！」

先ほどまでとは逆走する形で進み、改めて商店を探していたハルカがパーティーチャットで呼びかけてくる。ラシルもそれに気付きハルカの元に行ってみる。すると、そこには確かに、“銀弓”と書かれた商店をだすプレイヤーが居たのだった。先ほど2人が歩いていた時には確かに居なかった。恐らく、ラシル達が通り過ぎた後で商店を開いたのだろう。

早速中を覗いてみる。間違いなくシルバーボウだ。お金も十分に足りる。

商店名が銀弓とだけ書かれているだけあって、並んでいるのはシルバーボウが並んでいるだけだ。数は3つ。ラシルはそれぞれ性能を見比べていく。ドロップアイテムはそれぞれ若干ではあるが性能が違う。その為、こういった確認作業が必要になる。複数売っているのなら尚更だ。

見比べた結果、純粹に攻撃力の高い物、アーチャーに必要なパラメータに修正がされる物、SPの上昇率が上がる物だった。どれを見てもいわゆる“当たり”という物だろう。物によっては攻撃力が低かったり、パラメータがマイナス方向に修正されたり、クラスにはほとんど関係ないパラメータがアップしたりと、“はずれ”のアイテムが出ることも珍しく無い。そんな中、よく“当たり”が3つも出たものだと感心する。少し悩んだ後、攻撃力の高い物を選び、購入する。

「それじゃあ、戻ろうか」

「ちよつと待った」

目的のものを購入し、帰ろうとするハルカを呼び止める。そして、ハルカにトレードの要請を出す。一瞬ラシルの操作ミスかとも思い、戸惑うハルカだが、素直にラシルの要請を承諾する。

トレード用のウィンドウが新たに現れ、そこに表示されたのは、先ほど購入したはずのシルバーボウだ。エルナのために買ったはずのシルバーボウをなぜ自分に渡すのか？理由がわからず混乱し、この取引をどうするべきかと固まってしまうハルカ。

「えっと・・・」

「いいから受け取れ」

ラシルに言われるまま、このトレードに合意するハルカ。これにより、先ほど購入したシルバーボウはハルカへと渡る。

「帰ったらみんなに礼言つとけよ」

そう言って一人、先に帰路へと着くラシル。ラシルの言った意味が理解出来ずに、その場に立ち尽くすハルカだが、すぐに理解して、更に戸惑ってしまう。

「置いてくぞ」

ラシルの一言で、我に返ったハルカはそのままラシルの後を追うのだった。

商店街を抜け、街の西側の通路を歩いている時だった。通路の一角に人だかりが出来ているのを発見する。近くを通りかかる際にそ



の方向をチラリと見てみるラシル。どうやら、ここで商店を出していたプレイヤーと2人組みのプレイヤーが揉めているようだ。周囲に集まるプレイヤー達はそんな様子を止めるわけでもなく、眺めているいわゆる野次馬だろう。

当人達はオープンチャットで口論しているため、偶然通りかかったラシル達にもそのログが流れてくる。

「だから、わざとじゃないって言ってるでしょ！」

「ふざけんな！」

「そんな額で間違いなんかするわけねえだろ！この詐欺商人が！」  
「だからさつきからあやまつてるでしょ！」

ずっとこのような調子でチャットが展開されている。

どうやら、商店をだしていた女商人のプレイヤーが価格設定を間違えて商店を開き、このプレイヤー達と口論になっているらしい。2人組みのプレイヤーのチャットの内容から察するに、低価格のアイテム      ポーション等の消耗品だろう      の価格設定のミス。この場合考えられるのは、桁数の間違いか、別商品の価格で売り出していったところだろう。

（この場合だと桁かな？）

ラシルはそんなことを思いながら、しかし、それ以上の関心を示すこともなくその場を後にする。

「放っておいていいの？」

そんな様子に、ハルカがパーティーチャットで話しかけてくる。  
ハルカの性格上、この様子を放っておくのは忍びないのだろう。

「こういうのは関わらないに越したことはない。話もややこしくなるだけだしな」

そう返し、再び立ち去ろうとするラシル。ハルカも最後に商人の方に視線をやり、ラシルの後に続いた。

「ちよっとそのカップルさん、あんた達からもなんか言っちゃってよ」

野次馬達が集まっている中、立ち去ろうとしたラシル達は目立つ

たのだろう。突然商人のプレイヤーから声を掛けられる。だが、そんなことを気にするラシルではない。まるで声を掛けられたのは自分達ではないとでもいうかの様に、その場を離れていく。だが、ハル力はそうもいかない様だった。

「え・・・！いや、カップルってそんなんじゃ・・・」

（あのバカ・・・）

ハル力の反応に内心呆れるラシル。こうなってしまうっては自分も知らないでは通せない。面倒ごとには極力関わりたくないラシルだが、こうなってしまうては素直に仲裁した方がいいだろう。そう判断し、ラシルも足を止める。

「あんたらもこの女の仲間か？」

「ログ見た感じじゃ値段の設定ミスみたいだけど、あんたら被害は？」

近付いてくるラシルに、2人組みの片割れが問いかけてくるが、まるで聞こえていないかのように、振舞うラシル。

相手のペースに合わせては、この女商人が先ほどまでしていたような延々と平行線の口論になりかねない。いや、もはや口論にすらならないだろう。そして、その先にあるのは、わざとかわざとではないかの水掛け論だ。そんなものに付き合う気は毛頭ない。

「いや、特には・・・」

初めに話しかけてきたプレイヤーとは違う、もう片方のプレイヤーが答える。

その返答にラシルは内心溜息を吐く。

このプレイヤー達は、価格の設定ミスにより、なにかしらの被害があったわけではないのだ。ただ、設定が間違っていたというだけで、この商人のプレイヤーに絡み、この様な騒ぎになっていたのだ。

再度溜息を吐くラシル。予想はしていたが、最早呆れるしかないのだった。

「じゃあ、もういいだろ。はい解散」

そう言つて早々に立ち去ろうとするラシル。だが、なにか思い出したかのように不意に足を止める。

「あと、アンタも値段の確認ぐらいしろよ」

女商人のプレイヤーにそう言い残し、今度こそその場を後にするのだった。後ろで見えているしかなかったハルカもその後が続く。まるでそれが合図だったかのように、周囲にいたプレイヤー達もまた、解散していくのだった。

結局、最後に残ったのは、当事者の一人である女商人のプレイヤーだけだった。名はソレル。

ソレルのプレイヤーはモニターを見ながら、笑みを浮かべる。

「みいつけた」

一人そう呟き、ソレルをラシル達が向かった方へと移動させるのだった。

「おゝい、ちよつと待って！」

ラシル達の背後から声を掛けられる。名前を確認すると、ソレルというプレイヤーだ。一瞬誰だかわからないラシルだったが、すぐに先ほどの商人のプレイヤーだったと気付く。

「まだなんか用？」

素っ気無く答えるラシル。

これ以上は面倒臭い、というオーラを出ているの感じ取り、その様子に隣のハルカはただただ苦笑するしかなかった。

「さっきのことお礼も言つてなかったからさ、ちゃんとお礼でもと思つて」

「ああ、気にするな。それじゃ」

そう言つて、再び歩き始めるラシル。

ハルカはどうしたものかとその場に立ち尽くしている。

「だから、ちよつと待ってつてば」

「もう用は済んだろ？礼なら別にいらん」

立ち去ろうとするラシルに声を掛けるソレル。だが、ラシルはあ

くまで素っ気無く答え、再度立ち去ろうとする。

その時だった。

「ギルド、私も入れて」

「はあ!？」

「えっと・・・」

突然のソレルの言葉に2人は絶句する。

この全く予想外の提案にどう答えるべきか、考えてみるが一向に考えはまとまらない。そうしている間に、ハルカが上手く言ってくれるのではないかと期待してみるが、どうやらハルカも同じような状態なのだろう。彼女に期待するのも無理そうだ。

「なんでそうなる？」

そもそも、先ほど助けた礼をしたいということと呼び止められたはずだった。礼なら既に言ってもらっているし、物を貰うつもりもない。なにより、そんな大層なことをしたつもりも無い。

その礼とギルドとどう繋がるのか、ソレルの意図がいまいちわからなかった。更に言うなら、礼にすらなっていない。

「えっと、私まだ始めてまだそんなに間もないから、あげられるものもないし。だから一緒にギルドに入って、色々と手伝おうかな・・・なんて、だめ？」

「いや、『だめ?』って言われてもな・・・」

明らかに苦し紛れの言い訳と取れるソレルの言葉に、どうしたものかと悩むラシル。

彼女の言うことに、一応の筋は通っている。礼の仕方も色々だ。こんな形の礼の仕方もあるだろう。だが、ラシル本人にその必要性を感じていない上に、ギルドまで出てくるとなると、ラシルの一存では決められない。

「ギルドはマスターに聞かないとなんとも言えないよ。だから、紹介するぐらいなら出来るけど、それでもいいかな？」

「うん、十分」

ラシルが返答に困っていると、そこにハルカが提案する。ソレル

も特に異存は無いようだ。

「ラシル君もそれでいいかな？」

「もう好きにしてくれ・・・」

こうして、新たなギルドメンバー候補を加えて、3人は空の円舞曲の溜まり場へと向かうのだった。

## Chapter 2 - 1 (後書き)

ソレル(以下ソ)「ファンタジアナイツなんでもQ&A -  
- !」

ソ「・・・ってあれ？だれもない」

ソ「とうとう読者からの反響だけじゃなくて司会も消えたのね」

ソ「まあ、いいや。早速質問」

ソ「こんk・・・」

ラシル(以下ラ)「人のコーナーを勝手に乗っ取るなー！」  
(ソレルの後頭部をハリセンではたくラシル)

ソ「いったー。後ろからいきなり殴るなんて酷いじゃない」(泣  
ラ「自業自得だ」

ラ「ただでさえ長いのに無駄に行数使いやがって」

ハルカ(以下ハ)「それじゃあ。最初の質問です」

ソ「セリフまで取られてるし」(泣

ハ「今回は随分アップされるのに時間がかかってたけどなぜですか？」

ラ「なぜか書く時間があまりなかったそうだ」

ソ「大して忙しくもないのに？」

ラ「本人曰く、1日12時間になる罪を背負ったかもしれんらしい」

ソ「いや、そんな罪ないから」(汗

ハ「このネタどれぐらいの人に通じるんだろう？って、それよりも  
このネタ使って大丈夫なのかな？」(汗

ラ「じゃあ、次」

ハ「このゲームのクラスって元ネタってあるんですか？」

ラ「主にラング ッサーを参考にしているらしい」

ソ「だからハイマスターなんてクラスも考えてたのね」

ラ「クラスの特徴とかはちゃんと考えたらしいけどな」

ハ「でもラング ッサーにないクラスも結構ありますよね」

ラ「その辺は他のゲームとかも参考に考えたらしい」

ソ「ようするにパクリの集合体ってわけね」

ラ「身も蓋もないこと言うな！」

（再びハリセンで一閃）

ラ「一応名前を参考にした程度だ」

ハ「じゃあ、次行きますね。冒頭に出てくるキャラが誰だかまるわかりです・・・ってこれ質問じゃないような・・・」

ソ「私のことね。そう、私の正体は・・・」

ラ「言うな！」

（再びハリセン（以下略））

ラ「わざとに伏せてあるだけですよ。隠す気は一切ありません」

ハ「それでは今回はこの辺で」

ラ「次回もよろしく」

## Chapter 2 - 2 (前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

毎度ながら遅筆で申し訳ないです。

次回以降ですが、諸事情により、更に更新が遅れると思われます。  
見てくれている方々にはホント申し訳ないです。

それでは本編の方をどうぞ



## Chapter 2 - 2

ライラックの街の中心地を囲むかのように建てられた、様々な店更にその店を囲むかのように建てられている様々な建物。基本的に入ることの出来ないが、全てがそうと言う訳ではない。数少ない進入可能な建物の内の1つにその場所はあった。

ギルド『空の円舞曲<sup>ワルツ</sup>』の溜まり場である。

建物内では、ギルドマスターのエルナ、そしてメンバーのリシュリー、アルタス、ウイシュナの4人が談笑している。現在外出している、ラシルとハルカの2人を除けばこれで全員だ。

わずか6人で構成されたギルドの溜まり場としては、この建物は少し広すぎる。だが、建物内ということで、他のギルドと溜まり場が被らないことと、他のプレイヤーがこの場所を訪れるころはまず無いため、他者に聞かれたくない話などもそのまますることが出来るため、溜まり場としては最適と言えるだろう。尤も、建物内なので、どこかに行く、もしくは帰ってくる度にロード画面を挟む煩わしさを気にしなければという条件が付いてくるのだが。他者があまり寄り付かない理由もそこにある。

とはいえ、そんなことにはすっかり慣れてしまったメンバーの間では中々に好評の場所だった。

「ただいまー」

「ただいまです」

エフェクトと共に2人のプレイヤーが現れる。ラシルとハルカだ。これでギルド空の円舞曲のメンバー全員集合ということになる。

「お帰り、お二人さん。モノは無事買えたかい？」

まず2人を出迎えたのはエルナだった。そして、それに続くかのように、残りのメンバーが「おかえり」と声を掛けてくる。

「はい。マスター、みなさんありがとうございます。大事に使いますね」

お辞儀が出来ないかわりに、エモーションコマンドを使って、礼を言うハルカ。そんなハルカに、やはりそれぞれから返答が返ってくる。

「あ、マスター。それとですね、えっと・・・」

話を切り出すハルカだが、どうも歯切れが悪い。次の言葉を待つエルナだったが、その時だった。

「どうも、こんにちば」

まるでタイミング計っていたかのように、1人のプレイヤーがエフェクトと共に現れる。女性型商人のプレイヤーのようだ。エルナは見慣れない商人にカーソルを合わせ、キャラクター名とギルドをチェックする。名前はソレル。どうやらギルドには未所属のようだ。最近もこんなことがあったような気がする。そんなことを考えていると、後ろから声がかかる。

「ラシルくん、また拾ってきたの？」

「いや、今回はオレじゃねえっす」

リシュリーだ。それでエルナも思い出す。前回、しかもつい最近ラシルがハルカを連れてきたときと状況が似ているのだった。尤も、似ているのは突然新メンバーの候補を紹介されたということだけだ。

それで、エルナ自身も状況を理解する。

「とりあえず、なんでこうなったか説明してもらえるかい？」

「それが・・・」

ハルカが、買い物の帰りの出来事を説明する。

それを聞いたエルナがそのまま黙り込んでしまう。

「あの・・・やっぱりダメですか？」

そんな様子のエルナを見て、ハルカが心配になってくる。ハルカが問いかけるが、それでもエルナは答える様子はない。

と言ってもエルナ自身、メンバーが増えるのは問題ない。むしろ、人が入ってくれるのは大歓迎だ。普段なら二つ返事で了承しただろう。だが、今回はどうしても気になることがあった。

「試験どうしょ？」

少しの沈黙のあと、エルナから発せられた言葉に全員がずっこける。と言っても、ゲームにそんな仕様はないので、雰囲気上のものでしかないが、少なくとも、ラシルのプレイヤーである、樹は確実にそんな状態だった。

「いつも通りでいいんじゃないんですか？」

ウイシュナだ。

空の円舞曲では、このゲームでは珍しく、入団試験を行っている。と言ってもギルド内でのイベント程度のもので、大層なものではない。実際、1週間前にハルカが受けたときも、初心者であるにも関わらずクリア出来たほどだ。これにはラシルの協力があってこそなのだが、クリアが厳しいようならギルドのメンバーによる協力が問題ない辺り、この試験がさほど大きな意味を持っていないことが窺える。

そして、ウイシュナが「いつも通り」と言う様に、入団試験には毎回同じ内容のものが行われていた。その為、入団拒否の可能性は誰も 厳密にはハルカ以外は、だが 気に留めることすらしていなかったが、エルナが試験の内容を迷っているとは誰も思っていないかった。

「いや、こないだやったばかりだしねえ。あんまり同じものを続けてつてのもね」

エルナは短期間に同じ内容の試験をすることを懸念していたのだ。と言っても、なにか理由があるわけでもなく、単純にエルナ自身が最近やったことをまたやりたくないというだけなのだが。

因みに、他のメンバーはと言うと、いつも通りでも特に気にはしないが、エルナが反対するのなら、それに異を唱えるつもりもないようで、エルナの次の言葉を待っている。良く言えば、エルナのことを信頼しているということになる。逆に悪く言ってしまうば、ただのエルナ任せなのだが……。

「えっと、ソレルって言ったっけ？レベルは？」

「30です」

ようやくエルナが口を開く。ソレルのレベルを確認し、再び沈黙が訪れる。

だが、今度の沈黙は先ほどのような長さはない。

「よし、じゃあ、ソレルにはルーンソードを取ってきてもらおうかな？」

エルナが試験の課題に出したルーンソード。これは、ランク3の武器、つまりは敵からのドロップ（落とす）専用のアイテムになる。同じランク3の武器でも、先ほどラシル達が購入したシルバーボウよりもワンランク上の武器であるため、それよりも入手は若干難しくなる。

武器としての性能は、実は中々に優秀だ。攻撃力だけを見ればそこそこに強いという印象だ。だが、この武器の真価はその特殊能力にある。それは、自身の魔力値の5%を攻撃力に変換出来るというものだ。これにより、設定された数字以上の攻撃力を発揮し、魔力を高目に設定したキャラクターを使っているプレイヤーや、魔法関係のクラスからこれを装備出来る前衛系のクラスにクラスチェンジしたプレイヤー達に重宝されている。

「期限は10日以内、どうする？」

「エルナ、ちよつと厳しくない？」

リシュリーだ。

確かに、彼女の言うように、レベルだけを見るならば、このアイテムを取りに行くには、若干無謀と言えるだろう。尤も、キャラクターのパラメータや、装備などでも随分変わる上に、プレイヤースキル次第では絶対に無理という訳ではないのだが、だが、ほとんどの場合において、レベル以外の要素を考慮されるということはあまりない。初対面の者なら尚更この傾向が強いと言えるだろう。リシュリーの意見はもつともだ。そして、それは他のメンバー達も同様のようだった。

更に言うならば、10日で手に入るものなのかと言われるとかな

り微妙なところだったりする。こればかりは完全に運任せなのでな  
んとも言えないのだが、ドロップ率は当然として、モンスターの強  
さ、1マップ辺りに出現する数などにも左右される。そこに、自身  
の経験や、他のプレイヤーの体験談も交えたと、なんともしどい期  
間と言えるだろう。だが、それに関して、不満を挙げる者はいなか  
った。期間を延ばせば確かに確実性は増すだろう。だが、その分面  
白味はなくなっていく。それに、微妙な期間と言うことは、見方を  
変えれば試験での入手期間には絶妙な期間と言えるだろう。それに  
水を差すようなことをするものは誰もいないのだった。

「わかってるって。だから、今回もメンバーの協力は有りにするよ」  
そこで、一旦区切り、再び口を開く。

「じゃあ、細かいルール説明ね。まず、メンバーによる協力は1人  
1日のみ。但し、ハルカは別。あんたが連れてきたんだ、きっちり  
面倒みること」

「わかりました」

周囲からの反対や質問がないことを確認し、次に進む。

「で、次。入手方法は問わない。って言ってもあとはいくらいいし  
かないだろうけどね」

「金銭的な援助はなしだよな？」

ラシルが確認をする。これが有りならば、それこそ、今すぐにギ  
ルドのメンバーの誰かが、購入してそのままソレルに渡してしまえ  
ばその時点で試験は終了だ。勿論そんなことをしてしまえば、試験  
の意味はなくなってしまうので、そんなことがあるとは思っていない  
のだが、念のための確認だった。

「当然。あと、ソレルとの狩り以外でウチのメンバーが手に入れた  
アイテムも無効」

ラシルの意図を察してか、金銭面以外の援助もきつちりと否定す  
るエルナ。これで、ソレルの入手方法は自身での購入か、モンスタ  
ーからのドロップに限られる。いや、厳密にはそれ以外にもなくは  
ないが、ここでは割愛する。

「期間はさつきも言った通り10日。それまでにアイテムを見つけ、ギルドのメンバーに報告するか、期限が過ぎれば試験は終了。それでもやるかい？」

「やります」

一通り説明し、問いかけるエルナに迷うことなく答えるソレル。その様子に、エルナはモニターの前で薄っすらと微笑むのだった。エルナはマウスを操作し、ソレルをギルドへの入団申請を出す。突然の、しかも予想外の展開に戸惑うソレルだが、少しの思考の後、それを了承する。

「あの、まだ試験受けてないんですけど・・・」

ギルドには入ったが、釈然としない気持ちもあった。今更ながらに、本当に入ってしまったてよかったのかとすら思えてくる。

「毎度のことだから気にすんな」

ラシルが答える。そして、それに続くかのように次々と、

「よろしく」

「よろしくね」

「よろしく」

「よろ」

「よろしくお願いします」

と、それぞれが、それぞれの言い方で返してくるのだった。

そんな様子に一瞬戸惑うソレルだったが、先ほどの心配は杞憂だったのだと気付く。

「はい。試験がんばりますんで、よろしく」

（ここはいいギルドだ）

ソレルは心の底からそう思えたのだった。

「ハルカ、早速行こうか」

夕食のため、席を離れていたハルカが戻ってくると、ソレルは早速彼女を誘うのだった。

ギルドの入団試験の話が纏まったところ、丁度夕食時だったことも

あり、一人、また一人と次々に席を立つて行つた。勿論、ソレルもその一人だったが、比較的早い内に席を立つたこともあり、戻ってきたときにはまだ誰も戻ってないという状態だった。

待つこと10分ほど。そこでようやくハル力が姿を現し、今に至っているという訳だ。

「いいですけど、行く前に買い物に付き合つてほしいかな。矢の補充したいですし」

「うん、おっけー」

アーチャー 厳密には弓を使用するキャラクターだが

は弓の他に矢も装備しなくてはいけない。しかも矢は消費アイテムだ。1本の値段は安いとはいえ、それが毎回数百から数千本単位で消費されるのだ。ラシルと組んでいるから随分マシとはいえ、ゲームを始めたばかりのハル力にはとても買い置きしておく余裕などない。そのため、ハル力は毎回外に行く前に矢の補充をしているのだつた。

早速、目的のアイテムを探しに行こうと立ち上がる2人。だが、そこで、ソレルが肝心なことに気付く。

「そういえば、ルーンソードってどこで取れるの？」

「ソレルさん知ってるんじゃないんですか・・・？」

2人とも肝心のアイテムを落とすモンスターの居場所を知らないのだった。

ハル力は始めて半月ほど、そしてソレルも始めて1月半ほどと、どちらも初心者プレイヤーだ。そんな2人が目標とするモンスターの居場所を知らないのも無理ないことだった。

大抵のプレイヤーなら、そんなときは攻略サイトとなるのだが、やはりこの2人にはそんな発想が出るはずもなく、延々と途方に暮れるしかなかった。

「とりあえず先に買い物済ませてきますね」

「ん、りょーかい」

そう言つて出て行くハル力。再び、溜まり場で一人待つソレルだ

った。

「しょうがない。誰か来るのを待ちますか」

モニターの前で一人、そう呟くのだった。

それから5分ほど。

買い物に出ていたハルカも戻り、すっかり2人で待ちぼうけ状態だ。未だ他の誰も帰ってくる様子もなく、2人でどうしたものかと途方に暮れていた時だった。

「ただいま」

ラシルだ。どうやら夕食から帰ってきたようだった。

「ちょうどいいところに！」

「ラシル君、帰ってきてくれてよかったです」

「なんなんだよ、おまえら・・・」

帰ってきていきなりの歓迎ムードに気圧されるラシル。帰ってきたばかりで状況は一切飲み込めないが、どうやらなにか問題が発生しているということだけは、汲み取ることが出来た。

「とりあえずログ読むからちょっと待ってろ」

そう言ってチャットのログを読み始めるラシル。

2人のチャットモードはオープンだ。その為、周囲に居たラシル達にもチャットのログも残る。なので、わざわざ説明させなくてもそれで原因はわかるのだった。

「つまり、ルーンソードを落とすヤツを教えて欲しいと」

2人でコクコクと頷く。といってもそんな動作をさせることは出来ないのです、やはりエモーションで代用している。

「攻略サイト見るよ・・・」

「そんなのあるんだ」

「ネットゲームにもあるのねえ」

2人の反応に愕然とするラシル。ハルカが初心者なのはわかってるので、この反応なのも頷ける。だが、ソレルまで同じようなものだとは思っていなかった。現在では、極端なゲーム人口の増加というのはほとんどない。そのため、初心者というのはかなり珍しい



のだ。

実際、ソレルのことも、転生したレベル30だと思っていたくらいだった。まさか、こんな短期間に初心者、それも2人に関わることになるとは思ってもよらなかった。

「また今度探しといてくれ。場所はオレが連れて行ってやるよ。戦闘はどうする？」

「とりあえずはいいいよ。私とハル力でやってみるから」

若干レベルの足りない、いや、2人ならほぼ適当なレベルと言わべきだろうか。だが、それは通常のプレイヤーの場合だ。初心者2人となると、なかなか厳しいものがあるだろう。

更に言うなら、ハル力はほとんどラシルと組んでいるせいもあって、レベルの割にプレイヤースキルはほとんどない。アドバイスは色々としているものの、一朝一夕で身に付くものでもない。ましてハル力はこの手のゲームはかなり苦手なようなので、尚更だ。もう少し補足するなら、ラシルが結構助けているせいという部分もある。

一方、ソレルの方はラシルにはわからないが、今までギルドにも入っていなかったことや、パーティーに入っている様子もないことから、ハル力の様な状態ではないと思える分、まだ良いほうだろう。ハル力のことを考えると、ほぼ完全にソレル頼みとなることが予想される。

そんな2人組みに一抹の不安を覚えるラシル。だが、ソレル自身が自分の手伝いはいらないうっているので、必要以上の申し出は、逆にただのお節介だ。それに、ラシルが手伝えるのは1日だけだ。今、自分の都合で手伝ってしまったては、後々彼女達が必要としたときにどうにもなくなってしまう。

ラシルは自分の中でそう納得し、2人に任せることにするのだった。

「とりあえず徒歩でいいな？」

ラシルがこのようなのを確認を取るのは勿論理由がある。

街から街へと移動する場合、2種類の方法がある。

1つは、ラシルが提案したように徒歩での移動。そしてもう1つは、ギルドの施設や、スキル『トランスゲート』を使用して、一気に行く方法。

当然、後者の方が、断然早く着く事が出来る。

だが、初心者2人を連れていくのならマップを覚える意味も含めてこの方法を提案したのだった。

「おっけー」

「うん、大丈夫」

特に不満の声が上がらないのを確認すると、「じゃ、行くか」と声を掛け、溜まり場を後にするのだった。

ライラックの街の東側。そこから街の外に出て更に東に進むと、森林地帯に入る。その森林の中にその場所はあった。『アルメリア』。そう呼ばれる町にラシル達は居た。

アルメリア。大陸東部に広がる森林地帯の中にある町だ。一応町となっているが、どちらかと言えば村と言った方が正しいかもしれない。のどかという言葉がなんとも似合う。そんな雰囲気を入り、ここを拠点とするプレイヤーも少なくはない。

「ここが目的地？」

「正確にはここのダンジョンだけだな」

ソレルの問いにラシルが答える。

アルメリアに限らず、それぞれの町には町中、もしくは町周辺にダンジョンが存在する。ラシルとハルカが出会った、教会地下のダンジョンもそれに該当する。そして、それらのダンジョンは正式名称とは別に、町名のダンジョン、例えば、教会地下ならライラックダンジョンといった具合に呼ばれることが多い。

勿論アルメリアにあるダンジョンも、森林遺跡と呼ばれるダンジョンだが、通称ではアルメリアダンジョンだ。ラシルが『このダンジョン』と言うのは、やはり通称の方が意識しやすいせいだろう。

ラシル達が町を北に抜けると、それはようやく姿を現す。森林遺跡。前述の通りアルメリア周辺にある、通称アルメリアダンジョン。ラシル達の目的地だ。

ダンジョンに入り、マップを確認すると、普段とは違う様子なのに気付く。次の階層に行くためのワープポイントが2つあるのだ。勿論、自分達が入ってきた出入り口を除いてだ。

「あれ？これどっち？」

「地下だから北東の方だな」

そのことに気付いたソレルが問いかける。

このダンジョンは、このゲームには珍しく、地上と地下の2つから成っている。共に3階ずつで構成されていて、計6階層のダンジョンだ。

地上と地下ではモンスターの強さが全然違い、1階層目は初心者向け、地下は、中級者、地上2階層目以上は中から上級者向けとなっている。

「しかし、意外と覚えてるもんだな」

先頭を歩くラシルがそんなことを呟く。

マップ表示があるので、そうそう迷うことはないが、初めて来るダンジョンや、滅多にこないダンジョンはなかなか戸惑うものだ。このダンジョンはかなり入り組んでいるので尚更だ。だが、ラシルにそんな様子はなく、すいすいと進んで行くのだった。そんな様子にラシル自身も驚いている。

「よく来てたんだ」

「まあな」

ハルカに答えるラシル。

今でこそあまり来ることはないのだが、以前はよくここに通っていたのだった。当時は、モンスターにやられたり、アイテムの補充だったり1日に何度も通っていたので、すっかり道は覚えてしまっていたのだが、その頃の記憶はどうやら未だ健在のようだ。

道中に出会ったモンスターを倒しながら、進んで行き、ようやく

地下への入り口に到着する。ラシルは全員付いてきているのを確認すると、そのまま地下へと降りていく。

少しのロード画面を挟み、画面が切り替わる。森林遺跡地下1層。ここが目的地だ。

周囲にモンスターの姿はない。とりあえずは安全だろう。そんなことを考えていると、ソレルとハルカが姿を現す。

「ここが目的地だ」

ラシルがそう言うと、丁度1匹のモンスターを発見する。

アーマーソルジャー。それがこのモンスターの名だった。剣を持った鎧の抜け殻といった風貌のモンスターだ。

ラシルはそのモンスターに1発攻撃し、自分をターゲットに向けさせる。そして、そのままハルカとソレルの元へと戻ってくるのだった。

「で、これが目的のモンスター」

モンスターの存在を気にせず説明するラシル。当然、横ではモンスターが攻撃しているが、表記はMISS。ラシルは基本的に避けることに重点を置いているため、回避能力は高い。その為、装備品や転生したことも相まって、自身のレベルでは少し厳しいようなモンスターが相手でも戦うことが出来る。尤も、そのせいで、攻撃力や防御力などの他のパラメータは犠牲になっているのだが、そのことは本人はあまり気にはしていないのだった。

目的のモンスターを2人に見せると、ラシルはそのまま倒しにかかる。いくら回避出来るといっても、せいぜい6〜7割ほどだろう。流石に放置しておくのは危険だった。

今回はいつものように回避に専念した戦い方はせずに、そのまま力押しで戦っていくラシル。そんな戦い方をしなくても、攻撃が当たる**ヒットポイント**があまりないためだ。

4発目、5発目と攻撃を繰り返した頃だ。モンスターの攻撃が命中する。ラシルが受けたダメージは軽く3桁に届き、自身のHPの6分の1近くを持っていかれる。だが、それでも気にすることはな

く、更に攻撃を続け、そのまま倒しきる。倒しきるまでにそれほどかかりはしなかったものの、運悪く、更に2発のダメージを受け、ラシルのHPは既に半分以下となっていた。

普段なら、そんな戦い方をするのではないが、ここで分かれるからこそその戦い方だった。

（やっぱ無理な気がしてきた・・・）

ラシルは改めて、不安に駆られる。ラシル自身決して自分が強いとは思ってはいないが、少なくとも、目の前の2人よりは強いという自信はある。それなら、やはり無理矢理にも手伝おうかと考えるが、やはりその意見を押さえ込む。

「じゃあ、後はがんばってくれ」

「うん、ありがとね」

「ラシル君、ありがとう」

最後に2人に支援魔法を掛け、ラシルは引き返していくのだった。

ラシルが溜まり場に戻った時、その場に居たのはアルタスとウィシユナだけだった。

「あれ？2人だけ？」

「マスターとリシュリーさんなら狩りに行ったよ」

ウィシユナが答える。

エルナとリシュリーは大抵の場合、行動を共にしている。今回もそうなのだろうと、特に気にすることもなく、その場に座り込む。

「ラシルは早速手伝いに行ってたんじゃないのか？」

今度はアルタスが問いかけてくる。

「いや、道案内だけ。今はいいってさ。そういえば、お前らはどこか行かないのか？」

「丁度、どこに行くか話してたところだよ」

アルタスとウィシユナもコンビを組んでいるような状態だ。その為、よく一緒に行動している。

そして、ラシルとハルカもまた、すっかりコンビのような状態だ。

だが、決してそれぞれのパートナー以外の繋がりが無いかというと、そういう訳でもない。ギルドのイベントの一環で、メンバー全員で狩りに出ることもあるが、それ以外にも、行動を共にすることはよくあることだった。勿論、レベル差はあるので、経験値の分配などは出来ないし、行き先も、レベルが高い者には大して経験値も入らないような場所になることが多いのだが、それすらも楽しんでいるのが、空の円舞曲というギルドのメンバーだった。

「なあ、今回の試験成功すると思う？」

アルタスの言葉に考え込むラシルとウイシュナ。

なんとも難しい問いかけだった。武具のドロップ率は、総じて高くない。だが、10日という期間は、決して無茶という訳でもない。

「私はわかんないけど、成功はしてほしいかな」

ウイシュナが答えるが、ラシルは未だ考えたままだ。

確かに無茶ではない。だが、それはほんとにもあの場所で戦闘が出来ればという前提の元だ。ではあの2人はどうなのだろうか？

先ほどの戦闘を振り返る。正直、ラシル自身でも厳しいと言わざるを得ないだろう。勿論、あそこで戦闘を続けるというのなら、それなりの戦い方をするが、それでもやはり厳しいものはあるだろう。だが、それはあくまでラシル自身の話だ。では、あの2人はどうか？

アクション性の強いこのゲームにおいて、プレイヤースキルというのはかなり重要になってくる。それは、自身のレベルより上位のモンスターを相手にするなら、その重要度は更に大きくなる。だが、初心者2人にそれを求めるのは、厳しいものがある。

「無理だろうな」

それがラシルの出した答えだった。

「で、そういうアルタスはどうなんだ？」

「んー、成功するだろ」

深く考える様子もなく、答える。なんともアルタスらしい答えだった。

一方、ラシルが去って、2人になったソレルとハルカは、ダンジョンの探索を進めていた。

未だ戦闘はしていないものの、意外と楽に戦える。ソレルはそう樂觀していた。先ほどのラシルの戦闘を見る限りでは、ラシルより自分の攻撃力が高そうなこと、それと自分達は2人居る。このことが、不安を取り除く材料となっていた。

少し進み、モンスターを発見する。丁度いいことにアーマーソルジャーだ。

「ハルカ、早速いくよ」

そう言ってモンスターに向かって行くソレル。

「うん」

ハルカも短く返事をして、ソレルに続くのだった。

## Chapter 2 - 2 (後書き)

ラシル(以下ラ)「はあ、困った困った」

ハルカ(以下ハ)「のっけからなに言ってるんですか？あの人が来ちゃいますよ」

ラ「げ、それは困る。って作品違うのに来るわけないだろ」

ハ「あ、それもそうですよね。で、何が困ったんですか？」

ラ「作者が相変わらず小説を書く時間がないんだ」

ハ「まだ1日12時間とか言ってるんですか？ってそれとラシル君が困ってるのと同じ関係が・・・？」

ラ「いや、ただの作者の代弁」

「???」お困りですか？」(どこか間延びした声で)

ラ「キター。困ってません困ってません」(焦)

ハ「大丈夫ですから、どうかお引取りください」

エルナ(以下エ)「あんたら意外と酷いな」

ラ「ってマスターか。脅かさないでくれ」

ハ「よく考えたら全然声が違いますよね」

エ「そんなことよりタイトルコールしなくていいのかい？」

ハ「あ、そうでした」

ラ「ファンタジアナイツなんでもQ&A〜!!」

ハ「で、マスターがなぜここに？」

エ「前回から毎回ゲストで1人出られることになったって聞いたけど」

ラ「そんな話聞いてないですよ」(汗)

エ「まあ、細かいことは気にしない。それより質問質問」

ハ「はあ・・・。では早速。このゲームはアクション性が強いってずっと言われていますが、どんなゲームかイマイチ想像出来ないのので詳しくお願いします」

ラ「うーん・・・聖 伝説(2とか3とか)とかイー (6以降)



を想像してもらうとわかりやすいかも」

エ「えらい差があるねえ……」(汗)

ハ「逆に難しい気が……」(汗)

ラ「はい次」

エ「もうゲームネタはしないって言ってたのに相変わらず使いまくってるのはなぜですか？だって」

ラ「このページは作者がノリと勢いのみで書いてるから、気付くところになってます」

ハ「次は……って今回はもう終わりですね」

ラ「短!!」

エ「前振りがながすぎるからだよ」

ハ「そんな訳で次回もよろしくお願いしますね」

## Chapter 2 - 3 (前書き)

お久しぶりです。すっかり遅くなって申し訳ないです。相変わらず  
ちと書く時間がないもので、すっかり遅くなってしまいましたorz  
それと、そろそろ本格的に書く間がなくなってきました、しばらく  
の間（恐らく11月いっぱいぐらい）書けそうにありません。その  
為、次回の更新はかなり遅くなると思いますが、ご容赦くださいま  
せ。

それでは本編の方をどうぞ

## Chapter 2 - 3

森林の中にひっそりとある町、アルメリア。

単純な面積だけなら、ライラックのおよそ三分の四程度だろう。

だが、ライラックほど建物や人が多いわけではなく、ちよつとした広場のような場所が多いこともあり、小さいという印象はあまり受けない。むしろ、広いとさえ感じるものもあるだろう。

そんな町の北にある広場の一角に、二人組みのプレイヤーの姿があった。ハルカとソレルだ。

「私達だけじゃ、ちよつと厳しいですね」

「ラシルが普通に倒してたからもつと楽だと思ったのに・・・完全に予想外だったわ・・・」

二人は先程まで居た、森林遺跡      通称アルメリアダンジョン  
でのことを振り返っていた。

ラシルと分かれた後、目標となるモンスター、アーマーソルジャ―に戦闘を仕掛けた二人だったが、かなりの苦戦を強いられる事になった。

前衛となっていたソレルは敵の攻撃を避ける事が出来ずダメージを受ける。そのダメージもなかなか高く、ラシルが食らうダメージよりはまだマシだったが、そもそもラシルほど避けきれていない上に食らうダメージに大差があるわけではないので、ソレルのHPは削られていく一方だ。攻撃も三回に一回ぐらいはミスをしているような状態の上、回復アイテムを使用するために思うように攻撃が進まない。攻撃に関しては、ソレルの予想通り、ラシルよりはダメージを与えることは出来た。だが、こんな状況ではあまり意味はない。一方ハルカの方は、ソレルの後ろから矢を撃っているためそれほど危険はない。ミスもあまりなく、攻撃力も現状を考えれば申し分ない。だが、それはあくまでハルカが安全に攻撃出来る場合の話だ。モンスターは一匹だけではない。近くにモンスターが居れば、

ハルカにターゲットが向くこともある。そうなってしまうば、ハルカはターゲットを外そうと動き回り、果てには自分に襲い掛かるモンスターを撃退しようとし、ソレルの負担は更に増えることとなる。更に、別れ際にラシルの掛けた支援魔法が切れると、アイテムの消費に拍車がかかり、結局数匹倒したところで、アイテムの補充も兼ねて引き返してきたのだった。

「それにしてもラシルのヤツ、私よりレベル低いのになんであんなに戦えんのよ・・・」

「ラシル君、装備が結構揃ってますし、前にパラメータは回避に重点を置いてるって言ってましたから」

ソレルの愚痴に律儀に答えるハルカ。

このゲームではレベルアップ時には、自動でパラメータがアップする仕組みになっている。キャラクターの作成時にパラメータの成長具合の割合を決め、それに合わせ、クラスに沿ったパラメータが上がっていく仕組みになっている。ただし、これだけでは他のクラスになったときに、かなり厳しいものがあるため、その救済処置として、レベルアップ時に一定のポイントを得て、そのポイント分だけ、更にパラメータを強化出来る仕組みになっている。そして、キャラクターのパラメータとクラス、武器、魔法による修正値との合計が、キャラクターの最終的なステータスとなる。

因みに、ラシルは回避に重点を置き、それ以外は足りない分を上げるようにしている。そして、ハルカはバランスを重視し、ソレルは力に重点を置いているのだった。

「ここであうだ言うってても仕方ないし、行くとしますか！」

「はい！」

座らせていたキャラクターを立ち上がらせ、二人は再びダンジョンへと向かうのだった。

ダンジョンの一層目にはさほど強いモンスターは存在しない。少し道に迷いながら、遠回り気味に、目的の地下一階層目の入り口に辿り着く。それでも、特にダメージを受けた様子もなければ、アイ

テムも使用することはない。SP<sup>スキルポイント</sup>が溜まっていない事を除けば万全と言えるだろう。

「あ、そうだ」

早速地下に行こうとしたその時、ソレルが何かに気付く。

「ハルカってボイスチャットは大丈夫？」

ボイスチャットの確認だった。

この2人は、パーティーこそ組んでいるものの、今まで会話は全てチャットで行っていた。そのせいもあり、戦闘中はどうしてもお互い意思疎通が出来ない状態となっているのだった。

「はい、大丈夫ですよ」

「じゃあ、つけとこうか」

ソレルはボイスチャットの設定をONにする。これで、キーボードを打たなくても意思疎通が可能となる。

「聞こえる？」

「大丈夫ですよ」

互いに通じ合っているのを確認し、地下へと進む2人。

声には現れていないが、ハルカは初めて聞くソレルの声に内心驚いていた。自分の友人の声になんともそっくりなのだ。

（こんなこともあるんだ・・・）

そんなことを考えながら、先に地下に下りたソレルを追うのだった。

地下一層目に降り、周囲を見渡してみるが、近くにモンスターが居る気配はない。2人はアーマールソルジャーを探すべく、どちらからともなく歩き出す。

2人が探索を開始して、しばらく経つ。ここまでは幸運にも、常に二対一の状況で戦闘することが出来、先ほど来たときよりは随分楽に戦えている。それでもアイテムの消費は、やはり激しく、前衛として敵の攻撃を受けているソレルは既に、三分の一近くを消費している。

「ふう、やっぱり厳しいねえ」

ソレルが溜息交じりに口を開く。

2人は今、通路の端に座っている。連戦をしていては、アイテムがどれだけあっても足りそうにないので、一戦終える度に、こうして座って自然回復を待っているのだった。そのため、ダンジョンに居る時間に対し、全然戦闘は出来ていない。

このままここに居ていいのだろうか？そんな疑問がソレルの頭をよぎる。

あまりにも効率が悪いこの状況下で、彼女らにここに居るのは単に入団試験のためだ。内容はなんとも単純で、10日以内にルーンソードを入手すること。だが、モンスターからのドロップでの入手ではない。ソレルが自身の力で手に入れたものなら、たとえ購入したもので構わないのだ。それならば、ここよりもっと効率よくモンスターと戦える所に行つて、そこでレアアイテムを発見し、それを元手に買つてもいいのではないか？

そんな考えが思い浮かぶ。

だが、これには別の問題がある。

そもそもレアアイテムなど手に入るのか？手に入れることを前提に考えているが、これが出来ないことにはどうにもならない。

問題はまだある。

仮に手に入ったとして、それを売らなければならない。金銭を得るために手に入れたのに、売れないのなら、たとえそれがどんなレアアイテムでもガラクタ同然だ。だが、これに関してはあまり心配はしていない。ゲーム上には様々な人間がいる。NPCからの販売物でないものなら、余程の物でない限り売れないということはほとんどない。短い間だが、商人としてやってきた経験からそう考えていた。むしろ問題なのは時間だ。期限を定められている以上、それまでに売ってしまわなければならない。レアアイテムならそんなに時間は掛からないだろうが、出すまでの時間を考えれば、なんとも微妙なところだと言わざるを得ない。

だが、そんなことよりもある意味一番厄介なのは購入かもしれない。

購入方法は大きく分けて三つ。

一つは、他のプレイヤーによる個人商店。購入するなら、これは最もオーソドックスな方法だろう。勿論売っていけばの話だが。

ソレルはこれまで、あまり個人商店を覗くといったことはあまりしていない。せいぜい消耗品の購入に利用しているぐらいだろう。これは単純に、武具を買うほどのお金を持ち合わせていないため、どうしても疎遠になってしまっただった。それでも、全く縁がないかというと、そういう訳でもない。たまに、武具を中心に扱っている店を覗くこともあったが、これまでにルーンソードを見かけたことはない。勿論全部の商店を見ているわけではないので、一切売っていないかったというわけでもないだろうが、数が少ないのは確かだろう。なら、無事購入というのは難しいかもしれない。

二つ目はオークションによる購入だ。

アイテムを見つけるのなら、こちらの方が確立は高いだろう。たとえ誰かが購入しようとしても、出品者が設定した期間はずっと残っているからだ。

だが、こちらは確実に購入出来る訳ではない。それに、都合よく試験期間以内に購入出来るとも考え辛い。そう考えると、やはりこちらも難しいだろう。

三つ目は他のプレイヤーに直接交渉をすることだ。

購入する、という事だけを見れば確実性は高いだろうが、売ってくれそうなプレイヤーを探し、交渉する手間を考えるなら商店を回ったほうが無難と言えるだろう。

結局の所、どの方法を取るにしても他者次第になってしまうため、どれも確実ではない。それなら、自身でアイテムを入手した方がいいとも思える。

「そろそろ行きましようか」

ハルカから声がかかり、考えを中断する。既にHPは回復している。どうやら回復している間ずっと考えていたらしい。

「うん」

そう言って立ち上がるソレル。

探索を再開して間もなく、モンスターを発見する。アーマーソルジャーだ。

「それじゃあ、ハルカ、行くよ」

返事を待つことなく、モンスターに攻撃を仕掛けるソレル。

ソレルの現在の武器は斧。その為、攻撃の出が少し遅い。その為、大抵の場合、相手の攻撃よりも一歩遅れる形となる。それは今回の場合においても例外ではない。

慣れたプレイヤーなら、相手の攻撃を誘い、それを避け、カウンター気味に攻撃を当てるという動きになるのだが、始めてそれほど経っていないソレルには、その発想はないのだらう。相手の攻撃を受けながらも攻撃を繰り返していく。

そして、後ろからはハルカが矢を打ち込んでいく。

そのままモンスターを撃破。ラシルに案内されて来たばかりの頃を思うと随分安定してきているのを二人とも実感する。尤も、出直してきてから、未だ複数のモンスターを相手にしていない現状だからなのだが。勿論そのことも二人は理解している。

戦闘が終了し、ソレルのHPは半分近くにまで消耗していた。また休憩を挟んだほうがいいだらう、そう思っていた時だった。今度は後方からモンスターが迫る。アーマーソルジャーだ。

「敵」

ハルカは短くそう言いながらモンスターと距離を取る。その間も一発、また一発と確実に矢を打ち込む。この辺りの動きは、ラシルに随分と鍛えられたため、始めた頃よりは随分と様になっていた。ソレルも回復アイテムを使いながら敵へと迫る。

今回初の連戦だった。だが、それだけなら、アイテムの消費が多くなる程度で、大した問題ではない。慌てる様子もなく、互いがそれぞれの役割をこなす。

しかし、今回はそれだけではなかった。モンスターがもう一匹現



れ、ハルカへと迫る。ハルカは、再び移動し、もう一体のモンスター  
の相手を始める。

こうなってしまうては、ソレルは回復に手間取られ、モンスターの  
撃破がどうしても遅くなる。そして、ハルカもすぐにモンスターを  
倒せる訳でもないの、結果として、戦闘時間が大幅に長くなる。  
それは、二人にとって全滅の可能性が増えることも意味していた。

この場合、一体ずつ確実に倒していったほうがいいのだが、ハル  
カはどうしても、自身に来る敵の撃破を優先してしまうのだった。  
それは初心者故の行動なのだが、それよりも大きな要因となってい  
るのは、ラシルと組んでいるということだろう。

普段はレベル相応の所に行っているという事もあるが、なにより、  
ラシルと組んでこのような状態になった場合、ラシルが全てモン  
スターを引き受けているのだ。その為、こういった場合のハルカの行  
動はどうしても、今のようになってしまうのだった。

「ハルカ、先にこっちお願い！」

ボイスチャットで、ハルカに指示を出す。

「ごめん、咲希」

「え・・・？」

ずっと似ている声だと思っていたせいだろう。このような状況に  
陥り、慌てていたハルカは、咄嗟に出てしまったのだ。

ソレルも内心驚いていたが、だからといって手を止めるわけにも  
いかず、戦闘を続ける。

「ごめんなさい、ずっと友達に似てると思ってたからつい・・・」

「いいから、はやくお願い」

咄嗟に謝り、そのまま動きが止まるハルカを急かす。

結局、戦闘が終わるころには、2人ともHPがほとんど無い状態  
になっており、そのまま再び休憩となった。

「ごめんなさい。慌てたからつい咄嗟に」

先程のことを気にして、ハルカは再び謝罪していた。

「いいっていいって。いや、でも流石に声聞けばバレるわね」

「……………へ？」

ソレルの言葉に、硬直するハルカ。一瞬彼女が何を言っているのか理解出来ず、どこかヌケな返事をしてしまう。

「だから、間違っていないって」

「えっと、それってつまり……」

少し間を空け、自身が行き着いた考えを口に出す。

「……………咲希？」

「うん」

即答で返ってきた。似ている程度にしか思っていた為、なんとも意外だった。あまりに突然のことにそのまま停止してしまうハルカ。  
「ごめんね、驚かせようと思って」

「あ、ううん、それは全然いいんだけど……」

ソレルの言葉に我に振り返事をするハルカ。

その後も回復している間、ずっと雑談は続くのだった。

「あ、そうだ。神代にも内緒にしといてね。あっちもびっくりさせたいし」

「うん、わかった」

そう言って立ち上がり、二人はずっと話ながら、探索をするのだった。

二人の会話は途切れることなく続き、気付けは既に、日付が変わろうとしている時刻となっていた。

アイテムが出ることは無かったが、お互いレベルを一つ上げ、この日は終了となるのだった。

私立星想学園。2・Bと書かれた教室で、この日も睡眠を貪る樹の姿があった。

前日、ハルカとソレルの二人と別れ、溜まり場でアルタス、ウイシュナの二人と会話をしていた樹だったが、二人が出て行くと、溜まり場で一人になってしまい、樹自身もまた、出かけていたのだった。

アルメリアで戦闘をした際、予想以上に苦戦をしたため、少しでもレベルを上げようと、普段ハル力と二人で行っている場所よりもワンランク上の場所で戦闘を繰り返していた。

久々のソロを満喫するラシル。

いつもなら、ハル力に色々と教えながらになる為、どうしてもテンポが悪くなってしまう。それを不快に思ったことは無いが、やはりたまにこうして元のプレイスタイルに戻ると、嬉しいものがある。このとき、ラシルが相手にしていたモンスターは、ソレル達が相手にしていた、アーマールソルジャーと同等か、若干強いといったぐらいのモンスターだろう。だが、苦戦を強いられていたソレル達とは違い、ラリスは持ち前のプレイヤースキルで優々と撃破していくのだった。

結果、レベルが二つほど上がった頃には、既に深夜二時を過ぎており、慌ててベッドに入ったのだったが、朝起こされるまで寝ていたということはなかったものの、眠気が取れることも無く、こうして現在眠っているのだった。

少しして、毎日のごとく、湊斗が声を掛けに来るものの、

「ノートよろしく」

と、短く呟き、また落ちてしまう。

そんな様子を見て、湊斗は短く溜息を吐くと、それ以上起こすことはせず、その場を離れるのだった。

そして、遥歌と咲希の二人は、珍しく時間ギリギリで登校してきたため、樹に声を掛けることは出来ずにいた。

ホームルーム

そのままHR、一限目の授業となり、授業終了のチャイムが鳴っても樹の目が覚めることは無かった。

授業後の休み時間。未だ睡眠中の樹の周りに、すっかりおなじみとなった、いつもの三人が揃っていた。

「こいつは学校になにしに来てんだか・・・」

咲希が呆れた様子で呟く。

「きつと疲れてるんだよ」

「多分ゲーム疲れだろうけどね」

遥歌がなんとかフオーしようとするが、湊斗がそれを断ち切る。外見だけなら、温和な雰囲気を漂わせ、実際にも外見通りの性格な湊斗だが、付き合いの長さ故か、こと樹に関しては、容赦がない。「それにしても、今日土曜で半日しかないのにこいつ寝て過ごすつもりなのかしら？」

私立の星想学園では、公立校と違い、土曜でも半日だけ授業がある。そして、樹は基本的に、起きる用事がなければ延々と寝続けるのだ。勿論限度はあるが、このまま放置しておくとか放課後まで寝ている可能性が高いのは確かだ。

「おーい、神代。起きなって」

ゆさゆさと樹の体を揺らしながら、起こそうと試みる湊斗。だが、よほど熟睡しているのだろう。基本的に、起こされればすぐに目覚め、寝起きも悪くない樹には珍しく、ここまでされて一向に起きる気配はない。普段なら、こうして周囲で話をしているだけでも起きかねないので、それほど熟睡しているかが窺える。

「うーん、仕方ない・・・」

湊斗は少し思案したあと、突然樹の机の中を漁り始める。そして、取り出したのは一冊のノート。

何をするのかと、湊斗を見つめる遥歌と咲希。

そんな二人を尻目に、ノートを丸め、振りかぶったかと思うと、思いつきりそれを振り下ろす。

スパン！と小気味いい音教室に響く。

そして、その犠牲者かというと、

「んあ・・・あ・・・いたい・・・」

まだどこか寝ぼけた様子で、ようやく重い頭を上げるのだった。

「おはよ、神代」

まずは湊斗。

「おはよう、神代君」

「まったく、あんたはいつまで寝てるつもりよ？」

そして、苦笑気味な遥歌と呆れた様子の咲希が、それぞれ声を掛けてくる。

そんな三人の様子を見回し、ふとある物に気付く。湊斗の手の中にある、丸まったノートだ。

それを見て、樹はようやく謎の頭痛の原因を察するのだった。

「頼むから起こすなら普通に起こしてくれ」

「神代が普通じゃ起きないからだよ」

すぐさま湊斗に反論される樹。

そこで、休み時間の終了をしらせるチャイムが鳴るのだった。

二時間目の授業が終わり、再び休み時間。

先程の休み時間同様、樹の周りにはいつものメンバーが揃っていた。

「今度はなんの用だ？」

先程のこともあり、どこか含みのある言い方で迎える樹。尤も、

そんなことを気にするような者は、この中には居ないのだが。

「あんたに頼みがあつてね」

「頼み？」

先に口を開いたのは咲希だった。咲希が樹に頼みごととは珍しいなんともいやな予感がする。要件など聞かずに断ってしまおうかも考えたが、先程の休み時間を無駄足にさせてしまったこともあり、とりあえず聞き返してみる。

「ファンタジアナイツをちょっと手伝って欲しいんだけど・・・ダメ？」

「そーいや、やってるとか言ってたっけか・・・」

以前にそんなことを言っていたのを思い出す。

普段なら手伝いぐらいいは、全然構わない。プレイスタイルこそ口だが、やはり多人数でやった方が楽しいというのはある。それが友人同士なら尚更だ。だが、現在入団試験中というのを考えると、安請け合いも出来ないのだった。手伝いに呼ばれる可能性ある以上、口グインしている間は出来る限り予定は空けておきたい。

どうしたものかと迷いながら、遥歌に視線を送ってみる。遥歌もそれに気付く。

「あ、こっちは大丈夫ですよ」

どうやら、こっちの意図は察してくれたようだ。

「そういう訳で大丈夫だ」

遥歌が言うなら問題はないだろう。そう思い、引き受けるのだった。

「なにになに？デート？」

「違うっての」

即答で咲希の言葉を否定する。どうやら今のやり取りで、全く別の方向に興味が行ってしまったらしい。

実際に何も無いのだが、咲希にとってそんなことは関係ない。あれこれと質問攻めに合うことを考えると、なんとも憂鬱になる。

（……諦めるしかないか）

丁度、そう思ったときだった。休み時間の終了を知らせるチャイムが鳴り響く。そして、それを合図に席を立てていた生徒達は、次々に自分の席へと戻っていく。樹達も例外ではない。

「じゃあ、あとで待ち合わせ場所メールしとくから」

そう言って、咲希も自分の席へと戻るのだった。

放課後。樹は早々に家へと帰っていた。

部屋に荷物を置き、征服の上着を脱ぐと、パソコンの電源を立ち上げる。そしてそのまま台所へ。

樹の両親は共働きだ。しかも、夕暮れぐらいまで帰ってくることはない。その為、両親が家にいることは少ない。それは土曜でも変わらず、せいぜいいつもより早く帰ってくるという程度だった。なので、土曜の昼食は樹が自分で調達する必要がある。

尤も、料理をする事はあまり嫌いではなく、最悪カップメンの一つでもあれば十分な樹としては、大した手間は感じていない。以前、

母親に昼食の作り置きを提案された時も、それを断ったくらいだ。

冷蔵庫の中を物色し、適当に見繕うと、そのまま昼食を作り始める。間もなくして、昼食は完成し、それを二階の自分の部屋へと持っていく。

持って来た昼食を、机に置き、そのままフアンタジアナイツを起動する。昼食を置いたため、打ちにくくなったキーボードをなんとか打ちながら、ログインする。

ラシルが居たのは、いつもの溜まり場だった。周囲に人が居る様子はない。ギルド用のメニューウィンドウを呼び出してみるが、まだ誰もログインはしていないようだ。時刻は十二時四十五分。休みの日にログインするには少し早いように思えた。

ラシルをその場で座らせ、先に昼食を片付ける樹。その後、食器を片付け部屋に戻り、気付けば既に三十分近くが経過していた。それでも特に変化はなく、誰もログインしてくる様子はなかった。咲希からも連絡はなく、ただ、待ちぼうけを食らっている状態である（よくよく考えたら、休日の昼間からネットゲーってにもなんだから・・・）

今の自分の状況を見て、ただ苦笑するしかなかった。

その時、丁度携帯電話が鳴る。咲希からのメールだ。

『ちゃんと家に居る？アルメリアって町の道具屋の前に居るから』  
用件だけの、なんとも短い文章だった。とりあえず返信だけでもと思い、メールの作成画面を呼び出す。が、そこで手が止まる。

（まあ、いいか。めんどいし）

結局そのまま終了させ、パソコンをへと向き直る。すると、いつの間にもログインしていたのか、ハルカとソレルの名前があった。軽く挨拶だけして、ラシルはアルメリアへと向かうのだった。

ギルドの施設から一気にアルメリアまで飛び、そのまま道具屋へ向かう。

昨日に来たときは、案内していたということもあり、あまり町を見ることはなかったが、久しぶりに訪れ、こうして一人で歩いてい

ると、随分前にここを拠点にしていたこともあるせいか、どこか懐かしい気分になる。

アルメリアの北口。そこからまっすぐ東に向かった先の町の角。その場所に道具屋はある。

ラシルは道具屋前に着くと、咲希らしきキャラクターを探してみ  
るが、それらしいキャラクターどころか、だれも居ない。見知った  
二人のプレイヤーを除いてはだが。

そこに居たのは、先程ログインしたハルカとソレルだった。てっ  
きり既にダンジョンに行っているものだと思うっていたので、こんな  
所で会うのは意外だった。

「よう、まだ行ってなかったんだな」

「はい。これからなんです」

ハルカが答える。準備でもしていたのだろう。自分の中でそう納  
得し、特別深くは追求しない。

「そういうあんたこそなにやってんの？」

「待ち合わせだ」

今度はソレルが聞いてくる。

ラシルが答えると、パーティー加入要請のウィンドウが現れる。  
なぜかソレルから誘われている。とりあえず承諾し、文句の一つで  
も言おうかと考えていたら今度は、ボイスチャットの設定をオンに  
される。直接話せということだろうか？ 樹はインカムを装着してみ  
る。

「で、誰と待ち合わせだっけ？ かみしろくん」

この一言で、樹は全てを理解した。

「……お前か……」

ほんの一時間ほど前に聞いたクラスメイトの声だ。間違えるはず  
はなかった。

「ったく、それなら最初っから言えっの」

「ごめんなさい、神代君も驚かせようって言ってたから」

樹は呆れながら、遥歌は苦笑気味に、そして後ろでは咲希の笑い



声が聞こえるのだった。この様子では、どうやら十分に満足出来る結果だったようだ。

「それじゃ、十分満足もしたし、そろそろ行くのでしょうか」

咲希はそう言って、先に一人歩き出す。

「あ、咲希。待ってよ」

慌てて遥歌が追いかけて、小さく溜息を吐きながら、二人の後ろを樹も追うのだった。

## Chapter 2 - 3 (後書き)

ラシル(以下ラ)「ファンタジアナイツなんでもQ&A〜!」

ハルカ(以下ハ)「と、普段ならこうなるんですが・・・」

ラ「突然ですがなんでもQ&Aは終了です」

アルタス(以下ア)「ってなんでオレらが来た途端そんなことにな  
ってるんだ」

ウイシュナ(以下ウ)「本編でもあまり出番がないのに、ここでも  
切られるんですね」(泣)

ラ「いや、単純にネタがなくなっただけだから」

ハ「でもあとがきは相変わらずこんな感じのままで行くので大丈夫  
ですよ」

ア「あ、そうなんだよかったよかった」

ウ「まだ出番はあるんですね」

ラ(出番気にしすぎだろ・・・)(汗)

ハ「そう言えば、ゲストが2人って初めてですよね」

ラ「そーいや、そうだな。ってかお前らいつも一緒だな」

ア&ウ「コンビですから!」

ハ「えつと・・・そういうものなんですか?」

ラ「オレに聞かれてもしらん」

ウ「でもQ&Aがなくなったらなにをするの?」

ア「たしかに。ほかにすることないじゃん」

ハ「折角だし本編でも振り返ってみましょうか」

ラ「本編と言えば、作者がすごく気にしてることがあってな」

ハ「なんなんですか?」

ラ「学校って今土曜は休みだよな?と・・・」

ア「知らずに書いたのか・・・?」

ラ「お前作者が高校出てもう何年になると思ってるんだ。アイツが  
卒業したときはまだ土曜は隔週で休みだったような時だぞ」

ハ「ラシル君、あんまり言うとな作者の歳がバレますよ」(汗  
ウ「そんな時は困ったcom・・・」

ラ「そのネタはもういいって・・・」

ア「そーいえば今回はあんまり話が進んでないよな。ただでさえ、あんま進んでないのに」

ハ「たしか、最初の予定では、試験の半分ぐらいは終わる予定だったんでしたっけ？」

ウ「私達ももつと出番があるはずだったのに、切られちゃいました」  
(泣)

ア「ラシルも今回はかなり影薄いな」

ラ「ソレル中心の話だし、仕方ないだろ」

ハ「そう言えば次回はもう2話の最後ですね。ちゃんと終わるんですか？」

ラ「終わるというかわらせるというかノ・・・今回引つ張りすぎたせいでちよつと本編もあやしいらしい」

ア「で、次の更新はいつぐらいなんだ？」

ウ「今回かなり時間掛かったもんねえ」

ラ＆ハ「・・・・・・・・・・」(汗)

ウ「ってなんで2人とも黙ってるの？」

ア「司会が黙るな」

ラ「詳しくはまえがき参照ってことで」

ハ「そ、それではまた次回」

ア「え？ちょ！なに？もしかして地雷？オレ地雷踏んだ！？」

## Chapter 2 - 4

アルメリアダンジョン地下一層目。ソレルとハルカには、すっかりおなじみとなった場所だ。今回はラシルを伴っている為か、普段とは少し気分が違う。

目的地に着くと、まずはラシルが全員に支援魔法を掛ける。尤もアルメリアからこの場所まで、さほど距離がある訳でもないので満足にSPが溜まるはずもなく、完全な支援は無理だ。その為、優先度の高い物を使用する。

「とりあえず、行くか」

ラシルがそう声を掛け、戦闘を歩く。ソレルとハルカもその後が続く。

少し進んだところで、目標のモンスター　アーマーソルジャーを発見する。まずモンスターに近付いたのはソレル。両手に斧を構え、モンスターへと切り掛かる。その後方からは、ハルカが矢を放つ。

一方、ラシルはというと　側で二人の戦闘の様子を窺うだけで、戦闘に参加する事は無かった。

先程ラシルが掛けた魔法は、一定時間対象のスピードをアップさせる『クイック』の魔法だ。これにより、ソレル、ハルカ共に今までよりも攻撃速度が上昇している。勿論、劇的な変化とは言えないが、今までに比べれば、戦闘が有利になる事には変わりない。

また、回避能力も上昇している為、モンスターからの攻撃を一身に浴びるソレルは、これまで以上に攻撃を回避しているのだった。しばらくして、漸く戦闘が終了する。

結果は、目的のアイテムは毎度の如く、入手は叶わずだ。ソレルが受けたダメージもいつもと大差はない。支援魔法といっても、下位クラスで習得出来る支援魔法を、低レベルで使ったのだ。多少は有利に働くとは言え、所詮は付け焼刃程度の効果しか発揮しない

のだった。一番の違いと言えば、戦闘終了後にラシルが即座に『ヒール』の魔法を掛け、ソレルのダメージは簡単に回復してしまった事ふらいだろう。

「アンタはなんで見てんのよ・・・!」

終始、戦闘を眺めていたラシルに対して、あからさまに怒りをぶつけるソレル。ラシルは二人の手伝いと言う事でこの場にいるのだ。それが、戦闘には参加せず、側で様子を眺めているだけとなれば、彼女がこの様な態度に出るのも無理はない。

「レベル上げと、お前らの腕を上げるのと、どっちを優先させようかと思つてな」

事も無げに、ソレルの怒りを受け流しながら、そう答えるラシル。「そんなことより、アイテム出すのに協力してなさいよ!」

ラシルの言葉に更に反論するソレル。

そうなるのも無理はない。ソレルは現在、ギルドの入団試験中だ。クリア条件は指定されたアイテム 『ルーンソード』の入手。そして、ラシルが呼ばれたのは、このアイテムの入手を手伝う為だ。それを、来た目的がレベル上げなどと言われれば、ソレルが怒るのも当然だった。

この言葉を受け、ラシルは沈黙する。尤も、反省の為の沈黙ではない。自身の考えをどう伝えるか 言葉を搜しての沈黙だ。

「じゃあ一つ聞くが、お前ら二人で居るときってそんなに効率良く倒せるわけ?」

「それは・・・そんなにだけど・・・」

ラシル自身、意味も無くレベル上げなどと言っている訳ではない。モンスターがアイテムを落とすのは、全て一定の確率の上に成り立っている。そこに例外はない。

そして、確立の低いアイテムを出す為には、運も必要だがそれよりも、大量のモンスターを倒す。これが重要だった。そして、早く手に入れようとするなら、効率よくモンスター達を倒す必要がある。通常なら、それほど効率を気にする必要もないだろう。自身のペ

ースで戦闘をした所で、誰に迷惑を掛ける訳でもない。だが、今回の様に、一定期間内にというならば話は変わってくる。

では、どうすれば効率よく戦えるのか？答えは簡単だ。キャラクターのレベルを上げ、モンスターを圧倒出来る程に強くなるか、プレイヤースキルを上達させ、上手く立ち回れる様になるかだ。

だが、言葉で言うほど簡単なものでもない。

前者は、時間的に厳しいものがある。ソレル達のレベルなら、まだ一日に一つから二つ程度ならレベルアップも望めるだろう。だが、それ以上となると厳しいものがある。慣れたプレイヤーならまだしも、初心者二人にそれを望むのは酷だ。

後者も後者で無理がある。そもそもプレイヤースキルは、日々の経験の下で培われるものだ。一朝一夕で身に付くものではない。だが、慣れた者が教えるなら、ただ戦うよりはずっとマシと言えるだろう。

ギルドのメンバーが手伝えるのは一日だけだ。メンバーの人数を考えれば試験期間のほぼ半分は、誰かに手伝ってもらえる事になる。だが、残りの半分は二人だけなのだ。運良く、メンバーが居るときにアイテムを入手出来ればいいのだが、確実性はない。なら、二人で居る間も、少しでも効率よくモンスターを倒していかなばならない。

現状では、プレイヤースキルを上げるのが確実だろうというのが、先ほどの戦闘を見ていたラシルの考えだった。

ラシルはこの事を伝え、こう付け加えるのだった。

「安心しろ、効率は落とさないから」

こうして、一行のダンジョン探索は再会されるのだった。

一時間後。

「う、ごめん、ちょっと休憩させて」

「私も・・・」

そう言って、ダンジョン内で座り込むソレルとハルカの姿があっ

た。

「なんだ、もうか。しゃーなーな」

疲労困憊といった様子のソレルとハルカに比べ、悠々とした様子のラシル。傍から見れば、とても一緒に居た様には見えない。

一行が行動を再開してから、ラシルによる特訓が始まった。

ソレルには、攻撃を回避する方法を、ハルカには立ち回り方法を教えていたのだった。

二人とも、慣れない操作を要求され、毎回の戦闘がこれまでとは違った意味でいっぱいになっていった。

これまでに無い動き、これまでは気にもしていなかった事を気に掛け、今までにないペースで戦闘を続ける。慣れない事をしようと、神経を集中させている為、普段以上に疲れる。

だが、それ以上に戦闘スピードが今までは考えられない程に上がっていた。

元々、このダンジョンのモンスターは多めに配置されている。その為、戦闘をする機会も自然と多くなる。ソレルとハルカの二人もHP回復の為に時間を割いていたが、それでも戦闘数はなかなかのものだった。そう思っていた。

だが、ラシルが加わった事で、回復の手間がなくなった事もあるが、それ以上に戦闘をする回数が増えていた。モンスターを倒すスピードが上がった事もあるが、なにより、ラシル自身がモンスターを連れてくるのだった。

これにより、戦闘の終わりが見える頃にはもう次の戦闘、といった様になり、終わりが見えることはなかなかないのだった。

最早、ソレルとハルカには、一時間ずっと戦闘をしていた様にしか感じられないのだった。

「お前らが休憩してる間にもうちよい戦闘してくるわ」

ラシルはそう言っと、一人その場を離れるのだった。

「アイツ、どんだけ元気なのよ」

「ラシル君は慣れてるしね」

そんなラシルの様子に呆れたように呟くソレル。ハルカも苦笑するしかなかった。

壁際に沿い、座り込む二人。HPは減っていない為、わざわざこうして座る必要はないのだが、立ったまま居るとどうしてお休憩という感じがしない為、こうしている。

周囲にモンスターの気配はない。予想もしていなかったほどの戦闘の多さに、今までこうして座りながらゲームをしていたことが、どこか懐かしく感じられる。

「しかし、神代のヤツ。どれだけ強いんだよ」

自身の経験値を見ながら、ソレルが呟く。

現在は三人でパーティーを組み、経験値は三等分となっている。若干レベルの足りないソレル達とはいえ、この状態では経験値が大きく入る事は無い。その状態にも関わらず、レベルアップまでの経験値の溜まり具合を示すゲージはゆっくりではあるが、着実に増えつつあった。

「神代君は随分やってるみたいだし」

ソレルがラシルを本名で呼んだことに釣られてか、ハルカも本名で答える。

初心者二人から見ても、ラシルのプレイヤースキルの高さは十分に理解出来た。いや、初心者だからこそだろう。

相手にするモンスターが少なくなると、ラシルは新たにモンスターは連れて来る為に、戦闘から離れてしまう。だが、毎回連れて来る訳ではない。ソレル達の戦闘が速く終わり、ラシルに追いつく事もあった。

そんな時に目にしたのは、三体から四体ものモンスターを相手に立ち回り、互角以上に戦うラシルの姿だった。

決して広いとはいえない通路を隅々まで活用し、モンスターの攻撃範囲から逃れては、反撃を繰り返す。その様子は、ラシル一人が別のシステムで動いている。いや、別のゲームをしているのではないかと思わせるほどだった。



「お前ら、ネットで人のことを本名で呼ぶな」

そんな話をしていると、ラシルが呆れた口調で言う。ボイスチャットで話していた為、ラシルにも聞こえていたのだった。

「あはは、ごめんごめん」

「ついうつかりで・・・」

「ったく・・・。それより、そろそろ合流しないか？」

二人が休憩を始めてから、既に十五分が経過していた。知った仲とはいえ、これ以上ラシル一人に任せる訳にもいかない。それに、休憩には十分な時間だった。

「そうだね」

「じゃあ、そっちに向かうから」

二人はそう言って立ち上がると、マップに写るラシルを指すマーカーを指して移動を開始する。

初めこそ、モンスターに会う事もなく順調に進んでいたが、そのまま合流出来るほど甘くもない。道程の中ほどでモンスターに遭遇する。

数は二体。しかも、どちらもアーマーソルジャーだ。

今までなら、かなりの苦戦を強いられる事になっていた。だが、今はラシルに鍛えられたプレイヤースキルがある。それなら、随分と楽に戦えるのではないか？ソレルはそう考えていた。

「ハルカ、行くよ！」

そう言って、モンスターへと駆ける。

「うん！」

ハルカもそれに答え、射程範囲内へと移動する。

一発、二発　ソレルの攻撃が命中する。それに合わせて後方からは、ハルカの矢が飛んでくる。

一方、アーマーソルジャーは、ダメージを受けながらも、ソレルに攻撃をしようと剣を振りかぶっている所だ。

まだいけるだろうか？

一瞬の迷い。だが、この一瞬が命取りとなる。ソレルの状態は既

に、攻撃後の硬直状態となっていた。こうなってしまうては、最早どんな行動も受け付けない。

（しまった！）

気付いた時には既に遅く、ボタンの連打も空しく、ハルカの攻撃を受けながらもアーマールソルジャーの振りかぶった剣が振り下ろされる。

二体のモンスターからの攻撃を受け、ソレルのHPは一気に消耗する。一旦距離を取り、アイテムで素早く回復をすると、再びモンスターへと迫る。

次は先程の様な事はしない。二度の攻撃の後、素早くバックステップで距離を取る。アーマールソルジャーの攻撃を回避したことを確認すると、更に三回の攻撃を叩き込む。これが現在のソレルの最大攻撃回数だ。

アーマールソルジャーはまだ攻撃態勢にも入っていない。

まだいける。

今度は迷わない。あと一撃。そう思いながら、攻撃ボタンを連打する。だが、思いのほか長い、攻撃後の硬直と、斧故の攻撃速度の遅さで、後手に回ってしまう。結果、攻撃は出来ずに、再び、ダメージを食らうこととなる。

結果、安全に行こうとすれば、思うようにダメージを与えられず

しかし、欲を出せばダメージを受ける。ラシルの動きを思い出し、真似をしようとするればほど上手くいかず、戦闘が終わる頃には、いつもと変わらない程のダメージを受けていた。

「はあ……。ホントに効率よく戦える様になるのかな……」  
思わずそう呟く。

勿論、ラシルと同じ様に動けるなどと思ってはいない。一時間程度ではどうにもならないものだとも理解している。だが、全く進歩を感じられないのでは不安になってくるのだった。

その後も戦闘を重ねながら、無事ラシルと合流する。

「なんか、あんたの言うこと聞いてていいのか心配になってきたわ・

・ ・ ・

「出会い頭の一言目がそれかよ」

突然の事になんの事かわからず、ただ呆れるしかないラシル。

「いや、全然上達しないなと」

探索を続けながら、先の戦闘のことを話す。

「まあ、気持ちはわかるが・ ・ ・ 一時間程度で上手くなれたらオレ泣くぞ？」

冗談交じりにラシルが言う。

ラシルが教え込まれた当時、コツだけはその日の内に掴んだものの、なんとかサマになるまで三日。使いこなせる様になるまではなるまでなら、どれほどかかったかも分からないほどだ。

「まあ、しつかり鍛えてやるよ」

そして、再びラシルによる特訓が再開されることとなった。

この日は、このまま夜まで続くこととなり、その甲斐あってか、ソレルもコツだけはなんとか掴めてきた様だった。尤も、主だった成果はその程度で、本命　ルーンソードは影も形も見せないのだった。

次の日。この日は休みの為、昼にはソレルとハルカの姿があった。昼食を取り、ソレルがハルカを誘ったのだった。

「私が誘っておいてなんだけど、ネットゲームってのもアレよね・ ・

・ ・ ・

今二人は、久しぶりに戻ってきた溜まり場で過ごしていた。

昨日、ラシルと別れた際に、彼のトランスゲートと一緒に乗ってしまった為に、ライラックへと戻る事になったのだった。

「まあ・ ・ ・ たまにはいいんじゃないかな？」

たまに　そう言いながらも、つい最近もこの様な状況だった事を思い出し、つい苦笑してしまうハルカ。

現在は試験中ということで、二人ともログインしたものの、昨日に長時間やり続けたこともあり、どちらも腰が重い。中々、アルメ

リアに行こうとは切り出せない。

そろそろ、ダンジョンに向かった方がいいだろう。互いにそう思いながらも、つつい話しに花を咲かせてしまう二人だった。

そうしている内に、二人のキャラクターが姿を現す。エルナとリシュリーだ。

「あれ？二人とも珍しいね。もしかして、アイテムゲットした？」

最近は、すっかり姿を見なくなった二人を発見し、早速声を掛けるエルナ。

「いや、さっぱりですよ」

「全然見つからないです」

冗談交じりにソレルが答える。それに合わせる様に、ハルカも言う。

「あ、そうだ！もし良ければ、これから手伝ってもらえませんか？」

「ダメだよ、咲希！」

ソレルの提案に、ハルカが慌てて止める。本名なのは、今は二人だけでパーティーを組んでいるからだ。

「え、なんで？」

二人の事情を知らないソレルは、ハルカの慌て様に不思議に思いながら聞き返す。

エルナとリシュリーのプレイヤーは、現在高校三年生　つまりは、受験生だ。本来なら、こうしてゲームをしている間などほとんど無いのだが、二人が希望する大学なら、まだ成績に余裕がある為、こうしてログインしているのだった。

普段ならば、放課後に二人で勉強をし、それから帰宅となるのだが、今日の様な休みの日なら、こうしてログインしていながらも、ボイスチャットで連絡を取り合いながら勉強していることも珍しくない。

そんな事情を知っているメンバー達は、極力自身からの誘いは避け、エルナ達からの誘いを待ち共に行動することがほとんどだった。「それじゃあ、すぐに断った方がいいね」

二人の事情を聞き、早速チャットを撃ち始めるソレル。

「ああ、いいよ。リシュリーも大丈夫だよね？」

「しょうがないな」。その代わり、夕方からはみっちりやるよ？」  
だが、それも遅くエルナが了承する方が早かった。

「本当にいいんですか？」

「大丈夫だつて。夕方までだけどね」

思わず聞き返すハルカ。無理に自分達に合わせているのではない  
かと思い、申し訳なくなってくる。

時間に制限が付いているので、本当に大丈夫なのだろうが、やはり  
邪魔をした様に思えてしまい、少し後ろめたい気持ちになる。

「すいません」

「気にしないの。私達もいい気分転換になるんだし」

リシュリーがフォローを入れる。尤も、これは本心でもある。だ  
からこそだろう。この言葉で、ハルカの気持ちも随分と楽になるの  
だった。

「それじゃあ、時間も勿体無いし、さっさと行こうか」

エルナの一言で、早速アルメリアへと向かうのだった。

アルメリアまではあつという間だった。再び徒歩移動を予想して  
いたソレルとハルカは、いい意味で予想を裏切られた事となる。

「リシュリーさんもトランスゲートの魔法使えたんですね」

「それでも、元は僧侶系だしね」

感心するハルカに答えるリシュリー。

リシュリーは今でこそウィザードだが、本人も言う様に初めはは  
僧侶系統のクラスをしていたのだった。それもマスターし、今では  
こうして魔術師系のクラスとなっている。

ラシルとは違い、スキルはしっかりと習得してからのクラスチェ  
ンジだった為、僧侶系が使う白魔法のスキルは、ほぼ全てを最高レ  
ベルで使用出来る状態となっている。

アルメリアへと着いた一行は、早速ダンジョンへと向かう。

「そつだ。パーティーどうしようか？」

目的地に着いた所で、エルナがパーティーを決めていなかった事に気付く。

ラシルの様にレベルが近ければ、アイテムの探索と同時にレベル上げが可能となるので、そのままパーティーを組んだ所で問題は無い。

だが、今回の様にレベル差があれば、経験値の分配が出来なくなる為、簡単にパーティーを組むわけにもいかない。

「レベル差もあるし、このまま二パーティーでいいんじゃない？」  
「でもこの子達の回復に困らない？」

エルナが危惧していたのは、経験値とは別の所にあった。

メンバーの関係上、回復はリシュリーの担当になる。そして、リシュリーの様に支援に慣れたプレイヤーなら、ある程度は仲間のHPを確認せずともしつかりと回復が出来る。だが、それは親しい者との場合だ。

ハルカやソレルはギルドに入って間もない。自身の環境からも、先にギルドに入っているハルカですら、一緒にどこかに行った事など、数回程度だ。そんな状態で、二人を守りきることは難しいだろう。

「それもそつか。しょうがない、今回は経験値はちよつと諦めてね」  
リシュリーはそう言つて、四人で組む為のパーティーを作成する。残りの三人にも呼びかけ、新たなパーティーで探索を開始するのだつた。

一本道の通路を進み、モンスターを探す。休日だけに、プレイヤーが多いのか、この通路どころか、壁の向こう側にもモンスターの姿は見えない。

普段ならば、それほど気にしない状況だが、今回は、この状況がもどかしく感じるソレルだった。

そんなソレルの気持ちを感じてか、丁度モンスターが姿を現す。モンスター発見と同時に、まずはリシュリーが魔法の詠唱を開始

する。そして、エルナがモンスターへと突っ込んで行く。

エルナはラシルの様に、回避に特化したキャラクターではない。防御に重点を置いたキャラクターだ。その為、避けるような事はせず、攻撃は全て受け止める。

ラシルの様にほとんどが「MISS」と表記される事はない。だが、ダメージの表記はほとんどが一桁だ。その為、モニターに写るエルナのHPゲージはほとんど減る事がない。モニターの表示だけを見れば、ダメージを受けている事すらわからないだろう。

そこに、詠唱を完了したりリシュリーが『フレイムアロー』の魔法を発動させる。十本の炎の矢が、次々とモンスターに命中していく。そして、モンスターはそのまま撃破されるのだった。

ソレル達は、参戦する間もなく戦闘が終了してしまった。かなりのレベル差があるとはいえ、自分達が苦勞してやっと倒せるモンスターを軽々と倒す所を見て、改めてレベルの差の大きさを思い知る。「じゃあ、ここからは別行動にしようか」

一本道の通路が終わり、分かれ道となる。そこでエルナが提案する。

彼女のいう意味がわからず、沈黙するしかないソレルとハルカ。

「私とリシュリーが一緒に居ても効率下げるだけだからね」

エルナの言いたい事はこうだ。

エルナとリシュリーの二人は、この場所をソロで活動は十分に出来る。だが、リシュリーは、魔法を使う関係上、どうしても詠唱が存在する。だが、詠唱はダメージを受けると中断してしまう為、アクティブモンスターばかりが徘徊するこの場所では少しやり辛い。

そこで、ソレルとハルカにリシュリーの詠唱中、彼女を守りながら戦い、エルナはソロで戦闘をしていけば、効率は上がるだろうというのだった。

その事を説明し、話の見えなかった二人も漸く、エルナの意図を汲み取る事が出来た。

「マスターが構わないなら、私は賛成です」

「私も異議なし」

エルナの提案に、ハルカとソレルも賛成する。

「リシュリーは？」

「うん、いいと思うよ」

リシュリーも異議は無い様で、エルナの提案は可決となった。

「それじゃあ、また後で」

エルナはそう言うのと早速、一人ダンジョンを進んで行くのだった。  
「私達も行こうか」

リシュリーの一言で、残ったメンバーも探索を再会する。

モンスターの数が少ない。そう思えたのは最初だけだった。エルナと別れて間もない内に、モンスターと遭遇する。

今度は見ている訳にはいかない。ソレルがまずモンスターへと向かう。それに合わせる様に、ハルカが矢を放つ。いつも通りの連携だ。

「ハルカちゃんは後ろにも注意してね」

リシュリーがそう言いながら、魔法の詠唱を開始する。

モンスターからの攻撃を引き付けるソレルは、昨日を思い出しながら、攻撃を回避していく。自身はエウナのような防御型ではない為、彼女の様な戦法は取れない。

昨日、ずっとやっていたせいか、動きには随分と慣れてきた様子を見せる。だが、それ以上に、リシュリーと組んでいるということ、一番大きかった。

昨日の様に、ラシルと組んでいれば、回避と同時に攻撃もこなさなければならぬ為、どうしても操作ミスが出てしまう。だが、今回はリシュリーが魔法を発動するまでの間、時間を稼げばいいのだ。魔法が発動すれば、確実に撃破。とまではいなくても、それに近い状況にはなる。意識を攻撃にも向けなくても大丈夫という現状は、ソレルに余裕を与えるには十分だった。

攻撃と回避行動を数回繰り返したところで、リシュリーが『フレイムアロー』の魔法を発動させる。先程の様に、十本の炎の矢がモ



ンスターへと迫り、そのまま撃破となる。

「すごいですね」

思わずそんな言葉が出てくるソレル。

「それでもレベル80台だからね」

少し照れたようにリシュリーが答える。

こうして、探索を続けること一時間。今のところ、目的の『ルーンソード』は出ない。別行動をしているエルナからも、そういった報告はされていない為、あちらも同じ状況なのだろう。

探索が続いている内に、偶然エルナの側まで来た一行。一旦合流する為に近付くが、彼女のマークが寄って来る様子はない。恐らく戦闘中なのだろう。

特に気にする事もなく近付いていくと、そこには、やはり戦闘中のエルナの姿があった。

モンスターの数は四体。昨日、ラシルから教わった戦闘方法で、随分と受けるダメージが減ったソレルとハルカだが、それでもこの状況は二人には十分厳しいものだろう。

だが、エルナは違う。モンスターの数など気にする様子も無く、そのまま突っ込んでいく。事実、モンスターの数など、気になる程ではない。四体ものモンスターから攻撃を受けているため、受ける攻撃の数こそ多いものの、どれも大したダメージではない。表示されているHPのゲージも全くという訳にはいかないが、ほとんど減った様子はない。

逆に、エルナからの攻撃は、モンスターには十分すぎるほどのダメージを与えている。一撃が重い。ソレルやハルカ、それにラシルと昨日に組んでいた、どのプレイヤーとも戦闘スタイルが違う。

通常攻撃からスキル、そして、更に追い討ちを掛け、一気にモンスターを倒してしまう。まるで、モンスターから攻撃を受けている事など気付いていないかの様にさえ見える。

一体倒すと次。それが終わると、また次と 見る見るうちに、四体のモンスターを倒しきってしまう。

「お疲れ様」

エルナの戦闘が終わるのを見計らって、リシュリーが『ヒール』の魔法を掛ける。

「ありがと。こっちは全然収穫無しだけど、そっちは？」

「こっちもです」

互いにパーティーを組んでいる為、行動は別とはいえボイスチャットによる会話は出来る。そして、会話の中にアイテムの話題は出てこなかったので、予想はしていたが、改めて本人の口から聞くと、どうしても少し気落ちしてしまう。

「まあ、まだ時間はあるんだし、気長にいくしかないよ」

そんなソレルの気を察してか、エルナが明るくそう言うのだった。そして、再びエルナと別れ、ダンジョンの探索を再開した。

ソレル達一行は、アルメリアへと戻っていた。

時刻は既に五時。夕方　　というには少し早い、そのまま終了となった。

結果は　やはりアイテムは入手出来ずに終わった。それ以外の収穫といえば、ソレルとハルカがそれぞれレベルを一つずつ上げた事ぐらいだろう。

「今日はありがとうございました」

「こっちも楽しかったよ」

二人の勉強の邪魔をしてしまい、少し後ろめたい気になっていたソレルだが、気にしていない様子を見て、少し安心する。

「それじゃあ、私達は戻るけど、二人はどうする？」

「私達はここでいいです」

「戻ると、また来辛くなりそうですし」

溜まり場に戻ってしまうと、今回の様になかなか動けなくなりかねない。そう考えた二人は、アルメリアに残ることにした。

二人の言葉を受け、エルナとリシュリーはトランスゲートの中へと消えていく。二人の状況を考えると、今日はこれ以上徹だっても

らうことは出来ない。二人の手を借りられるのもここまでだ・

「これからどうしようか？」

「うーん、ちょっと疲れたし、今日はもうやめとこうか」

ソレルがハルカに答える。

昨日は、丸一日。そして、今日も半日とずっとゲームを続けていた二人。ソレルも、試験中とはいえ、これだけ続けては、流石にこれ以上続ける気は起きない様だった。

ハルカもそれは同様で、ソレルの言葉に、内心安心する。

そして、二人ともログアウトをして、この日は終了となった。

休日が終わわり、再び平日が訪れる。学校がある為、ゲームをする時間は削られるが、それでも『ルーンソード』を求め、毎日ログインを繰り返すソレルとハルカ。

一日、また一日と成果の無い日が続く。初めのうちこそ、まだ余裕が見られたが、日が経つにつれ、それに比例するかの様に、焦りが出てくる。

どんなにモンスターを倒しても、手に入るのは目的の物以外のアイテムばかり。本当にアーマーナイトが落とすのだろうか？そもそも、他の方法を取った方が良かったのではないか？

そんな考えまでが浮かんでくる。

そして、ついには土曜となる。期限はこの日を入れてあと二日となっていた。

学校が終わり、昼食を取ってすぐにログインをしたソレル。ハルカの姿はまだない。恐らく、まだ昼食を取っているのだろう。

ハルカを待つ間に、先に準備だけ進めておく。一週間もの間、この町にいるせいかすっかり馴染みの町となっている。

準備を済ませ、ハルカを待つ事数分。アルタスがログインしてくる。

「お、ソレル発見！今って狩り中？」

ソレルがログイン中なのを確認すると、早速ギルドチャットで話

しかけてくる。

「今はハルカ待ちですよ」

「丁度よかった。オレとウィッシュナ連れて行かないか？」

アルタスから意外な提案が出される。

エルナ達に手伝わってもらった後、平日で長時間のゲームが出来ない事を理由に、ずっと二人でアイテムを探していた。その為、アルタスとウィッシュナの二人は、未だこの試験に関わっていない状態だった。

予想外の申し入れに考え込むソレル。これまで、アイテムの探索ばかりに気を取られ、あと二人居るメンバーにどこで手伝わってもらうかは、考えていなかった。

とはいえ、残り二日。今日と明日で一人ずつ　というのが一番妥当だろう。だが、アルタスは二人でと提案している。それでは、どちらか片方だけというのも申し訳ない。

そうなれば、今効率を上げるか、明日の最終日に効率を上げるか。違いはそれだけだ。

「それじゃあ、お願いします」

それが、ソレルの返答だった。と、言っても特に深い意味は無い。ただ、単純に、早いほうがいいだろうと思つての事だった。

「わかった。それじゃウィッシュナが来たら合流するな」

十分後。

全員が揃い、すっかり通い慣れた、いつもの場所へと向かうのだった。

目的地に着くと同時に、二体のモンスターに襲われる。先陣を切っていたソレルが、二体のモンスターの攻撃を早速浴びる事になる。前方をモンスターに塞がれ、思うように動く事も出来ずに、ラシルと組む前の様な戦い方となってしまう。

だが、それも束の間だ。すぐに、残りのメンバーも姿を現す。こうなってから、早かった。瞬く間にモンスターを仕留め、不意打ち気味で始まった戦闘は、ソレル達の圧勝となった。

戦闘終了後、ウィシュナの『ヒール』で、ソレルのHPは全快する。

以前に、ラシルやリシュリーと組んだ時も感じていたが、やはり支援魔法があると随分と楽になる。

ソレルとハルカは、クラスの関係上、自身や他者を回復するスキルというのは持ち合わせていない。その為、回復するとなると、アイテムか時間の経過による自然治癒しかない。だが、この二つは、前者なら数による制限が、後者なら時間が掛かるという欠点がある。勿論、スキルの使用にも、SPによる制限と詠唱時間があるが、それでもSPさえあれば、無制限に使えるスキルは十分に魅力的だった。

そして、何より、ソレルはスキルを多用しない傾向にある事も大きい。

ソレルは商人だ。そのクラス故、スキルも攻撃に特化している訳ではない。その為、SPは余りがちとなっている。それなら、それで回復を　どうしても思ってしまうのだった。

この試験が終わったら、回復系のスキルだけでも習得するのかもしれない。これまで、ギルドのメンバーと組んで、ソレルはそう思うのだった。

モンスターを倒し、早速探索を開始する一行。

少し進んだ所で、再びモンスターと遭遇する。今回は幸先がいいように感じられる。

まずは、アルタスがモンスターへと向かう。そして、一撃。更に続け、攻撃の最大数まで出し切る。途中モンスターからの攻撃もあったが、気にはしない。

だが、エルナの様な、防御型のキャラクターと言うわけではない。事実、モンスターから受けるダメージは、ソレルの受けるダメージよりも低いものの、ダメージを抑えているとは言い難いものだった。モンスターの攻撃が終わるのを見計らって、ソレルも攻撃に参加する。アルタスの攻撃と、ハルカが後ろから矢を放っていた事もあ

り、ソレルが攻撃に参加して間もなく、戦闘は終了となった。

「やっぱり、前衛が一人増えると全然違いますね〜」

今までよりも、格段に短い戦闘時間を体感し、ソレルがそう口を開く。これまでの様に、ソレルとハルカの二人では、まずありえない短さだ。

「ホントだねえ。私も助かるよ」

ウィシュナが答える。若干含みのある答えだったが、戦闘時間が短いということは、それだけダメージも抑えられる。つまりは、リリースであるウィシュナの仕事が減るという事だ。

そういう意味なのだろうと、ソレルもハルカも受け取っていた。だが、この時点で、ウィシュナの言った事の本当の意味を理解している者は居ないのだった。

探索が進み、次々とモンスターを倒していく一行。一度に現れる数が少ない為、戦闘に苦戦する事も無い。だが、逆に戦闘回数は多い為、モンスターを倒した数は中々のものとなっている。ソレル達にとっては、やりやすい環境となっていた。

相変わらず、『ルーンソード』は見つからない。だが、久しぶりにいつもと違う環境での探索のせいか、ハルカを待っている間に感じていた焦りは、今はどこかへと消えていた。

快調に進む事一時間。これまで、特に大きな問題もなく、目的のアイテムが出ない事を除けば、まさに順調といえた。

基本的に、幅の狭い通路で構成されているこのダンジョンだが、それだけではない。少しではあるが、広がりのある 部屋の様な場所も存在している。

丁度、一行はその内の一つへと来ていた。

部屋に入った所から、モンスターの姿が見える。だが、そこに居たのは一体や二体ではない。今見えているだけでも四体ものモンスターが固まっていた。

ソレルが一步踏み出すと、更に二体のモンスターの姿を確認出来た。

このまま突っ込んでいいものか迷う。モンスターは最低でも六体。こちらの戦力は四人。内二人は、ソレルやハルカよりも高レベル。しかもその内の一人はプリーストだ。

攻撃、回復共に問題無い様にも思える。だが、それでも、踏み出すには躊躇してしまふ。流石に、一度に相手にするには、モンスターの数が多すぎる。

だが、そんなソレルの悩みはまるで関係ないと言わんがばかりに、アルタスが突っ込んでいく。

「え？ちよっ・・・アルタスさん！？」

思わず口を開くソレルだが、反応が帰ってくることは無い。勿論、止まる事も無い。そのまま戦闘へと突入する。

「はあ、やっぱり」

「はは・・・相変わらずだねえ」

そんなアルタスの行動に、ウイシュナは溜息を吐きながら呟き、ハルカは苦笑しながら、戦闘へと参加する為に、ソレルの脇を抜けて行くのだった。

予想外の行動に呆気にとられていたソレルだったが、二人の行動で我に返り、自身もまた、戦闘へと参加する。

モンスターは、全部で六体。入り口付近から確認出来た分で全部だった。そして、その六体のモンスターから、攻撃を一身に浴びるアルタス。

だが、そこに、回避というものは存在しない。ダメージを抑える訳ではなく、かといって、回避をする訳でもなく、ダメージを受けながら、攻撃を繰り返すアルタスの姿があった。

このダンジョンに来るには、十分過ぎるレベルと、ロードというクラスの特性上、HPは高い。その為、これ程の攻撃を浴びても、致命傷という訳ではない。だが、それでも、ゲージは随分と削られている。

戦い方こそエルナに似ているが、内容は全くの別物だった。

アルタスに追いついたウイシュナとハルカ。まずは、ウイシュナ

が『プロテクション』の魔法を詠唱する。それと同時に、ハルカが攻撃を開始する。

詠唱時間はごく僅かだ。ハルカが二本目の矢を放つ頃には、もう魔法が発動していた。

魔法により、防御力が増すアルタス。これで、ダメージは抑えられるが、それでも十分とはいえない。

次に、『ヒール』を唱え、アルタスのHPを回復する。そこで、漸くソレルが追いついてくる。

モンスターの隙を窺い、攻撃を繰り返すソレル。モンスターの数に機を取られ、回避のタイミングを見誤り、回避行動が遅れる。だが、なんとか紙一重で避ける。

「ソレルさんは、なんとかダメージを食らわない様をお願いします」  
ウイシュナから、そう指示が出される。アルタスの支援で、ウイシュナも余裕があるとはいえない状況だ。

その事をつさに理解し、ソレルは攻撃の手を緩める事にする。  
ラシルに教わった戦闘方法を練習し始めて一週間。いつも通りに攻撃を加えながら、ダメージを受けずに立ち回る事が出来るほどの腕は、ソレルにはまだなかった。

今までの通路とは違い、小部屋となっている為、スペースは広い。  
その為、これまでよりも自由に動ける様になっている。

ソレルは回避行動を繰り返しながら、周囲を動き回り側面からあるいは後方からと、モンスターを攻撃していく。

ソレルが与えるダメージは決して高いとは言えない。その為、モンスターを倒すには、どうしても時間が掛かる。手数を抑えている現状では尚更だ。現状で、攻撃に期待出来るのは、アルタスと、ハルカだけだった。

これまでよりも、時間が掛かったものの、なんとか一体、また一体とモンスターを撃破していく。

モンスターを一体倒す度に、確実に戦闘が楽になるのを感じる事が出来た。



順調に数を減らし、ついには最後のモンスターも無事撃破する。

「ウィシユナちゃんが、最初に楽が出来るって言ってた意味が分かった気がするよ」

「同感・・・」

ハルカの言葉に、ソレルも同意する。

「アルくんってばいつもあんな感じで・・・」

溜息を吐きながら、どこか諦めた様子でそう言うウィシユナ。

今回のアルタスの、暴走とも取れる様な行動は、今に始まった事ではない。

敵を見つけると、とりあえず突っ込む。それがアルタスの戦闘スタイルだ。これは、かなり厄介なのだが、それ以上に厄介なのがパラメータだ。

アルタスは防御にはほとんど重点を置いておらず 装備品はそれなりに気にしているが パラメータの重点を置いているのは力つまりは攻撃力に重点を置いている。結果、先の戦闘の様に、避けられない、耐えられないという状況に陥っている。ただ、この状態は必ずしも悪いという訳では無い。

攻撃力が高い分、モンスターの殲滅が早いのも、また確かだ。ただ、攻撃を回避しようとしないうちに、こうして、悪い部分ばかりが目立ってしまうのだった。

そんなアルタスと組んでいるウィシユナだが、回復、支援行動に関しては、かなりのプレイヤースキルを誇っている。

周囲からの評価も中々のもので、同期間プレイしている者の中でならトップクラスの腕前なのではと言われる程だ。

無茶をすると、周囲に迷惑の掛かるパーティープレイでは、どうしても動きが慎重になる。そして、そういった面々をサポートする事は、普段、暴走しがちなアルタスと常に組んでいるウィシユナには、随分と楽なものだった。

事前にサポート魔法を掛け予防線を張り、仲間が受けるダメージを確認しながら、HPゲージに合わせ、回復をしていく。更には、

SPが尽きない様に、余裕のある時には、自身が攻撃をするのも忘れない。

ウィシュナにとっては、普段アルタスと組んでいる時にしている事を、そのままやっているだけなのだが、周囲が、彼女を称えるには十分過ぎる動きだった。

「でも、よくあそこまで支援してくれますねえ」

感心した様に、ソレルが言う。ソレルがダメージを極力受けない様に立ち回ったとはいえ、少しでもミスがあれば危ない状況だっただろう。

「まあ・・・慣れてるからあれぐらいは」

照れ笑いの様な　しかし、苦笑とも取れるような反応を見せながらそう答える。

そうした話題で盛り上がりながら、一行は探索を再会する。

その後は、特に苦戦する事も無く　とは行かず、時折ピンチに陥りながらも、なんとか切り抜けるのだった。

そして、気付けば、既に日付が変わろうとするぐらいの時間になっていた。

ほぼ、丸一日掛けたこの日も、結局成果はないまま終わってしまった。ついには、最終日を残すのみとなってしまうたのだった。

「うっっ・・・どうしよう、ハルカ」

「どうするもなにも、一体でも多く倒して、少しでも確立を上げるしかないよ」

アルメリアの道具屋前。すっかり二人の溜まり場となったこの場所、情け無い声を出すソレルと、それを宥めるハルカの姿があった。

ついに迎えた、試験最終日。これまで、どれだけソレルとハルカでがんばっても、ギルドのメンバーの協力があっても、一切『ルーンドード』は出なかった。その事が、ログインしたばかりにも関わらず、ソレルをすっかり意気消沈させているのだった。

「とにかく、こんなとこに居てもしょうがないし、とりあえず行こ？」

「うん、そうだね」

いつもはどこか頼りない感じのあるハルカだが、この日ばかりは頼もしかった。

ハルカの言葉に後押しされる形で、ダンジョンへと向かうのだった。

十日間通い続け、すっかり慣れた道を歩く。初めこそ、マップを見ながらも迷っていたが、今では逆にマップを見なくても進む事が出来る。そして 同じく見慣れたいつもの場所へと辿り着く。

アルメリアダンジョン地下一層。

「今日こそ出すわよ！」

「うん！」

わざと大きめの声を出し、不安を掻き消すソレル。それに会わせるかの様に、ハルカの返事も力強いものだった。

ダンジョンを奥へと進み、モンスターと遭遇する。まだまだ完璧とはいえないが、ラシルに教わった戦闘方法のおかげで、随分と自身が受けるダメージが減った。一体程度ならば、ダメージを受ける事が珍しい程だ。

初めの頃に、思うように戦えずすぐに引き返していた事が、今では懐かしかった。

手早くモンスターを倒すと、更に奥へと進んでいく。途中出会うモンスターを一体、また一体と、順調に倒していく。

十日間で、ずっと戦闘を繰り返していた事からレベルが上がった事もあるが、それ以上に、ソレルとハルカのプレイヤースキルの上達が大きい。

とはいえ、モンスターに集団で出てこられると、やはり、どうにもならない。

順調に しかし、時にモンスターに囲まれ苦戦を強いられながらも、モンスターを倒していく二人。

それでも、目的のアイテムは出る事は無く、時間は刻一刻と過ぎていくのだった。

「全然出ないわね。確率ってどれぐらいなの？」

「0・1%って昨日ラシル君が言ってたよ」

アルメリアの道具屋前。ハルカの矢の補充に戻ってきた二人は、そんな会話をしていた。

「0・1%か。ってことは千体倒せばいい訳ね」

「えっと。そんな単純なものじゃない気がするけど。・・・」

ハルカの言う様に、そんな単純なものではない。千体のモンスターを倒して、0・1%の確立で手に入るアイテムが確実に手に入るなら、このゲームからレアアイテムという存在はなくなるだろう。

勿論、そんな事はソレルもわかってる。だが、それでも考えないと、最早手に入る気はしないのだった。

「因みに、今何体ぐらい倒したの？」

「えっと。・・・300体ぐらいじゃないかな？」

ハルカが手元にあるモンスターからのドロップアイテムから、大まかな討伐数を数える。

「うう。・・・やっぱり無理な気がしてきた。・・・」

現在、時刻は午後五時。昼から始めて、この数だ。残りの時間を考えると、千体のモンスター。それもアーマーナイトのみを倒すのは無理だろう。そう思うと、ますます意気消沈するソレルだった。「もう、そんな事言ってるなら、とりあえず行っただ方がいいよ？」「なんか、アンタのプレイスタイルが段々神代に似てきた気がするわ。・・・」

「時間に余裕がないからだよ」

そう言っ、ハルカが先に歩き出す。このまま口で言っても仕方ないと判断したためだ。

「あ、待ってよハルカ！」

ソレルも慌ててハルカの後を追うのだった。

探索を再開してからも、成果は相変わらずだった。一時間、二時

間と過ぎても、一向に『ルーンソード』が出る気配は無い。

途中、夕食と風呂挟みながらも、それ以外はずっとダンジョンで過ごす。

気付けば、時刻は十一時半を過ぎていた。ここまでくると、アーマーナイト以外のモンスターと戦う事すら煩わしい。

「流石にもうダメな気がしてきた・・・」

慣れない長時間プレイに、疲れ果てた様子でソレルが口を開く。それはハルカも同じ様で、最早、ソレルをフォローする元気も無い様だ。

あと一体　アーマーナイトを倒す度に、そう思いながら、騙し騙しでゲームを続ける二人。

そして、ついに時刻は十一時五十分を指す。それと同時に、アーマーナイトが現れた。

「ハルカ、ちよつと賭けをしない？」

アーマーナイトを目の前にして、ソレルが口を開く。ハルカは、彼女の言いたい事がわからず、続きの言葉を待つ事にする。

「もう時間も無いし、コイツで出なかった試験はすっぱり諦める。どう？」

ソレルの言葉を否定しようとするハルカ。だが、言葉は出ない。残り時間は十分。これだけあれば、あと一体か二体は倒せるだろう。だが、それで出るとも思えない。だからこそ、ソレルお提案を否定する言葉が出てこないのだ。

それに、これはソレルの試験だ。ハルカはあくまで手伝いでしかない。それなら、引き際は彼女にまかせよう。そう思ったのだった。「うん、いいよ」

ハルカがそう答えると同時に、戦闘が開始される。

昼からずっと続け、すっかり疲れ果てたはずなのに、これで最後と決めると、不思議と今まで通りに動けた。いや、今までよりも調子がいいかもしれない。

攻撃を繰り返し、モンスターの攻撃を避け、更に攻撃に転ずる。

ハルカも、モンスターの動きに合わせながら、上手く軸をずらし、確実に矢を当てていく。

難なく、戦闘は終了する。ソレルは早速、自身が獲得したアイテムを確認してみる。だが、何度見返しても、そこに『ルーンソード』の表記は無かった。

「やつは無理だったか・・・。ハルカは？」

念のためにハルカにも聞いてみる。勿論期待などしていない。

「あつた。出たよ！」

「え・・・？」

あまりにも予想とは違う反応が返ってきた為、ハルカの言っている事が一瞬理解出来ないソレル。

すると、不意に取引要請が出される。それを承諾し、ハルカの出すアイテムを見てみると、そこには確かにルーンソードがあつた。

「ほら、咲希。早く受け取つて。急いで溜まり場に戻らないと！」

ハルカの言葉で、漸くアイテムを受け取らないといけない事に付き、早速『ルーンソード』を受け取る。あとは、溜まり場に帰つて、手に入れた証拠としてメンバーに見せれば試験は官僚だ。

「目的のアイテム、やつと出ました！」

大急ぎで帰路に着きながら、ハルカがギルドチャットで報告する。  
「もう十分ないよ。急いで戻つてきな」

それにエルナが答える。

溜まり場には全員が揃っていた。試験の最終日ということで、ソレルがアイテムを持つてくるのを皆が待っていたのだ。

「ちよつと時間が微妙かも・・・」

「これでアウトはシャレにならないよな」

そんな事を言いながら、ソレルとハルカの帰りを待つ。だが、少し変化が起きていた。皆がソレルとハルカに注目している為、誰も気付いていなかったが、確かな変化があつた。

「はあ、過保護なこと・・・」

それに気付いたエルナが、一人そう呟いた。

ソレルとハルカがダンジョンから出た頃には、残り時間は五分を切っていた。だが、まだ道のりは長い。森を抜け、アルメリアのギルドに行き、ライラックに転送されてから漸く溜まり場を目指せるのだ。時間がギリギリ いや、足りないくらいだ。

森の中を、アルメリアに向かい進んでいく。途中に出会うモンスターは全て無視だ。戦闘をしている余裕などない。

道のりの半分位まで来たところで、見知ったキャラクターを発見する。

「ラシル！アンタなんでこんなところに？」

そこに居たのは、先ほどまで溜まり場に居たはずのラシルだった。「ちよつとアルメリアに用事があつてな」

そう言いながら、魔法の詠唱を開始する。『トランスゲート』の魔法だ。

「帰るついでにお前らも送ってやるよ」

「でも・・・いいの？」

『トランスゲート』を前にして、ハルカは少し戸惑い気味だった。ラシルの手伝いは既に終了している。なのに、溜まり場へと戻る事に協力してもらっているのか、判断がつかないのだった。

「言つとくけど、手伝いじゃないぞ。たまたま見つけたからついでに奥ってやるんだからな！」

ハルカの意図を汲み取り、そう答えるラシル。あくまで手伝いではなくついでということを強調していた。

「早くしろつて。消えるから」

二人の後を押す様に言うラシル。そして、意を決した様に、ソレルとハルカは『トランスゲート』へと飛び込むのだった。

二人が出た場所は、ライラックの街の北側の通路だった。溜まり場まで、それ程距離もない。街中を一気に駆け抜ける。

溜まり場に戻ると、挨拶もそこそこに、エルナへと駆け寄る。そして、取引要請。

エルナが承諾すると同時に、試験の課題であった『ルーンソード』を差し出す。

「これでいいですか？」

「うん・・・合格！」

これで無事、試験はクリアとなった。同時に、ソレルは正式に『空の円舞曲』の一員となる。

「最後のラシルの反則がちょっと気になったけどね」

「さあて、なんのことやら」

エルナの冗談交じりの言葉に、いつの間にか戻ったラシルが惚けてみせる。だが、エルナはそれ以上追求してくる事は無かった。ラシルもそれが分かっているのか、必要以上に惚ける気も無いようだ。こうして、十日に及ぶソレルの入団試験は、無事幕を閉じるのだった。



## Chapter 2 - 4 (後書き)

ラシル(以下ラ)「ども、お久しぶりです」

ハルカ(以下ハ)「すっかり遅くなっちゃってごめんなさい」

ラ「予想以上に時間がかかったよ・・・」

ハ「ワードのページ数がいつもの倍ですもんねえ」

ラ「おかげで、今月あと2話アップする予定だったのが無理になっ  
たな」

ハ「でも今年最後に2話が終了でキリがいいじゃないですか」

ラ「まあ、そう考えれば確かにいいかもな」

ハ「作者みたいに基本後ろ向きじゃダメですよ」

ラ「それもそうだな。それじゃあ、今日はゲストも居ないしまった  
りするか」

リシュリー(以下リ)「ってゲストを無視しないの！しかもそれま  
での会話と繋がってないし」

ラ「ちっ・・・やっぱ今回も居たか」(ボソ

リ「聞こえてるわよ」(汗

ハ「そんな訳で今回のゲストはリシュリーさんです」

リ「空の円舞曲のサブマスターのリシュリーです」

ラ「例によって性格は変わりまくりです」

リ「細かい事は気にしない！」

ハ「それじゃあ、毎度の如く本編を振り返ってみましょうか」

リ「やつとまともな出番なのに、私の出番は少ないわよね・・・」

ラ「いや、アルタスとウイシュナに比べたらまだマシだろ？」

ハ「私なんか毎回居るのに完全に空気ですよ」(泣

ラ&リ「・・・」(汗

リ「ほ、本編って言えば、今回は随分手抜きよね？ダンジョンに居  
るシーンしかないし、文章もアレだし」

ラ「それは、長くなりすぎるからカットした結果と、同じ様なシー

ンで作者がダレた結果らしい」

ハ「因みに、まともに書くと、これの倍ぐらいは余裕でいけるらしいですよ」

リ「ちゃんと計画して書かないから・・・」(汗)

ラ「完全に読み間違いだな」

ハ「しかも今回のテーマは私達メイン以外のキャラの戦闘シーンの露出らしいので、ダンジョンのシーンを抜く訳にもいきませんしね」

ラ「あと、毎回4話縛りにしてるのも原因だな」

リ「これからも絶対に予想外に長くなるよね・・・」(汗)

ハ「あ、でも今月は結構忙しかったのもあるみたいですし、多少長くなっても、意外と今までぐらいのペースでアップ出切るかも・・・」

「  
ラ「忙しい理由も忘年会だしな」

リ「休みに一気に書くってスタイルをどうにかすれば大丈夫かもね」

ハ「フォローできない」(汗)

ラ「そんな訳で、次回以降もかなり遅れたりする可能性大な訳だけど」

リ「気長に待ってやってくださいませ。ではまた次回に」

ハ「私のセリフ残ってない！」(泣)

## Chapter 3 - 1

「んー 終わったー！」

私立星想学園2・Bの教室。HRの終了と同時に、咲希はその声をあげていた。

「お疲れさま」

「ったく、大袈裟なヤツめ」

遥歌と樹が声を掛けながら　そして、その後に続くように、湊斗が咲希の席へと集まる。すっかりお馴染みとなった四人組が集合となった。

七月初頭。一週間に及ぶ学期末テストの最終日がこの日だった。いつもの顔ぶれで、いつもの様に帰路に着く。

「テストも終わったし、夏休みが楽しみだね」

「気早すぎだつての」

咲希の言葉に、呆れたように返す樹。

夏休みまでは、まだ二週間ほどある。確かに少し気が早いといえるだろう。

しかし、テストも終わり、一学期中の大きなイベントは残っていない。咲希の興味が夏休みへといくのは無理からぬ事だろう。

「確かに。でも早くきてほしいよね」

樹の言葉に頷きながらも、咲希をフォローするかの様に、湊斗は彼女に同意する。

「そつえば、皆は夏休みは何か予定あるの？」

遥歌が、更に気の早い質問をする。普段なら、誰かが指摘しそうなものだが、既に夏休み気分な、咲希と湊斗は勿論、先ほど指摘をしていた樹さえも、指摘する事は無かった。むしろ、予定を考えている辺り、樹もまた、今から夏休みは楽しみなのだろう。

「　ウチはいつも通り何もなし・・・かな？」

去年までの事を思い出しながら、そう答える樹。

樹の両親は、共働きである。勿論、それは、樹が夏休みに入ったところで変わるわけではない。とはいえ、盆の時期ともなると、会社は休みになるようで、二人とも数日の休暇となる。

この期間を利用して家族旅行でも　という案が出たことが無い訳ではない。だが、両親が普段多忙なのを知っている樹は、折角の休みに、わざわざ疲れに行く事も無いとこの申し出を断っているのだった。

尤も、どこに行っても人の多そうな時期に旅行になど行きたくないという思惑もある為、素直に両親のことを考えてとも言い難いのだが・・・。

「ウチは母さんの実家に帰省するぐらいかな」

「今年も行くんだな」

「うん、毎年のことだしね」

樹は去年に、湊斗を誘った時に、そうこのことを言われたのを思い出していた。

一方湊斗は、嫌気や諦めといった様子はなく、むしろ嬉しそうにも見える。大抵の場合は、親戚の家や、両親の帰省となると、退屈という印象が強いが、どうやら湊斗には適用されないようだ。

「で、そういうお前らはどうなんだ？」

「私は、今年も遥歌のそこにお世話になる予定」

樹の問いに、咲希が答える。

「楠木さんのウチにお泊り？」

すかさず、湊斗が話しに乗ってくる。

「ううん。ウチ、毎年旅行に行ってるんだけど、その時に咲希も誘って一緒に行ってるの」

遥歌は咲希と仲良くなつて以来、家族との会話の中でも、咲希の名前を出す事が多かった。そして、それを見た遥歌の両親は、毎年行く夏の旅行に咲希を招待したのが始まりだった。それ以降、楠木家の夏の旅行には、毎年咲希を加えて行っているのであった。

こうして、夏休みの話題で盛り上がっている内に、交差点へと差

し掛かる。この四人が別れる場所がここだった。

「それじゃあ、ここまでだな」

そう言っ、それぞれがそれぞれの言葉で挨拶を交わし、解散となる。これもいつもの光景だ。

四人で盛り上がり過ぎていた時間は呆気なく終わりを迎え、一行はそのまま解散となった。

樹が家に帰ると、そこには誰も居なかった。といっても、特別珍しい事ではない。職場で働く両親と、学生の樹では、どうしても学生である樹の帰宅時間の方が早くなる。しかも、今はテストの為、半日で学校が終わるのだから尚更だ。

部屋に荷物を置き、台所へと向かう。だが、昼食が用意されている訳ではない。尤も、この状況も樹が望んで出来た状況なのだが。

樹自身、料理は嫌いでは無い。その為、昼に冷めてしまった料理を食べるなら、自分で作ると言っているのだ。尤も、そのレパートリーはかなり少ないのが本人の悩みの種にもなっているのだが。今も、冷蔵庫を眺めながら“なにを作るか”ではなく“何が作れるか”と思案中だ。

「こりゃ、夏休みまでにちよつとレシピ増やさないとな・・・」

呆れたようにそう呟きながら、冷蔵庫の中身を物色していく。そうやら、今日のメニューは決まったらしい。

これまで週に一回、テスト期間になってからはずっとやってきたおかげか、手際良く準備を進めていく。次々と調理をしていき、二十分も経った頃には昼食は完成していた。

昼食を終え、自室のパソコンの前で過ごす。だが、ファンタジアンイツは起動していない。モニターに写っているのは、普段、樹がよく観覧しているウェブサイトだった。

部屋に戻ってしばらく経ち、時間は昼の1時半といったところだろうか。樹が眺めていたウェブサイトも見終わり、大きく伸びをした時だった。突然、部屋のドアが開かれる。

樹以外、誰も居ないはずの家でこんなことが起きれば驚きそうなものだが、そんな様子もなく、開かれたドアを一瞥する。

「よう、おつかれ」

樹の予想通りの者が立っている事を確認すると、一言そう声を掛けるのだった。

「うん、お邪魔するよ」

そう言つて、この訪問者　橘　湊斗は部屋と入ってくる」

「玄関は鍵かけといていいんだよね？」

「ああ、おっけー」

湊斗の様な、親しい友人が来る場合は、大抵はこの様な具合になるのだった。尤も、それは樹の指示によるものなのだが。

日曜でも無い限り、この家に樹以外の者がいることはまずない。そんな状態で遠慮することはないということと、なにより、わざわざ玄関まで降りて行き、応対するのが面倒だという理由で、こうしている。

湊斗も、初めこそ戸惑っていたものの、今となつては、この様に全く遠慮なく　更には、玄関の施錠までしてくるといった気遣いまで見て取れる程となっていた。

「で、掲示板だっけ？」

「うん」

今回の湊斗の訪問は、突然というわけではない。遥歌と咲希の二人と別れた後、約束していたのだった。だからこそ、ファンタジアンイツを起動する事もなく、ウェブサイトを観覧していたのだった。湊斗の用件を確認すると、樹はブックマークから一つのサイトを選択する。そして、ファンタジアンイツを扱ったサイトが表示される。

このサイトはファンタジアンイツの情報を扱う　所謂、攻略サイトだ。湊斗に勧められ、このサイトをブックマークしている樹だが、このサイトを利用することはほとんどない。

情報量は豊富で、早くて正確　まさに優良な攻略サイトといえ

るだろう。だが、樹がこのサイトに訪れる事はあまり無い。

優良サイト。そう言われて否定する者はまず居ないだろう。それは、あまり利用する事の無い樹も認めるところだ。情報量が豊富で早くて正確。だが、それと同時にサイトそのものが見辛いという欠点も備えていた。その為、樹は別のサイトを利用することがほとんどで、このサイトを利用することは滅多にないのだった。

逆に湊斗はこのサイトをよく利用している。やはり、新着の情報となると、ここに敵う所は無い。尤も、既出の情報なら樹と同様の理由から他サイトを利用しているが。

しかし、湊斗にとって、このサイトの真価とは、情報ではない。彼にとって、このサイトの真価は掲示板にあると考えていた。

サイトの構成はどうであれ、ファンタジアナイツの攻略サイトではまさに大手サイトといえるだろう。そして、それは訪問者が多いということでもある。

人が多ければそれだけ、掲示板への書き込みも増える。そして、それは攻略には関係ない様な情報も集められるということの意味する。湊斗は、それを目的にこのサイトへとよく訪れるのだった。

「貸して」

そう言つて、マウスを受け取ると、『掲示板』とかかれた文字をクリックする。そして、スレッドのタイトルが並んだページが表示される。

「えっと、確かこの辺に・・・」

そう呟きながら、目的の書き込みを探す湊斗。

大手サイトだけあり、書き込みの量もなかなかのものだ。目的の書き込みを発見したのが前日の夜。それも寝る前だということにも関わらず、随分と流されてしまった様だ。

画面をスクロールさせていき、ついには1ページ目の最後まで来てしまう。ここまで来ても、まだ目的のスレッドは見つからない。前日に湊斗が発見した時点では、まだ上の方にタイトルがあったことから、書き込みの多さが窺える。

「あ、あつた！」

2ページ目に移り、漸く目的の物を発見する。

樹もタイトルを見てみる。そこには、『噂の問題児発見』というタイトルで書き込みがされていた。だが、そこからはなんのことは全く想像がつかない。

「まあ、見てみてよ」

そう言つて、湊斗がページを開く。

段々とページが表示されていき、樹は最初の書き込みを早速読んでみる。

始めこそ、全く関心のなかった樹だが、書き込みを見た瞬間、一気に関心が高まる。それもそのはずだ。そこには、自身が立ち上げたギルドの名が記されていたのだった。

書き込みの内容はこうだ。樹達のギルドのメンバーの内の一人が、活動を自粛しているにも関わらず、ログインをしていた。既に活動を再開している可能性もある。ギルドのサイトでは活動再開の報告は確認されていない。このような状態でゲームを再開する様なヤツらはさっさと引退すべき。

と、まさに樹達に悪意しかない書き込みだった。そして、最後には証拠とばかりにスクリーンショットを載せていた。しかも、問題のプレイヤーの名前もしっかりと確認出切るようにしてだ。

その後も数回に渡り、スクリーンショットのみの書き込みをしたところで、漸く、他の観覧車からの返信となっていた。

「なあ、これつてウチと関係ないだろ・・・」

とりあえず、投稿者の書き込みだけを見て出た樹の感想だ。

「あ、やつぱわかった？」

「当たり前だつての」

始めこそ、関心をもてた樹だったが、スクリーンショットを見た瞬間に、その関心は一気に消え失せてしまった。

まずは名前。一見すると本人の様だが、最後に小さく『・(ドット)』の文字が付いていた。ファンタジアナイツでは、既に使われ



た名前は使用出来ない。これだけでも、最早別人だと言っている様なものだ。

更には、ギルドにも所属していない。ギルドに所属していれば、所属するギルドの名前も表示されるのだが、このスクリーンショットにはそれがない。こんな状態で自身のギルドのメンバーだとどんなに言い張ったところで、何も知らない第三者からすれば信じると言う方が無理な話だ。

極めつけは見た目だ。

髪型、髪の色、クラスと全て一緒にはなっている。だが、それだけだ。キャラクターのグラフィックに適用される一部のアイテムはまるつきり違う物となっている。これでは、知らない者しか騙せない。

これだけの要素を揃えていて、知り合い　それも自身のギルドのメンバーの事で騙されるという方が無理な相談だ。

勿論、湊斗もそれはわかっていた。実際、湊斗にとってこの書き込みの内容自体はさほど重要ではなかった。むしろ、重要なのはこの書き込みに対する返信の方だった。

「とりあえず、返信を<sup>レス</sup>読んでみてよ」

湊斗に促され、返信の方を読み始める樹。始めこそ普通に読んでいたが、量の多さから、次第に斜め読みで一氣に読みきってしまう。だが、それでも湊斗の意図を汲み取るには十分だった。

「なるほど、本題はこっちか・・・」

「正解」

書き込みの返信は、明らかにおかしい点があることへの指摘ばかりだった。初めの内は。だが、この投稿者に賛同する書き込みが出てきた途端に、スレッドの雰囲気は一変する。

同じく賛同する者、それを煽る者、それらに反論する者、無関心を装う者……。返信を見るまでは、ただのネタ投稿だと思っていただけに、これには驚きを隠せない樹だった。

だが、樹が驚いたのは、それだけが原因ではない。様々な書き込

みがあるにも関わらず、どれ一つとして樹達を擁護している様な書き込みはないのだった。

反論をしている者達も『ただのネタでしかない書き込みに賛同している事』に対して反論しているだけで、決して樹達の味方をしている訳ではないのだ。

樹達が休止をしてから、そろそろ5ヶ月が経とうとしていた。にも関わらず、自分達のギルドの名前が出るとこれほどの騒ぎとなることは、樹にとって　そして、湊斗にとっても意外だった。

「こりゃ、復帰はもうしばらくかかりそうだな・・・」

「だねえ・・・」

二人でそう溜息を吐くのだった。

「あ、そういえば！」

少し暗くなつた雰囲気を変えるためか、明るくそう言いながら、鞆の中を漁り始める。

「これ、確かやりたがつてたよね？」

そう言つて取り出したのは、1本のRPGのソフトだった。1週間ほど前に発売されたばかりのソフトで、これまでのシリーズをプレイしてきた樹にとってずっと注目していたソフトでもあった。

結局、購入は見送りとなつたのだが、現在最も注目しているソフトの一つは間違いなくこれだと言えるだろう。

「お、やるやる！」

先ほどの暗い空気はすっかり無くなり　いや、無くしたと言つた方が正しいだろう。暗くなつたところでどうしようもない。その事を理解している二人は、少し大袈裟なぐらいに明るく振舞つたのだ。

樹は、ゲーム機の準備をし、湊斗にコントローラーを渡す。

「ありがと・・・ってなんで僕が1P側なの？」

コントローラーを受け取り、コードを辿って行くと、行き着いた先は1P側の接続端子だった。

因みに樹は2P側のコントローラーを持っている。RPGとは言

つても、戦闘だけなら複数人でプレイが可能となっている。その為、自身も参加するつもりなのだろう。

「オレ、データないし。橘のデータでやるんじゃない？メモリーカード入ってたし」

あっけらかんと答える樹。湊斗としては、新規のデータで始めるつもりだったので、少し困惑気味だった。

「いや、ネタバレとかあるし・・・」

「ああ、オレその辺はあんま気にしねえから」

「そういえば、そういう性格だったよね・・・」

苦笑しながら、しかし、どこか感心したような口調で答える湊斗。新規データは諦めて、素直に自身のデータをロードし、ゲームを始める事にした。

一時間程が過ぎただろうか。着々とイベントをこなして行き、ゲームを進めていく二人。ボスモンスターを撃破し、一息ついたところで湊斗の手が止まる。

「やっぱり気になる」

「どうしたんだよ、いきなり」

突然の言葉に、思わず聞き返す樹。なにか気にあるような場所でもあっただろうか？思い返してみると、特に怪しい所はなかったと、いうよりはそれらしい場所は湊斗が既に調べていた。なら、他にないかないだろうかと考え、あることに気付く。

掲示板。

明るく振舞い、ゲームで気を紛らわせたところで、やはり気になるのではないだろうか？そんな考えに辿り着く。

正直、樹自身も気にならないといえば嘘になる。周囲の反応をあまり気にする事のない樹がそうなのだ。湊斗が気にしていても不思議ではない。

「神代、やっぱりネタバレ気になるから交代！」

「・・・へ？」

想像していた事と、全く違う言葉が出てきた為、湊斗の言ってい

る言葉の意味が理解できずに間抜けな返事を返してしまう。

「神代が気にしなくても僕が気になるから交代して」

「あ、ああ。って一人でやってるのもな〜・・・」

「すぐ仲間は増えるし気にしなくていいよ」

「・・・そうか？それなら」

心配は杞憂だったせいかな、どつと疲れが押し寄せる。そのせいか、断るのも面倒だったにで、湊斗の提案を受け入れ、コントローラーを交換する。

「そういえばさ・・・」

「ん？」

ゲーム序盤のイベントを眺めながら、湊斗が口を開く。

「あの書き込みどうしよう？」

「ん〜・・・とりあえず放置でいいんじゃないか？」

少し考え、そう答える。

「こつちになんかあれば対応ってぐらいでいいだろ？」

「・・・それもそうだね」

樹の提案に、少し考えた末同意する。二人とも、大々的に動きたい訳でもなければ騒ぎを大きくしたい訳でもない。その為、二人にとってはこの程度の対応で丁度いいぐらいなのだった。

「それじゃあ、他の皆にも伝えとくね」

「ああ、頼む」

この短いやり取りでこの問題は解決となった。

その後、この話題は出る事無くそのままゲームを進めていくこととなった。気付けば、樹の両親が帰ってくる様な時間になり、湊斗をそのまま 半ば強制的に 夕食に招待し、その後帰路へと着くのだった。

「神代、そっち行っただよ！」

インカムから声が聞こえる。声の主はクラスメイトの綾瀬咲希だ。ぼーっと考え事をしていた樹はその声で我に変える。そして、モ

ニターを見ると、自身の操るキャラクター『ラシル』が敵の攻撃に晒されようとしているところだった。

咄嗟に回避行動を取ろうとするが間に合わない。攻撃を2発受けることとなり、ラシルのHPはごっそりと削られる。かろうじて生きている。まさにそんな状態だ。

一旦距離を取り、ある程度回復させると、今度はモンスターへと攻撃を開始する。普通に戦えば、苦戦するような事は無い。それを証明するかのように敵を圧倒する。そして、モンスターを倒し、小さく溜息をつくのだった。

「神代君、大丈夫？」

同じく、クラスメイトの楠木遥歌の声が聞こえてくる。

咲希の操るキャラクター『ソレル』が空の円舞曲<sup>ワルツ</sup>に入団してからは、よくこの三人でパーティーを組んでいるのだった。

因みに、普段は互いにハンドルネームで呼び合っているのだが、樹の調子がおかしい為、わざと苗字で呼びかけていた。

「さっきからずっとそんな調子じゃない」

「ああ・・・わりい」

二人に、歯切れ悪く返事をする樹。

湊斗が帰った後、いつもの様にファンタジアナイトにログインしていた。そして、やはりいつもの様に、遥歌と咲希の二人とダンジョンに来ているのだが、今ひとつ集中出来ないでいた。

先ほどのように、ぼーっとしている事も多く、戦闘もそれほど積極的に参加している訳ではない。周囲からしてみれば何かあったとは思えないだろう。

「・・・わりい、今日はもうやめとくわ」

樹はそう言うと、街に戻る事も無くそのままログアウトする。そのままパソコンの電源も切ってしまい、ベッドへと倒れこむ。

考えるのは、昼間の掲示板のこと。

あの書き込みや、そこでの盛り上がりに関してはそれほど気にしてはいない。むしろ、気になっているのはギルドの復帰の時期だ。

今のギルドに不満がある訳ではない。むしろ楽しい。だが、それでもやはり、ギルドの活動再開を願わずにはいられない。

夏休みまで、あと二週間ほど。時期的にも、期間的に復帰にはちよいどいいのではないかと考えていた。だが、今回の騒動を見る限りでは、もう少し様子見をした方がいい様にも思えた。

樹や湊斗だけならば、それほど気にする様なことでもない。だが、友人達を巻き込むとなるならそうはいかない。

ファンタジアナイツでの自分の居場所。楽しい　楽しかった場所。ただそれを取り戻そうとしているだけなのだが、こつも上手く行かないと最早溜息しか出なかった。

もどかしさはあるが、焦りは無い。こればかりは時間が解決するのを待つしかない。樹は勿論、湊斗も、そして　他のギルドのメンバー達もわかってるのだろう。だからこそ、誰も何も言っていないのだ。

「考えてもしようがないのは分かってるんだけどな・・・」

一人、そう呟く。そして、そのまま目を瞑る。

何も考えないようにしようとすればするほど、様々な事が頭の中が駆け回る。それでもなお、頭の中を空っぽにしようとする。そうする内に、いつしか樹は眠りに付くのだった。

### Chapter 3 - 1 (後書き)

エルナ（以下エ）「今回も随分遅くなったね。丸一ヶ月近く経ってるよ」

ハルカ（以下ハ）「またトラブってたみたいですよ」

エ「新年会のしすぎとかじゃなくて？」

ハ「新年会はやってないみたいですよ。えっと、資料によるとですね・・・考えてた話はあったけど、これを1話目に持って来ると確実に4話まで引つ張れない内容だったみたいですね」

エ「へえ。それで？」

ハ「なので、新しく考えてたみたいなのですが全然思いつかなくてこんなに遅くなったみたいですよ」

エ「だからページ数も少ないのか」

ラシル（以下ラ）「いつまで言い訳してんだ!？」

ハ「あ、ラシル君。どこ行ってたんですか？」

ラ「どこもなにも『今日はラシル君がゲストだから舞台袖で待ってね』って紙があったからずっと待ってたんだよ」

エ「あ、それ私が適当に書いたヤツだ。まさか信じるとは思って無かったよ」

ラ「ちよっ！犯人アンタか。ってかこの文章をマスターが書いたと思うと・・・キモっ!」

エ「キモイゆーな!」

ハ「ははは・・・（苦笑）ところでマスターはなぜここに？」

エ「あ、そうそう。なぜか私の所に新企画の計画書が届いたから届けに来たんだった」

ラ「で、新企画って？」

エ「キャラ紹介みたいだね」

ハ「そういえば、してませんでしたね。ページもないですし」  
ラ「丁度いいし早速やるか」

ハ「ページを作ってそっちでって気はないんですね」(汗

エ「今やると中途半端な所にリンク出来るから却下」

ハ「編集で入れ替えていけば問題ない気が・・・」

ラ「めんどいからパス」

エ「つてなわけでキャラ紹介第1弾は主人公のラシルで」

ラ「オレか。なんか自分で言うのも恥ずいし二人に任せろわ」

エ「元々は、とあるギルドのマスターをしていたんだったね」

ハ「今は休止中でセカンドキャラクターを使ってるんだったよね」

エ「性格はかなりの面倒くさがり屋で、二言目には面倒って出てるぐらいの筋金入り」

ラ「いや、そうでもない気が・・・」

ハ「でも、面倒見はいいですよ」

エ「あと、昔に師匠ともいうべきプレイヤーが居て、高いプレイヤースキルはその人の教えのおかげみたいだね」

ハ「リアルでは、極々普通の17歳の少年です。因みに私の同級生です」

エ「リアルでの性格はどうなんだい？」

ハ「ネットそのままですよ」

ラ「まあ、特別ロールしてるわけでも無いしな」

エ「じゃあ、大体こんな感じだね」

ハ「わかったようなわかりにくいような・・・」(汗

ラ「ちゃんとしたのは全部書き上がった後にでも作者に書かせるしかないな」

エ「そんな訳で今回はこの辺で」

三人「また次回もよろしく」



## Chapter 3 - 2

夏休みに入り間もない頃。綾瀬咲希こと、ソレルのこの一言が全ての始まりとなった。

「そういえば、もう夏休みですけどマスター達っていつまで来れるんですか？」

ゲームのログインの事だ。

いくら日頃から勉強をし、成績に余裕があると言っても、そろそろ受験勉強に本腰を入れねばならない時期だろう。それにも関わらず、まだエルナとリシュリーからは、そういった話を聞くことはなかった。

「とりあえず夏休みいっぱいログインするつもりだよ」

「回数は随分減ると思うけどね」

エルナの答えに付け足す様に、リシュリーも答える。

エルナとリシュリーの休止。いつか来るであろうとは考えていたが、それはもつと先の事のようにも思っていた。だが、明確な期限を聞いてしまうと、それは一気に現実味を帯びてくる。

それは、他のメンバー達も同じなのだろう。ギルドの溜まり場はしんと静まり返り、街の明るいBGMだけが聞こえてくる。

「今から湿っぽいのはなし！」

「そうそう、まだ先の事なんだし」

暗くなつた雰囲気を払拭するかの様に、明るくそう言うエルナとリシュリー。

「あ、そうだ。折角の夏休みだし、みんなで何かしない？」

二人に釣られる様に、明るくそう提案するソレル。

二人が休止するまでに。そう出そうになるが、そこはこらえる。言ってしまうば、また暗い雰囲気に逆戻りだ。

ソレルの提案は、どうやら皆が賛成のようだ。二人がファンタジアナイトから離れる前に、ギルドのメンバーで何かしたい。そうい

う気持ちは、皆同じ様だ。

「それで、何かいい案でもあんの？」

ラシルだ。

この問い掛けに答えられる者はいない。

何かをする。言ってしまうのは簡単だが、何をするにしても、ゲーム上では限界がある。目新しい様なことなどすぐに思い浮かぶはずもなく、何をするにしても今までしてきた様な事ばかりが浮かんでくる。全員が考え込み、再び沈黙が訪れる。

新たな沈黙を起こした事に責任を感じ、何か言おうとするラシルだが、何も浮かばないのはラシルも同じ。浮かぶ事といえば、ギルドのメンバーでダンジョンに行くギルド狩りくらいだ。普段からしていることだけに、この場で言うのは違う気がし、結局黙り込んだままだった。

「オフ会・・・とか・・・」

今にも消え入りそうな それこそ、この様な状態でなければ間違いない誰にも気付かれなかったであろう程の小声でハル力が提案する。そして、この一言で、またもやこの場の空気は一変する。

「・・・って無理ですよ。みんなどこに住んでるのかもわからないし」

そんな様子を感じ取ってか、ハル力は慌てて否定する。

「ハル力、それだ！」

「たしかみんなウチの隣の県だったと思うし、無茶ではないな」

だが、そんなハル力の様子とは逆に、エルナとラシルはまんざらでもない様子だ。いや、この二人だけではない。他のメンバーも同様だ。

「場所はラシルの地元なら丁度いいぐらいだね」

「それなら、寝床はウチが提供ってことで」

「どうせなら海行こうぜ、海」

「平日なら人も多くなさそうだし、いいんじゃないかな？」

「いつぐらいがいかな？」

することが決まり、早速それぞれが意見を出していく。だが、そんな様子を傍目に、ハルカとソレルの二人はすっかり置いてけぼり状態だ。ネットワーク上での人付き合いなど、ファンタジアナイツを除けば皆無といっているだろう。そんな二人に、この話題に入っていく事は難しかった。

更に言うならば、ハルカの口からオフ会という言葉が出たことから奇跡と言っているくらいだろう。

「お前らも希望出さないと、全部決められちゃうぞ」

そんな二人の状況に気付き、声を掛けるラシル。それで、なんとか輪に入るが、やはり話に付いて行くのは難しい。

結局、この日は皆がログアウトするまでオフ会の話題で盛り上がったままだった。だが、その甲斐あってか、この日の内に無事詳細を決める事が出来たのだった。

因みにハルカとソレルはというと、なんとか開催日の希望は出ず事が出来たものの、それ以外はほとんど意見を出せる事もなく、終始聞き手に回っていたのだった。

8月初頭。

砂浜と道路を隔てる堤防の側にその姿はあった。樹、遥歌、咲希。普段はよく一緒にいる顔ぶれだが、湊斗が居ないという状況はなんと珍しい。だが、それもそのはずだ。この日はオフ会の開催日だ。空の円舞曲とは関係を持たない湊斗をこの場に呼べるはずはないのだった。

「今日も暑いよな・・・」

愚痴るように樹が口を開く。

だが、そう言うのも無理は無い。まだ午前中だというのに、気温は既に30度近くにまで達している。昼になる頃には更に温度は上がっている事だろう。まさに真夏日と言える。

「ホントだね。でも海に入るなら丁度いいかも」

樹の言葉に遥歌も同意する。

「こつちの方に来るのも久しぶりよね」

「地元で大体は事足りるしな」

ここは樹達の地元と言うわけではなく、隣町だ。樹達の地元には海が無いため、海水浴に来るならここが一番の近場となる。

隣町とはいえ、樹達にとってここはあまり縁のある場所ではない。街の規模はどちらも同程度な為か、こうしたイベントでも無い限り、ここまで足を伸ばす事はないのだった。

尤も、遥歌や咲希はその限りではない。時折、買い物なので、こちらまで足を伸ばす事もある。それでも数ヶ月に一度という程度なのだが。

そんなことを話しながら、樹は携帯電話で時間を確認してみる。時刻は10時まであと数分といったところだ。集合時刻は10時なのだが、未だそれらしい人影は見えてこない。

「まだ誰に来そうにないな」

樹は周囲を見渡しながら言う。

「電車の時間もあるだろうし、少し遅くなるぐらいで考えておいたほうがいいんじゃないかな？」

釣られて周囲を見渡しながら遥歌が答える。

何度見ても、そこに写る景色に変化は無い。変化らしい変化といえば、時折道路を走る車と、地元の学生と思われる同世代程の者達が砂浜に下りていく程度だ。

「そういえば、みんなの顔って知ってんの？」

「私は知らないよ。神代君は？」

咲希の今更なはらの質問に遥歌が答える。そして、その質問は樹へと向けられる。

「オレも知らないけど」

さも当然というかの様に答える樹。

周囲を探してはいたものの、相手の顔などは一切知らないのだった。勿論、今日着ている服装なども知らない。相手の情報は一切なかった。

「それでどうやって合流すんのよ？」

咲希の疑問はもつともだ。待ち合わせとは、互いに相手のことをわかつている状態で始めて成立するものだ。それを、相手の情報が一切なし　それも互いにだ　の状態でというのはあまりにも無理がある。

だが、そんな状況でも樹は全く問題ないと言わんがばかりだ。

「みんな携帯で連絡とれるだろ。それに　」

ここで軽く区切る。

「こんなところで、浜にも下りないで溜まったりわかるだろ」

樹の言う様に、堤防付近で集まっているのは、周囲を見渡しても樹達だけだった。確かに、この様な所で浜辺に下りるわけでもなくただ集まって喋っているだけの三人は目立つ。時期が時期だけに尚更だろう。

そう話していると、一人の少年がこちらに近付いて来ることに気付く。帽子を目深に被り、顔ははつきりと確認出来るわけではないが、少なくとも三人に見覚えがある様子は無い。

尚も少年はこちらへと向かってくる。そして、樹達の側まで来ると、そのまま足を止める。

何かを確認するかのように三人の顔を見つめると、少し考え込む素振りを見せる。そして

「なあ、アンタらもしかして、ラシルとハルカとソレルか？」

そう口を開くのだった。

この少年を見たことが無いのは確かだ。だが、そこから聞こえてきた声は聞き覚えのある　それも聞きなれた声だった。そして、自分達のHNを知っている事からも、樹の中で予想が確信へと変わる。

「お前、アルタスか？」

「当たり前！やっぱりラシル達だった」

ラシルの言葉に、素直に喜びを見せるアルタス。どうやら、雰囲気はゲーム内で会う時とそれほど変わらないようだった。

「もしかして、オレが一番乗り？」

「うん、まだ私達だけだよ」

アルタスが周囲を見回しながら問い掛ける。

現在の時刻は、既に待ち合わせ時間から5分近くが過ぎている。

にも関わらず、未だ誰もこの場には現れていないのだ。アルタスが不思議に思うのも無理は無い。

「てっきり最後だと思ってたよ。時間も過ぎてるしマスターに説教でもされるかと思ったけど、助かった」

「それにしても、ホントみんな遅いわね」

改めて、周囲を見回しながら咲希が口を開く。

アルタスが来たことを除けば、周囲の風景は相変わらず。既に集合時間が過ぎているにも関わらず、連絡は特になし。アルタスが居るとはいえ、自分達はからかわれただけなのではとさえ思えてしまう。

だが、そんな考えもすぐに杞憂へと変わる事となる。

アルタスが来た事が契機となったかの様に10分も経った頃にはギルドのメンバー全員がその場に来ていたのだった。

メンバーも揃ったところで、早速近場の海の家で着替えをする一行。尤も、樹とアルタスの二人は早々に済ませてしまい、今は女性陣を待っているのだが。

「なんで、女ってこうも時間を掛けるかねえ」

「・・・だな」

樹の愚痴にアルタスの同意する。

二人が準備を終え、外へと出てきてから既に10分ほど。未だ出てくる様子は無い。先に出て行くわけにもいかず、こうして外で延々と待つ事になっているのだった。待ち合わせと今とずっと炎天下に居たせい、もう放置しておいてもいいのではないかとすら思えてくる。

「もう先に行っちゃうか。暑いし・・・」

「流石にそれはマズイって」

樹の気持ちもわかるだけに、苦笑するしかないアルタス。  
そう話している内に、漸く女性陣が姿を現す。

「悪い悪い、お待たせ」

「・・・ホントだよ」

「そうふて腐れるなつて。いいモン持つて来たんだからさ」

不機嫌そうな樹を見て、エルナが手に持っていた物を手渡す。ビ  
ーチボールだ。

「ただ泳ぐだけつてのもなんだし、それならちよつとは楽しめるで  
しょ」

そう付け加える。

すでに膨らませてあるところを見る限り、出てくる前に膨らませ  
ていたのだろう。そう考えると、いつまでも不機嫌で居るわけにも  
いない。

「それじゃ、行くか」

だが、態度に出す事はせずに、そう言つて皆を先導するのだった。  
尤も、他のメンバー達も樹の心情は理解している様で、特に気に  
する様子もなく後へと続くのだった。

早速海に入り、軽く泳ぐ。気温が気温だけに、水の冷たさがなん  
とも心地いい。そして、水にも慣れてきた所で、早速ビーチバレー  
が開催されるのだった。

こうして、7人で遊んではいるものの、若干のぎこちなさはある  
が、普段ゲーム上で会う時のように接する事が出来ているのは誰も  
が意外に感じていた。

普段から それこそ、ほぼ毎日というぐらいに会ってはいるも  
の、それはゲームの中での話だ。ボイスチャットで会話をし、メ  
ールのやり取りをしていると言つても、やはり“どこかの誰か”と  
いう意識がなくなる訳ではない。

そんな者達が集まるのだ。ゲーム内で会う時のように振舞えるの  
だろうか？そんな不安はやはりあるのだった。特に、人見知りがあ

り、それを自覚する樹は特にだ。

皆がロール（演技）をしていないこともあったのだろう。実際に会ってみると、それまで心配していた事がバカらしくなるぐらいにいつも通りの面々がそこに居たのだった。そして、1時間も経つころにはぎこちなさもなくなり、すっかりいつも通りとなっていた。

「オレちよつと休憩してくるわ」

海に入ってしまった頃、樹はそう言つて海から上がる。そして、あらかじめ敷いておいたビニールシートへと座り込む。

（しかし、よく盗られないもんだな・・・）

このビニールシートの上には、樹のリュックが置いてあるだけだった。盗られて困る様な物も入っていないため、シートが風で飛ばない様にと重り代わりに置いてあるだけとはいえ、荷物番が一切居ないというのは些か無用心と言えるだろう。

少しの間ぼんやりとしたかと思うと、そのまま大の字になって横になる。あれほど強いと感じていた日差しが、水で冷えた体には丁度いい。

快晴とまでは行かないまでも、十分に広がる青空を見上げながら考えるのは、以前に湊斗が見せた掲示板への書き込み。尤も、気になっているのは内容そのものよりも周囲の反応だ。折角見えてきたギルドの復帰が、一気に遠ざかった様に感じてしまふ。そう考えるとどうしても憂鬱になってしまふのだった。

因みに今は、あの書き込みには返信は付いていない。だが、代わりに別の所で樹達のギルドがいかに危険かという内容で盛り上がっている、尤も、盛り上がっているのは樹達に反感を持つ 所謂“アンチ”と呼ばれる者達だけで、他は冷やかしか程度で書き込みをしているだけなのだ。

周囲の反応はともかくとして、自分達が動けば騒ぎになる事は確実だろう。あまり目立つ事は避けたい樹達としては、今復帰するのは得策とは言えない。だが、そんなことを言つて引き延ばしていたのでは永遠に復帰など出来ないだろう。



「・・・はあ」

考えれば考えるほど悪い方へと向いていき、大きく溜息を吐く。

「何一人で溜息なんか吐いてんのさ？」

樹の視界を人影が遮る。そこに立っていたのはエルナだった。

「なんだ、マスターか」

「なんだはないだろう。それで、どうしたのさ？」

再度樹に問い掛けながら、隣へと腰を下ろす。それに会わせ、樹も体を起こす。だが、樹が口を開く事はない。しばしの沈黙がこの場を支配する。

エルナは急かす事無く、樹の言葉を待つ。普段は冗談が多く、あまり真面目な事は話さない印象のある樹だが、こういった時に冗談を言う様な性格ではないことを知っている。

一方、樹はどうしたものかと考え込んでいた。全ての事情を知るエルナになら相談しても問題はないだろう。だが、自身のギルドの問題を無関係なエルナに話してもいいものかと思うと少し気が引ける。なにより、折角楽しく遊んでいる時にわざわざ話すような事ではないように思える。

だが、このまま考え込んだところで、いい方向には傾かないだろう。

考えなければいい。答えが出ないのならそうすればいいのだが、自身が大きく関わり、なにより強い関心を持っている、そんな状態で考えるなどというのは無理な話だ。

「大した事じゃないんだけどさ・・・」

一人で考えたところでどうにもならない。それならと、話してみる事にする。

ギルドの事、掲示板の事。気付けば考え込んでしまう事。最近悩んでいた事を全部打ち明ける。

「ってまあ、考えなきゃいいだけなんだけどさ」

少し湿っぽくなりすぎたせいか、最後に冗談っぽく明るくそう付け加える。

「まったく・・・なにを悩んでるのかと思ったたら」

呆れたように、少し溜息交じりでそう答えるエルナ。そして、立ち上がり樹へと向き直る。

「周り気にしたってしょうがないんだし自分のやりたい様にやる。それでいいんじゃないの？」

「そんなもんか？」

「そんなもんだって」

エルナはそう言って手を差し出す。樹がその手を掴むと、そのまま引っ張り上げる。

「それじゃあ、おなかも減ったしご飯食べに行こうか」

時計がないので誰に気にしていなかったが、時刻は既に昼を回っている。そう言われて、樹も初めて空腹感に気付く。

「ラシルは先に行って場所取ってて。私はみんな呼んでくるからさ」

「りょーかい」

そう言っで、エルナは再び海の方へと向かっていく。

「あ、そうだ」

何かを思い出したかの様に樹の方へと向き直る。そして

「私らが休止するまではギルドの復帰は禁止だからね」

そう付け加えて、再び海へと向かうのだった。

「なに言っでんだか・・・」

そう呟き、エルナの姿を見送ると、樹も一足先に海の家へと向かうのだった。

行く途中エルナの言った事を考える。エルナ達が休止するまで

つまりは夏休みが終わるまでだ。

出来るなら、今すぐにでも復帰したいと思う樹なのだが、不思議とエルナの言葉通り彼女達が休止をするまで先延ばしにするのも悪くない。そう思う自分も確かにいるのだった。

（つくづく現金だな、オレも）

そんな自分に、つい苦笑するのだった。

## Chapter 3 - 2 (後書き)

ラシル(以下ラ)「どうもお久しぶりです」

ハルカ(以下ハ)「相変わらずのグダグダ展開でごめんなさい」

ラ「楽しいはずの話なのにどうも暗いよな」(汗)

ハ「作者の腕のなさが露骨に出てますねえ」

エルナ(以下エ)「あと、今回はセリフが多すぎるねえ」

ハ「あ、マスター今回も来てたんですね」

エ「今日のキャラ紹介の関係だね」

ラ「因みに今回セリフが多いのは、某動画サイトにアップされてるストーリー動画の影響かと思われ」

ハ「苦手な日常シーンを書いてる時になんでそんなもの見に行くんでしょね、あの作者は」(汗)

エ「しかも、新しいストーリー動画に手を出し始めたらしいしね」

ラ「ダメだこいつ(ry)」

ハ「そういえば、今回の話は本来3 - 1話になる予定だったんですよね？ 図分時間かかりましたよね」

エ「まあ、書き溜めしてたわけじゃないらしいしな」

ラ「あと、書き始めると意外と書けなかったらしい」

ハ「相変わらずダメダメですねえ」

ラ「因みに今回はいつもより短めなのもその辺が原因だな」

エ「3 - 3話のためにネタを温存したつてのもあるみたいけどね」

ハ「それと、どうして私は今回も空気なんでしょうか」(泣)

ラ「そういえば」(泣)。なんかマスターの方がヒロインっぽいよね」

エ「でもハルカがラシルの相談に乗ったりつてのもおかしいしねえ」

ラ「リシュリー姐さんとかウィシュナなんか全然出てないんだしそれよりマシだって」

ハ「空気は個性ってことですかね」(泣)

エ「それじゃ、そろそろキャラ紹介に行こうか」

ラ「今回はハルカだな」

エ「ハルカはこの作品のヒロインだね」

ラ「マスターの方が目立ってるせいかヒロインって認知されてるか怪しいけどな」

ハ「ううゝ・・・」(泣)

ラ「性格はネットでもリアルでも大人しい性格だな」

エ「でも引つ込み思案とかじゃなくて言いたい事はハッキリいうタイプでもあるね」

ラ「最近はおれらとよくツルんでるけど、それまでは咲希といろんなグループに顔を出してたこともあつて意外と顔は広がったりする」

エ「本編で生かされることがなさそうな設定だねえ」(汗)

ラ「あと、ネットゲームをやってはいるけど、普段ゲームとかはしないみたいだな。やるのも咲希に付き合つてって程度」

ラ&エ「あと、空気は個性！」

エ「言わないでください」(泣)

ラ「今回はこんなもんかな？」

ハ「あ、今回は次回の予告が」

エ「めずらしいね」

ハ「今回は作者の都合により更新は1週間ぐらい遅れそうです」

ラ「今なんでまた・・・？」

ハ「どうもレコーダーのHDDの容量が少なくなってきた・・・っていうか空きがなくなつてその処理をしないとイケないみたいです  
ねえ」

エ「どんだけ溜めてるんだ・・・」(汗)

ラ「HDDいっぱいってことは・・・大体120タイトルぐらいか？見切れるのか？」

ハ「えっと、作者曰く、『30タイトルぐらいが限界じゃね？』と  
のことです」

エ「次回の更新の頃にはまた溜まつてそうだねえ・・・」(汗)  
ラ「だな・・・」(汗)

ハ「そんな訳で今回はこの辺で」  
ラ「次回もよろしく」

### Chapter 3 - 3

時刻は夕方五時を少し回ったぐらいだろうか。夏のこの時間では夕方というにはまだ早く、日はまだ高く、傾く様子もなかった。

樹達、空の円舞曲一行は、僅かに潮の香りを漂わせながら神代家の前へと集まっていた。

「遠慮なくあがってくれ」

玄関の鍵を開け、後ろのメンバーにも開放する。

夕方五時といえば、高校生が帰宅するには些か早い時間だろう。

特に泊り掛けである事が前提では尚更だ。だが、それには勿論理由はある。

普段ならこの時間か、あと一時間もすれば母親は帰ってくるだろう。父親も仕事次第では帰ってくる可能性も有り得る。だが、そうなっては、事前に夕食は神代家だと決めていた為、両親と針合わせになってしまう。人数的に厳しいというのもあるが、なにより、友人達にHNで呼ばれるところは極力聞かれたくないということで、こうして早目に帰宅したのだった。

更に、両親には事前に事情は説明しておき、この日は二人で外食ということになっていた。その為、もうしばらくは両親が帰ってくる心配はないのだった。

「流石にちよつと狭いな……」

現状を見て、少し苦笑する樹。

とりあえずは一行を自身の部屋に通したものの、これほどの人数が来ては、狭さを感じずにはいられなかった。

「まあ、二人ほど居てないだけマシか……」

「ハルカとソレルにはちよつと悪いけどね」

諦めた様に呟く樹に、リシュリーがフォローする。

二人の言うように、今、遥歌と咲希の二人はこの場に居ない。荷物を置きに帰ったついでに、買出しへと出ているのだった。

「直に風呂も沸くだろうし、それまで適当にしてくれ」

そう言う樹だったが、すぐに無用な一言だったと気付く。ネット上だけとはいえ、付き合いはなかなか長いせいか遠慮というものには余り無い様だ。樹が言うよりも早く、それぞれが思い思いに過ごしているのだった。

「これ買おうか迷ってたんだ。ちよつとやっていいか？」

「いいけど、データは消すなよ」

アルタスは早速ゲームを始め

「ラシル君、ちよつとパソコン借りるね」

「ああ、いいよ」

ウィシユナはパソコンを使い始める。

「本棚にエロ本はなしか……」

「ベッドの下にもないよ」

「あんたら二人はなにやってんだよ……」

エルナとリシュリーの二人はお約束ともいうべき、成人向け雑誌の探索に勤しんでいた。尤も、購入したことはないので見つかるはずはないのだが。

そんな様子に呆れながら、壁にもたれかかり改めて皆の様子を見ている。それぞれが思い思いに過ごしている事に変わりはない。その様子を見て、自身も必要以上に気を使う必要がないとわかると、一気に眠気が襲ってくる。炎天下の下での待ち合わせや海で泳いだ事で想像以上に疲れが溜まっていたのだった。

最早、抵抗しようと思う間も無く、そのまま眠りへと落ちていくのだった。

「……ル。お……ろ……ル」

暗闇の中、声が聞こえる。誰の声だろうか？判別をつける事はできないが、聞き馴染みの声である事は間違いなかった。だが、そんなことはどうでも良かった。

完全な闇の中にありながら、居心地いいこの空間にまだ居たい。

そう思う樹だが、そんな思いとは裏腹に、意識は自然と声の方へと向かっていく。

意識が声へと近づく度に、真っ暗だった空間は徐々に白く明るみを帯びていく。

「起きろ、ラシル！」

声のはっきりと聞こえた瞬間、それまでの闇はなくなり、景色はいつもよりは人の多い自分の部屋になっていた。そして、目の前にはエルナの顔。

「やっと起きたか」

「あれ……もしかして寝てた？」

寝ぼけ眼でそう言いながら、時間を確認してみる。どうやら十分ほど寝ていたらしい。

周囲を見てみると、先ほどまでと特に変わった様子はない。どうやら、なにかあったのではなく、樹が寝ている事に気付いたエルナがそれを起こした様だった。

何かをしなければ……そう思う樹だが、まだ頭が回らないのか、どうも思い出す事が出来ない。

「そういえば、お風呂大丈夫なの？」

「風呂……？」

ウイシュナがなんの事を言っているのかわからず、考えてみる。帰って来たときに風呂を沸かしていたのを思い出す。

「そっぴゃ、沸かしてたな。もう湧いてるだろうし案内するよ」

大きな欠伸をしながら立ち上がり、部屋を出ようとする。だが、その後に誰も続く様子がなく、そのまま立ち止まる。

「……ってだれか来いよ」

「いや……アンタが最初なんじゃないかって」

エルナの言葉にそこに居た全員が頷く。

「いや、オレ最後でいいんだけど……」

「目覚ましがてらに入ってきたら？」

リシュリーの言葉に再び全員が頷く。



樹としては、遠慮などではなく、初めから最後のつもりだったのだが、この様子を見る限りでは誰も動く様子はない。

「わかったよ……。じゃあ、お先につてことで」

ここで揉めていても仕方がないので、素直に折れるのだった。

二十分ほどして。

樹が戻ってきた時には、それまでとは状況が随分と変わっていた。樹が出て行った頃には、それぞれが思い思いに行動していたはずが、今では全員がテレビに向かって　いや、正確にはテレビゲームで盛り上がっているのだった。

先ほどからアルタスがしていたゲームだろうか？とも考える樹だが、彼がしていたのはごく普通のRPGだ。ロールプレイングゲームこの場にいる全員がこうして夢中になるとは思えない。なにより、コントローラーが二つ使用されている。ますますそれは考え辛い。

「次誰か　つてなにしてんの？」

そう言いながら、樹も画面を除いてみる。そこに写っていたのが随分前に買ったテニスゲームだった。どうやら二人対戦で盛り上がっている様である。

「おかえり」。今次に入る人決めてるの」

ウィシユナの言葉に思わず口を閉ざしてしまう樹。なぜわざわざそんな時間の掛かるもので決めるのか？そんなことを考えてしまう。最新の物に拘らなければ格闘ゲームからレースゲームまで一応は揃っている。それらなら、もつと短時間で決められるはずだ。尤も、極力公平さを期した結果であることは予想出来たので、その辺りの事は敢えて口にはしない。

「それで、トーナメントでもやってんだ」

「うっん、リーグ戦」

「時間掛けすぎだろう」

呆れたように呟くと、ベッドの一画を陣取り大人しく観戦することにする。遥歌と咲希もまだ来る様子もない為、そう慌てる事も無いと考えるのことだ。

現在、試合をしているのはアルタスとエルナ。スコアの上ではアルタスが圧倒的に有利な状況だが、漸く慣れてきたのか、エルナが粘りを見せ試合は長引いている様だった。

一方アルタスは、上手くボールを打ち分け、攻めの姿勢を崩さない。随分と慣れている様子だ。

しばらくラリーが続くが、やがてその均衡も崩れてくる。これまでに粘りを見せていたエルナだったが、次第にアルタスの打つボールに追いつけなくなってくる。そして、ついには得点を許してしまう。それが切っ掛けとなったかのように、この後も次々とアルタスは得点を決めて行き、エルナの巻き返しはないままゲームセットとなった。

「まだあるのか？」

「いや、これで終わりだよ」

エルナが答える。どうやら、この試合がリーグ戦最後の試合だった様だ。

「確か…… ウイシュナだったけ？」

「…… さいですか」

言いたい事はあったが、最早そんな気力もなく、それだけに留める樹。

「それじゃ、案内するよ。あと、そのまま晩メシの準備してくるか  
らみんなは適当にしててくれ」

「覗くなよ」

「覗くか！」

ウイシュナを風呂まで案内すると、樹は一人、台所でへと向かう。  
「さて、どうしたもんかな……？」

夕食の支度に来たのはいいが、いざ始めようとすると早速作業に詰まってしまう。それもそのはずだ。なにせ、材料は遥歌と咲希が仕入れてくる事になっている。二人が帰ってこないのでは本格的な準備など出来るはずも無い。

「サラダぐらいならなんとかなるかな？」

冷蔵庫を覗きながらそう呟く。メニューはあらかじめ決まっているので、勝手にいくつかメニューを増やしたところで問題はない。

「折角の焼肉だし、タレも作るか。あとスープもいけるな」

作るものは決まると、次々と材料を取り出していき調理していく。趣味とまではいかないまでも、日頃から料理をする機会が多いため、手際よくこなしていく。

まずはタレを作り、空いている容器にそれを移す。次にサラダ。これはラップをして冷蔵庫に入れておく。

「ラシル君、なにか手伝おうか？」

最後のスープに取り掛かり、味見をしていた所でウイシュナに声を掛けられる。

「いや、丁度終わったところ」

満足出来る味だったのだろう。鍋に蓋をしながらそう答える。

とりあえずの準備も済ませ、ここに居る意味もあまりない。残っている事といえば、後片付けぐらいだ。なので、ウイシュナを先に部屋に戻そうかとも思ったが、折角手伝おうと来てくれているのをそのまま戻すのも、追い返したようで少し気が引けた。何か話でも

そう思ったところであることに気付く。

（そういえば、ウイシュナと二人って初めてな気が・・・）

いつもは、大抵はアルタスや他のギルドのメンバーと一緒に居る。その為、彼女と二人で居るという事はまずなかった。

それに気付くと、いざ話そうにも話題が見つからない。ファンタジアナイツなら確実に話せるだろうが、折角こうしてリアルで会っているのに、普段共にしているゲームの話題というのも気が引けた。「そういえば、ラシル君って結構料理したりするの？」

何を話そうかと考えている内に、ウイシュナから話題が提供された。少し困っていただけにありがたいことだったが、いざとなるとあまり話す事のない自分に、樹は内心苦笑するのだった。

「うーん、週一回つてとこかな・・・」

神代家がいくら共働きとはいえ、きちんと三食とも準備はされて

いる。その為、樹が料理をする機会といえば、半日だけ学校がある土曜の昼食ぐらいなのだ。

「まあ、腕は大したことないんだけどな」

「冗談っぽくそう付け加えておく。」

「え、ホントに？」

「ホントだつて。なんならちよつと飲んでみるか？」

樹はそう言つて立ち上がると、味見に使つた更にすこしスープを入れ、ワイシユナへと渡す。

皿を受け取つたワイシユナは、楽しみといった様子だ。少しスープを見つめた後、少しずつ口へと含んで行き、熱さに慣れると残りを一気に飲み干す。

「……ラシル君」

一呼吸置き、ワイシユナが口を開く。

樹が自身の料理を人に食べさせるのは今回が初めてだ。どういった反応が返ってくるのか不安がある反面、それ以上に楽しみでもあった。

「すごく美味しいよこれ。これだけ作れば十分だよ」

「そ……そうか？」

流石に不味いという感想が出てくるとは思つてなかったが、こういった反応が返つてくるとも思つてなかった樹。初めて人に食べさせた料理は思つたよりも好評だったようで嬉しい反面、はずかしくもあった。

その後も、料理の話で盛り上がる二人。初めこそどうしたものかと考えていたが、こうして共通の話題が見つかり、時間はあつという間に過ぎていく。友人の新たな一面を発見し、その事を素直に喜ばしく思う樹だった。

しばらくして、家にチャイムの音が鳴り響く。どうやら来客のようだ。

「いいよ、私出てくるね」

「あ、おい……」

立ち上がろうとする樹を止め、ウィシュナがそのまま玄關へと向かう。静止する間もなく行ってしまった少女の背中を見送り、小さく溜息を吐きながら再び腰を下ろす。

追いかけようかとも考えたが、来客者は誰であるのかは予想出来た。なので、言葉に甘え、応対はウィシュナに任ずことにする。

間もなくして、樹の予想が正しかったことを証明するかのように、声が聞こえてくる。次第に声はこちらに近付き、その主達が台所へと姿を現す。

「お待たせ」

「ごめんね、ちょっと遅くなっちゃった」

咲希と遥歌の二人だ。

樹が買出しも頼んでいた為、二人の手にはスーパーの袋がある。

「しかし、流石にすごい量だな」

テーブルに置かれた荷物を見て、そう漏らす樹。

買ってくる材料は、基本的には買出しの二人に任せていたが、分量や樹が個人的に欲しいと思う材料は指定していた。人数が人数なので、少し多目に伝えてはいたのだが、それを考慮しても相当な量となっていた。

「お疲れ。重かっただろ？」

「それはいいんだけど……」

樹の言葉に、遥歌が言葉を濁すように答える。

その様子に不思議に思う樹。先ほどのやり取りにおかしな部分があったとは思えない。だとすると、頼んだ品物だろうか？だが、そちらにも覚えはない。

心当たりは一切ない為、どう反応していいかわからず、二人の出方を待つ事にする。

「これを見ておかしな部分があることに気付かないかしらね？」

樹の様子を見て、咲希が携帯電話を差し出してくる。そこに写っていたのは、樹自身が送った買い物リストのメールだった。

画面に表示されている部分は勿論、画面をスクロールさせて他の

部分を見てもおかしい部分はやはり見当たらない。

「普通だと思っぞ」

惚ける訳でもなく、そう答えながら携帯電話を返す樹。

「じゃあ、この酒ってのはなにかしらね？」

そう言われて、漸く二人の言いたい事を理解する樹。確かに、メールを送るときに冗談半分で酒と書いたのを覚えている。

「……無礼講？」

「意味わかんないわよ」

適当な返答をする樹に対して、呆れた様に返す咲希。

「とりあえずお酒は無理だったよ」

いつまでも終わりそうにない二人を見かねてか、遥歌がそう答える。樹としても、本当に買ってくるとは思っていなかったのも、特に気にしてはいない。

「じゃあ、オレはもうちょっと準備してるからみんなは先に部屋に行っててくれ」

「そうするわ」

「手伝おうか？」

咲希と遥歌で全く逆の反応が返ってくる。

そんな二人の反応を見て、“らしい”と思う樹だが、ここまで正反対の性格でよくここまで気が合うものだと思えて感心する。

「いいよ、二人で動けるほど広くも無いしな。ウィシュナ、二人の案内よろしく」

そう言つと、早速袋の中の荷物を取り出し、作業を開始していく。その様子を見て、遥歌達もその場を後にするのだった。

しばらくして、樹も準備を済ませ自身の部屋へと戻っていた。部屋では相変わらずゲーム大会が繰り広げられていた。

「アルタスもそろそろ出てくるかな……？」

時計を見ながら、樹がそう呟く。

アルタスが風呂に行つて既に二十分ほど。そろそろ出てきてもいいぐらいの時間だ。

「それじゃ、オレは一足先に準備に行ってくるよ」  
そう言って立ち上がる樹。

アルタスが最後の入浴者だ。彼が上がれば漸く食事となる。本を読むのも、人のゲームを見ているのも少し飽きてきていた所なので丁度いい。

「私も手伝うね」

樹に続くように遥歌も部屋を出る。

準備とは言っても、食器を出す程度だ。手伝いが必要なほどにとでもないのだが、先ほども断りを入れている。あまり邪険にするのも気が引けた。

「じゃあ、頼むわ」

そう言って、今回は素直に受け入れるのだった。

「そこに食器が入ってるから必要そうなのは出しといて」

「はい」

遥歌に指示を出し、自身も冷蔵庫から、先ほど準備をしたものを  
出そうとしてあることに気付く。

（ここじゃ全員座れないよな……）

台所にあるテーブルでは全員が座る事は無理だ。隣のリビングに  
目をやるがそれはあちらも同じ事。しばしの間考え、解決策を探し  
てみる。

（持って来るしかないか……）

出来る事なら避けたい。そう思う樹だったが、他にいい解決方法  
も思いつかず、諦めるしかなかった。

「楠木、このこと頼むな」

そう声を掛けてから、台所を後にする。

二階の一番奥。そこに樹の目的地はあった。倉庫代わりとして使  
っている空き部屋だ。ドアを開けると、所狭しと物が置かれ、足の  
踏み場もない状態だ。一番奥にあるものなど取り出すのは不可能で  
はないかとさえ思えてくる。

そんな部屋の一番手前に樹の目的の物は立てかけられていた。現

在、一階に置いてあるものよりも随分と大きめのテーブル。これが樹の目的の物だった。

「アレから物が増えてなくて助かった」

大きさ故に、重量も然ることながら、なにより動きにくいのだった。少しでも部屋の奥に行っていれば、出すだけでも一苦労といった所だっただろう。

尤も、運ぶ手間はなくならないのだが……。それを考えると、やはり他に方法が考えられずにはいられない樹だった。

「諦めて持っていくか……」

溜息交じりでそう呟くと、テーブルを抱え、倉庫を後にした。

「随分デカイ荷物持つてるな」

「お、上がったか」

廊下を進んでいるとアルタスが丁度通りかかる。どうやら、丁度風呂から上がったところのようだ。

「手伝ったほうがいいか？」

「いや、大丈夫。それよりみんなを呼んできてくれ」

「わかった。気をつけろよ」

短いやり取りで別れる二人。アルタスを見送ると、樹も再び台所へと向かうのだった。

重量があるとはいえ、樹もやはり男。運ぶのが厄介というほどのものではない。幅と高ささえ気を付ければそれほど問題はない。

大きな問題が発生する事もなく、テーブルを運び終える。

次に、リビングのテーブルやソファを部屋の端へと寄せ、持ってきたテーブルを設置する。

「食器は全部こっちに頼むな」

「はい」

遥歌にそう指示を出し、自身も準備を進めていく。

丁度準備が終わったところで、残りの面々も台所に姿を現す。

「適当に座ってくれ」

そう言っ、全員が来てからと冷蔵庫に入れておいた肉と野菜を



運び、樹も腰を下ろす。

「随分すごいね」

食卓に並ぶ食材を見つめ思わずそう漏らすリシュリー。彼女は  
いや、厳密にはここにいる全員、それこそ準備をした樹ですら、  
予定を話していた時点では肉と野菜がある程度だと思っていた。

それが、いざリビングに来てみれば、サラダとスープの追加。肉  
も生のままの物と、タレに漬け込んだ物の二種類。タレですら樹の  
自作の物と市販の物と、家庭で焼肉をするには十分過ぎるほど手が  
込んでいる。リシュリーでなくとも、この様な感想を持ってしまっ  
たろう。

「こりゃ、バーベキューを辞めて正解だったかもね」

当初の予定では、夕方まで泳ぎそのままバーベキューとなる予定  
だった。だが、食材を含め、荷物を運ぶのが無理という理由で断念  
していたのだった。

「それじゃあ、焼いていくか」

そう言って、材料をホットプレートへと乗せていく。

「この辺はもういけるかな……？」

そう言って、焼けた物を端へと寄せ、更に新しい食材を乗せてい  
く。

こうして、ずっと焼き番に徹する樹。家族を除けば他者に料理を  
振舞った経験などない。先ほどウィシュナから好評を得たものの、  
やはり人からの評価というものはどうしても気になってしまう。こ  
のままで落ち着いて食事どころではなさそうだ。その為、こうし  
て周囲の反応を待っているのだった。

次第に、焼けた具材に箸が伸びる。こんなとき、誰にも遠慮がな  
いというのはありがたかった。もし全員が始めに箸を伸ばすのを躊  
躇うようならば、ずっと食材を焼いている樹が不自然に見えるから  
だ。

口に運ばれる様子を見て、思わず緊張する。先ほど、ウィシュナ  
からはいい評価を得たものの、やはりこうした経験がないせいにかこ

うなってしまう。

緊張を誤魔化すためか、自身でも味を確かめてみる。味見をしたとき同様、悪い感想が出そうなものではない。

「意外とイケるね」

「料理するとは聞いた事あったけど本当だったんだね」

エルナとリシュリーは高評価の様だ。

「なんか仕込んでるかと思ったけど、意外とちゃんと食える物だ…」

…」

「さつきも少し貰ったけど、やっぱり美味しいね」

「普段のアンタからは想像出来ないわね」

「今度レシピ教えてほしいな」

「お前らに普段どんな風に見られてんのかよくわかったよ……」

ここに居る者達からはいい評価が得られると同時に、その感想の内容に呆れる樹。だが、言葉とは裏腹に、この評価に安堵しているのもまた、確かだった。

そのまま食事も進み、やがて食事も終わる。多すぎたかと思われた食材も、結局はそのほとんどが平らげられてしまっていた。

片付けをしようと立ち上がるうとしたときだった。

「神代君、ゆっくりしててよ。片付けはやっておくから」

遥歌から静止の声が掛かった。

「いいよ。楠木こそゆっくりしてろって」

「ラシル君はずっと準備してたんだし、片付けぐらい任せてよ。ハルカ、私も手伝うね」

遥歌の申し入れを断り、動こうとする樹だったが、ウィシユナにまで止められてしまう。準備の時点から動きっぱなしなのは、それほど気にしてはいないのだが、彼女達の申し入れをあまり無下にするの気が引けるのだった。

「……わかったよ。それじゃ頼む」

そう言って、上げた腰を再び下ろすのだった。

ふと時計を見ると、既に午後八時を過ぎていた。樹の予想では、

そろそろ両親が帰宅してくるのではと考えていたのだが、未だその様子はない。

（どこに行ってるんだか……）

そんな感想を抱きつつ、夕食時からつけていたテレビへと目を向けるのだった。

時刻は午後十時。一行は再び樹の部屋へと戻り話に花を咲かせながらも、各々がそれぞれの方法でこの場を満喫していた。

そんな中、遥歌の様子は少し違っていた。まばたきを数回繰り返したかと思うと、そのまま目蓋が閉じられる。そのまま舟をこぎ始めたかと思うと、一瞬大きく揺れその反動で驚き、目を見開く。そんなことを数回繰り返していた。最早半分寝ている状態だ。

「疲れたんだろ。もう寝てきたら？」

そんな様子に気付いた樹が声を掛ける。

「ううん、大丈夫だよ」

そう答える遥歌だが、目蓋は閉じかけ、いかにも眠そうといった表情だ。彼女の言葉に説得力は一切感じられない。

「説得力ないって。ほら、案内するから着いて来な」

遥歌の言葉を見無視し、部屋から連れ出す。

遥歌もそれ以上反論することもなく、樹に続く。大丈夫とは言いつつも、やはり起きているのは限界だったのだろう。

樹は、後ろを気にしながらも先導し、一階の客間へと遥歌を連れて行く。

「ここ。好きなところで寝てていいから」

そう言ってドアを開ける。

中は樹の部屋よりも少し広い程度の部屋だ。だが、家具の類はほとんどないため、随分広く感じる。そこに、布団が敷き詰められていた。

流石に、同じ部屋に男女一緒に寝るのはよろしくないということ  
で　そもそも樹の部屋にそんなスペースはないのだが　あらか

じめ用意していたのだった。

「うん、ごめんね」

「謝る事なんかしてないだろ。それじゃ、おやすみ」

「おやすみ……」

遥歌が布団に入るのを確認すると、そつとドアを閉め、樹も自身の部屋へと戻るのだった。

その後も、会話で盛り上がりながらも、インターネットで面白いサイトを見つけては笑いあい、ファンタジアナイツのアイテムを賭けて対戦しと、相変わらずの様子を見せる一行。

だが、時間が経つにつれ、一人、また一人と次第に眠っていく。

時刻は午前三時。気付けば起きているのは樹一人だけだった。

「だれも起きねえし……」

現状を見て呟く樹。呼び掛けても肩を揺すっても誰も起きる様子はない。皆が所狭しと横たわっている。最早空いているスペースは樹の座っていた場所ぐらいだ。

「……もうこのままでいいか」

何をしてても無駄だと悟ったのか、樹は彼女達を起こすのを諦める。そして、そのまま部屋を後にする。

「流石にここはマズイよな……」

部屋を出た樹が向かったのは、先ほど遥歌を案内した客間だった。自身の部屋では寝るスペースがない為、ここで寝ようかとも一瞬考えたが、それはすぐに却下する。

人数分のタオルケットを取ると、遥歌を起こさないよう気を配りながら、再び部屋へと戻る。

部屋で寝ている面々にタオルケットを掛けると、次は自身の寝場所を探す事にする。

（ここしかないよな……）

寝ることが出来そうな場所を考え、出た結論はリビングだった。このソファなら寝るには十分だろう。

もう寝ようかと思う樹だったが、海から帰って少し寝ていたせい

か、それほど眠気は無い。

（ちよつと外にでも行くかな）

持っていたタオルケットをソファに放り投げ、そのまま厳寒へと向かうのだった。

外は静かなものだった。時間が時間だけに、人通りなどあるはずもなく、聞こえてくるのは僅かな虫の音のみ。時折吹く生温い風も、薄っすらと汗ばんだ肌には心地よかった。

樹は道路に出ると、塀にもたれ掛る様に座り込む。そして、空を見上げた・

（やっぱわかんねえな……）

僅かに見える星を見て、まず出てきた感想がこれだった。

元々星を見るという趣味は持っていない。そして、何度か星座の説明を聞いた事はあるのだが、今至ってもやはり理解は出来ていない。それでも尚、星座を探してみるがすぐに諦める。

何も考えずただただ空を見上げる。特に何があるという訳でもないが、この静かな時間は気に入っていた。

そうして、少し経った頃、後ろから人の気配がする。誰かが起きてきたのだろう。

「あ、神代君。まだ起きてたんだ」

「海から帰って寝たせいかあんま眠くなくてな」

そこに現れたのは遥歌だった。

短いやり取りを済ませると、遥歌も樹の横へと腰を下ろす。

「もしかして起こしたか？」

「ううん。目が覚めたら物音がしてたからそれで出てきただけ」

「そっか」

再び訪れる沈黙。

出会って間もない頃こそ、この沈黙が気まずく感じたものだが、今ではこの様な状況も相まって、心地よく感じる。

「でも意外だったよ」

先に沈黙を破ったのは遥歌だった。

「神代君って星見るのすきだったんだね」

「いや、特別好きって訳でもないよ。それこそ星座とかもさっぱりだし」

樹は冗談っぽく言うと、そのまま立ち上がる。

「さてと、オレはそろそろ寝るけど楠木はどうする？」

「私も寝るね」

二人で家へと戻る。暗い廊下を進み、リビングの入り口に着いたところで足が止まる。

「それじゃ、おやすみ」

「うん、おやすみ」

そう、挨拶だけして別れる。遥歌を見送ると樹もソファへと倒れこむ。

申し訳程度にタオルケットを掛け、そのまま目を瞑る。家の中では外に居た時の様な虫の音すら聞こえず、静寂だけがそこにあつた。眠気はほとんど無かつたはずなのだが、意外と疲れはあつたのだ。あつという間に樹の意識は闇の中へと溶け込んでいくのだ。た。

### Chapter 3 - 3 (後書き)

ラシル(以下ラ)「加速するグダグダ!」

ハルカ(以下ハ)「のっけから何言ってるんですか?」

ラ「いや、今回いつもにも増して酷かったからついな……」

ハ「ああ、確かに」

ラ「しかも引つ張りすぎだし」

ハ「確かにもつと簡略出来そうですね」

ラ「引つ張りすぎた結果がこれだよ!」

ハ(今回は随分飛ばしてるな)

ハ「それで、今回のつてどれぐらい引つ張ったんですか?」

ラ「とりあえず予定ではオフ会は終了する予定だったらしい」

ハ「オフ会どころか一日が終わっただけですな」

ラ「なんでもここで終わらせると次回のネタがなかったそうだな」

ハ「グダグダな上にネタがないとか……」(汗)

ラ「やめときゃよかったのにな……」(汗)

ハ「そういえば、一週間ほど遅れるって言うてたのに結局一週間どころじゃないですね」

ラ「予想以上に進まなかったらしい。グダグダな話にするから」

ラ「ゆっくりした結果がこれだよ!」

ハ「そう言うって作者が随分サボってたみたいに聞こえますね」

ラ「遅くなつてホントすんませんです」

ハ「それじゃあ、そろそろキャラ紹介に行きましょうか」

ラ「今回はマスターだな」

ハ「名前はエルナで、マスターの愛称で親しまれています」

ラ「愛称からわかる様に、オレ達の所属ギルド『空の円舞曲』のマスターだな」

ハ「姉御キャラってことらしいので、それっぽくなるように意識はしてるみたいですね」

ラ「セリフだけ見ればオレかアルタスが喋ってる様にしか見えないのが難点だな」

ハ「リアルでは受験を控える高校三年生です」

ラ「あの性格に似合わず結構優秀らしくて、夏休みに入っても遊んでられるぐらいの余裕があるんだから驚きだな」

ハ「そんなこというと失礼ですよ」（汗）

ラ「あと、すっかりヒロインっぽくなってきてるな」

ハ「ヒロイン私なのに……」

ラ「作者曰く、もうこっちがヒロインでよくね？らしい」

ハ「ちよっ……！」

ラ「とりあえず今回の紹介はこんなもんかな」

ハ「あ、すっかり忘れてたけど、遅れる原因になったHDDレコーダーはどうなったんですか？」

ラ「ああ、なんでも30タイトルぐらい見ればいいほうと思ってたら、100タイトルぐらい商家出来たらしく、残り30タイトルぐらいになったらしいぞ」

ハ「随分減ったね」

ラ「まあ、あれから放置して、また60タイトルぐらいにまで増えてんだけどな……」

ハ「その内また今回と同じことしそうですね……」

ラ「それじゃあ、今回はこの辺で」

ハ「次回もいつもにも増してグダグダになりそうですが、また見てくれると嬉しいです」

ラ「グダグダは続くよどこまでも……」

ハ「そういうこと言って来る人減っても知りませんよ……？」（汗）  
二人「それでは、また次回」



## Chapter 3 - 4

「ん。ここは……？」

樹が目を覚ましたとき、いくつかの違和感を覚えた。まず天井が普段から見上げているそれではなかった。そして背中。いつも寝ているベッドよりも随分柔らかい。

未だ目が覚めきらない状態のまま体を起こす。そこで飛び込んできた景色は自身の部屋とは全く違うものだった。

「……そうか、リビングで寝たんだっけ」

少しして、漸く昨日のことを思い出す。部屋が占領されていた為に、こうしてリビングへと避難していたのだった。

時間を確認してみると、現在11時を少し回ったところだった。

（少し寝すぎたかな？）

まだ少し眠い目を擦りながらも、リビングを後にする。

ドアを開けると、遥歌が一人本を読んでいるところだった。

「あ、神代君、おはよう。本借りてるよ」

「ああ、それはいいけど……こんなとこで何してんのさ？」

まず樹が向かったのは、昨日遥歌が寝ていた客間だった。

持ち出したタオルケットを片付けに寄ったのだが、時間が時間なだけに、人が居るとは思っていなかった。

「わざわざこんなとこで読まなくても部屋に居とけばいいだろうに

……」

「そっなんだけどね」

苦笑しながら、曖昧に答える遥歌。この様子に部屋の様子はある程度の予想がついてしまふのだった。

同時に、遥歌が随分と早い内に起きていた事も予想が付く。

（つたく、起こせばいいのに）

そんなことを思いながらも、彼女の性格上まずしないであろうこ

ともわかってしまう。なので、これ以上のこの話を引っ張ることはしない。

樹は自身の持っているタオルケットを片付けるために、押入れの扉を開ける。

「布団そこに入れておいたけどよかった？」

遥歌の言葉で、中に視線を向けると、そこには昨日に出したはずの布団が丁寧に畳まれて片付けられていた。

部屋に入った時から違和感はあったものの、これを見て漸くその正体が判明する。

「ああ、悪いな」

ありがたく思う反面、気を使わせているようで申し訳なく思う樹かと言つて、放っておけとも言つわけにもいかず、礼を言うだけに留めておく。

「とりあえず部屋に行くか」

「え、でも……」

「いいから」

樹の提案に渋る様子の遥歌。だが、それもお構いなしというかの様に先に部屋を後にする樹。

その様子を見ても尚、動く様子のない遥歌。彼女もまた、樹のしよつとしていることがわかるのだろつ。なので。動くに動けないといった様子だ。

「置いてくぞ」

動く様子のない遥歌を急かすかの様にいう樹。

その言葉で、諦めたように遥歌も漸く重い腰を上げるのだつた。

樹が自身の部屋のドアを開けると、そこには昨夜部屋を出たときと変わらぬ光景が広がっていた。

五人もの人間が所狭しと寝ている様はある意味壮観にさえ見える。決して狭くはない部屋だが、これほどの人間が寝ていると足の踏み場すらない。樹は部屋に入るのを早々に諦めると、近場にいる者から順次起こしに掛かる。

「いい加減起きろ！」

「……」

声を掛ける程度では到底置きそうにはない。肩をゆすり、頬を叩き、それで漸く反応を見せる。それを何度か繰り返し、一人、また一人と起きていく。

「やっと起きたか……」

「みんなおはよう」

呆れた様子の樹の隣で、遥歌がにこやかに挨拶をする。尤も、まだ眠気眼の五人から返答が返ってくる事はないのだが。

少し間を空け、目が覚めてきたのか昨日までの賑やかさが戻ってくる。

「起きたならとりあえず着替えて来い。楠木、客間に案内してやって」

有無を言わせないためにも遥歌にそう指示を出し、女性陣を部屋の外へと出す。先ほどまでは所狭しと人が居たせいか、樹とアルタスの二人だけになると随分と広く感じる。

「そういえば、昼飯はどうすんの？」

手早く着替えを済ませ、すっかりくつろいでいるところにアルタスが口を開く。この日の予定は遊びに行くことと夕食は外食という事以外は特にはなにも決まっていなかった。

「そうだな……。どうせ出て行くんだしその時にどっか適当に入れればいいんじゃないか？」

「それもそうだな」

特に反対意見がある訳でもなく、そのまま決定する。

そう話している内に、客間へと移動していた面々が戻ってくる。

人が集まり、再び賑やかになる樹の部屋。他愛も無い話で盛り上がり、いつしか時刻は昼になっていた。

「そろそろ出るか」

話も一段落着いた所で樹が切り出す。移動する事と昼食を取る事を考えれば、丁度いい時間だろう。

「昼はどうするの？」

「外で適当につてさつきアルタスと話してたんだけど、それでいいか？」

ここでも反対意見が出る事もなく、そのまま決定となる。

住宅地を抜け、商店街へと出る一行。食事をするにしても遊ぶにしても、ここならば一通りの施設は揃っている。この日一日を過ごすには丁度いい場所だろう。

「とりあえずは荷物だな」

樹達、地元組み以外のメンバーの手にはそれぞれ荷物が抱えられていた。解散前に一度取りに戻るという案もあったのだが、二度手間という事もあり、こうして持ってきているのだった。

荷物とは言っても、一晩泊まるための着替えが入っている程度なので、大きさだけをいえばそれほど大きな物という訳でもない。邪魔というわけではないにしろ、わざわざ持ち歩くものでないことも確かだ。

「駅のロッカーとかでいいんじゃない？」

「そうだね」

「私達はこの辺はわからないからね。案内頼むよ」

一行は、駅を目指し再び移動を開始する。

駅は商店街を抜けた先にある。この辺りでは大きい部類の駅であり、路線もいくつか交わっているため、解散の時にも丁度いい。これもまた、この辺りで遊ぶ理由の一つである。

商店街を歩きながら、飲食店を覗く樹。昼時だというのに、どこもそれほど混んではいなかった。

「意外と空いてるな」

それが樹の感想だった。

どこも人は入ってはいえるものの、すぐに座れるか、待ったとしても一組か二組といったところだった。どこももっと混んでいると思っただけに、この状態は嬉しい誤算といえた。

「今日は平日だしね。こんなもんじゃないの？」

咲希の言葉で今日が平日であることを思い出す樹。

樹達学生は現在休みでも、大人たちからすれば今日はただの平日でしかない。なので、このような状態でも無理からぬことだ。

毎日が休みのせいだ。日付は意識していても、曜日の感覚はほとんどなくなっていた。

そう話している内に、商店街を抜け駅へと辿り着く。構内へと入って行き、早々に目的のロッカーを発見する。

「さて、荷物も入れたしあとはどこでメシ食うかな」

「ファーストフード系の店でいいんじゃない？」

「そうだな。どうせ夜にがつり食うんだし」

これから遊びに行くことを考えると、昼食にそれほど時間を取られたくないのはだれもが同じだったのだろう。行き先は簡単に決定する。

「それじゃ、行くか」

一行は、来た道に戻っていくのだった。

樹達は全国チェーンのバーガーショップに来ていた。

注文を済ませ店の奥にある大きな席を陣取る。

「ご飯食べたらどこに行く？」

「ボーリングとカラオケとゲーセンが候補だったっけ？」

あらかじめ出ていた候補を確認する。

「見事なまでに時間のかかるものばっかだねええ……」

候補の内容に、若干呆れ気味に呟くエルナ。

本来は、もう少し案もあったのだが、わざわざオフ会ですることでも無いようなことや、そもそも出来ないという理由から候補から外れていったのだった。その結果、残ったのは最も無難と思われるこの三つだった。

「普段ゲーム内で会ってるんだしとりあえずゲーセンは無しでいいんじゃないの？」

まずは樹の提案。

どれに決定するかというよりも、まずはどれかを候補から消そうとしての提案だ。

「みんなバラバラになっちゃいそうだし私は賛成かな」

遥歌も樹の意見に肯定的な態度を見せる。

「でも時間の調整はしやすいし候補に残しといていいんじゃないか？」

「ゲームって言うてもいつもやってるのは別物だしね」

逆に、アルタスと咲希は否定的な態度だ。

残りの三人はというと、どちらの意見にも賛同出来る為、中立的な立場を取っている。

「それなら、カラオケなりボーリングなり行つて時間があればゲーセンって形でいいんじゃない？」

中立を保っていたエルナがそう提案する。候補から消すわけでもなく、かといってメインで遊ぶわけでもない。妥協案　そういつてしまえば響きは悪いが、両者の意見を取り入れた形であることは確かだ。

「それぐらいならいいかもな」

「異議なし！」

樹達も納得した様で、エルナの提案で決定となる。

樹からしてみれば、狙ったようにはいかなかったものの、結果的に選択肢を減らす事には成功したのでこれはこれで問題なかった。

「あとはどっちにするかだね」

時間を考えると両方というのは厳しいだろう。

「そういえば、私神代が歌つてるところって見たことないな」

まず口を開いたのは咲希だ。暗にカラオケに行きたいと言っているようだ。

「そういえば、いつも来ないよね。来ても歌わないし……」

そんな咲希の様子に気付いているのか、遥歌も彼女の話を広げる発言をする。

二人の言う様に、樹がカラオケに行くということはまず無い。誘ったところで、大抵の場合は断られてしまうのが常だ。時折付き合いで来る事もあるが、文字通り居るだけなのである。そのせいか、最早友人達の間では樹をカラオケに誘うのは一種のタブーとされており、最近では誘われる事すらほとんどなくなっていた。

そんな経緯もあり、二人より付き合いの長い湊斗は勿論、両親に至るまで樹の歌声を聞いたという者は居ない。その為、尚更興味があろうのだろう。

「じゃあ、ボーリングで決定ってことで」

カラオケと言われて素直に頷くはずもなく、樹が強引にボーリングに決定しようとする。

「決定な訳あるか！相変わらずカラオケ限定でノリ悪いわねえ」

勿論、そのまま決定されるはずもなく、咲希に却下されてしまう。

「どうしてもダメか？」

「ダメ」

無駄だとわかりつつも食い下がってみる樹だが、即答で却下される。

なにかいい方法はないかと考えてみる。

尤も、そこまでカラオケを拒否する理由は特には無い。ただ、選べるのならどうせなら自身も遊べる方を選びたい。ただそれだけの事だ。

「じゃあ、こうしよう」

なにかいい方法が思い浮かんだのだろう。話を切り出す樹。

「とりあえずボーリングで1ゲームのスコアで勝負する。で、オレが勝ったらそのままボーリング。負けたらカラオケ。ついでにボーリング代はオレが出してやるよ」

「面白そうだね。いいんじゃないの？」

樹の提案にエルナも賛成の様子を見せる。エルナだけではない。他のメンバーもどうやら異議はなさそうだった。

「勝負はいいけど、ラシルとソレルの二人でやるの？」

「ボーリング派とカラオケ派のチーム戦でいいんじゃないかな？」  
「チームの平均のスコアなら人数が多少偏っても問題ないし、それでいいんじゃない？」

細かなルールも次第に決まっていき、今後の予定はこれでほぼ確定となった。

人と話すには少し困難なほどの音量で音楽が流れる。決して広いとは言えない部屋の一角で樹は落ち込んでいた。

「せめて最後にストライク　いや、スペアでも出してれば……」  
ここはカラオケ屋の一室。

樹の提案により開催されたボーリング対決は、僅か3ピン差という接線の末、咲希率いるカラオケ派チームが勝利し、今に至っている。

「アンタも意外と引つ張るねえ」

樹の様子を見て、エルナが呆れたように話しかける。

「そりゃ、あれだけ惜しければな……」

勝負の内容を思い出し、軽く溜息を吐く。

「でも、ラシル君ってホントにカラオケ苦手なんだね」

「まだ歌ってないのラシルだけだもんね」

ウィシュナとリシュリーから感心するかの様な感想が出てくる。

カラオケに来て早一時間。既に全員が一曲は歌い、多い者はもう三曲は歌っている。それに引き換え樹は未だ一曲も歌わず、ずっと聞き手に回っているのだった。

「実は昨日の海水でやられたのか喉の調子が……」

「さっきからめっちゃ普通じゃねえか」

「オレの聴くジャンルってカラオケにはまず入ってないし」

「最近はどうでもないみたいだよ」

「某ガキ大将並の歌唱力しかなくて」

「むしろそれは聞いてみたいかも」

「前に歌ったら出禁になって……」



「んな訳あるか！」

歌う事を回避する為に色々と言いつくしてみるが、どれも反論されてしまう。こんな時、大抵は味方で居てくれる遥歌も擁護する様子もない。尤も最後の方は最早ボケとツツコミにしかなくなっていったが。

「ぐだぐだ言っていないでアンタも一曲ぐらい歌いなさいよ」

そう言つてリモコンを差し出す咲希。

樹としては聞いているだけで十分なのだが、これ以上断る事も出来そうに無く渋々とそれを受け取る。

気は進まないながらも、とりあえず曲を見てみる。

（ネットじゃ入ったなんてよく見かけるけどホントに入ってるもんなんだな）

曲のリストを見ながら思わず感心する。

樹の聴く音楽は自身が気に入ったものと他者から見れば随分曖昧なものだ。だが、そう公言している様に、気に入った曲ならば流行に関係なくCDを購入していたり、逆に巷で評判のいい曲でも気に入らなければ一切聴かないと、好みがはっきりしているとも言える。

尤も、樹はそれほどテレビを見ているという訳でもない為、聴く音楽といえば、ゲームやアニメのタイアップや、動画サイトで使われている様な曲に偏っているのもまた確かなのだが。

そして、そういった曲はこういった場所ではほぼ無縁というイメージがあつたのだが、最近はそうでもないらしいというのは、インターネット等で記事を読み知識としては知っていた。こうして見てみる事で、本当だったのだと改めて実感する。

ある程度見ると、隣に居るウイシュナにリモコンを渡す。そしてウイシュナもまた隣のエルナへと　と次々と回していく。そうれと同時に曲も次々と追加されていく。

人数が多いためか、途切れる事無く曲は追加されていき、ついには終了時間近くとなる。

「そういえば、ラシル君って歌った？」

ウィシユナがぼつりと漏らす。

樹がりモコンに触っているということ、特に誰も気に留めては居なかったが、数時間居るにも関わらず樹は未だ一度も歌っていないのだった。

「神代、アンタ……！」

「ははは……気のせいじゃないか？」

そう言うてはみるものの、当然通じるはずもなく樹に冷たい視線が突き刺さる。

「それじゃあ、最後はラシルの歌で締めてもらいましょう！」

咲希がマイクでそう宣言し、樹にマイクを突きつける。受け取らない訳にもいかず、マイクを受け取る樹。

樹が受け取ったのを確認すると、曲を選び送信する。

「ちょ……おまつ！」

「大丈夫よ、ちゃんとアンタが知ってる曲だから。一緒にCDも買いに行っただし知らないとは言わせないわよ？」

樹に反論の余地は残されていない様だった、

次第に、前奏が流れ始め、それと同時に周囲の期待も高まる。

（やりにくい……）

自身で招いた結果なだけに言葉にすることも出来ず、内心そう思うだけに留めておく。

やがて前奏も終わり、歌い始める瞬間が刻一刻と近付く。逃げる事も出来そうに無く、樹は覚悟を決めるのだった。

「……恥ずい」

カラオケでの精算を済ませ、夕食の為に移動をする一行。楽しそうに話に花が咲いている中で一人、樹は落ち込んでいるのであった。原因は言わずもがな、先ほどのカラオケだ。

「ラシル君、そんな落ち込まなくても……」

「十分上手だったと思うよ」

「歌いなれてるって感じはあったしね」

本人の落ち込み様とは逆に、周囲の評価は高かった。

樹が歌う事を頑なに拒むのは、本人も言うように恥ずかしい、ただこれだけのことだ。ただし、樹のそれは極端なまでに筋金入りだ。大抵の場合は、抵抗はあれど歌うという行為そのものには問題はないだろう。だが、樹に限っては、この抵抗はかなり強い。その為、人前で歌うということはないとい現在の状態になっている。

更にいうなれば、歌は歌うものではなく聴くものという意識も持っている。なので、人前の有無に関わらず歌うということはほぼないのだ。

気に入った曲は一日中流している事もある為、ある程度メロディ等はわかるとしても、聞き手一辺倒の樹が高評価を得ていることは十分に誇れる事のはずなのだが、本人にとっては重要なことでもない為か落ち込みから立ち直る様子は無い。

「遥歌、今度また神代誘って行こうか」

「これ以上は可哀想な気もするけど……っていうか多分来ないと思うよ？」

「その時は首根っこ捕まえて引きずっていけばいいんだって」

本人の居ないところで次のことを決めていく一行。樹本人の耳にも届いていたが、拒否をする元気もないのか、今更割って入ることはしないのだった。

「そういや、どこまで行くんだ？」

いつの間にか一行は商店街の端まで来ていた。

夕食に関しては、遥歌と咲希の二人に任せてある。その為、樹もどこに行くかは聞いてはいない。だが樹には、この辺りに食事が出るような場所がある記憶はない。

「もうちょっと行った所」

そう言って咲希が入って行った場所は普段馴染みの少ない通りだった。

先ほどまで居た大通りとは打って変わって、全くといっていいほ

ど人気の無い通りを進む一行。店らしい建物もほとんど無い。咲希を信用しない訳ではないが、このような場所に食事が出来る店があるとは到底思えなかった。

「あ、あった」

一行に不安が募り始めた頃、漸く目的地へと到着する。

「ラーメン屋……？よくこんなところ知ってたな」

「美味しいラーメン屋があるって噂で聞いたのよ」

「おいおい……大丈夫なのかよ？」

「前に咲希と食べに来たけど美味しかったよ」

咲希の言葉で、一気に不安になるが遥歌の言葉でそれも杞憂に思えてくる。噂だけならなんと頼りないが、実際に食べた事があるのなら問題ないだろう。そう思う事にして、それ以上は深く追求しない事にする。

「これ食べ終わったらオフももう終わりか」

注文を済ませ、一息ついたところで咲希が残念そうに言うのだった。

「あつという間だったね」

咲希も同感なのだろう。やはり寂しそうに口を開く。

「私らなんか帰ったらまた勉強漬けだよ。あゝ、帰りたくないな」

「ホントね。はあ、思い出ただけでも憂鬱だわ……」

項垂れる受験生二人。

いくら余裕のある二人とはいえ、なにもしなくても大丈夫とはいかない。僅か二日の事とはいえ、ここでの体験は帰ってからのことを考えると憂鬱になるには十分だった。

「でも、ホント楽しかったよね」

「このまま解散つてのも惜しいよな」

これは年下組み。感想の内容とは裏腹に、やはりその表情は曇り気味だ。

「今から湿っぽくなってどうすんだよ。それに……」

ラーメンを啜りながら、樹が口を開く。

「楽しかったならまた集まればいい。そうだろ？」  
少し間を空けて言う。

その言葉で辺りがしんと静まり返る。予想外の反応に、何かおかしいなことも言ったのかと不安になる。

やがて、この静寂に耐え切れなかったのか、笑い声が漏れてくる。次第にそれは広まっていき、樹を除く全員から聞こえてくる。

「アンタにそんなセリフに会わなすぎ」

「ご……ごめん、でも確かに神代君らしくないかも」

咲希と遥歌の言葉に全員が頷く。どうやら全員が同じことを思っていた様だ。

「ったく……やっぱお前ら最悪だ」

そう言って再びラーメンを啜る樹。

俯き表情は見えなかったが、口元は笑っていた。

「もうそろそろかな……？」

時計を確認しながらリシュリーが呟く。

夕食を終え、今は駅構内の改札口に集まっていた。電車までの時間があつたため、ここで待っているのだった。

「そっか。それじゃ、私らはお先についてことで」

「ああ、気をつけてな」

あつさりとした挨拶で済ませ背を向けるエルナ。樹も同じ様に答える。互いが感傷的なのは似合わないと思っているせいか、これぐらいが丁度いいと思えるのだった。

「みんな、色々ありがとうね」

リシュリーも先に改札に向かったエルナを追いかける。

一度振り向き、軽く手を振るとそのまま駅の奥へと消えていく。

「で、そっちはまだいいの？」

樹がウィシュナとアルタスに問い掛ける。

二人はエルナ達とは方向が違うこともあり、まだこうしてここにいるのだった。

「私達もそろそろかな」

時計を確認しながらウィシュナが答える。方向は違えど時間の違いはそれほどは無い様だ。

「あーあ、もう終わりか。なんかつまんねえの」

「次回に期待だな」

「またゲームでね」

ふて腐れながらもどこか楽しそうなアルタス。そして、一足先に改札へと向かう。

「それじゃあ、私も行くね」

「また来なよ」

「いつでも歓迎するよ」

三人に見送られ、ウィシュナとアルタスの二人も駅の奥へと消えていく。これで残ったのは、地元の三人だけとなった。

「それじゃ、帰るか」

この一言を切っ掛けにこの場を離れ、そのまま解散となる。空の円舞曲の初のオフ会はこれで終了となった。

「例のサイト、まだ見てる？」

「ああ、今まさに見てるとこ」

オフ会が終わってから数日。樹はいつもの様に自宅で過ごしていた。パソコンに写っているのは、以前に教えられた自身のギルドのことで盛り上がる掲示板。

オフ会からはすっかり忘れていたのだが、ふと思い出しサイトを開いたところで、友人の橘 湊斗から電話が掛かってきたのだった。「意外な人物が出てきたね」

「ったく、あのお節介ヤローめ」

樹が見ていなかった数日の間に、すこし動きがあったのだった。それまでは、樹達のギルドに対する排斥的な書き込みしかなかったものの、たった一つの書き込みによってぴたりと止まってしまっていたのだった。

書き込みの内容は至って単純なもので、“いつまでもくだらねえ事で盛り上がってんじゃねえ！”と書かれていただけだった。普通ならこのまま荒れそうなものだが、投稿者を見てそれも納得する。

「まさか荊棘の森が出てくるとはね」  
ソニアフォーレスト

湊斗にとってもこれは予想外だったのだろう。驚きというよりも、どこか興奮すら感じられる。

「流石、三大ギルドは違うな」

驚いているのは樹も同様だ。だが、口から出てくるのは皮肉なのだった。

「これで、ウチらと荊棘の森ソニアフォーレストが繋がっていると勘違いしてくれるヤツが出てくればいいんだけどな」

これは本心だった。

三大ギルド。そう呼ばれるほどのギルドとの繋がりがあるとなれば、自分達が復帰したときも、それほど大きな問題が発生する事はほとんどないだろうと考えていた。

ともかく、これで樹の肩の荷が少し軽くなったのは間違いないのだった。

### Chapter 3 - 4 (後書き)

ラシル(以下ラ)「大変だー!」

ハルカ(以下ハ)「どうしたんですかいきなり」

ラ「作者が紙芝居クリエイターにハマリやがった」

ハ「なんですかそれ？」

ラ「ADV系の画面で進行する動画を作るツールだ」

ハ「でも作者のパソコンにそんな動画はなかった様な……」

ラ「素材がないから使い方を覚えるために色々触ってるって程度だからな」

ハ「もしかしてファンタジアナイツが動画化予定のフラグなのでは……？」

ラ「作者は絵が描けないからな。100%ありえん!」

ハ「そういえばそうだった……」

ハ「それじゃ、なんでそんなツールに触ってるんですか？」

ラ「MUGENストーリー動画を作るらしい……」

ラ「まあ、素材がないからまだ作り始めてはいないが、シナリオとかは考えてるみたいだな」

ハ「因みに、こっちと同時進行って……」

ラ「出来るわけが無い!」

ハ「デスヨネー」

ラ「更に、今月出るグ　ランサーも買うみたいだし、ペースが上がる要素が一切ないという……orz」

ハ「四角じゃ伏字の意味ないですよ」(汗

ラ「作者が、とにかく顔グラが足りないから、アイコン、もしくはイラストがあるサイトがあれば是非教えて欲しいって言ってた」

ラ「……ってなんでオレがそんな告知をしなければならなんだ」

ハ「やりたい放題ですね」

ハ「とりあえず今日のキャラ紹介にいきましょう」



ラ「今回はソレルこと綾瀬 咲希」

ハ「ゲームでは空の円舞曲の新人で、私とラシル君のパーティーメンバーでもあります」

ラ「リアルではオレらのクラスメイトだ。もともとそんなに付き合いはなかったんだけど、ファンタジアナイツを始めた事を切っ掛けにいつの間にかツルむ様になってたな」

ハ「私は中学時代からの友達なんだけどね」

ラ「性格は正反対って感じだけど不思議と二人とも気は合うみたいだな」

ハ「紹介はこれぐらいかな？」

ラ「だな。そーいや、今回本編に触れてないしちよつと触れとくか」

ハ「今回も酷いグダグダだったぐらいしかない気が……」(汗)

ラ「戦闘とかないから余計にな」(汗)

ハ「楽しそうな様子が全然伝わってこないし」

ラ「まあ、次回からはネットでのことがメインになるから今回よりはマシになる様な気がしなくもない」

ハ「素直にいつも通りって言いましょうよ。まあ、そんな事言ったら人が減りそうですけど……」(汗)

ラ「そんな感じの次回もよろしく」

## Chapter 4 - 1

薄暗いダンジョンの中。ラシルは一人、モンスターと対峙していた。数は三匹。だが、そんな状況にも関わらず、ラシルは迷う事無く切り掛かる。

モンスターの攻撃を避け、隙を見つけては攻撃する。

いつしか当たり前となったこの動きを、いつもの様に繰り返す。ラシルにとって多対一の戦闘は最日常と言っても過言ではない。それはパーティーを組んだ現在でも言えることだ。

「ふう、まず一匹」

数度の攻防を繰り返し、ついにはモンスターを一匹倒す。だが、それと同時に背後から今にも攻撃が繰り出されようとしている。回避　そう考えるが、すぐにそれも無理だと気付く。

勿論、一撃でやられてしまう様な状態ではない。回避を諦めると、次にどう動くか考え始める。

その時だった。

モンスターの後方から矢が飛んでくる。そして、それは次々とモンスターに命中していき、そのまま撃破となる。

残るモンスターは一匹。こうなればあとは問題なかった。これまでに蓄積したダメージもあり、簡単に最後の一匹も倒してしまう。

戦闘が終わると同時に、二人のプレイヤーが駆け寄ってくる。先ほど矢を射た張本人のハルカとその仲間のソレル。二人ともラシルのパーティーメンバーだ。

「珍しくダメージ受けかけてたじゃない。最近ソロじゃないから腕落ちたんじゃないの？」

「毎回毎回無傷で済むわけ無いだろ。たまたまだよ」

一見すると、嫌味でも言われているかのような光景だが、ソレルとラシルのやりとりは大抵がこの様なものだ。今更誰も気にすることはない。

「それにしても、マスターも無茶言つよな」

ラシルが思わず愚痴をこぼす。

それは前日のことだった。

「ボスでも狩りに行くか」

ライラックのとある建物の中。ギルド“空の円舞曲”<sup>ワルツ</sup>の溜まり場となつて居るこの場所で、いつもの様にメンバー達は集いのんびりと過ごしていた。そんな中、唐突にエルナが言ったこの一言が全ての始まりだった。

「マスターいきなり何言い出すんだよ」

ラシルが呆れてそう返す。だが、この反応は無理も無い。

オンラインゲームにおけるボスモンスターとは、高レベルのパーティーが倒しに行くような、特別に強いモンスターのことを指す。

空の円舞曲がレベル上げを重視した、高レベルプレイヤーの集まりのギルドなら誰もこの様な反応は示さないだろう。だが、実際にはその間逆。自身のペースでのんびりと楽しく過ごす事を主としたギルドだ。とてもではないが、戦いたいから行こうと言つて行けるようなものではない。

「オレらが行つたつてあつさりと返り討ちに合うのがオチだぞ」

ラシルの言葉に周囲も頷く。これだけでも、いかに無茶な提案かが窺える。

「ボスつてそんなに強いのか？」

ハルカだ。

この中で、ゲームを始めて間もないハルカとソレルが話しについて来る事が出来ないで居た。ボスモンスターと戦う経験などないので、それも無理は無い。

「仮にここに居る全員のレベルがマスターぐらいになれば相手次第じゃ希望が見えてくるってぐらいだな」

「それって今の私達はかなり無謀なんじゃ……？」

ラシルの大まかな説明で二人もエルナの提案がどれほど無茶か通

じた様である。

「無茶なのはわかってるよ」

どうやら、本人にも自覚はある様だ。だからと言って、大人しく中止する様な性格でもないのだが。エルナはそのまま言葉を続ける。「でもさ、私らそろそろ休止だし最後にちよつと無茶もしてみたいって思ってたね」

こう言われてしまうと、だれも反論出来ない。

「しょうがないわね、たまにはエルナの無茶に付き合いましょうか」初めに口を開いたのはリシュリーだ。渋々ながらも了解する。それに合わせ、他の者も賛成するのだった。

「それじゃ、明後日の夜に集合ね」

「明後日？すぐに行くんじゃないのか？」

思わずラシルが聞き返す。だがそれは、ラシルだけでなく、全員が思っていたことだった。

行くのなら今晚か、遅くても明日ぐらいだと思っていた。一日空ける事に何か意味でもあるのかとも思うがそれらしい事も思い浮かばない。

「さっきラシルも言ってたろ？」

エルナがそう答える。

自分は何か言っただろうか？ラシルは思い返してみるが、思い当たる節はなにもない。

「レベルが足りないって言ってたろ？だから、みんな明後日の夜までにしっかりレベルを上げておく事」

「ほとんど意味ねえだろ、それ……」

MMORPGに分類されるオンラインゲームのほとんどはオフラインでのゲームの様に、簡単にレベルが上がるということはない。勿論ファンタジアナイツも同様だ。

低レベルならまだしも、ある程度レベルが上がってくると、一日費やしてモンスターと戦っても数えるほどしかレベルは上がらないや、数えるほども上がるならまだいいだろう。更に高レベルにな

れば一日に一つ。果てには数日、数週間で一つとなってくる。

それほど掛けてレベルを上げて也得られる恩恵はそれほど大きくは無い。

「どうせ他にもパーティーは居るだろうしなんとかなるだろ」

当のエルナは随分と樂觀的だ。だが、彼女の言葉はなかなか的確を射ているのも確かだ。結局そのまま決定となり、今に至っているのであった。

「しかし、流石に疲れたな」

樹は伸びをしながらそう呟く。

ボスモンスターとの戦闘を明日に控え、昨日からずっと三人でダンジョンに籠りっぱなしなのだ。

今日も、ログインをして三時間ほどだが、ログイン時に街に居た事を除けばこのダンジョン以外の場所には行っていないのだった。

「ちよつと休憩しない？」

「賛成。折角だしちよつと出ようよ」

「いいな。ちよつと気分転換するか」

ハルカの提案に二人とも賛成する。

戻ってきたときの事を考え、その場でログアウトする。樹は、他の二人がログアウトしたのを確認すると、自身もログアウトし、そのままパソコンの電源も落とす。

手早く準備を済ませると、早速外へと出かけるのだった。

樹が向かった先は、全国チェーンのバーガーショップだった。

「意外と時間食っちゃったな」

樹はここに来る途中に、ついでにと買い物をしていた。その為、少し遅めの到着となっていた。特に時間を決めていたわけではないが、咲希が文句を言っている光景が目に見え浮かぶのだった。

店内に入ると、平日にも関わらず、随分と席が埋まっていた。学校で見たことがある顔が疎らに見えることからほとんどが学生なのだろう。安く済み、長時間居られ、暑さも凌げるということこ

うして集まってきたいるのだろう。

（みんな考えることは一緒か）

思わずそんな感想が出てくるのだった。

注文に行く前に、辺りを見回してみる。間もなくして目的の人物を見つけそのまま近寄る。

「よ、お待たせ」

「あ、神代君」

「随分遅いけど何やってたのよ？」

声を掛けると、予想通りの反応が返ってくる。

「悪い悪い。お詫びに何か一つなら奢るからそれで勘弁してくれ」  
あらかじめ考えておいた答えを言う樹。

「ホント？じゃあね」

樹の予想通り一気に期限のよくなる咲希。

（すっかり慣れたな、オレも）

少し前まではほとんど交流も無かったというのに、今ではすっかりこの調子だ。改めてそう考えると、内心驚くのがあった。

「神代君、前のオフ会でも随分使ってたけど大丈夫？」

「多少は余裕あるからな。楠木も遠慮するな」

咲希とは対象的な反応を示す遥歌。こんな光景もすっかり見慣れたものになっていた。

「そついや、別々に行動してみてどうだった？」

注文を済ませ、戻ってきた樹が問い掛ける。内容は先ほどのダンジョンでのことだった。

普段なら三人で共に行動をしているのだが、今回は樹がソロ、遥

歌と咲希がコンビという形でレベル上げに励んでいたのだった。

「いや、やっぱいっぱいはいだわ」

「なんとか合流出来たって感じだったもんね」

二人の返答から、苦労していた事が窺える。それもそのはずだ。すっかり恒例となっているが、樹とダンジョンに行く場合は適正レベルよりも高いレベルのダンジョンにいく場合がほとんどだ。特に

今回はボスモンスターとの戦闘準備も兼ねているだけあり、普段よりも厳しい所に行っていたのだった。

三人で居るからこそ 正確に言えばラシルが居るからこそだが なんとかなっている状態で、二人だけで放り出されてはこうなるのは当然と言えた。

「そもそも、なんで私らがあんなとこで放り出されなくちゃいけないのよ？」

理由も告げられず二人にされたのだ。咲希の怒りも当然と言えるだろう。

「オレが居たら二人とも立ち回りとか覚えられないだろ」

「神代君、出来ればもうちょっと詳しく……」

咲希の様子を気にすることもなく答える樹だが、あまりに簡潔すぎるそれは二人には一切伝わる様子もない。

「えっと、まずギルドで一番レベルが低いのはオレらだ。これはわかるな？」

樹と組む事で、初心者の二人も随分レベルは上がっている。だが、基本的にはゆつくりとしたペースでゲームをしているため、アルタスやウィシユナほどのレベルには未だ届いていないのだった。

この樹の問いに頷く二人。それを確認すると、樹は話を続ける。

「そんなオレらが多少レベルを上げたところではつきり言って無駄な訳だ」

「レベルを上げにダンジョンに籠ってたんじゃないの？」

遥歌の疑問はもつともだろう。レベルを上げるために普段よりも厳しいダンジョンに行っていたのだ。レベルを上げるのが無駄だというのなら、これまで通りの場所でも問題は無いように思える。

「そりや完全に無駄って訳でもないけどな。でも、オレ達が多少レベルを上げたところで即戦力って訳でもないだろ？」

樹の言葉に頷く二人。ボスモンスターの強さはわからない二人だが、樹の言おうとすることは理解出来る。

「そんな足手まといのオレらが必要以上に足を引っ張らない為には、

強い敵との立ち回り方を覚えた方法がいいと思っただけ」

若干皮肉混じりにそう言う樹。だが、それは同時に本心でもある。レベルも低く、装備品も心許ない状態の樹達では仲間の盾となり相手の攻撃を引き付ける事も、確実にダメージを与えて行く様なアタッカーとなる事も厳しい。いや、無理と言っても過言ではないだろう。

「まあ、オレらに出来る事なんてのは死なない事ぐらいだしな」

そう言っただけこの話を打ち切る。代わりに別の話題を切り出し、解散となったのは二時間も後のことだった。

そして夜。夕食と風呂を終えた樹は早速パソコンの前へと座る。

足手まとい。

昼に皮肉を込めて言ったセリフが蘇る。遥歌にも咲希にも、そして自分自身にも。誰に言ったわけでもないセリフだが、思い出す度にそれが事実だと思い知る。同時にそれはどうしようもない事だとも理解する。だからと言って、何もしないといことが出来るかといえ、答えは否だ。

「もうちょつと足掻いてみるとしますかね」

目いっぱい皮肉と自嘲を込めてそう呟くと、ハルカとソレルの二人を伴いダンジョンへと向かうのだった。

「それでボス狩り？無茶するね」

一日経ってボス狩り当日。時刻は午後一時を過ぎた頃。神代家に遊びに来ていた湊斗の率直な感想がこれだった。

「珍しく昼間からログインしてダンジョンに籠ってるから何事かと思っただけ」

基本的に樹のプレイする時間帯は夕方から夜に掛けてがほとんどだ。それは休日でも変わらない。だが、湊斗が来たときにはそれは間逆の、朝からログインし、レベル上げに勤しむ樹の姿があった。事情を聞き、漸く納得をした湊斗なのだった。

「んな大袈裟な……」



呆れたように返す樹。

だが、言われてみると朝からこうしてレベル上げに没頭しているというのも確かに珍しく思えてくる。

「それで、勝算はあるの？」

「ギルドの状況見たろ？まず無理。他のパーティー頼みだよ」

「他人次第なんて神代にしては珍しいね」

「オレ達だけじゃどうにもならんからな。こうもなるさ」

そんなやり取りが続く。

「それで、今日は宿題だっけ？」

「うん。一応答え合わせも兼ねて見直しておこうと思ってね」

しばらくファンタジナイツの話題が続いたところで、漸く本題へと入る。

二人は現在夏休みということで、例に漏れず大量の宿題を出されている。尤も、二人とも既に宿題自体は終わらせている。後は、学校が始まった時に提出するだけだ。だが、適当に答えを書いていたのでは再提出となる。その為、樹と湊斗はこうして答え合わせも兼ねた最終チェックをしているのだった。

「これやると、もう休みも終わりって感じだよな」

自身と湊斗の問題集を見比べながら、そう呟く樹。

今回に限らず、長期休暇の終盤にはこうして二人で答えあわせをしているのが常だった。その為、この作業を始めると、どうしても休みの終わりを実感してしまうのだった。

作業は夜まで続き、解散となったのは、日が完全に落ちてしまつてからだった。

「予想以上に時間食つたな……。これじゃレベル上げって時間はなさそうだな」

湊斗を見送るため、外に出ていた樹は、湊斗の姿が見えなくなる  
と一人そう呟く。

当初の予定では、夕方ぐらいには作業を済ませギリギリまでレベル上げをするつもりだった。だが、予想以上に時間が掛かってしま

い、最早その時間は残されていないのだった。

「まあ、なんとかなるか」

そう言って、僅かに星の見える空を眺めると部屋へと戻っていく。  
そして、集合時間を迎えるのだった。

## Chapter 4 - 1 (後書き)

ラシル(以下ラ)「お待たせしました。ついに四話目に突入です」  
ハルカ(以下ハ)「今回は引つ張れなかったのでいつもより短めです」

ラ「今回の話はボス戦!」

ハ「作中で随分無茶だつて言つてたけど、ネットゲームのボス戦つてそんなに厳しいんですか?」

ラ「まあ、モノによるとは思うけどな。少なくとも、作者のやつてたネットゲームはかなりキツイぞ」

ハ「因みにどれぐらい?」

ラ「当然相手にもよるけど、最高レベル99でレベル80ぐらいなら普通に足手まといだな。まあ、作者の場合装備品とかも揃つてないから余計にそう感じてるだけかもしれんがな」

ハ「随分厳しいんですね……」(汗)

ラ「参考程度にはしてるけど、全く一緒って訳じゃないから雰囲気だけでもわかつてもらえればって感じたな」

ハ「それじゃ、そろそろキャラ紹介にいきましょうか。今回は橘湊斗君です」

ラ「オレ達のリアル側の友人だな。オレは作中の一年前 高校一年からの付き合いだ」

ハ「私達は数ヶ月前つてぐらいだね」

ラ「オレがファンタジアナイツを始める切っ掛けになったヤツで、前に居たギルドのサブマスターでもある」

ハ「今はは休止中だからゲーム内で会う事はないけどね」

ラ「性格は割りと温厚って感じたな」

ハ「でも意外にもみんなの纏め役だったりもします」

ラ「結構言いたいことははっきりと言うタイプだからな」

ハ「大体こんな感じかな?」

ラ「だな」

ハ「そういえば、紙芝居クリエイターはどうなったんですか？」

ラ「最近は何も触ってないな」

ハ「意外ですね。前回のハマリ具合からするとずっと触ってそうだったのに」

ラ「素材が無いしな。今作っても、後から全部画像を差し替えていかないといけないし」

ハ「それは結構な手間になりますね……」

ラ「どうせMUGEN関係も揃えないといけないしな」

ハ「完成はまだまだ先になりそうですね」

ラ「こっちは忘れた頃について感じだな」

ハ「それじゃあ、今回はこの辺で」

ラ「次回もよろしく」

## Chapter 4 - 2

「みんな集まったね？」

空の円舞曲<sup>ワルツ</sup>の溜まり場となっているライラック中心部にある建物の中。エルナは周囲を見回しながら言った。

「ちよつと時間は早いけど、早速行くよ」

エルナがそういうと同時にリシュリーがトランスゲートの魔法を唱える。

空の円舞曲の面々が次々と新たに出来たワープポイントへと乗り込んで行く。画面が暗転し、ロードが終わった先に広がっていた光景は、辺り一面が雪に覆われた町だった。

「ここ……ルナリアか」

ルナリア 舞台となる大陸の北方に位置する町で常に雪に覆われた景色が特徴の町だ。また魔道の町とされており、魔法に関するアイテムが売られている事もまた特徴の一つだ。その為か あ るいは“魔道の町”という公式の設定を尊重をしたプレイヤーによるものなのか。ともかく、この町には魔法での戦闘を主とするプレイヤーがあつまるのだった。

「ここに来たって事はスノーフレークのボスか？」

「そういうこと。それじゃ、早速向かうよ」

ラシルの問い掛けに当然と言わんばかりに答え、先導して歩き出すエルナ。

これまで、リシュリーを除き、空の円舞曲のメンバーは誰もどのボスモンスターと戦うのかすら知らされてはいなかった。このラシルとエルナのやり取りで漸く全員が目的地を知ることとなった。「でもさ、なんでここなのさ？ここって一番弱いつて訳じゃないだろ？」

アルタスが問い掛ける。

通常のモンスターよりも強力なボスモンスターといえど、その強

さはそれぞれだ。勿論、最弱のボスモンスターの所に行ったところで無茶である事には変わりはないが、下手な所に行くよりはよほいいだろう。

「戦いやすさなら、多分ここが一番だからね」

エルナも考えなしで決めた訳ではない。攻略サイト等から情報を集め、戦いやすそうな相手を選んだ結果が今向かっているスノーフレイクと呼ばれるダンジョンなのだった。

尤も、エルナのこの一言だけでは漠然としか伝わっていない様だが。

「このボスは攻撃力と防御力だけだからな」

ラシルがフォローするかのように、ボスの詳細を伝える。

「魔法の使用頻度はそんなに高くないし、使ってきたも詠唱時間はあるし、威力も他のボスに比べたら威力は低いほうだし」

このダンジョンのボスの特徴を一つずつ思い出していく。

「確かに戦いやすい方だと思うぞ」

この言葉で、一行になんとかなるかもれないと希望が湧いてくるのだった。

町を抜け、しばらく進んだところにその場所があった。雪原の一角にある洞窟。ここがスノーフレイクと呼ばれるダンジョン。今回の目的地だ。

「へえ、こんな所もあるんだねえ」

中に入り、これまでとは違う様子に声を上げるハルカ。

この洞窟　スノーフレイクダンジョンは雪原の中にある為か、壁や床は凍りついたかのような外見となっている。また、洞窟内だというのに明るく、他のダンジョンとは少し違う雰囲気となっていた。

これまで、ハルカが行ったダンジョンと言えば、薄暗い洞窟や地価空洞といったものがほとんどだ。こういった雰囲気のあるダンジョンは珍しいのだろう。

ボスモンスターの出現する最下層を目指し、一行は奥へと進んで

しく。町の側にあるダンジョンなだけに、他のそれとかわらず上層階層で苦戦することはない。そして、そのまま地下四層目まで到達する。

「ここの敵ってそんなに強くないのね」

地下四層に到達したところでソレルが口を開く。

確かにこのダンジョンの難易度はそれほど高くは無い。普段ラシルと自身のレヘル以上のダンジョンに行っているだけに尚更そう感じるのだろう。尤も、一番の原因は七人ものメンバーでパーティーを組んでいることなのだが。

「ここは結構簡単なほうだしね」

「オレらにはこの辺から厳しくなってくるけどな」

エルナとラシルが答える。

そう話している内にモンスターが一行へと近付いてくる。

「お、丁度いいところに。ソレル、試しに行ってこいよ」

ラシルもモンスターに気付き、ソレルをけしかける。

「アンタ、さつき自分で厳しいって言ったじゃない……」

「いいからいいから」

「……まあ、いいけど。ハルカ、行こう」

釈然としないまま、ハルカを伴いモンスターへと挑む。

「ねえねえラシル君、大丈夫なの？」

ソレル達を見送りながらウイシュナが問い掛ける。その声は不安そうだ。それも無理はない。ウイシュナはレベルこそそれほど高くは無いものの、ゲームをプレイしている期間はソレルやハルカに比べると随分長い。二人との実力差は十分に理解しているのだった。

「いや、大丈夫じゃないだろう」

「じゃあヤバイじゃねえか！」

事も無げに答えるラシル。その答えにアルタスが慌てる。

「だから、いつでも助けに行けるようにしないと　ね？」

リシュリーのその一言でアルタスもウイシュナもとりあえずは落ち着きを取り戻す。そして、戦況を見守る様に二人の方へと視線を

向けるのだった。

一方、ソレルは互いに攻撃が届かない程度の距離を置きモンスターと対峙していた。その手に構えているのは、以前のギルド入団試験の時に手に入れたルーンソード。

相手の情報は一切無し。そんな状態のせいか責める事が出来ずにいた。だが、モンスターにとってはそんな状況などお構いなしだ。一歩、また一歩と近付いてくる。そして、それは悩む時間がなくなっていくことを嫌でも理解させられる。

そんな中、ソレルの後ろでハル力が矢を番え　放つ。それが合図となった。

ハル力の攻撃と同時にモンスターとの距離を一気に縮める。一回、二回と攻撃を繰り返し出し、ここで一旦距離を取る。ラシルに随分と鍛えられたせいかな、こういった動きも随分と様になっていきっていた。若干の余裕を持ってモンスターからの攻撃を回避する。

「ちょ　固っ！」

ソレルの口から思わずそんな言葉が漏れる。

ソレルが与えたダメージは三桁にも満たない程のダメージだった。最近レベルも上がり、苦戦はしても善戦出来るだろうと考えていた。だが、そんな予想はあっさりと覆され、挑むにはあまりに無謀だと思い知らされる。

「ソレル、これはマスター達に手伝わしてもらわないと無理なんじゃない？」

そう言いながらも、弓を打つ手は緩めない。

ハル力の与えるダメージもソレルと大差はない。二人で戦っているとはいえ、この状態では無謀な事には変わりない。更に言うならば、ハル力の場合、攻撃に矢を消費する為、攻撃する回数に上限がある。勿論、簡単になくならないように大量に矢を持ち歩いてはいるものの、モンスター一体に大量の矢を消費することは得策ではない。

「マスター、私達じゃ無理　」



ハル力がそこまで言った時だった。突然炎の魔法が炸裂する。それと同時にラシルとアルタスが切り掛かる。

予想外の状況に呆気にとられ、眺めているしかない二人。

「ほら、アンタ達も見えてないで攻撃に参加する」

エルナはそう言い残すと、自身もモンスターへと向かっていく。

この言葉で二人も攻撃を再開し、間もなくしてモンスターの撃破に成功するのだった。

「お疲れ。どうだった？」

「きついなんてもんじゃないわよ。アンタ無茶させすぎ」

「でもみんな助けに来てくれてよかったよ」

予想以上の強敵に二人はすっかり疲れた様子だ。

「まあ、この先はこんなもんじゃないけどな」

ラシルは楽しそうにそう言うのと奥へと進み始める。それとは逆に、ハル力とソレルはこの言葉ですっかり意気消沈となるのだった。

そんな二人の様子を余所に、奥へと進んで行く一行。だが、これまでと違い、モンスターとのレベル差からハル力とソレルが戦力と呼ぶには些か頼りない状態となり、戦闘が厳しくなる。

一方、レベルがほぼ同じのラシルは装備品の関係もあり、この階層でも戦う事は出来た。だが、与えるダメージは決して満足のいくものではなく、なによりほんの数回ダメージを受けるだけでやられてしまう。事実、地下四層に着てから既に三度はやられている。それでも、持ち前のプレイヤースキルを生かし、立ち回ることなどでなんとか戦闘に貢献しているのだった。

「ルナリアのボス部屋は真ん中だっけ？」

現在、一行は五層目まで来ていた。少し進み、モンスターとの交戦を終えたところでラシルが口を開いた。

ここ、スノーフレークダンジョンも町の近くにあるダンジョンだ。その為、他のダンジョンと同様に町の名前で呼ばれることがほとんどだ。ラシルが“スノーフレーク”ではなく“ルナリア”と言ったのもこの為だ。

「ボス部屋？」

聞き慣れない単語に、聞き返すハルカ。

「ボスはその辺を歩いてるわけじゃなくて、専用の部屋にしか出てこないんだ。で、ボスが居る部屋ってことでボス部屋って訳」

「因みに、ここだと真ん中辺りにある部屋がそう」

ラシルとエルナの説明が終わる頃、丁度目的地へと辿り着く。

「へえ、意外と人が居るもんだな」

「これなら私達でもなんとかなるかもね」

中央部の様子を見て、ラシルとエルナが口を開く。

そこにあつたのは、ボス部屋の前で十数人ものプレイヤーが集まっている光景だった。

「これみんなボス狩りかよ」

「ちよつとしたイベントって感じだね。ボス狩りっていつもこんな感じなの？」

アルタスとウィシユナもこの光景に感心するばかりだった。二人もボスモンスターとの戦闘は今回が初めてだ。これほどの人数が集まる場所に遭遇など何かのイベント意外ではそうそう無い。二人は小規模なイベントに参加するかのような気分となっていた。

「イベントはイベントでもギルドイベントみたいだよ」

リシュリーの言葉を受け、ここにいるプレイヤーそれぞれにカーソルを合わせてみる。キャラクターの名前と共に表示されたギルドの名前は、全てが同じものを映し出していた。

ソニア  
フォーレスト  
「荊棘の森……」

「三大ギルドじゃねーか……！」

出会う事になるとは全く考えていなかったその名前に全員いや、正確にはハルカとソレルを除くメンバーが驚きを隠せないでいた。

「そんなにすごいギルドなの？」

「っていうか三大ギルドってなに？」

初めてまだ数ヶ月のハルカとソレル。これまでの活動がずっとソ

ロプレーであつたのなら情報を得ていたかもしれないが、周囲の環境もありこれまで積極的に情報収集をするということとはなかった為、二人にとって“三大ギルド”と“荊棘の森”はただの聞きなれない単語でしかなかった。

「フアンタジアナイツには特に大きなギルドが三つあるんだよ」

「その内の一つが荊棘の森って訳」

事情が飲み込めない二人に、ラシルとエルナが説明する。だが、二人がどれだけ理解したかは些か怪しいものがあつた。

「このゲームをやつてる人じゃ知らない人は居ないって言われてるぐらいだね」

「噂じゃそのギルドの一員になるのが最終目的の人もいるとか」

「オレはゲームマスターにも顔が利くなんて話も聞いたことあるぞ」

他にも、次々と三大ギルドにまつわる噂話を話していく一行。その内容は様々で、明らかにデマあるようなものから信憑性のありそうなものまで多岐にわたつていた。

「とにかく凄そうなのはよくわかつたよ……」

そんな面々に苦笑しながら答えるハル力だつた。

「まあ、三大ギルドだからって私達が遠慮する事は無いさ。私らも待とうか」

エルナはそう言うと、ダンジョン中央部の一画を陣取る。他のメンバーもそれに習い、エルナの近くに集まると、そのまま座り込むのだつた。

「すぐに行くんじゃないの？」

今回の目的地は、厳密に言えばこの場所ではない。この先にあるボスモンスターが待つ部屋だ。だが、この先に進む様子は一切ない。思わずソレルが問い掛けるのだつた。

「まだ入れないんだよ」

「前にボスを倒してから一定時間経たないと、入り口が開かないからね。今は時間待ちって訳」

「オレいつの間にかすっかり説明役だな……」

ソレルの質問に答える、ラシルとエルナ。だが、そんな状況がすっかり定番となっていることに溜息を吐くラシルだった。

「なあ、もしかして、アンタらもボス狩り？」

そう話している内に、一人のプレイヤーが話しかけてくる。

男性型のキャラクターで名前はヨシノ。クラスは特殊クラスの一つインペリアルナイト。勿論、彼も荆棘の森のメンバーだ。

思いもよらない相手に思わず黙り込む。

「そうだけど」

「ふうん。強いのか？」

「アンタ達に比べればまだまだだよ」

エルナとヨシノの淡々とした会話が続いていく。

「だろうね。下位クラスに　そもそも戦闘系クラスですらないのも居るみたいだし」

ハルカとソレルの方に目を向けながらそう言い放つヨシノ。

荆棘の森のメンバーは特殊クラスと上位クラスで編成されている。その中で、下位クラスから特殊クラスまで様々なクラスの者達で編成された空の円舞曲のメンバーは異色とも言えた。これほどのメンバーの中では、中位クラスのウイシュナやアルタスですら浮いた存在となっているのは間違いなかった。

「まあ、せいぜいウチの足は引つ張らないでくれよ」

そう言い残すと背を向け自分達のメンバーの元に戻ろうとするヨシノ。今にも高笑いの一つでも聞こえてきそうな雰囲気だ。

「押さえないよ。特にラシル」

空の円舞曲の面々が何を言うよりも早く、エルナが静止を掛ける。一人念を押されたラシルは文句を言いたくなるが、ここは抑える。

ここで言い争いを起こしたところで、得策で無い事も確かだ。特に相手が三大ギルドともなれば尚更だ。怪しげな噂の真偽はともかくとしても、周囲への影響力は確かだ。そんな所を敵に回した所でいいことはない。

「ほう、ウチはいつからそんなにえらくなっただんだ？」

見慣れない人物がこちらに近付いてくる。クラスこそヨシノと同じインペリアルナイトだが、その外見は大きく異なる。非常に巨大な体格をしており、細身のキャラクターが多いこの中ではよく目立つ。

体格を除けば他は周囲のプレイヤーとさほど変わらない。そのはずなのだが、不思議と存在感は強い。

（アイツは……まさか！）

突然現れたこのプレイヤーに心当たりがある様子のラシル。内心慌てるが、声は出さない。

「ったく、すまないな。三大ギルドなんて呼ばれてるせいか、どうもああいうのが多くてな。アイツにはよく言って聞かせておく」

「なにもマスターが頭を下げなくても」

このプレイヤーの突然の行動に慌てるヨシノ。だが、それ以上に、空の円舞曲の面々はヨシノの言った言葉に驚く。

「マスターってまさか……」

「荆棘の森のマスターをしてるトラデスだ。よろしくな」

トラデスは改めて自己紹介をするのだった。

「ん？そのマジックナイトのアンタ、もしかして」

「いや、初対面の三大ギルドのマスターに話しかけられるなんて光栄だな」

明らかに慌てた様子のラシル。

事実、樹はモニターの前で焦っていた。キーボードで打ち込みながら、トラデスに対してメッセンジャー用のウィンドウを開き急いでチャットを入力する。

「トラデス、余計な事言うな！」

「じゃあ、やつぱりお前……ユグドか！？」

表には出さないものの、十分過ぎるほどに驚いていた。それも無理は無い。現在休止をしているはずのプレイヤーがこうして目の前に居るのだ。

当然ながら、ラシルの前身であるキャラクター　ユグドが復帰

したとも、彼の運営するギルドが活動を再開したとも聞いた事はない。勿論、ラシル自身もトラデスに別のキャラクターでログインしているということは話した事はない。

全く予想していなかっただけに、トラデスの驚きは相当なものだろう。

「なんでわかったんだ？」

ラシルは当然の疑問を指摘する。

樹が他のキャラクターを使ってログインしている事を知っているのは、エルナと湊斗の二人だけだ。だが、先ほどの様子を見る限りエルナと面識があるとも思えない。

一方、湊斗とトラデスは確かに知り合いではある。だが、湊斗が勝手に言いふらすとも思えない。

どのような経緯でバレてしまったのか、ラシルには全く見当がつかなかった。

「何でも何も……名前がそのままじゃないか」

そう言いながら溜息を吐くトラデス。

ユグドとラシル。この二つの名前は神話に出てくる世界樹から取った名だった。尤も、それぞれ単体でしか聞かなければそれを連想されることはまずないだろうと考えていた。

今回の様に、簡単に連想されてしまうのはラシルにとっても意外だった。

「で、休止中のお前がなんでここに？それも別のギルドで」

「まあ、色々あつてな。すぐにやめるつもりがこうなったんだよ。

問題を起こしてる訳でもないし、黙っててくれると助かるんだけど」

「ああ、それは構わんさ。ウチとしては元々お前達を非難するつもりもないしな」

「マスター！」

「ラシル！」

丁度二人の会話が一段落着いた時だった。互いのギルドのメンバーから呼び出される。どうやら時間の様だ。

「まあ、せいぜいがんばれよ、ラシル」

「あんたには期待してるよ」

互いにそう声を掛けると自分達のギルドの下へと戻る。

荊棘の森のメンバーが入ったのを確認すると、空の円舞曲の面々もそれに続くのだった。

## Chapter 4 - 2 (後書き)

ラシル(以下ラ)「お待たせしました、4 - 2話です」

ハルカ(以下ハ)「予想以上に長くなったので予定より短くなっちゃいました」

ラ「本来はボス戦を終わらせる予定だったしな」

ハ「それが無くなったから今回は説明ばかりになっちゃいましたねえ」

ラ「あとは、新キャラが出て来たぐらいか」

ハ「あと、ラシル君のこともちよつと明かされましたね」

ラ「とうとうオレの元の名前がバレてしまった」

ハ「この調子でラシル君がもと居たギルドの名前が出る日も……」

ラ「それはもうちよつと先の予定だ」

ハ「そーなのかー」

ラ「どこぞの宵闇妖怪か！そんなことよりキャラ紹介するぞ」

ハ「今回は空の円舞曲のサブマスター、リシュリーさんです」

ラ「ゲーム内ではマスターと組むウィザード(魔道士系上位クラス)で、過去に僧侶系もしていたことから、魔法での攻撃、支援が出来るのが特徴だ」

ハ「ギルドで狩りに行くときなんかは、ウィシュナちゃん以上のパーティーの生命線を担ってます」

ラ「リアルでもマスターとは友人同士らしく、そつちでもよく一緒にいるみたいだな」

ハ「よく一緒に受験勉強してるしね」

ラ「因みに、リシュリー姐さんも学業は優秀らしくて、夏休み中に遊んでられるぐらいの余裕はあるみたいだな。マスターと違ってこっちは納得」

ハ「マスターに怒られますよ……」(汗)

ラ「今回はこんなもんだな」



ハ「そういえば、作者さんの買ったグ      ランサーはどうなったんですか？」

ラ「とりあえず買ってソッコーで追加シナリオの方はクリアしたぞ」  
ハ「それだけ……？」

ラ「不幸な事故が起きてな……M2があるからロクにセーブもしないで、常にスタンバイ状態でゲームを続けてたら消えてしまったな……」

ハ「やる気なくなっただけですね」(汗)

ラ「今じゃPSPはすっかりアニメ観賞用になってるよ」

ハ「そーなのか」

ラ「それはもういいって」(汗)

ハ「それじゃあ、また次回もよろしく」

## Chapter 4 - 3

暗転した画面が切り替わる直前、まずはBGMが流れ出す、それまでのダンジョンとは別の、ボスモンスターとの専用戦闘BGMだ。それと同時にSEも混じって聞こえてくる。先に入った荊棘ソニデの森フォーレストのメンバーが戦闘をしているのだろう。

「それじゃ、私達も行こうか」

エルナの一声で、全員が更に奥へと足を進める。

細い通路を少し進むと、大きな部屋へと辿り着く。そして、その部屋の中央にそれは居た。

十数人ものキャラクターが集まりながらも、決して見失う事はないその巨体。人の形をしていながらも、決して人とはいえない風姿。見た目の材質からはゴーレムというよりもロボットという単語がしっくりくる。この巨大なモンスターこそ、ここスノーフレークダンジョンで待ち構えるボスモンスター“ポセイドン”だ。

ポセイドンはゆっくりと腕を振り上げると、そのままなぎ払う。

周囲に群がっていた、前衛を勤めていたプレイヤーは全員がダメージを受ける事となる。

尤も、それだけで攻撃が止むかというところはない。後方に控える回復要員のプレイヤー達が次々と前衛組の傷を癒していく、  
「へえ、ちゃんと統制取れてるんだねえ」

荊棘の森の戦闘の様子にエルナが感心する。

「相手の動きが遅いから何とかなる戦法だけだな。でも、人数的に、どっかが崩れると危ないかもな」

「のんびり眺めてないで、私達もいかないと」

リシュリーの言葉で、全員が戦闘態勢に入る。

まずは、エルナとアルタスが向かい、攻撃へと参加する。その一方で、ラシルはソレルと共に、相手の背後に回りそこから攻撃を仕掛ける。

「ソレルとハルカは喰らったら終わりだから絶対に当たるなよ。ハルカは近付かなきゃとりあえずは大丈夫だけど、ソレルは逃げるタイミングを間違えないように気をつける」

いつも三人で狩をするときにように、ラシルが指示を出していくだが、今回はそれだけでは終わらない。

「リシュリー姐さんは支援をしていつてくれ。ウィシュナはマスターとアルタスの回復優先」

普段、ギルドで狩りをする時などは、他のメンバーに指示を出すということはまずない。出したとしても、ハルカやソレルにだけだが、今回は違った。

普通に戦えば、あっさりとやられてしまいかねない。その為、こうして指揮を執っているのだった。

このラシルの行動は事前に打ち合わせがあったものではなく、突如の行動だった。だが、空の円舞曲のメンバーの中で一番ボスマスターとの戦闘に慣れている事は誰もが察していた。その為、特に混乱が起こることもなくこうして戦闘に臨んでいられるのだった。

「これは……長くなりそうだね」

戦闘の状況を見ながらエルナが呟く。

エルナ達、空の円舞曲のメンバーは勿論、荊棘の森のメンバーが攻撃した時のダメージも決して高いものではない。勿論、このボスマスター、ポセイドンがそれほどまでに防御力が高いというものもあるのだろう。だが、それだけではない。トラデスやヨシノは他のメンバーに比べ随分と高いダメージを出していた。これだけでも、レベルや武器に差があることがわかる。

「長引くだけならいいけど……下手するとちょっとやばいかもな」  
どうやらラシルはなにか懸念があるようだ。だが、それを口に出さない以上、誰も知る由はない。

一見すると危うそうな　それでいてどこか余裕もあるようにも見える戦闘は大きな変化が起こることもなく、淡々と続いていた。戦闘が始まって数分。そこで、ついに変化が起こる。

これまで、周囲にいるプレイヤーを攻撃するだけだったポセイドンが、初めてそれ以外の動きを見せたのだ。何か力を溜めているような　その様に見える。

「　！やばい、逃げろ！」

ポセイドンの行動が示す意味を理解したラシルは、咄嗟に指示を出す。

それと同時に荊棘の森のメンバーも部屋の端へと散っていく。

「馬鹿、そっちは　！」

ほとんどのプレイヤーが部屋の端へと逃げる中、一部のプレイヤーは通路の中へと逃げていく。

その様子に気付いたヨシノが戻るように指示を出そうとするが、既に手遅れだと悟ると、それ以上言葉が続く事はなかった。

間もなくして、ポセイドンがレーザーを放つ。

レーザーは通路を完全に飲み込み、そこに逃げたプレイヤーはなす術もなくあっさりとやられてしまう。たった数人とはいえ、やられたプレイヤーは仲間の回復と魔法による攻撃　所謂、後衛職のプレイヤーがほとんどだ。たった数人とはいえ、些か大きな損害だ。「マスター、どうします？」

ゆっくりと考えている時間はない。

咄嗟に判断出来ずに、ヨシノはトラデスへと判断を仰ぐ。

「今日のオレはただの付き添いだ。指揮官のお前が判断しろ」

トラデスはこれを一蹴する。

改めて考え込むヨシノ。

助けるか、このまま戦闘を続けるか。

冷静に、それでいて迅速に考えを纏めなければならない。だが、悠長に考えている暇はないという現状がどうしても焦りを生む。

「だれか、やられたやつらの復活を頼む」

これが正しい選択かはわからない。だが、やられてしまった者達が戻ってくるまで待つよりは、多少のリスクを犯してでも、すぐに復活させたほうがいい　そう思っの判断だった。

（あつちは大変そうだな）

慌しい様子の荊棘の森を視界の端に捉えながらそんなことを思うラシル。

（まあ、大変なのはウチも一緒だけどな）

先ほどのレーザーでの攻撃からポセイドンの動きは随分と変わっていた。

全体的な動きが早くなり、攻撃の種類も随分と増えた。これまではなんとかなっていた空の円舞曲のメンバーも、今ではまともに戦う事すら厳しくなっていた。

「ソレル、戻れ！」

「え？」

一瞬、攻撃が止まる。その隙を見て、攻め込むソレルだったが、それをラシルは慌てて静止する。

だが、次の瞬間には、地面をなぎ払うかのように放たれたレーザーがソレルを直撃していた。勿論、これを耐えられるはずもなく、ソレルはやられてしまう。

更に追い討ちを掛けるかのように、ポセイドンは上空へとレーザーを打ち上げる。一瞬の間を置いて、部屋中に次々とレーザーが降り注ぐ。

「いきなり激しくなるな」

「HPが半分になると凶暴化するからな」

「こんな中であと半分か。嫌になるな」

ギリギリの状況の中で会話する、ラシルとアルタス。

レーザーの振ってくる位置は完全なランダムだ。なので、少しも気が抜けない。こうして会話をしているのも危ないぐらいだ。

「きゃっ」

悲鳴というにはあまりにも短い、そんな声が聞こえた。

ラシルは、画面内を見回してみるが、特に変わった様子はない。他の仲間からの報告も特にないたため、状況が今ひとつ掴めない。

今ラシルにわかることといえば、先ほどの声はハルカのものだった

たというぐらいのものだ。

「ハルカ、どうかしたか？」

「ごめん、やられちゃった」

これで漸く、何があったのかラシルにも理解出来た。

確かに良く見てみると、パーティメンバーの残りのHPを示すゲージの内、ハルカのものを示すそれが真っ黒 即ちHPがゼロであることを示していた。

恐らく、避け損なって被弾してしまったのだろう。

ハルカ それに先ほどやられてしまったソレルはレベルがまだまだ低い。

強力なモンスター それもボスモンスターとなれば、攻撃を耐えろというほうが無茶というものだ。

レベルが低いというだけならラシルも該当するが、ラシルは装備品が充実している事に加え、クラスは、他の二人とは違い特殊クラスだ。

特殊クラスともなれば、クラス特有のステータスのプラス修正に加え、SPゲージを最大まで溜める事により、更にステータスをアップさせることが出来る。

ここに来るまでに、特にスキルも使わず回復や支援が全てリシュリーやウィシュナに任せてきた。それでいて、ラシル自身は攻撃には積極的に参加していた。

ここに辿り着くまでの五階層に加え、ポセイドンとの戦闘と、相手に攻撃をする事でSPが蓄積されていくファンタゾアナイツにおいて、これだけの戦闘の機会があればSPを最大まで貯める事など造作も無い いや、むしろ溜まっていて然るべきというべきだろう。

更に言うならば、ラシルはただレベルが低いというだけではない。既に二度の転生をしており 内一度は大きな効果があるものではないが パラメータだけならばハルカとソレル この二人を大きく上回っている、

この状態のラシルならば、一度ぐらいいは耐えられる可能性はあるが、それはコンピュータがはじき出すダメージ幅の最低に近い値を引けば 即ち運次第なのだ。

同レベル帯の それも装備品もなければ転生の経験も無いハルカとソレルに対して耐えるという方がいかに無理難題かが窺える。「待つてて、すぐに回復するから」

こんな状況のせいか、空の円舞曲のメンバーの中に攻撃を仕掛けようとするものはだれもいなかった。

その為、支援を担当しているリシュリーとウィシュナはそれぞれのパートナーを回復する必要がなくなり、多少の余裕が出来ていた。幸いなことに、ハルカの周辺は偶然にもポセイドンが放ったレーザーが降ってくることはほとんどない。すぐさま駆け寄り蘇生魔法の詠唱に入る。

「リシュリー姐さん、今詠唱したら」

そんな様子を見たラシルが静止しようとするが、既に詠唱を開始したりリシュリーを止める事など出来るはずもなかった。

「え……？」

詠唱を開始したその時、リシュリーにレーザーが降り注いだ。

次の瞬間、その場にあつたのは、HPがゼロになりやられてしまったリシュリーの姿だった。

「これランダムだけど、魔法の詠唱には確実に反応するんだよ」

突然のことで、理解が追いつかないリシュリーにラシルが説明する。

現時ア部屋中に降り注ぐレーザーは完全なランダムだ。但し、たった一つの例外を除けばという条件下での話だ。

実はこの攻撃、魔法の詠唱には反応するという性質を持っている。つまりは、魔法の詠唱を開始すると、そのプレイヤーには確実にレーザーが降り注ぐのだ。

このポセイドンというモンスターがファンタジアナイトに実装されたのは、昨日今日という話ではない。攻略サイトを見れば確実に

この情報は載っている。

事前にこの情報を仕入れておけば、このようなミスをすることはないのだが、そうでない者に対してはランダム故に出来る偏りを利用した 所謂引っ掛けの様なものとなっていた。

間もなくして、漸くポセイダンの攻撃が停止する。

リシュリー以降、だれかがやられる事はなかったが、被害はなかなかに大きい。

（これは……ちと、体制を立て直したほうがいいか？）

ラシルはちらりと荊棘の森側を見てみる。

こちら側は大きな被害もなく  というよりは、多少の被害が出てもうまく立ち回りながら、被害を最小限に留めている。

（とりあえずは  あっちに任せるとしますかね）

元々、空の円舞曲の面々の戦闘能力はそれほど高くはない  この戦闘に関しては、だが  反面、荊棘の森側は十分な戦力が揃っている。

自分達が戦線から離脱したところで問題はない。ラシルは瞬時にそう判断する。

「一旦、体制を立て直そう。全員集まってくれ」

そう指示を出しながら、まずはリシュリーを復活させる。

「ハルカは私が回復するよ」

丁度戻ってきたウイシュナが、そのまま魔法の詠唱を開始する。

これで残るはソレル一人となった。だが

「これどうやって近付くよ……？」

溜息混じりにラシルが呟く。

ソレルがやられた位置はポセイドンに近い場所だ。

蘇生の魔法は対象者と近付かなければならないため、危険に晒される事になる。

戦闘開始時の様に、相手の動きが遅くこちらにも余裕のあるときならまだしも、HPが半分を切り動きが素早く、多彩になった今では蘇生させるのはかなり厳しい。



「アイテムならいけるんじゃないの？」

「使ったほうも使われたほうもちよつと間動けなくなるからな。タイミングが難しいのはかわらないよ」

魔法が無理ならアイテムで アルタスのこの発想は至極当然ともいえるが、ラシルはそれをあつさりとは否定する。

一度攻撃されるとそれまでという状態が、事態を難しくしているのだった。

「オレかマスターなら多少は耐えられるし、後ろから回復してもらうつてのは？」

「それも無理。ソレルの方がどうにもならん」

両者が動けないということは、どちらも攻撃を受ける可能性があるということだ。

誰が行くかというのは余り問題ではない。タイミングを見誤れば、やられてしまうのは救助対象のソレル自身だ。そういった意味では誰が行っても変わりはない。

「ソレル、もうそのままでもいいか？」

「出来れば回復してほしいかな……」

普段なら激しいツツコミが返ってきてさうものだが、このような状況のせいか、返答は随分と謙虚なものだ。

「よし、とりあえず戦闘再開しよう。ソレルは隙を見て回復つてこ  
とで」

この場に居る以上、ポセイドンの相手を荊棘の森だけに任せるわけにはいかない。ただ待つだけよりは戦闘に参加した方がいいだろう。

ラシルは瞬時に考えを纏め、指示を出す。

ラシルの指示を合図に、再び全員が戦闘体制に入る。

「つたく、アイツら……。サボってないで戦闘しろつての」

ヨシノは、自身のギルドのメンバーに指示を出す一方で、空の円舞曲の様子を視界の端に捉えながら呟く。

「なんだかんだ言いながらもアイツらを頼りにしてるんだな」

「そ、そんなことないですよ」

からかうトラデスの言葉をヨシノは慌てて否定する。

「なら愚痴るのはなしだ。さっさと倒しちまうぞ」

口調こそ、それまでの明るいものだったが、雰囲気は全く違うものになっていた。

そんなトラデスにヨシノは「はい！」と力強く返すと自身も戦闘へと戻っていった。それと同時に空の円舞曲のメンバーも再び戦闘を開始するのだった。

クロツカス　そう呼ばれる王国の首都ライラック。

この街には様々な建物がある。NPCの運営するショップから、クエスト用のNPCが設置されているもの、ただNPCの話が聞けるだけのものと、その有り方は様々だ。

そんないくつもの建物の中でも特に異彩を放つのが中央部の一角にある建物だろう。

二つの階層で構成されたこの建物はただ広いだけの　それだけの建物だ。

ショップでもなければ、NPCもいない。勿論、クエストで訪れることもない。

今後のバージョンアップで使う事になるのか、それとも開発陣の遊び心でつくっただけなのか……。プレイヤーにそれを知る由はないが、この場を必要とする者達は確かに居る。

ギルド『空の円舞曲』

この場所こそ、このギルドの拠点となっていた。

初めてのボスモンスターとの戦闘を終え、メンバー達はこの場所へと戻っていた。

「いや、酷かったねえ」

セリフの内容とは反対に明るい声で、それも笑いながら戦闘を振り返るエルナ。

彼女の言葉からも察せる様に、戦闘の結果は惨敗だった。

体制を建て直し、戦闘を再開した後しばらくは問題なく戦っていた。だが、それも一つのミスで簡単に覆されることになる。

僅かな隙を見計らい、エルナがソレルの回復に行ったのだった。結果から言えば、この行動は失敗に終わる。ソレルが復活出来る事無く、それどころかエルナまでやられてしまうという結果となったのだ。

だが、それだけでは終わらなかった。

この様子を見ていたアルタスがそのまま回復に向かったのだった。勿論、不用意にこの様な行動をして成功するはずもなくアルタスもその場で倒れる。

その後、この三人を回復することは出来ず、一人、また一人と倒れて行き、戦闘が終わった頃にはラシル一人が残っている状態だった。

また、ボスモンスターとの戦闘では、撃破時にその場に居た全てのプレイヤー　勿論やられてしまったプレイヤーは除外されるがアイテムを取得できるのだが、ラシルが取得したアイテムは、何の変哲も無い売却用のアイテムだった。

エルナが酷かったというのも十分頷ける内容だ。

「オレ達じゃあんなもんだろ」

疲れた様子のラシルが口を開く。

彼のいう様に、空の円舞曲のメンバーのレベルや装備を考えると妥当な結果があるいは　ラシルが最後まで生き残った事が奇跡的と言っても過言ではない。

「それでもやつぱ悔しいし……よし、あと一週間徹底的にレベル上げしてリベンジしよう」

エルナの新たな提案にその場に居た全員が悲鳴を上げるのだった。

森の中に存在する村アルメリア。その一画に彼らの姿は合った。ギルド『荊棘の森』マスタートラデス。同ギルドのメンバーヨシノ。ポセイドンとの戦闘の後、この場所に戻ってきた彼らは、ミーンテ

イングも兼ねた反省会を開き、それが今終わったところだった。

この場は既に解散となつてはいるのだが、二人は未だこうしてこの場に残っているのだった。

「意外と苦戦しましたね。あの程度のボスに時間も掛かったし」

「ウチの新人ばかりだったしな。連携も噛み合わないだろうし、そもそも半分ぐらいはボス戦初めてだったろ？無理もないさ」

先のボスモンスターとの戦闘を振り返る。

三大ギルド　そう呼ばれるには勿論、人数の規模だけが原因ではない。ファンタジアナイツのジャンルがRPGである以上相応の強さも求められる。

大勢のプレイヤーを率い、高い戦闘力も持ち合わせる。だからこそ、他のプレイヤーは尊敬と畏怖を込めて彼らをこう呼ぶのだ。三大ギルドと。

そんな三大ギルドの一角を担う荆棘の森としては、今回の戦闘は決して褒められたものではないだろう。それを示すかのようにヨシノの言葉にもそれが表れている。

尤も、トラデスにとってはそうでもないらしかった。

彼の様子からは先の戦闘の事を気にしている様子は全く感じられない。いや、気にしても仕方がないというのを理解しているのだろう。

今回問題となっていたのは、どれも経験が浅い事から来るものだ。こればかりは時間を掛けるしかない。それがわかってはいるからこそ、特別慌てる事もないのだろう。

「それよりも、お前はあのギルドどうみる？」

「そうですね……」

あのギルド　つまりは空の円舞曲のことだ。

ヨシノはしばらく考え込む。

「特になんとも……ごく平凡なギルドだとしか。あと、ボス狩りに来るには早すぎですね」

これがヨシノの感想だった。

この答えにトラデスは不満を漏らすわけでもなく 逆に同意するわけでもなくただ押し黙る。

「それがどうかしたんですか？」

トラデスの真意を読み取る事が出来ず問い掛けるヨシノ。だが、すぐに返答が返ってくることはない。

「ラシルがあのままあそこに居るならウチに来てくれないかと思つてな」

しばらく沈黙が続き、ようやくトラデスが口を開いたと思えば、彼の口から出てきた言葉は、ヨシノにとって意外なものだった。

平凡なギルドの一メンバーでしかない者を迎えたいというのだ。それもマスターであるトラデス自らが。

「たしか、最後まで無事だった二刀流のマジックナイトですよ？ そんなに凄いプレイヤーには見えませんでしたか……？」

動揺を隠しながら、思い出してみる。

ヨシノ自身も戦闘に指揮と慌しく動いていたためそれほどはつきりと見ていた訳ではないが、特に目立った動きはなかったはずだ。

「多分アイツ、一度もダメージを受けてないぞ」

そんなバカな？

トラデスの言葉に反論しそうになるが言葉が出ない。

通常のモンスター相手ならまだしも相手はボスモンスターだ。そんな事ありえない。どれほどプレイヤースキルを高めようと奇跡でも起きなければ いや、たとえ奇跡が起きようと無理なのではないか？

そんな考えが頭をよぎる。

「オレもちゃんと見てた訳じゃないからなんとも言えないけどな。でもアイツのプレイヤースキルがズバ抜けて高いのは確かだ」

トラデスがそう言うのなら、ラシルの腕前は確かなものなのだろう。

だが、何度思い返してもやはりトラデスの言う様なプレイヤーとは思えなかった。

「まあ、次に会った時にでも良く見てみればいいさ」  
腑に落ちない。そんな様子を察したのだろう。

トラデスは最後にそう言うつと、その場を後にした。それを追うようにヨシノも付いて行くのだった。

## Chapter 4 - 3 (後書き)

ラシル(以下ラ)「お待たせしました、4 - 3話完成です」

ハルカ(以下ハ)「毎度ながら時間かかってますねえ」

ラ「作者ももつと早くに書き上げるつもりだったんだけどな、意外と進まなかったみたいだな」

ハ「小説意外に時間食いすぎてるのも問題ですよ……」(汗)

ラ「今回はストーリー動画作成用に色々調べてたのもあるみたいだけど……」

ハ「そつちもついに動き始めたんですね」

ラ「ちよつとだけな。それよりも。ストーリー動画を二つ視聴開始して(一つは途中で見れなくなつて止まつてるけど)前に見たストーリー動画(約50話)を見直したり」

ハ「だめだこいつ、はやくなんとかしないと……」

ラ「更にゲーム面では、ととの2、PSP版イークリア、最近はPS3版T Vお体験版とムービーを見たらすごくやりたくなつたから360版を再開したとか……」

ハ「遅い原因、完璧にそれですね」

ラ「マジで自重しろ」

ハ「そろそろキャラ紹介にいきましょうか」

ラ「今回はアルタスだな」

ハ「アルタス君は明るい……ギルドのムードメーカー的な存在ですね」

ラ「ただ能天気なだけだな」

ハ「クラスは騎士系の中位クラスのロードで、よくウィシュナちゃんと組んです」

ラ「戦闘スタイルは猪突猛進バカとでもいうか……とにかく突っ込んで力押しで攻めて行くって感じだな」

ハ「ウィシュナちゃんがないと厳しそうですね」

ラ「まあ本人は楽しんでるみたいだしいいと思うけどな」

ハ「今回の紹介はこれぐらいですね」

ラ「そういえば、今回本編振り返ってないな」

ハ「そうですね。でも終始戦闘だったし振り返るほどのものもなかった気が……」

ラ「……だな。あ、でも一応補足が一つ」

ハ「なんですか？」

ラ「今回出てきたボスの名前がポセイドン（海の神様）なのになんで機械っぽいゴーレムなんだ？って感じだろ？」

ハ「ああ、言われてみれば確かに」

ラ「実は名前と外見のイメージなんかは某ゲームの特殊なモンスターそのままパク……もとい参考にしたからなんだ」

ハ「……」（汗）

ラ「パクッテナイヨホントだよ」

ハ「え、えーと……それではまた次回」



## Chapter 4 - 4

「で、アンタはあの三大ギルドとかいうとこのマスターとどんな関係なわけ？」

ここは、近所のバーガーショップのチェーン店。

以前、ボスモンスターとの戦闘を終えたあとと再戦することが決まり、再びレベル上げに励む事になった樹、遥歌、咲希の三人。

それから数日、いい加減レベル上げに疲れと飽きが来た事もあり、以前の様にこうして集まっているのだった。少し違うのは、この日は湊斗もいることだろう。

全員が注文を終え、席に着いたときに咲希が言ったのは冒頭のセリフだ。

「いや、どうって言われてもな……別に何ともないぞ？」

「あれだけ二人で話しててなんともないわけあるか！」

煮え切らない様子の樹を一蹴する咲希。

「話しても問題ないんじゃない？」

「わざわざ話すようなことでもないと思うんだけどな……まあ、いか」

樹は自身やその周囲のことを基本的に秘匿とする傾向がある。勿論これは、本来所属していたギルドの関係から、余計な問題を持ち込まないためでもある。だが、それを差し引いてもやはり、その傾向は強い。

一方、湊斗はそれとはほぼ真逆といつていいぐらいだった。

勿論、本当にいえない部分を漏らすことはないが 事実、遥歌や咲希は樹達のギルドのことは全く知らない 問題ないと判断すればあっさりと情報を公開する。

そんな湊斗が問題ないというならば、樹はあっさりと折れることにする。

「言つとくけど、あまり面白い話でも無いぞ」

一旦、そう前置きをおく樹。その言葉に遥歌と咲希は頷く。  
そんな二人の様子を確認すると、樹は静かに話し始めた。

「オレらがゲームを始めた頃に世話になった人がいたんだ。まあ、  
師匠ってとこだな。で、その師匠の知り合いだったのが、あのトラ  
デスって訳。その時の縁と当時はまだ荊棘ソニデア フォーレストの森が今ほど大きくな  
ったこともあって多少の交流があったと、まあ、そんだけのもんだ。」

遥歌と咲希の予想に反して、樹の話は非常に短いものだった。こ  
れは、単に樹が端的に語っただけなのだろうが。

想像以上にあっさりとした話だったためか、呆然とする二人。

「それ……だけ？」

そして、漸く出てきた言葉がこれだった。

「もうちょつと色々あるのかと思ってたよ」

「だから、面白くもなんともない話だつて言つたろ？」

苦笑交じりの遥歌に、樹が呆れた様に返す。

樹の話は随分と端折ったものだ。だが、それを丁寧<sup>丁寧</sup>に語ったとし  
ても、それはやはり樹が言うように、“面白い話ではない”ではな  
い。

彼らの間には、小説のような劇的な物語があるわけでもなければ、  
コミックのような怒涛の展開がある訳でもない。

どれだけ親切丁寧<sup>丁寧</sup>に　そして、どれだけ大袈裟に話そうとも、  
結局は“師匠の知り合いで付き合いが出来た”という内容に集約さ  
れる。それ以上にはなり得ない。

「で、トラデスがどうかしたのか？もしかして惚れたか？」

「え？咲希そうだったの？」

「個人的にはあまりおすすめしないよ」

樹の冗談に、遥歌と湊斗が便乗する。

少し前ならば、こうしたやり取りもほとんどなかったのだが、こ  
れもすっかり打ち解けている証拠だろう。

「違うわよ！大体、なんであんな腹立つヤツのいるギルドのマスター

「なんかを」

否定と同時に、ヨシノへの愚痴もこぼす咲希。  
先日のは、当日こそ反感を持ったメンバーもいたものの、今では咲希だけが根に持っているのだった。

いつの間にか彼女の弁はヨシノへの愚痴のみになってしまい、更にそれが収まる様子はない。

周囲の意見を聞き入れる様子もなく、更には絡んでくる始末。最早、樹達はタチの悪い酔っ払いを相手にしている錯覚に陥るのだった。

結局、彼女の愚痴は一時間もの間延々と続き、漸く収まりを見せたのだった。

その後は他愛もない話で盛り上がり、解散となる夕方までバーガーショップの一画を占領し続けたのだった。

「ラシル、これから時間あるかい？」

再びボスマンスターを討伐に行く日が目前にまで迫ったある日。

ラシルはいつもの様に、レベル上げに行く前にアイテムの補充をしていた。丁度その時だった、エルナがギルドチャットで話しかけてきた。

「いつも通り、あいつらと狩りに行くつもりだけど」

「今みんなどこか行こうって話になってるんだけど、アンタもどう？ ハルカとソレルも行くって言ってるけど」

「それなら参加するよ。すぐ戻るわ」

普段なら効率なども考えそうなものだが、そんな様子もなく参加を決めるラシル。勿論、効率なども考えてなのだろうが、それよりも、ここ数日は同じメンバーと同じ場所ですつと戦闘をしていたのだ。ラシルでなくとも飽きは来る。そんな中でのこの提案は、まさに助け舟といったところなのだった。

手早く買い物を終わらせると、ラシルは溜まり場へと戻るのだった。

溜まり場へと戻ると、ギルドのメンバー全員が揃っていた。全員準備は万端らしく、あとはラシルが来るのを待つのみといった様子だった。

「お待ちせ。で、場所は決まってるの？」

「いや、丁度決めてたところなんだけどね」

「なかなか決まらなくて」

その言葉を聞き、丁度いいと言わんがばかりにニヤリとするラシル。

「だったら、いい物あるぞ」

そう言つて、エルナにアイテムを投げ渡す。

「！ラシル、これって……！」

アイテムを見たエルナが珍しく慌てている。それも無理はない。ラシルが渡したアイテムとは

「これ、オリハルコンじゃないか！」

このエルナの言葉にその場に居た全員が驚く。

このオリハルコン、レアアイテムの中ではドロップ率が高いため、アイテムのランクとしては低いものの、あくまで他のレアアイテムと比べればだが、高値で取引され、このゲームに慣れたプレイヤーならだれもが欲しがる代物のだ。

勿論、それには理由がある。

最上位の武具を作ろうとした場合、どうしてもこのアイテムは必要となってくる。しかし、ドロップするモンスターは一部のボスモンスターのみにと、非常に手に入りにくい物となっている。

「こんなもん、どこで手に入れたんだよ……？」

「こつちに戻ってくる時に安売りしててな。それで買ってきた」

アルタスの問い掛けに、事も無げに答えるラシル。

いくら安売りとはいえ、そうそう手の出せるものではない。そんなものを、衝動買いしてくる上に、簡単にギルドに差し出すラシルの感覚は最早、絶句するしかなかった。

「それなら、面白いダンジョンにいけるだろ？異議なしならそれで

行こうか」

全員が“勿体無い”と思いながらも、このままでも決まる気配はなく、結局ラシルの意見に賛同するのだった。

「ここに来るのも久しぶりだね」

目的のダンジョンに無事辿り着き、ハルカがそんな感想を述べる。

「そーいや、ハルカの試験以来だっけか」

ハルカのギルド入団試験で訪れて以来、この場所に来る事がなかったことを思い出す。

尤も、アイテムを使用して訪れるダンジョンとはいえ、使用しているアイテムが全く違うのだから、厳密には同じとは言えないのだが。

それはともかくとして。

空の円舞曲フルッの一行は、オリハルコンによって生成された、ランダムダンジョンに来ていた。

「それじゃ、パーティー分けようか。私とリシュリーで組むから、残りはラシルが面倒見てくれるかい？」

レベル差は大丈夫なのだろうか？

エルナの提案を聞いてラシルが真つ先に浮かべた疑問だった。ギルドの情報ウインドウを開き確認してみると、エルナの提案に問題がないことがすぐにわかった。

「いつの間にか追いついていたんだな」

あくまでパーティーが組める程度にはあるが、ラシル達三人のレベルはアルタスとウィシュナのレベルに追いついていたのだった。五人で組む事に問題ないことを確認すると、ラシルはエルナの提案を了承し、一行は二手に分かれて探索を始めるのだった。

「ここでもう結構強いな」

ラシル達は現在地下三階にまで来ていた。

そこで戦闘を開始したのだが、アルタスの言う様に、モンスターは随分強力なものが出現するようになっていた。

「噂には聞いてたけど、ホント見た目で強さがわからないわね」

「だから楽しめるんだって。そうすりゃレベルアップまでの時間も気にならないだろ」

ラシルはそう言いながら、モンスターに止めを刺す。倒すのに苦労しただけあり、五人でパーティーを組んでいるにも関わらず経験値はなかなかのものだ。

「経験値が随分入るね」

「こりゃ高い金出した甲斐があつたな」

そう言うラシルに「どうせならもつと別のことに」と言いたくなる面々だったが、それを口に出すものはいなかった。今更どう言つたところでアイテムが戻ってくる訳でもない。

むしろ、折角のラシルの計らいを楽しもつと思うのだった。

一方エルナ達は、ラシル達よりも更に下層の地下五階にまで来ていた。

「まだ五階だつてのに、油断してると危ないね」

「エルナが無茶するからだよ」

呆れたようにリシュリーが言いながらエルナを回復させる。だが、彼女がそう言うのも無理はない。

この階層のモンスターは、エルナ達よりも少し強いぐらいだろう。戦闘時間が多少長くはなつても苦戦するほどのものではない。

そのような状況にあつたせい、戦闘中に三匹ものモンスターに囲まれても構わず戦闘を続けた結果、回復が追いつかず、やられてしまつ一步手前までダメージを受けることになつたのだつた。

「危なくなつたらちゃんと退かないと……私も援護しきれないよ？」

「ごめんごめん。ちゃんといけると思つただけだね」

「とにかく、あんな無茶はもうダメだからね」

改めて釘を刺すリシュリーに「はいはい」と返事をしながら、探索を再開する。

二時間ほどが過ぎて。

エルナ達は地下一階まで戻っていた。一度小休止をとということで、

ここまで戻ってきていたのだった。

「多分この辺に……」

何かを探しているのか、エルナは辺りを見回しながら歩いていく。

「あ、アレじゃない？」

しばらく歩き、リシュリーはそれらしきものを発見する。どうやら間違いないらしく、二人は近付いていく。

「お、やっと来た」

そこに居たのは、ラシル達とは別行動をしていたパーティーだった。

小休止ということで、ラシル達とこうして待ち合わせをしていたのだった。ただ、別パーティーになっているため、表示されているマップにラシル達の情報が写ることもなく、合流に手間取っていたのだった。

「いや、探した探した。それで、そっちはどう？」

エルナは悪びれた様子もなく、ラシル達の輪に加わってしまう。

「こっちは結構大変だったよ」

「割とお前のせいなんだけどな……」

アルタスの言葉にラシルが突っ込む。後ろでハルカが苦笑しているのを見る限り、あながち間違いというわけでもないようだ。

「ラシル君がいなかったら2、3回は全滅してたよ」

ウィシュナが呆れたようにいうのだった。わずか二時間でこれほど全滅の危機があったのなら、この反応も納得だ。

全滅の危機の原因がアルタスが一人で突っ込み、そのままモンスターに囲まれてしまったであろうことは、エルナには容易に想像出来た。自身が当事者でないせいか、相変わらずな様子に、微笑ましくなってくる。

「それでマスター、これからどうするんですか？」

ハルカが問い掛ける。

ギルドのメンバー全員が集まってこうしてダンジョンに来ているのだ。このまま各自レベル上げだけで終わるはずはない。

ハル力だけでなく、全員がそう思っていたことだった。だから、こうして合流したからにはなにかあるだろうとは全員が予想していた。

時間も既に深夜に指しかかろうかという時間だ。一度解散して、後で再び集合ということはないだろう。

「それじゃあ、最後にこのボスを倒しに行くとしますか」

エルナの言葉に異議を唱える者はなく、一行は最下層を目指す事になった。

そして地下十階。

この辺りまで来ると、メンバー内では最高レベルのエルナでも相手にするのはかなり厳しいモンスターが出てくるようになっていた。それでも、人数の多さでなんとかモンスターを撃破し、ここまで到達できていたのだった。

「まだあるの……？」

「さすがレアアイテムで作ったダンジョンだけあるね」

「階層は結構ありそうだもんね」

いつまで経っても終わりが見えないダンジョンの構造に、そんな言葉出てくるようになる。

探索は次の階層に行くためのワープポイントを探すだけに留めているため、一階層辺りの滞在時間は少ないものの、既に十もの階層を進んできた事と、何より戦闘の難易度の高さから、実際の道のり以上に長く感じていたのだった。

「でもこれ以上の階層となるとちとキツイかもな……」

ラシルの言葉は珍しく弱気なものだった。

尤も、基本的に無茶な場所には行かないので、あくまでラシル個人の感覚のため、周囲から見れば十分無茶な場合も多々あるが、そういった言葉を聞く機会がないだけで、実際にはラシルの言葉は、周囲の状況を見て言う事がほとんどだ。

今回の言葉も弱気や不安から来るものではなく、文字通りこのパーティーには厳しいと感じているだけなのだ。



それでも、ここまで来たからには引き返す気にもなれず、先へと進むのだった。

そして、地下十二階。

僅か二階層降りただけで、モンスターの強さはそれまでとは全く違うものになっていた。いや、厳密には徐々に強くなっていたのだろう。ただ、モンスターに対抗出来るギリギリのラインを超えてしまったただけで……。

「ラシル君、SP残ってる？」

「こつちもカラだ。ウイシュナの方は……ないんだったな」

「うん。こつちもまだ回復してないよ……」

先の戦闘で、なんとかモンスターは退けたものの、回復が追いつかず、回復魔法の使える三人のSPが尽きるという事態になっていた。

「今モンスター出たらやばいぞ」

「出ないことに期待しながら回復を待つしかないね」

脱落者こそいないものの、各員のHPは随分と減ったままだった。

「ソレル、売り物用のアイテムとか持ってなかったっけ？」

「自分の分だけよ。それにドロップの装備品しか販売してないわよ」  
商品用に回復アイテムを持っていることを期待したハル力だったが、その望みも断たれてしまう。それぞれが持ってきていた回復アイテムも既に使い切ってしまう、自然に回復していくのを待つしかなかった。

幸いモンスターの襲撃にあうことはなく、完全とはいえないまでも随分と回復していた。

「結構回復したね。SPは？」

「ダメだ。スキルじゃ全然回復しねえ」

ラシルの言葉に、リシュリーとウイシュナも頷く。

本来。このゲームにおいてSPとは、戦闘によって蓄積されていくものだ。スキルによる自然回復はあくまで補助に過ぎない。その為、回復速度は随分と緩やかなものなのだ。

「多分、戦闘になったら支援しきれないと思うよ」

「それじゃ、もう少し休憩」

エルナはそこまで言って何かに気付く。

僅かにではあるが、何かが聞こえる。徐々に大きくなるそれは、モンスターの足音だった。

他のメンバーも気付いたのだろう。エルナが声を掛ける前に既に全員立ち上がっている。

間もなくして、モンスターが姿を現す。どうやら、モンスターもエルナ達に気付いたようで、まっすぐに向かっていく。

（誰がターゲットにされてるんだ？）

ラシルはモンスターの動きを窺うが、メンバーが固まっているため、その動きから察することは出来ない。

（とりあえず、突っ込んで一旦オレに無理矢理ターゲットを向けさせるか……？）

後衛にモンスターを向かわせるわけにはいかない。そう考えて、自身の動きを考えるラシル。だが、どうやらそんな暇もないようだった。

ラシルが動きを考える一方で、徐々にモンスターは迫ってくる。下手にモンスターに突っ込んだところで返り討ちに合うのが関の山だ。その為、全員が様子見をしていたのだが、ついに耐え切れなくなったアルタスがモンスターへと向かう。

それを合図とするかのように、エルナとソレルも向かっていく。

戦闘開始だ。一步遅れて、ラシルも戦列に加わる。

だが、格上の相手に戦線を長時間維持できるはずもなく、戦闘開始から間もなくして崩れ始める。

受けるダメージが大きすぎるため、まずはアルタスが下がる。レベルの高さから、なんとか耐え抜いていたエルナも限界に近付き一旦下がる。これで、前衛はソレルとラシルの二人となる。

「こういう時、一撃の重さがないのは痛いな」

ラシルは自身のキャラクターのパラメータの割り振りを少し後悔

する。

前衛二人とハルカ。現在、モンスターにダメージを与えているのはこの三人だ。だが、どれも数値は芳しくない。

ラシルは武器こそ相応の物を持っているが、力のパラメータは決して高いとは言えず、ハルカとソレルは純粋にレベルや武器がこの場所では分不相応だ。

「ソレル、ちよつとの間足止め頼む！」

ラシルはそう言つて一旦後方へと下がると、魔法の詠唱を開始する。

「いきなりそんなこと言われても……！」

突然の事に慌てるソレル。その言葉と同時に敵の攻撃を回避する。だが、動きが大きくなりすぎる。結果、モンスターとの距離が開いてしまう。

どうやら、モンスターはラシルをターゲットとしたようで、ソレルには目もくれずにラシルへと向かう。ソレルと、モンスターの動きに気付いたエルナとアルタスも向かうが、間に合う距離ではなかった。

既に詠唱に入り、無防備となったラシルにモンスターの攻撃が容赦なく降り注ぐ。

一瞬、誰の目にもラシルのHPを示すバーが全てなくなったかのように見えた。だが、ラシルはまだ立っている。どうやら、残りごく僅かだが、HPが残ったようだ。

「危ねえ……おい、ソレル！」

「アンタがいきなり言うからでしょ！」

そんないつものやり取りをしながらも、ラシルは自身を回復する。同時に、エルナとアルタスも回復させ、三人は戦線へと復帰する。

「アレ？ラシル、魔法は？」

他の三人と共に、前衛として攻撃に加わるラシルに問い掛けるアルタス。

「お前らの回復したらSPなくなつたんだよ」

ラシルは溜息混じりに答える。どうやら、戦闘によって蓄積されたSPの量はギリギリだったらしい。

改めて、戦闘は振り出しへと戻るが、事態が好転することはない。ダメージはなんとか与えているものの、常に押されているのはラシル達だ。それでも今はなんとか均衡を保ててはいるが、少しでも綻びが出来れば、そのまま一気に崩壊してしまうであろうことは誰もが感じていた。

そして、その綻びがいとも簡単にやってきた。

ギリギリのHPで粘っていたアルタスがやられてしまったのだ。続いてソレルも回避行動のミスからやられてしまう。

これで残るメンバーは五人。

エルナとラシルは戦線を維持し、ハルカが後方から矢を放つ。ウイシュナとリシュリーは支援と、それぞれの役割は依然そのままだ。皮肉にも、前衛が二人減ったことにより、支援の負担が減り、一旦パーティーの崩壊は止まる。だが、安心出来る事態ではないことに変わりはない。

モンスターの攻撃を二人揃って避ける。そこにハルカの矢が命中する。

前衛二人とモンスターとの距離が開いたその時だった、僅かに詠唱をしたかと思うと、ハルカに魔法が降り注ぐ。近くに居たウイシュナとリシュリーも巻き添えにされる形でダメージを受ける。

魔法職の二人は、さほど大きなダメージを受けることもなかったが、ハルカはそうもいかず、ここで脱落となる。

「こいつ、魔法もあるのかよ……」

これまで使う素振りもなかったため、誰もが失念していたのだ。た。

負担は減っても、大きいことには変わらない。次第に回復も追いつかなくなり、ついにはラシルとエルナもやられてしまう。

残るはリシュリーとウイシュナの魔法職の二人。勿論、この二人に対抗出来るはずもなく、呆気なく全滅となり、この日の探索は終

了となるのだった。

そして、再びボスモンスター討伐の日がやってくる。

「それじゃみんな、準備はいい？」

空の円舞曲の溜まり場に集まったメンバーに、エルナが問い掛ける。その言葉に全員が頷き、一行は再びスノーフレーク 通称リナリアダンジョンへと赴くのだった。

レベルが上がった事も有り、一週間前に訪れたときよりも進むのが随分楽に感じられた。実際、楽になっているのは確かだった。

特にレベルが低かったラシル達は、随分と無茶をして しかし、それに見合うだけの見返り、即ち経験値とレベルを手に入れていた。勿論、他のメンバーもこの時ばかりは、ずっとレベル上げに励んでいたのだ。

以前は随分遠く感じられた道のりも、今回は随分短く感じる。そして、間もなくして最下層の中央 通称ボス部屋と呼ばれる場所の前へと辿り着いた。

「相変わらず、結構人がいるな」

部屋の開放を待ち、近くに集まるプレイヤー達を見て、ラシルが呟く。

「相変わらずっていうか、また同じ人たちみたいだよ」

ハルカの言葉を受け、よく見てみると確かにギルド“ソニア 荊棘の森”の一行がここに集まっているのだった。

尤も、同じギルドではあるが、同じ人物とは限らないのだが。

今更、相手のことを気にする事もなく、前回と同じ様に一画を陣取り、同じ様に部屋の開放を待つ一行。そこに、一人のプレイヤーが近付いてきた。

「よう、またアンタらか」

以前もこうして声を掛けてきたヨシノだった。もつとも、以前のような憎まれ口ではなかったが。

「あ、あんたこの前の……！」

「ま、今回もせいぜいがんばりな」

過剰に反応するソレルを余所に、ヨシノはそれだけ言っと立ち去ってしまった。

「なんだったんだ？」

「なにか心境の変化でもあったんじゃないかい？」

「いや、あれは絶対になにか裏があるに違いないわ」

ソレルが未だ根に持っているのは相変わらずだった。

入れ替わるように、更に別のプレイヤーが訪れる。他のプレイヤーよりも一回りは大きいその姿は、やはり見覚えのあるものだった。

「よう、アンタらもまた来たのかい」

巨体のプレイヤー　トラデスからは友好的な雰囲気が見て取れる。

三大ギルドの一角を担うギルドのマスターという肩書きのせいか、トラデスの様子とは裏腹に、必要以上に緊張してしまう。ただ一人を除いては。

「お前らもかよ。大方先週からずっといるんだろっけど、よく飽きないな」

ラシルだ。付き合いの長さもあるからだろうか、なれた様子で応対する。

三大ギルドの一つのマスターをお前呼ばわり出来るものなど、そうはいないだろう。知らない者が見れば、ラシルは何も知らないただのバカか。あるいは命知らずなプレイヤーに見えるだろう。

「そう言うな。狙ってるアイテムがなかなか出ないんだ」

日頃から二人のやり取りはこのようなものだろう。トラデスは特に気にすることもなく会話を続ける。

「そっちもがんばってくれ。頼りにしてるぞ」

最後にトラデスはそういい残すと、自身のギルドの集まる方へと戻っていった。

そして、それを合図とするかのように、閉ざされていた扉が開くのだった。

「二回目ともなると、流石に楽ね」

「そんなこと言って、死んでもしらないよ？」

戦闘が始まって数分。

二回目ということもあり、少し余裕を見せるソレル。その言葉を聞いて、ハル力は苦笑する。だが、その余裕も納得出来るぐらいに、ソレルの動きは非常にいいものだった。

「最近、どっかの誰に合わせて無茶してたからね。それに比べればかなり楽よ」

ソレルの言うように、ここ一週間は非常に厳しいものだった。はるかに格上のモンスターを相手に、それも時には数体に囲まれて相手にしていたのだ。

一撃こそ大きいものの、基本的に動きの遅いこのボスモンスターポセイドンの攻撃を避ける事は、これまでの事に比べると随分楽なものだった。

「余裕みせるのもいいけど、ミスしないようにしなよ。下手すると終わるまで寝たきりになるよ」

エルナがそう嗜め、一行は再び戦闘に集中する。

何度もやられながらも、うまく復活させていき、戦闘が終盤に差し掛かった今も、脱落者は出ていなかった。

一方、荊棘の森のメンバーも戦闘を続けていた。空の円舞曲のメンバーがここまで戦えているのも、彼らが共に戦闘をしているからに他ならない。

そんなメンバー達を指揮するのはヨシノ。彼はメンバーの指揮をする一方で、空の円舞曲 いや、ラシルの動きを見ていた。

以前、彼らと共に戦った後、トラデスが言ってた言葉を思い出す。 “ラシルは一度も死んでいないかもしれない”

ありえないと思いつつも、確かめてみたい。そんな気持ちからだ。（ありえねえ。なんなんだよ、アイツは……！？）

ヨシノは驚愕していた。そう思えるほど、ラシルの動きは秀逸な

ものだった。

ラシルはこれまでに二回やられていた。一回はランダムに降ってくるレーザーを受けて、そしてもう一回は動きが切り替わった直後、突然の変化に対応しきれなくて攻撃を回避しきれなかったのだ。

その様子から見て取れるように、ラシルは一回か　よくて二回攻撃を受けるとやられてしまうほどのHPしかない。

そして、ダメージを受けた状況はランダム性の強いものと、動きの切り替わり時の非常に避けにくい状況ばかりだ。それ以外は一切のダメージを受けていないのだ。ヨシノが驚くのも無理はない。

「ヨシノ、お前から見てどうだ、ラシルは？」

ヨシノがラシルの方を気にしていたのはわかっていただろう。トラデスが問い掛けてくる。

「どうもなにも、どう見てもチートにしか思えないですよ」

「そりやそうだ。オレの知る限りこの世界で最高<sup>ゲーム</sup>の腕を誇ったプレイヤーの弟子だからな」

ラシルの動きは当たり前と言わんがばかりにトラデスが言う。

そう話している内に、ついにポセイドンを討伐する。しばらくの間、ずっと戦っていたこともあり、荊棘の森のメンバーに感慨のよくなものはなかった。そこにあったのは、やっと作業が終わったと、その程度のものだった。

一方、空の円舞曲のメンバーも、誰も欠けることなくこの瞬間を迎えていた。

「やつつつつと終わったー!!」

「みんなお疲れ」

荊棘の森とは逆に、戦闘終了と同時に盛り上がる空の円舞曲。前回のほぼ全滅という状況に納得がいかず、こうして再戦を挑んだだけに、この結果はメンバーにとってうれしいものだった。

それは、これまでに何度もボスモンスターを倒してきたはずのラシルも同じ様で、態度にこそ出ていないものの、その顔には確かに笑みが零れていた。



「それじゃ、そろそろ戻ろうか」

一通り騒いだ後、エルナの言葉でウイシュナがトランスゲートの魔法を唱える。

次々と溜まり場へと戻っていくが、ラシルは何かを考え込むようにしてその場にとどまる。そして、ついにはラシルと魔法を唱えたウイシュナだけが残る。

「……？ラシル君、帰らないの？」

「ん、ああ、悪い。先行っててくれ」

ラシルの態度を不思議に思いながらも、彼の言葉どおりウイシュナは一足先に戻る。

ウイシュナを見送ると、振り返り荆棘の森の方へと近付いていく。  
「トラデス！」

そして、トラデスの名を呼ぶ。二人の関係を知らない、他のメンバーからどよめきが起こるが気に留める様子はない。

ラシルの声に気付き、声の方向を見ると、何かが飛んでくる。慌ててそれをキャッチすると、それを確認し戸惑うのだった。

「お、おい、これ……！」

「やる。ウチには過ぎた報酬だ」

ラシルはそう言って背を向けると、トランスゲートの魔法を唱えそのまま消えてしまうのだった。

「おかえり。なにしてたのさ？」

溜まり場に戻ったラシルを迎えたのは、エルナのそんな言葉だった。

「いや、大したことじゃないよ」

短くそう答えると、そのまま座り込む。

「ところでさ、ラシルはアイテムなにが出た？」

「オレか？あゝ……何も出なかったぞ」

「……ホントに？」

ソレルに疑問の眼差しを向けられる。更には、ソレルの態度から

他のメンバーにも不振がられてしまう。

「な、何だよ、お前らまで。ホントだって」

慌てて弁解するが、疑問が消える様子はない。

尤も、確かにラシルの言葉には確かに嘘はあった。帰り際にトラデスに渡したアイテム　それこそがまさにラシルが手に入れたアイテムだった。

だが、ラシルが手に入れる事が出来たのは、トラデス達荆棘の森もメンバーがいたからこそだ。だからこそ“過ぎた報酬”と言ったのだ。

このことは言ってもややこしくなることは、容易に想像出来たため、ラシルはこうして黙っているのだった。

「はいはい、そこまで。それより、ミーティング始めるよ」

エルナがそういうと、全員が揃っているのを確認し、話し始める。「みんな、おつかれ。最後の最後まで引っ張りまわして回して悪かったね。お陰で休止前にいい思い出来たよ。ミーティングって言ってもこっちからは何もなし。みんなはなにかある？」

エルナはそう言うが、誰も何も言わない。そして再び、エルナが口を開く。

「それじゃ」

「マスター」

ラシルが言葉を遮る。だが、すぐには続かない。

しばらく沈黙が続く。だが、誰もこの静寂を崩すような事はしない。ただ、ラシルの言葉を待つ。そして、ラシルは静かに　しかし、確かに言うのだった。

「オレ、ギルド抜けるわ」

## Chapter 4 - 4 (後書き)

ラシル(以下ラ)「第四話終了です」

ハルカ(以下ハ)「随分遅くなった上に長くなってしまいました」

(汗)

ラ「ギルド狩り引つ張りすぎだな」

ハ「作者にはもっと文章を纏める能力をつけてほしいですね。でも今回は随分半端に終わりますね」

ラ「そこはそういう演出つてことで」

ハ「雑誌に連載されているコミック向けの演出じゃ……」

ラ「細かいことは気にしない！それでは、今回はこの辺で」

ハ「早！」

ラ「ネタがないそうだ。それではまた次回」

ハ「次回もよろしくです」

## 9 / 3 追記

ラ「ただいま、誤字とおかしかった文章を修正しました。一応一通り読んで修正したので、大丈夫かと思いますが、まだミスが残っているようなら報告お願いします」

ハ「でもまさかサブタイまで間違えてとは思わなかったですね」

ラ「作者も全くきづいてなかったからな。最初見たときは本気でびっくりしてたぞ」

ハ「因みに、なんで前回と丸被りになってたんですか？」

ラ「作者は”Chapter”って綴りがわからないから、毎回コピペでサブタイ付けてるんだけど……」

ハ「今回はうつかり修正してなかったと？」

ラ「そういうこと」

ハ「英語が苦手とは自称してましたけどここまでとは」(汗)  
ラ「更にミスがあります」

ハ「え？まだあるんですか？」

ラ「そもそも、なんでここも加筆されてると思う？」

ハ「そういえば、おかしいですね。本文の修正だけのはずなのに」

ラ「最初アップしたときに、ネタがないってことで早々に終わったけど、キャラ紹介をすっかり忘れてました！」

ハ「そういえば確かにやってない！」

ラ「そんな訳で、キャラ紹介したいと思います」

ハ「今回はウィシユナちゃんです」

ラ「クラスは神官系中位のプリースト。アルタスのお守りでギルドの生命線だな」

ハ「ゲームを始めた時にたまたまマスターに拾われたという裏設定があつたりします。でも試験はどうしたんだろ？」

ラ「細かい事は気にするな。性格はハルカとソレルの中間って感じだな」

ハ「そうだね。活発って訳じゃないけど、決して控えめって訳じゃないしね。でもこう言う全然特徴のない子みたいだよ……」

ラ「気のせいだ」

ハ「因みにリアルは私達の一個下で高校一年生です」

ラ「これも表には全く出ない設定だけだな」

ハ「とりあえず、今回はこれぐらいですね」

ラ「だな。それでは今度こそ、また次回」

ハ「また見てくださいね」

## Chapter 5 - 1

「なあ、これからどうする？」

樹は非常に困っていた。

日頃から溜まり場として使用していた、フィールドの一角にやって来るがそこには出迎えてくれる者はだれも居ない。それもそのはずだ。そこはもう溜まり場ではないのだから。

「そうだね……」

共に居た友人　湊斗はのんびりとした様子で答える。一見すると、特に困った様子もないのだが、それでも彼なりに困っているのだった。

「ギルドもなくなつたし……かと言って行く当てもないしやっぱソロでいくしかないかな……」

二人が困っていたのは、樹の言うように自身の所属していたギルドがつい先日解散となつてしまつたからなのだった。

他のメンバーは既に他のギルドに流れていつてしまつたのだったが、この二人は、ゲームを始めてすぐにここに拾われたため、他のギルドにと、いう気にもなれずこうしているのだった。

因みにソロとはこの場合はギルドには所属しないといういう意味になつてくる。

ギルドは必ずしも入らなければならないものではない。なので、どこのギルドにも所属せずにゲームを楽しむというのも、一つの方法だ。

「トラデスのところは？」

「あそこって、もう三大ギルドの一角だろ？前ならまだしも、今いきなり行つて入れてもらつてのもマズイだろ」

「だよな」

湊斗の提案はあつさり却下される。もっとも、これは湊斗も予想していたようだ。

この二人は、ギルドの解散が決定した頃からトラデスからギルドに誘われていたのだった。だが、トラデスのギルド“ソニア フォーレスト荊棘の森”は既に三大ギルドとして数えられるようになっていた。同時に、ギルドへの入団は不定期で行われる試験をクリアするという条件が付くようになっていた。

ただ、この二人にはこの限りではない。

マスターであるトラデス直々の誘いだ。試験は免除されそのまま入団となるだろう。だが、それは苦勞して試験をパスしてきた他のプレイヤーとは大小あれど摩擦を生む結果となるだろう。それではトラデスに迷惑を掛けかねない。

そう考えると、トラデスの元に行く事も出来ないでいるのだった。「とりあえず、ライラックにでも行ってみるかルシフィス」

「そうだね、ユグド」

ユグドとルシフィス。これが樹と湊斗の操るキャラクターの名前だった。

二人がやってきたのはライラックの一画。

ここは人が集まるということもあり、他の街にはあまり見られないような、ユーザー独自の区画がある。

例えば、街の中央から南に向かって伸びる通路。ここはユーザーが各々に商店を出す区画となっている。勿論、他の街にもこうして商店を出すプレイヤーはいるものの、ここまできつちりと特定の区画内で商店が出されているのは、ライラックぐらいのものだろう。

そして、現在ユグド達のいる場所もまた、ライラック特有の場所だった。

「ここも相変わらず賑やかだな」

「そりゃ、ネットゲームの一番の醍醐味だろうからね」

今二人が居るのは、商店が立ち並ぶ通路から通路を一本逸れた場所。そこにある広場を利用して出来た、通称“募集広場”と呼ばれる場所だ。

その名の通り、パーティーからギルド、果てにはアイテムや情報まで文字通りなんでも募集する為に人が集まった場所だ。もつとも今ではパーティーやギルドの募集の意味合いが強くなっているが。

「なあ、やけにギルドの募集がすくなくないか？」

「そうだね。こんな偏つてるってことはなかったと思っただけ」

しばらく広場内を散策する二人だが、以前にここを訪れたときは随分と様子が変わっている事を不振に思っていた。

以前に訪れたときは、パーティーやギルドの募集が乱立していたのだが、今はどこを見てもパーティーの募集しかないのである。

元々、余り訪れる事のない場所でもあるため、記憶違いかとも思うが二人とも同じ疑問を抱いていることを考えればその可能性は少ないだろう。

「ギルドの方はどこかに移ったのかもしれないね」

結局、ルシフィスが出した結論はこれだった。この言葉にユグドも頷く。

「場所探してみる？」

「いや、そこまでするほどでもないしな。今日はパーティーにでも混ざるか」

二人は、どうしてもどこかのギルドに入りたいと、いうわけではない。ただ、どちらかといえば、ギルドに入っていた方がゲームを楽しめると考えてのことだった。その為、わざわざ探してまでギルドに入るうとは思えないのだった。

変わりに、どこか募集がかかっているパーティーを探す二人。

勿論、どこのパーティーでもいと言うわけではない。相手の提示する条件に自身達が合っている所にしか入れない。

「無いな……」

「探しているときに限って無いよね」

しばらく広場内のパーティーの募集を見ていた二人だが、どこも条件が合わない。大抵がレベルが違うものだったが、時折レベルの条件をクリアしたかと思うと、ヒーラーの募集など、どこのパーティー

イーもユグトとルシフィスの入れそうなものはなかった。

「……二人でどっか行くか」

「そだね」

勿論、自分達でパーティーを募集するという方法もあるのだが、待っている時間が勿体無く感じてしまい、結局二人でダンジョンへと向かうのだった。

二人がやってきたのは、ライラックにある教会の地下に広がるダンジョン、その最下層だ。

近いからという単純な理由でこの場所まで来たのだが、この場所は二人には少し厳しい場所だ。もっとも、この二人に限れば、そのくらいが丁度いい。この場所はまさに適当といえるだろう。

前衛職が二人ということもあり、次々とモンスターを撃破していくユグドとルシフィス。元々二人には少し厳しい場所ということもあり、モンスターを倒すのに若干時間はかかるものの、決して苦戦はしない。

また、こういった場所では大抵の場合、魔術師系統のクラスと僧侶系統のクラスのプレイヤーを必要とする場合がほとんどだが、やはり、その辺りもこの二人には当てはまらない。

過去にユグドは僧侶系クラスを、ルシフィスは魔術師系クラスを経験しているため、攻撃、回復魔法共に二人で十分役割を果たせるのだった。

二人で攻撃と魔法を両立させるのはパラメータ的にも厳しいものはあるものの、プレイヤースキルで補えるだけの腕は二人とも持っている。その為、大した障害にはなっていないのだった。

「結構戦えるね」

ここに来て三十分。特に危うい場面に遭遇することなく順調に戦闘を重ねていく。

モンスターを、また一匹倒したところで、ルシフィスが口を開いた。

「そうだな。適当に選んだ割には当たりだったな」



ユグドも彼の言葉に同意する。

ユグドもルシフィスもこの場所は初めてだったが、予想以上に良好なダンジョンに二人は満足気だった。

「それじゃ、ついでにボスも行ってみる？もしかしたら開いてるかもしれないし」

ルシフィスがとんでもない提案をする。

「いくらなんでも無理だろ。人も見かけないし多分誰も居ないぞ」  
いかに二人のプレイヤースキルが高いとはいえ、ボスモンスターまで倒せるかといえば、それはまた別の話だ。レベルは足りていなくて、人数も二人というのはいくらなんでも無謀すぎる。

多少の無茶なら大抵は付き合うユグドでも、流石にこれには賛同出来ない。

「折角来たんだしさ。それにここのボスも見たことないし」

「はあ……わかったよ。その代わり部屋が開いてなかったら諦めるよ」

ユグドは溜息混じりにそういうのだった。

道中に現れるモンスターを倒しながら、目的地へと向かう。人をほとんど見かける事は無かったが、幸いにも大量のモンスターに囲まれることも無く順調に進んでいく。

特に危険に陥る事も無く、無事目的地へと辿り着くが、ここまで来ても、やはり人はいない。

「しかし、ホント人が少ないな」

「戦闘中かな？とりあえず見に行こう」

ボスモンスターと戦闘中なのか、それともただ単純に人が居ないだけなのか。ここに居ても判断出切る材料はない。

もっとも、人の存在は特に問題ではない。一番の問題はボスモンスターとの戦闘が可能かどうかという一点のみだ。確認のためにも二人は扉へと近付いていく。

「まだなのか終わった後なのか　ともかく戦闘は無理みたいだな」  
「そうだね。しょうがない、また人を集めてからだね」

「お前ホント好きだな……」

ルシフィスの言葉に、最早呆れながらそう返すしか出来ないユグドだった。

その後は、ダンジョンの探索を再開し、街に戻ったのは二時間程経ってからだった。

街に戻って、まずは精算を始める。精算と言っても気の知れたもの同士、内容は簡単なものだ。

特に使い道のない売るためのアイテムはルシフィルに、プレイヤーに売れそうなものはユグドに集める。あとはそれを、ルシフィルはNPCに売却、ユグドはオークションに登録。あとは、手に入ったお金を二分して精算は終了だ。

必要以上のやり取りがないため、十分もあれば終わってしまう作業だ。この辺りは慣れた者同士の特権と言えるだろう。

予想以上に、収入が多く懐も暖まった二人は商店の立ち並ぶ、南側の通路へと来ていた。もっとも、特に目的がある訳でもなく、冷やかしか　あるいは掘り出し物への期待といったところだ。

「！ルシフィス、アレ見てみるよ」

興味のないものが、あつてもとても手が出せるようなものではないものばかりで、このまま商店めぐりも終わろうとした時だった。

ユグドは何かを見つけ、ルシフィスに声を掛ける。

「ん？何かあった？」

ユグドの声につられ、ルシフィスも彼の指す商品を見てみる。

「これって……指導者の証？」

「そう。いつそのこと自分達で作るつてもありだと思わないか？」

とりあえず、どこかのギルドに入ろうとは考えていた二人だが、自分達でギルドを作ってしまうという考えは無かった。ユグドの提案はまさに盲点だった。

ギルドを作るにはクエストを成功させれば良い。

クエストと言っても大層なものではなく、ユグドが見つけた、この“指導者の証”というアイテムをNPCの元に持っていけばいい

だけだ。アイテムさえ手に入れば簡単に造ることが出来る。

「それはいいけど、ユグドお金あるの？」

「こっちは足りないな……そっちは？」

「こっちも同じく」

ダンジョンの最深部まで辿り着くことが出来るほどの実力を持っていても、まだゲームを始めて半年ほど。ゲームの特性も含め、購入しないといけないものも多く、これは、アイテムを一つ一つドロップする手間も時間も惜しいからではあるが、二人の手元にはあまりお金が残る事はない。

今回も、ダンジョン帰りで懐が暖かいと言っても決して多くはない。二人の所持金を足しても、到底手が出そうにないのだった。

「仕方ない。とりあえず稼ぐか」

「そうだね」

二人の意見が一致すると、再びダンジョンへと向かうのだった。

ユグドとルシフィス。二人がギルドの結成を目指して一週間。未だ成果は出ていなかった。

「売り切れの事をすっかり忘れてたな」

「あの時、取り置き交渉をしとくんだったね」

沈みがちなユグドとは対照的に、のんびりとした様子で答えるルシフィス。

目標金額には三日ほどで既に届いていた。だが、今度はアイテムが見つからないという事態に陥っていた。

売っているのはNPCではなく、あくまでプレイヤーだ。必ずしも目的のも物が売っているとは限らない。そのことをすっかり失念していた二人は、アイテムを探すためダンジョンと商店を往復する日々が続いているのだった。

「ここまで見つからないと嫌がらせされてる気になってくるな」

「どこか別のギルドに入的事情かもかもしれないよ」

やはり、対照的な雰囲気二人の会話は続く。

ギルドの結成を決めてからも、メンバーを募集しているギルドも同時に探してはいた。だが、これといったギルドも見つからずにはいた。

「いや、もうここまで来たら絶対にギルド作ってやる」

「じゃあ、ダンジョンだね」

一通り商店を覗き、ここで収穫がないのを確認すると再びダンジョンへと向かうことにする。

二人がやってきたのは、南に広がる砂漠の一角にあるダンジョン。この地下二階が二人の目的地だ。

モンスターはそれほど強くはなく、ユグド達からすると物足りない相手だ。だが、二人の探すアイテム“指導者の証”をドロップするモンスターで一番効率よく倒せるモンスターはここにいるモンスターになるため、ここ数日はこうしてここに通っているのだった。

「それじゃ、今回もがんばって行きますか」

「そうだね。何かあったら連絡ってことで」

短いやり取りを終えると、その場で解散する。

二人で戦うほどのモンスターもいないため、いつも個別に探索をしている。今回もそのスタイルを変えることも無く、二人で違う方向に向かうのだった。

ルシフィスと別れて間もなくして、モンスターを発見する。相手の様子を見る事無く突っ込み、そのまま斬りかかる。斬った勢いを殺さぬまま、モンスターの脇をすり抜けると、振り向きざまに背後からも一撃。

僅か二回の攻撃でモンスターを倒してしまう。

「ここまで楽だと物足りないな」

誰に言うだけでもなく一人呟くユグド。

「愚痴らない愚痴らない。ここ以外だとあまりいい場所ないんだしボイスチャットはそのままの状態になっていた為、ユグドの呟きはルシフィスにも聞こえていたようだ。」

「わかってるよ」

予想外の反応に内心驚きながらも、ユグドは短く返す。

他の場所では、自分達では厳しいか、そもそもアイテムを持っているモンスターが少ないという場所ばかりになってしまう。

そのことは十分に理解しているユグドだが、ここ数日はずっとこの場所で戦闘を繰り返している。どうしても愚痴が出てしまうのだった。

軽く溜息を吐くと、ユグドは再びモンスターを探し移動を開始するのだった。

「ユグド、こっちはそろそろ限界。そっちは？」

探索を始めてしばらく経った頃、ルシフィスから連絡が入る。どうやら今回はこれで終了のようだった。

限界とは言っても、HPがギリギリという状況でもなければ回復アイテムが尽きたという訳でもない。モンスターからのドロップアイテムで重量が限界なのだった。

普段、ダンジョンに籠っている時間の半分も経っていたはずなのだが、このダンジョンのモンスターは楽に撃破出来る。結果、短時間で普段以上のモンスターを倒す事が出来、同時にアイテムの取得量も増える。そのため、ダンジョンの滞在時間も短くなるのだった。「こっちはもうちょっと余裕はあるけど……戻ったほうが無難だな」「了解。それじゃあ、合流しようか」

そう言って、互いの場所を目指して移動を開始する。

表示されているマップには、パーティーメンバーの動きも表示されているため、相手の動きは簡単に把握出来る。分かれ道で余程変な方向に向かわない限りは、合流に手間取る事もない。

ユグドはルシフィスの動きを気にしながら、彼の居る方向に進んでいく。

自分達が帰ろうとしたところで、モンスターは出現しなくなるわけではない。移動をしている間も、次々とモンスターを倒していくユグド。

「なんか帰ろうとした途端に増えてないか？」

「よくあることだよ」

呆れ気味のユグドに対し、いつもの様にどこか楽し気に答えるルシフィス。

一方ルシフィスは、ユグドとは対象的にモンスターに会う事はほとんどなく楽に移動出来ていた。この様子だと、ユグドが戦闘をしている間にルシフィス側から合流出来そうだった。

ユグドはというと、戦闘自体はそれほど時間もかからずに終わるのだが、どの道を選んでもモンスターと遭遇するのだった。

アイテムを探すルシフィスにとってはこの状況は嬉しいものなのだが、帰る間際になってというのは、同時に皮肉でもあった。

二人の距離が漸く近付いてきた頃、通路の先で戦闘をしている様子が伝わってくる。間違はなくルシフィスだろう。ユグドは周囲のモンスターを手早く片付けると、戦闘が起きている場所へと向かう。そこには、やはり戦闘中のルシフィスがいた。苦戦はしていないものの、彼を囲むモンスターの数はなかなかのものだった。ざっと見たところ、狭い通路に八匹ほどモンスターが確認出来る。

数こそ多いが、二人からすればやはり格下の相手。ユグドの加勢も加わり、見る見る内にモンスターの数は減っていく。周囲のモンスターが全滅するのに、それほど時間は掛からなかった。

「とりあえず戻るか」

周囲にモンスターが居ないのを確認すると、ユグドが“トランスゲート”の魔法を唱え、二人はその場を後にするのだった。

ユグドとルシフィスはライラックへと戻っていた。

ダンジョンまでは距離があるものの、他のプレイヤーが売り出すアイテムを探すにはこの街が一番都合がいい。そういった利便性からも、ここ最近はずっかりこの街が二人の拠点となっていた。

ダンジョンから戻った二人は、人の少ない場所へと移動し精算作業を始める。いつもの様に、NPCに売ってしまうものとオークションに登録するもので仕分けをしていく。

「今回も収獲なしだったね」

「だな。まあ、最後に大量に出てきたときはログもちゃんと確認してなかったしそっちに期待だな」

「ユグド、それ欲しい」

「そーいや、クエスト用だったっけ？」

そんな会話をしながらアイテムの振り分け作業が続いていく。

二人とも所持限界量ギリギリがまでアイテムを持っていたことと

何より、今回の探索では様々な種類のアイテムが出た事もあり、いつもより少し時間がかかっていた。

「こっちはこれで　って、あつ……」

ユグドは自身のアイテムの整理が終わったところで何かに気付く。

「どうしたの？」

「……出てた」

「は？」

一瞬、何の事かわからずルシフィスはマヌケな返事を返してしまふ。

「指導者の証……出てたわ」

ユグドはそう言って、指導者の証を見せてみる。

二人がギルドの結成を目指して一週間。漸く二人の目的は達せられたのだった。

## Chapter 5 - 1 (後書き)

ラシル(以下ラ)「今回は過去編です」

ハルカ(以下ハ)「全五話とか言ってたのに過去編なんか入れて大丈夫なんですか？」

ラ「流石にその辺りのことは作者も考えてるみたいだぞ」

ハ「ならいいんですけど……それでも心配ですね」

ラ「あいつの考えほどアテにならないものはないからな」

ハ「それにしても今回はまた随分と遅かったですね」

ラ「ホントにな……」

ハ「いつも見てくださってる方には申し訳ないです」

ラ「あと、前回の今回のこのコーナーもすいませんでした」

ハ「作者のまさかのうっかりで文章追加でしたからね」

ラ「気付いた人何人いるんだろうな？」

ハ「それでは恒例のキャラクター紹介です」

ラ「と、言いたいところなんだが、前回で全員終わってたりするんだよな」

ハ「トラデスさんとかヨシノさんはしないんですか？」

ラ「ほとんどゲストキャラみたいなものだしな。ここではやらん」

ハ「それじゃどうします？」

ラ「そうだな……よし、今回はギルドの紹介にするか」

ハ「そういえばしてなかったですね」

ラ「今回はオレ達の所属ギルド“空の円舞曲”<sup>ワルツ</sup>」

ハ「元々は四人の小さなギルドなんでしたよね？」

ラ「そう。で、そこにオレが入って」

ハ「更に私とソレルが入って合計七人のギルドですね」

ラ「マスターはエルナ、基本的にはまったりギルドだな」

ハ「どこか行くのにもギルドメンバー同士で行くことがほとんどです」



ラ「仲いいからな、ウチの連中は」

ハ「そういえば、知名度はどうなんですか？」

ラ「何気にマスターが結構顔が広かったりするから、マスターの知り合い連中が知ってるって程度だな」

ハ「そんなもんなんですね」

ラ「普通のギルドなんてそんなもんだ。ウチが小規模弱小ギルドだから特に名前を知られる機会もないしな」

ハ「なるほど」

ラ「今回はこれぐらいだな」

ハ「ですね。では、みなさんまた次回」

## Chapter 5 - 2

「うーん、どうしたもんかな……？」

ユグドがギルドを設立してから数日。新たに発生した問題に、ユグドは頭を抱えていた。

「すっかり忘れてたね」

同じく頭を抱えているはずなのだが　そんな様子を一切感じさせること無く、ルシフィスと言う。

「まさか、ここまで人が集まらないとはな」

「どこか、適当なところに入ったほうがよかったかもね」

ギルドを設立はしたものの、人は一切集まらない。これが二人が頭を抱えている理由だ。

ここ数日、メンバーの募集をしてきた二人だったが、これといった成果は未だ出ていない。ほぼ勢いだけでギルドの設立を決めたせいか、設立後にはメンバーを集めなければならないということをすっかり忘れていたのだった。いや、正確に言えば、この苦労を正しく認識していなかったというべきだろう。

「やっぱ、今更ギルドに入ろうってヤツはいないのかな？」

しばらくメンバーの募集をしていて、ユグドがずっと疑問に思っていたことだ。

ファンタジアナイツの正式サービスが始まって数年。

最近では、新規のプレイヤーは珍しい。即ちそれは、長期間というほどではなくとも、それなりの期間はこのゲームをプレイしていることになる。そして、それはだれもがどこかしのギルドに所属しているのでは？　と、そんな考えに至るのだった。

「そんなことはないと思うけど。そんなに多くはないだろうけど」  
ユグドの言葉を否定しつつも、最後にそう付け加えるルシフィス。彼の言うように、確かに皆どこかのギルドに所属ということはずまずない。一人で行動する、所謂ソロプレイヤーもいれば、何ら

かの理由でギルドを抜けた者、ギルドそのものがなくなってしまった者など、ギルドに所属していない者はたしかに居る。

尤も、最後にルシフィスが付け加えた様に、その様な者達が少数であることも確かだ。

ファンタジアナイツは多人数参加型のRPGだ。そして、このゲームの一番の醍醐味といえば、他の者とパーティーを組んでダンジョンに向かうということだろう。

勿論、このことはこのゲームを始めたほとんどの者が理解しているところではある。結果、どこかのギルドに所属するというのは自然な流れだろう。

「はあ……その少数に期待するしかないか」

「そうだね」

そうして、二人は再びメンバーの勧誘へと戻るのだった。

そして次の日。

昨日も成果はなかったせい、樹はだんだんとログインをするのも億劫になってきていた。とはいえ、湊斗はログインをしているため、そうも言ってはられない。

樹は軽く溜め息をつく、今日もファンタジアナイツの世界へと赴くのだった。

ユグドが現れたのは、かつて自身が所属していたギルドの溜まり場。

ギルドは既に解散しているため、この場所に誰かが来ることはもうない。また、解散したのもほんの数日前ということもあり、新たにどこかのギルドがここを溜まり場にしようとやってくることもなかった。

尤も、街のすぐ側とはいえ、ここは街の外。入り口からわずか距離があるため、決して便利な場所だとはいえない。そんな場所に人が来るとは考えにくい。

そうだった理由もあり、ユグドとルシフィスはここを拠点に動いているのだった。

「ちょっと早かったか……？」

ユグドは辺りを見回すが、人が居る様子は無い。ギルドメニューを表示させ、メンバーのログイン状況を見ているが、やはり自分しかログインはしていない。

大抵の場合、湊斗　ルシフィスが先にログインしているので、こういった状況は珍しい。

ユグドはその場に座り込むと、これから先のことを考える。メンバー集めは相変わらず成果はなし。いつその事、ギルドなどやめてしまつてどこか別のギルドに入ってしまったほうがいいのではないか？　ギルド設立のためにつかったアイテムや、これまでにかかった時間は無駄になつてしまふがこのままよりよほどいい気がする。

そんなことを考えていた時だった。突然、一人のプレイヤーが現れる。どうやら、だれかがログインしてきたようだ。そして、こんな場所にログインしてくるようなプレイヤーは一人しか思いつかない。

「よう、今日は遅かったな」

相手を確認するまでもなく、そう声を掛ける。

「ちよつと調べ物をしててね」

ユグドの予想通りの人物　ルシフィスが言葉を返す。

「調べ物？」

「うん。ユグドがもう飽きてきたみたいだからね、ちよつと違う方法を探してきた」

メンバーの勧誘のことだ。

学校でそれらしいことを言つた事を、ユグドは思い出す。

「メールしておいたから見てきなよ」

そう言われ、樹はメールソフトを開いてみる。いくつものメールマガジンに混じつて湊斗からのメールが確かに届いていた。

早速開いてみると、中にあったのはアドレスのみ。メールの送り主が湊斗だと気付かなければ間違いなくスパムメールとして処理しているところだ。

そんな内容に少し呆れながらも、早速リンクをクリックしてみる。その先にあつたのは、どうやらファンタジアナイツの攻略サイトの様だ。湊斗が以前から参考にしていたのか、それとも新たに探してきたのか。ともかく、樹は初めて見るサイトだった。

普段、あまりこういったサイトに通うことも無い樹だが、今回のように紹介されたサイトは一通り目を通すことにしている。しかし、今回は人を待たせていることもあり、必要と思われる部分のみを見ていく。

「へえ、結構な情報量だな」  
樹は思わず感心する。

ある程度当たりをつけて見ているとはいえ、やはりどうしても関係のない場所に行くこともある。その際も流し読み程度で見ているが、それでもわかるほどにしつかりと作りこまれたサイトだった。これまでに湊斗から知らされてなかったのが不思議なくらいに思えてくる。

三十分ほどで、必要な情報は得ることが出来た。一旦ブラウザを閉じると、樹は再びファンタジアナイツへと戻る。

「お待たせ」

「意外と早かったね」  
少し間を空けてルシフィスから返事が返ってくる。

「それじゃ、早速行こうか」  
「意外と効率悪そうだけどな……」

「でも確実性はあるみたいだよ。それに、今までのやり方も全然効果なかったしね。なら別の方法を試してみるのもいいんじゃない？」  
「それもそうか」

そういうと、二人はサイトから得た方法を早速実行するために、街へと向かうのだった。

二人がやって来たのは、ライラックの一角にある広場。最近は何となく来ることがなかったが、パーティーの募集などに使われる場

所だ。

「相変わらずオレらに丁度よさそうなパーティーってないよな……」  
一通り募集内容を見てみるが、今回もユグド達が入れそうなパーティーはなかった。

余り来ることがないというのもあるだろうが、ユグドにとってこの場所は、パーティーを組める場所というイメージはあまり持てないのだった。

「愚痴らない愚痴らない。僕たちが募集すればいいだけなんだし」  
特に困った様子を見せることもなく答えるルシフィス。

適当な空いた場所に座り込むと大まかな条件だけ提示し、あとは人が来るのを待つだけだ。

「しかし、パーティーを募集してギルドに入っていないヤツを勧誘……か。そんな上手くいくもなかねえ」

人が来るのを待つ間、ユグドがそんな言葉を漏らす。先程のサイトに掲載されていた情報だ。

「相手の人柄はわかるからね。普通に募集するよりは確率は高いみたいだよ」

これもサイトに掲載されていた情報だ。勿論、ユグドも知らない訳ではない。ただ、今ひとつ信憑性が持てないというのが正直なところだった。

「ま、とりあえずはやってみるしかないよ」  
ルシフィスはそういつて話を締めくくるのだった。

メンバーの勧誘方法を変えて二日ほどが過ぎた。  
成果は相変わらず無しだ。

既にギルドに所属しているプレイヤーがほとんどで、ソロで活動している者は滅多にこない。それでも一日に二、三人程は見かけが、それもほとんどの場合がセンドキャラクターでギルドに所属させるつもりのない場合がほとんどだ。

尤も、そう上手くいくとは最初から考えてはなかっただけに、こ

の結果はさほど気にはしていない。むしろ、これまでにない状況でダンジョンにいける今の状態を楽しんでいるのだった。

「知らないヤツとでも意外と楽しめるもんだな」

「それゲーム初めて半年も経ったプレイヤーのセリフじゃないよ」

どこか呆れながら、ユグドに答えるルシフィス。

割と社交的なルシフィスに対し、ユグドは閉鎖的だ。その上、ソロプレイも気にしないときている。

これまでに、こういった他のプレイヤーとパーティーを組んだ経験はほんの数える程度だ。

ファンタジアナイトに限らず、この手のゲームの一番の醍醐味といえる部分をひたすらに無視してきたのだ。ルシフィスが呆れるのも当然だ。

「そう思うなら、もうちょっとこういう場所にも顔出すようにしなよ」

「ま、気が向いたらな」

そついうと新たにパーティーを募集する。

「時間的にも今日はこれでラストかな？」

ユグドが時間を確認しながら言う。

時刻は現在午後九時。一度ダンジョンに行けば、どんなに早くても一時間程度で帰ってくるということはまずない。それに他のメンバーを待ったり場所を決めたりしては、更に三十分は掛かるだろう。

明日も平日であることを考えれば、これ以上続けるのは難しそうだった。

丁度その時、一人のプレイヤーが二人の下にやってくる。

「こんばんは。入れてもらってもいいですか？」

黒いローブに身を包んだ、魔術師。名はファティマというようだ。

「うん、歓迎するよ」

ルシフィスはそう答えると、ファティマをパーティーへと招き入れた。

ファティマが来てから既に十分以上は経過している。これまで他愛もない話で盛り上がったいた三人だったが、出会ったばかりの者同士そうそう話題があるはずもなく、次第に話は尽きていく。

「誰も来ないな……」

話がひと段落ついたところでユグドが呟く。

「そうだね。このまま三人でどこか行くのがいいかもね」

特に人の多いこの時間帯で見つからないのなら、あまり待つのは得策ではない。そう考えたルシフィスが提案するのだった。

「え？でもオレ達回復役すら居ないし、せめて僧侶系の人が来るのをまつた方が……」

そんなルシフィスの意見にファティマが異を唱える。

前衛職が二人に、魔術師が一人。回復役の居ないこのメンバーでダンジョンに向かうのは、確かに得策とはいえない。ファティマの意見は至極真つ当なものだ。

「それならオレが出来るから問題ない」

そう答えるユグドだが、ファティマは絶句するしかなかった。

いくら回復魔法が使えるとはいえ、ユグドはあくまで前衛。それも魔法とは無縁の戦士系の中位クラス、グラディエーターだ。

魔法による回復は魔力値に影響されるため、当然ながらユグドにまともな回復量は期待できない。それにも関わらずユグド いや、ルシフィスも含めたこの二人は、特に気にしてはいないようだった。  
(このパーティーはハズレだな……)

ファティマはそんなことを思うのだった。

一行がやってきたのは、ルナリアダンジョンの二層目。

ファティマが普段行くことなく、経験値も稼げる所ということで、ここに決定となった。

(いくらなんでも無茶すぎだろ)

口にし出さないが、ファティマはずっとそんなことを考えていた。



ここ　　ルナリアダンジョンの難易度は、なかなか高目となっている。いくら三人いるとはいえ、この場所はユグド達にはまだ早いだろう。

尤も、ユグドやルシフィスからすれば、こういったことはむしろ日常茶飯事と言ってもいいぐらいなので、問題はない。だが、そんな事情を知らないファティマからすれば、無茶だと思つのも無理ないことだろう。

（多少死ぬのは諦めて、それを理由にさっさと抜けるか）

そんなことを考えながら、ファティマは小さく溜め息を吐くのだつた。

探索を始めて間もなくして、早速モンスターを発見する。それも二匹。

このダンジョンの難易度が高い理由として、モンスターのレベルが高いというだけではない。モンスターの多さも難易度を上げていることに一役買っている。その為、こうして、複数のモンスターと対峙するということは、ままあることなのだった。

「それじゃ、オレらで引き受けるから魔法よろしく」

「後ろからくるモンスターには気をつけてね」

ユグドとルシフィスはそういうと、相手の強さや数など気にする様子もなく　事実、一切気にしていないのだが　早速モンスターへと近付いていく。

（どこまで持つのやら……）

二人の様子に、半ば呆れながらもファティマも呪文の詠唱を開始する。

（あ、あれ……？）

戦闘は三分と経たない内に終了した。勿論、ユグド達の勝利で。レベルの問題があるため、時間こそかかるものの、問題らしい問題といえばそれぐらいだろう。

ファティマの予想を大きく裏切り、若干のダメージを受けた程度で、戦闘は終了してしまった。

「どうした？ぼけつとして」

「え、あ、いや、なんでもない」

ファティマは慌ててそう言うと、二人についていくのだった。

それから二時間ほどダンジョンを探索したところで、ついにアイテムの重量が限界近くまで達する。

「そろそろ切り上げるか」

「そうだね」

ユグドとルシフィスの様子は普段と変わらない。だが、ファティマだけは、未だに呆気に取りられていた。

まともに戦闘など出来るはずはないだろうと思っていたのだが、終わってみると、結果はその真逆とも言えるものだった。戦闘にならないどころか、この二時間、誰も倒れることなく終わってしまったのだ。

これまでファティマがファンタジアナイツをプレイしてきた中で、格上のモンスターを相手に、それも大抵の場合は複数を同時に相手にして、ここまで圧倒するのは始めてのことだった。

「なあ、アンタら何者だ？」

清算を終え、あとは解散となったところで、ファティマが疑問を口にする。

「何者って……極々普通のプレイヤーだよ」

「普通のって、明らかな格上相手に余裕勝ちするようなヤツらに言われても信用出来ないって」

ルシフィスの言葉をそのまま信用出来るはずもなく、ますます怪しむファティマ。

これほどのプレイヤースキルをもったプレイヤーはそうそう居ない。しかもそれが、ゲームを始めて僅か半年のプレイヤーというのだから、怪しむのも無理はないだろう。

「オレら、師匠にかなり鍛えられたからな。多少の無茶なら全然問題ない」

「師匠？」

ユグドの言葉に聞きなれない単語を、思わずおうむ返しに聞き返す。

「ああ。“エターナル・エチュード”ってギルドのマスター。まあ、今は居ないけどな」

「っ！エターナル・エチュードだと！？なるほど、確かにそれなら納得だ」

ギルドの名前を聞いた瞬間、ファティマの中で全て納得出来た。だが、逆に今度はユグドの方が訳がわからなくなってくる。

「なあ、あのギルドってそんなに有名なとこだったのか？」

「え……ユグド今まで知らなかったの？」

ルシフィスに問いかけるが、帰ってきたのは呆れたような返答だった。自信の所属していたギルド　それも半年もの期間　のこ

とを知らないのだから、こんな反応を返すのも無理はない。

「わざわざ自分のギルドのこととか調べないって」

「それでも結構名前とか出てくるんだけど……そもそも掲示板なんて覗きに行かないよね」

ネット上だけでなく、リアルでも付き合いのある二人だ。当然、

このユグドという人物がどういった者かはわかっている。そう、わ

かっているのだが、それでも最早出てくるのは溜め息ばかりだった。「僕達の居たエターナル・エチュードってギルドは、人数はそれほど多くはないけど、みんな実力者ってことで、周りからは結構注目されてたんだよ」

「メンバー僅か十五人ほどで中堅最強ギルドって呼び声高かったぐらいだぞ」

ルシフィスが説明していると、ファティマもそれに入ってくる。

ルシフィスの言葉に比べれば、ファティマはやや大袈裟に聞こえるが、それはあながち嘘ではない。むしろ、ルシフィスが控えめに説明していると言ってもいいほどだ。

中堅ギルドで十五人といえば、中程度かやや少ないといったくらいだろう。それでも最強の文字が付けられる辺り、彼らがどれほど

の実力者で、どれほど注目されていたのが窺える。

「へえ、そんなにすごいとこだったんだな」

しかし、ユグドの反応はあっさりしたものだった。

「反応薄すぎだろっ！そもそもあそこは」

「わかったわかった」

まくし立てるファティマに圧倒されるユグド。

エターナル・エチユードはファティマにとっても思い入れのあるギルドだったのだろう。この話になってから、彼のテンションは随分と高いままだ。

「よかつたら、ウチに来るか？」

「え？」

ユグドの予想外の言葉に、思わず聞き返すファティマ。

「ちょうどギルドにも入ってないみたいだしね。よかたらどう？」

ユグドに合わせ、ルシフィスも勧誘を始める。

ファティマからの返答はない。恐らく迷っているのだろう。少しの間沈黙が続く。

「そうだな、アンタ達といると面白そうだ。改めてよろしくな」

こうして、新たなメンバーが加わったのだった。

## Chapter 5 - 2 (後書き)

ラシル(以下ラ)「みなさん、こんにちは。やっと五話も半分まできました」

ハルカ(以下ハ)「過去編はまだ終わらないんですね」

ラ「作者曰く『引つ張りすぎた』らしい」(汗)

ハ「毎度の如く無計画っぷりを発揮したんですね」(汗)

ラ「そんな訳でもうしばらく過去編にお付き合ってください」

ハ「それではギルド紹介です。今回は三大ギルドの一つ荊棘ソニデアの森フォーレストです」

ラ「オレの知り合いのトラデスがマスターを務めるギルドで、三大ギルドの中じゃ新参のギルドだ」

ハ「そもそも三大ギルドって何なんですか？」

ラ「三大ギルドってのは、簡単に言うと、とにかくメンバーが多くて強いゲーム内で特に飛び抜けた強さを持つギルドだな」

ハ「三大ってことは当然三つあるんですね？」

ラ「まあな。流石に残りの話数的にも出せないけどな」

ハ「ラシル君は荊棘の森ってどんなギルドかは知ってるんですか？」

ラ「一応な。とりあえず分類するなら狩りギルドだろうな」

ハ「なるほど。確かにダンジョンで人を見かけると、ここの人達だったってことはよくありますもんね」

ラ「だな。ギルドもメンバーも互いに強さを求めているからな。どうしてもそうなるってわけだ」

ハ「それでは今回はこの辺で」

ラ「また次回」

## Chapter 5 - 3

「マスター、今、暇？」

ライラックで商店を覗くユグドに、ギルドチャットで声が掛かる。声の主は、どうやらフアティマのようだ。

「ああ、特に用はないよ。どっか行くのか？」

「今、みんなでアリーナに行ってみようって話になっててさ、マスターもどう？」

「アリーナか……」

アリーナと聞いた途端、渋りを見せるユグド。

アリーナは、プレイヤー同士の戦闘を目的としたマップだ。基本的にPKが不可能なファンタジアナイツで唯一プレイヤー同士が戦える場所だ。だが、ユグドはこの場所が苦手なのだった。

普段なら、誘えば大抵は快諾するユグドだが、アリーナだけはほとんど来ることがないのだった。

「ほら、先月入ったミュシャの歓迎会だってちゃんとやってないしさ」

どうにも今回は押しが強い。こう言われては流石に断るのは気が引ける。

尤も、歓迎会と称していないだけで、三日連続でギルド狩りを行い、その間に手に入れたレアアイテムのほとんどは入団祝いと言ってミュシャに渡していた。これは十分に歓迎会と言えるのではないかと言いたくなるユグドだったが、それは抑えておく。

「わかった、行くよ。溜まり場でいいか？」

「ああ、それでいいよ」

溜め息交じりに承諾するユグドだった。

三月の春休みもそろそろ終わりが見えてきた、そんな時期のことだった。

ユグドが溜まり場に戻ると、既に他のメンバーは集まっていた。

ギルドを立ち上げ数ヶ月、メンバーは五人へと増えていた。

ファティマを勧誘してから間もなくして、勧誘出来た エンチャンターのイーリス。そして、先程のユグドとファティマの会話に出てきたように、一ヶ月程前に偶然の出会いから入団することになった ゴッドハンドのミュシャ。この二人が新たにメンバーとなっていた。

「お待たせ、アリーナだっけ？」

そう言いながら、とりあえず腰を下ろす。

「うん。みんな準備は大丈夫？」

ルシフィスの言葉に全員が頷く。

「それじゃ行くか」

一行は、アリーナへと向かうのだった。

この大陸を治める王国クロツカス。ライラックはその王国の首都というだけあり、王城とも通じている。王城は常に開放されているらしく、簡単に入ることが出来る。

上へと向かえば、国王のいる謁見の間へと通じるが、ユグド達が用があるのはこっちではない。その逆の地下だ。

階層を一つ降りただけで城の様子はがらりと変わる。煌びやかだった内装は打って変わり、岩肌をむき出しにし、所々に武具の見受けられる無骨なものとなっていたのだ。地下は兵の訓練所となっているようで、それも当然と言えるだろう。

そんな場内の様子に全く触れることなく、一行はどんどん進んでいく。

しばらく進むと、大きな扉と一人の兵士が見えてくる。ここが目的地　アリーナだ。

「うーん、どこもいっぱいだよ」

真っ先に兵士に話しかけたミュシャが落ち込んだ様子で言う。

アリーナはいくつかのフィールドに別れている。そして、それぞれに人数が制限されている。

「別にオレ達が入れないほど多いフィールドもないじゃないか」

人数を確認したユグドが言う。

「でもイベントとかはしてるかも」

同じく人数を確認したイーリスが言う。

プレイヤーキラ  
いかにPKを目的とした場所とは言え、最低限のルールというものはある。イベント中に突然乗り込み、暴れまわろうものなら確実にルールに抵触するだろう。

勿論それは、公式によるものではなくプレイヤー間での、一種の暗黙のルールのようなものだ。必ずしも律儀に守る必要もない。事実、アリーナに重点を置くプレイヤーは無視される場合がほとんどだ。

そもそもこのルールが、時折アリーナに来るだけの者達が作り上げたのだから、こうなるのは仕方がないのかもしれない。

「なんかやってりや入り直せばいいだろ。とりあえず一番多いところ行ってみるか」

ユグドはそういうと、返事を待つことなく姿を消してしまう。それに合わせて、残りのメンバーも後に続くのだった。

一行がやって来たのは街を模したようなフィールドだった。立ち並ぶ建物の隙間に、他のプレイヤーの姿が見受けられる。だが、いくつかのグループは居るものの、どれも戦闘をしている様子は見受けられない。

「イベント中って訳じゃなさそうだけど……」

「流石にこれは戦闘を仕掛けづらいな」

ルシフィスとファティマだ。

どのプレイヤーも、座り込んでしまっただけで動こうとはしない。フィールドを一周してきて初めて見かけたグループも微動だにしていな

い。  
「しょうがない。一旦出るか……ってミュシャ、どうした？なんか元氣ないけど」

普段は明るく、すっかりギルドのムードメーカーとなっていたミュシャだが、フィールドを回っている間にそんな様子は見えなくな



っていた。

「うっん、大丈夫。ちょっと見られてる気がして……それだけだから」

苦笑気味にそう答えるミュシャ。

視線 それは他のメンバーも確かに感じていた。

単に注目と言ってもいい意味でも 逆に悪い意味でも受けることになる。今回の場合は明らかに後者だろう。ミュシャは人一倍強く感じていたのだろう。すっかり意気消沈といった様子だ。その様子を見て、気のせいではなかったのだと確信する。

「やっぱりあの噂のせいで……」

「イーリス！」

心当たりがあるのか、イーリスが呟くとファティマの声がそれを制止する。

「ごめんなさい、マスター。私……」

「いいよいいよ。内容はともかく、噂があるのはホントだしな」

特に気にした様子もなく答えるユグド。

イーリスが思わず漏らした噂 いかに関係に疎いユグドもその内容は知っていた。だが、それも当然と言えるかもしれない。その内容はユグド自身のことなのだから。

事の発端は一週間ほど前に遡る。

その日、ファンタジアナイツは大型のバージョンアップを行った。同時にあるユーザーが一つのツールを公開した。ダメージ無効化ツール 所謂チートツールと言われる物だ。

これが偶然なのか、開発者の思惑によるところなのか、それは誰も知る由はない。だが、このツールの公開が原因となったことだけは間違いなかった。

ファンタジアナイツのアップデートと共に装備品もいくつか追加されていた。今回は上級者向けのアップデートと公式サイトにも掲載されているように、追加された装備品やダンジョンはどれも高性

能、高難度となっていた。

普段は特別情報収集などしない樹も、この時ばかりは追加要素の情報を眺めていた。

ダンジョンの情報を一通り見終わった樹は、今度はアイテムの情報へと画面を切り替える。アップデートして間もないというのに、性能は勿論、入手方法まで既に公開されている。

（どこでこんな情報拾ってくるんだか……）

そんなことを考えながら眺めていると、一つの鎧が目に残る。

“聖鎧アレフ・ストレイン”。高性能な鎧だが、入手方法はアイテムの交換のみと長いクエストをこなす手間はない。交換用のアイテムはレアアイテムがずらりと並んでいるが、幸いギルド狩りなので溜め込んだアイテムで十分に事足りる。

問題があるとすれば、交換するための場所だろう。流石にソロで行けるほど簡単な場所ではない。尤も、ギルドのメンバー達と行けばあまり心配はいらないだろう。全員がレベル100オーバーで特殊クラスだ。そう簡単にはやられることはない。

問題が無さそうなことを確認すると、早速ログインしてギルドのメンバーを招集するのだった。

結果から言ってしまうと、特に問題が発生することもなくアイテムは無事手に入れることが出来た。

メンバー達は二つ返事で了承してくれ、ダンジョンも危険に陥ることなく進めた。更に嬉しい誤算として、“聖鎧アレフ・ストレイン”はユグド個人の所有物となった。

元々、ギルドで管理しているアイテムで作った以上、この鎧も個人ではなくギルドで所有という形にするつもりだったのだが

「ユグドが持っていていいんじゃない？」

「マスター、基本的に何も欲しがらないしな。たまには貰ってもいいと思うぞ」

「私は当分前衛をするつもりはないですし、マスターが持っていていいから、ちやっってください」

「ボク、最近色々貰ったしこれ以上は貰えないよ」  
等々。

メンバー達の好意により、晴れて鎧はユグドの所有物となったのだった。

それから数日後。ある掲示板で一つの話題が盛り上がりを見せていた。ファンタジアナイツのアップデートと共に公開されたチートツール。これを早速使っているプレイヤーを発見したとのことだった。そして、そのプレイヤーというのが ユグドだった。

元々一部の違反プレイヤー達からは注目されていたツールだっただけに、最初はそういったプレイヤー達の間だけで語られていた。だが、大手の掲示板ということもあり、いつしか様々なプレイヤーが来ることとなったのだった。

初めはユグドを擁護するような書き込みもあった。しかし、第三者から見ても 事実とはかくとして 白だった場合と黒だった場合、面白いのは後者だろう。そういった流れもあって、いつしかユグドはチートツール使用者のレッテルを貼り付けられることとなったのだ。

この話題がユグドの耳に入るまでそう時間は掛からなかった。自分のことだ。自ら調べなくても自然に耳に入ってくる。

当然ながら、ユグドはチートツールなど特に興味は持っていないため、この掲示板で初めてその存在を知ったほどだ。完全に濡れ衣である。

「なんで、こんな噂が出てくるかね」

溜め息混じりに、そんな愚痴をこぼすユグド。

「その極端な育成の賜物じゃない？」

ユグドの災難を楽しむかのように、ルシフィスが答える。

後に使うことになるラシルもそうだが、樹の使うキャラクターはある一点に特化されている。

素早さに特化したラシルとは逆に、ユグドは防御力に特化したキャラクターとなっていた。更にスキルもダメージを軽減するものを

中心にセツトし、極めつけは先日手に入れた“アレフ・ストレイン”だ。更に防御力が向上し、結果　ほとんどダメージを受けないというキャラになってしまったのだ。ユウドの育成状況を知っている者からすればあんな噂が立ってしまうのもどこか仕方がないように思えてしまう。

因みに、ダメージをカット出来るのはあくまで“ほとんど”なので、ダメージはしっかりとつけることになる。よく見るとそのことは十分にわかるはずなのだが、やはり、話題としての楽しみを出すためにもその辺りは無視されているのだろう。

そう考えると、更に溜め息が出てくるユグドだった。

「でも真面目な話、なんとかしたほうがいいとも思うけど？」

「どうせ根も葉もない噂だろう？放つときゃその内収まるだろ」

ユグドは表立って動く気はないようだ。下手に動いたところで、相手側を煽る結果になりかねないと判断してのことなのだが、それを察してはいても溜め息を吐かずにはいられないルシフィスだった。

そんな経緯もあり、一週間近くが過ぎた今も状況は変わっていないのだった。

一つ誤算だったのは、予想以上に話が事実として広まっていることだろう。周囲からの異常なほどの注目はその為だ。

「見つけたパーティーから戦闘　って雰囲気でもないし、一回入りなおすか？」

ユグドがそう言った時だった。近くに居たパーティーがユグド達へと近づいてくる。

「おい、チート野郎がなんでこんな所にいるんだ？」

話掛けてきたのは、騎士系の上位職であるジェネラルのプレイヤーだ。そこに友好的な雰囲気など一切ない。

「……」

ユグドは、このような手合いは基本的に無視するのが妥当だと考えている。なので、特に相手にするようなことはしない。

このままさつさとログアウトしてしまいたいところなのだが、それをすると相手の言うことを認めたようで、それはそれで癪だ。

（さて……どうしたもんかな？）

ひたすらに無視を決め込むユグドに腹を立てたのか、相手のプレイヤーは捲くし立ててくるが、それを気にすることもなくどうするか考え込むユグド。

「マスター、あれ……！」

イーリスの声に我に返り、周囲を見回してみると、他のプレイヤー達も集まり始めていた。目の前のこのプレイヤーの様にユグド達の姿を見てやってきたのか、それとも目の前のこのプレイヤーが連絡をしたのか。ともかく、このフィールドにいるほとんどのプレイヤーがユグド達の下へと集まってきているのは確かだ。

「なあ、マスター。どうする？」

予想外の状況にファティマが慌てたように問いかけてくる。

「どうするって言うても　ここで逃げたらそれこそ疑惑確定だろ？とりあえず様子見のほうがいいだろ？」

極力平静を装うが、内心ではかなり焦っていた。

逃げることは出来ない。かと言って、今ここで無実を訴えたところで聞く耳を持つ者はいないだろう。

ネット上というのは非常に匿名性の高い場所だ。何かを信じてもらおうとするのなら、それに値する信頼か情報ソースが必要となる。今回の場合なら自身のハードディスクの中身を全て公開でもすれば、あるいは大丈夫かもしれない。当然、そんなことが出来るならばという前提条件が付いてくるが。

次々とプレイヤーが集まり、あっという間にユグド達は取り囲まれてしまう。

「ざつと三十人ほどつてどこかな？」

「それってほとんど全員だよ」

このフィールドに入る時に表示されていた人数がちょうどそれぐらいだったのをミュシヤは思い出す。

「まったくいつもこいつも……物好きというかなんというか」

ユグドは集まったプレイヤー達を見ながら、呆れたように呟く。

「それ、間違ってもオープンチャットで言わないでよ?」

「オレ、そんなに信用ないか?」

ルシフィスの言葉に、思わず溜め息を吐く。

一方、周囲に集まってきたプレイヤー達からは様々な言葉が飛び交ってくる。

「あれって本物?」

「よく似た名前なんじゃないの?」

本人かどうか疑うものから、

「ゲームマスター呼んだ方がいいんじゃないか?」

「その前に三大ギルドだろ」

通報をしようとするプレイヤーまで様々だ。ただ一つ共通しているのは、誰もユグドに対して友好的な感情は持ち合わせていないということだろう。

「なあなあ、あんたネットで有名になってる人だろ?無敵ツール使ってみてどうだった?」

そんな中、一人のプレイヤーが話しかけてくる。

彼は、クラスに一人はいるお調子者といったところだろう。こんな状況でもお構いなしだ。尤も、そんな言葉にユグドが答えるかといえは そんなことあるはずもなく、答えが返ってくることはない。

「シカトかよ。どうせ使ってるのバレてんだしなんとか言えよ!」  
無視されたのが、気に障ったのだろう。言葉を荒げ、不快感を露にする。

それで、動揺するユグド達ではない。だが、周囲に集まるプレイヤー達にはそうはいかなかった。彼の不快感が伝染するかの様に、どよめきが広がっていく。

「なにあれ、感じ悪〜」

「さっさとやめちまえ!」

この程度はまだまだの野次なのだが、

「もうお前死ねよ」

「住所晒せ、殺しにいつてやるから」

……等等。

言葉がどんどん過激になっていく。その言葉を受け、周囲の者も更に言葉を荒げるという悪循環が出来上がる。その様子は、炎上してしまったブログを思い起こさせる。

「マスター、これは一旦帰ったほうがよくないか？」

ファティマが言うが、なんの反応もない。離席でもしたのだろうか？そう考えたときだった。ユグドが一步踏み出す。そのまま、お調子者のプレイヤーの側へと近付いていく。

「マズイ……っ！ユグド、やめろ！」

誰もがユグドの行動に注目する中、ルシフィスだけがユグドのやるうとすることに気付く。慌てて静止を呼びかけるが、それで止まるユグドではない。

ユグドはお調子者のプレイヤーの前まで来ると、そこで立ち止まる。そして、次の瞬間

スキルによる、強力な一撃が相手に炸裂した。相手は後方に吹っ飛ばされ、そのまま起き上がることはない。

恐らく随分とレベル差があったのだろう。たったの一撃で相手プレイヤーを下した。

突然の出来事に、辺りがしんと静まり返る。

しかし、その静寂も長くは続かない。

初めに行動を起こしたのはファティマだった。我に返ったファティマは魔法の詠唱を開始する。まるで、それを行動開始の合図とするかのように、イーリスとミュシャも動き出す。

「おい、みんなまで」

「ギルドの仲間があれだけ言われてんだ。黙ってられるかって」  
ファティマの言葉に、イーリスとミュシャも頷く。

ここで、漸く辺りを囲っていたプレイヤー達も動き始める。この

衝突を止めようとする者は誰一人おらず、皆が我先にと、ユグド達に襲い掛かる。

ファティマは魔法の発動と同時に囲いの外側へと逃げ出す。少し離れたところで、再び魔法の詠唱に入る。

イーリスはまず、ミュシャの武器に魔法属性の付与をする。それを確認したミュシャは早速近くのプレイヤーへと攻撃を開始した。

ユグドも近くに居るプレイヤーから攻撃を仕掛けていく。複数人を相手にしながらも全く引けを取らない。

「はあ……」

そんな様子を見てルシフィスは小さく溜め息を吐く。

「しょうがないな」

向かってくる攻撃を避けながらそう呟くと、ルシフィスも反撃を開始するのだった。

訳三十人もいる相手に対し、ユグド達は僅か五人。普通なら間違はなく勝ち目などないだろう。だが、レベル差と、なによりプレイヤースキルの差からほぼ互角の勝負が出来ていた。

しかし、ユグド達が勝つのは不可能だろう。一人倒す間に、一人回復されてしまうのだ。勝負はどこまでいっても平行線　いや、ラシル達の人数が少ない分、時間を掛ければ掛けるほど、どんどん不利になっていく。

三十分も経つころには、ユグド達の旗色は随分と悪くなっていた。次第に回復は追いつかなくなり、SPもほとんど残っていない。

「これ以上は厳しいね。みんな、そろそろ引くよ」

ファティマの言葉に全員が頷く　ユグドを除いては。

「ユグド？」

「……ああ、わかってる」

どこか納得のいかない様子だが、ユグドも了承する。

「全員ここを出たら、アルメリアに集合してくれ」

ユグド達の溜まり場は、噂のこともあり知っている者は少ない。今回の一件で更に厄介な事態になることを予想したユグドは、



比較的人の少ないアルメリアに移動することにした。

この日は、次のログインのことも考え、更に人気のない所に移動し終了となった。

そして次の日。

学校からの帰り道。樹の携帯電話に一本の着信が入る。こんな時間に着信が来るのを珍しく思いながらも液晶を確認する。

「げっ……」

樹の表情が一気に曇る。

嫌な予感しかない。液晶に表示された名前　そこにはトラデスと表示されていた。

出来ることなら今すぐ電源を切って、周囲からの連絡を絶ちたいところだが、そういう訳にもいかない。仮にここで電話を無視しても互いにネットに接続しているのだから、簡単に捕まってしまう。

観念した様に小さく溜め息を吐くと通話ボタンを押した。

「よう、なんか面白いことになってるらしいな」

「面白すぎて泣けてくるよ」

早速説教でもされるのかと思っただけに、トラデスの言葉は予想外だった。

「でも、ちよつとばかりマズイ方向に向かつてるぞ」

先程まで陽気に話していたトラデスの声が、突然真面目になる。

このトラデスの言葉は想定範囲内だ。昨日のことがあって、トラデスからのこの電話。これで何もないと思えるほど、樹は楽観的ではない。

「とうとうチート疑惑が確定にでも変わったか？」

「それだと、まだ面白い話で済んだんだがな」

この言葉は予想外だった。疑惑が確定になること以上にマズイ事態など想像出来ない。

「もしかしたら、ゲームマスターが出てくるかもしれないぞ」

「……は？」

一瞬何を言ったのか理解出来なかった。なぜゲームマスターが出

てくる事態にまでなっているのだろうか？

そもそもゲームマスターは、言わば警察のようなものだ。ネットの書き込みの噂程度で動くとは思えない。

「まあ、ゲームマスターならこっちの潔白も証明出来るか。そう考えればそんなに悪い話でもないんじゃないのか？」

噂がどうであれ、ゲームマスターなら確実に無実を証明出来るだろう。

「……レベルダウン者十五人。その内、引退者三人」

「？」

「昨日の騒動でお前達が暴れまわった結果だ」

昨日の騒動　つまりはアリーナでも一件だ。

アリーナは対人戦用のフィールドではあるが、プレイヤーキャラがやられた際のペナルティは通常通り受けることになる。その内容は、これまでに取得した経験値と現在の所持金を各1%ずつ失うというものだ。勿論現在のレベルに必要な経験値を下回ればレベルダウンすることになる。

だが、それがどうしたのいうのだろうか？アリーナで少しペナルティを受けすぎたというだけでゲームマスターが出てくるというのもおかしい話だ。むしろ、敵対していたプレイヤーを取り締まって欲しいぐらいだ。

「まさか、アリーナでPKしたから、なんて言うんじゃないだろうな？」  
プレイヤーキャラ

「おいおい、いくらなんでもそんな訳ないって」

「じゃあ、なんで？」

「お前ら、復活させて倒してただろ？」

「復活してきたヤツなら速攻で倒してたけど……少なくともオレはそこまでしてねえよ」

このゲームの仕様として、相手　モンスターも含めて　に回復や支援と言った、通常、味方に対して使う魔法を使うことが出来る。勿論、それはアリーナでも変わらない。

ただし、アリーナと通常フィールドでは一つ大きく違うところがある。

フィールドで相手にするのはCPUが動かすモンスターだ。その為倒してしまえば、後は消滅するのみだ。しかし、アリーナでの相手はプレイヤーキャラ。倒してすぐに消滅とはいかない。プレイヤーが何かしらの操作をしない限り、その場に倒れたままである。

結果、相手を復活させることも可能となるのだ。そして、これを利用して、相手を復活させすぐに倒すという行動を繰り返せば、相手に簡単にペナルティを大量に与えることが出来る。

また、ログアウトして逃げよとしても、復活と同時にログアウト用のメニューが消えてしまうため、逃げることも難しい。

確かに、これならゲームマスターと呼ばれても文句は言えないだろう。

「とにかくだ……このままだとあまりいいことにはならないぞ。誰も見てないのをいいことに奴らある事ない事書いてるしな」

「わかったよ。ギルドの方で色々話して見るよ。忠告サンキュ」

そう言って電話を切る。既に家の前まで来ていた。どうやら帰りの道のほとんどを、ずっと電話で話していたらしい。

「はあ、今から気が重いな……」

溜め息混じりにそう呟きながら玄関の鍵を開けると、自分の部屋を目指すのだった。

「と、言う訳だ」

アルメリアから数マップ分離れた森の中。アルメリア及び、その周辺は決して人が多いとはいえない。しかし、それに輪を掛けて人の居ないマップの一角を陣取り、ユグド達は集まっていた。

ギルドのメンバー全員がログインしたのを確認して、ユグドはトラデスから聞いた話をメンバーに告げる。

「何も無しとは思ってなかったけど、まさかそこまで大きくなってるとはね」

ここまで大きな騒ぎになるのはルシフィスも予想外だったようだ。ある程度のことは予想していたようで、他の者ほどではないが、それでも驚きは隠せないといった様子だ。

「つつーか、そもそも誰だよ。復活させてまで倒してたの」

ユグドの言葉に反応して「あはは……」と苦笑しながら、気まずそうに上がる手が二つ。ファティマとミュシャだ。

「おーま！えーらー！かあー！」

「い、いや、ほら。あいつら腹立ったし……っいつい」

ファティマの隣でミュシャも頷く。

騒ぎがここまで大きくなっている原因のほとんどは、間違いなくこの二人の行動によるものだろう。しばらくお説教モードに入りたいユグドだが、今更何を言っても遅いわけで……。

二人は日ごろからこういったことをしているプレイヤーではないし、なにより自分のことで腹を立ててくれたのだと思うと、あまり怒る気にもなれなかった。

はあ……と溜め息を吐くと、話題を変えることにする。

「とりあえずは、これからどうするかだな」

「せめてウチのサイトだけでも今回のことは何か書いておいたほうがいいんじゃない？」

「ウチは一切悪くないとかいいかもな」

「相手を煽ってどうするんですか」

イーリスが呆れながら突っ込む。

こんな事を書いた日には、間違いなくロクなことにはならいだろう。

「でも一応、被害者はこっちだぞ。そこまで下手に出るってのもな。まあ、レベルダウンは気の毒だとは思っけど」

本を正せば、相手側がケンカを売ってきたのだ。それで返り討ちにあったから、今度は騒ぎを大きくしているのだ。そんな相手に、自分達が下手に出る気は全くなかった。

「そっいうことを言うならせめてログぐらいは取っておきなよ」

「……そういうお前はどんなだよ？」

初めから会話のログは取っていないものと決め付けられているのが引かなかったが、まさにその通りなので何も言い返せない。なんとか出てきた言葉がこれだった。

「僕もそこまで気が回ってなかったよ。誰か取ってた人いる？」

しん、とした沈黙がその場を支配する。会話のログがないのは皆同じらしい。

「こんな状況で僕らが何言っても無駄だと思うよ？」

「向こうはログはしっかりと取ってそうだな」

掲示板やサイトなどで書かれている内容が概ね一致し、ログまであるのなら、ユグド達は何を言ったところで説得力はない。たとえば、それが、事実を言っていたとしてもだ。

「でもあっちだってログを晒せば、適当なこと言ってたのがバレるだろ」

「多分、そっちも改変してあるんじゃないかな？」

会話ログはテキスト形式で保存される。つまりは簡単に改変が可能なのだ。他に人が居た訳でもなく、スクリーンショットもなく捏造されたものでも、それは十分に証拠となるのだ。

「僕らが何を書いたとしても」

「チート疑惑者の言うことは信じてもらえない……と」

チートツール使用の疑惑は広く浸透している。元々、根も葉もない噂ではあるため、大半の者は一種のネタとして盛り上がっている程度だろう。昨日の者達とて、悪ノリが過ぎたと言えなくもない。世間に無実を訴えれば、案外あっさりと受け入れられるかもしれない。

しかし、現状では真逆の意見が出ることになる。こうなってしまうえば、世間が選ぶのは、第三者から見て面白いほうだ。

元々あった疑惑が確定に変わるのは、それほど時間も掛からないだろう。

「八方塞がりか。どうしたもんかね……」

どこか他人事のようにユグドは言う。

だが、その言葉に返ってくる言葉はなにもない。そもそも状況が悪すぎる。ポーカーで言うならば最強の手札に役無しで挑むようなものだ。どんなハツタリをかましたところで、相手を降参させることなど出来ない。

「僕達が消えるのが一番手っ取り早い方法ではあるんだけどね」

「オレ達がそこまですることもないだろ、何もしてないのに」

「でもゲームマスターをなんとかすることは私達には出来ない……」

堂々巡り

好転のしようのない事態の前に、どんな案も意味をなさない。

ゲームをやめるか、キャラクターを削除するか　思い浮かぶのはこの二つの選択肢だけだった。

「消えるって言ってもやめるってことじゃないよ。当然キャラの削除でもね」

ルシフィスの言葉に、全員の頭に疑問符が浮かぶ。

ネットゲーム上で消えると言えば、引退　即ちゲームをやめるか、キャラクターの削除だろう。それ以外にどんな意味があるのか？ルシフィスの意図が読めない。

「ギルドとキャラはしばらく休止って形でいいんじゃないかな？しばらくすればほとぼりも冷めるだろうし」

続けるかやめるか　この二つの選択肢しか頭になかっただけに、これは盲点だった。

「ちよつとの間離れないといけないのは癪だけど……それが無難かもな」

「なんなら前に作って放置してるセカンドキャラを育ててみたら？ウチのギルドのメンバーだってバレなければいいんだし」

ユグドは以前に新規のキャラクターを作っていた。防御を主体としたユグドとは真逆の、速さを主体としたキャラクターなのだが、少してそのまま放置されている状態だ。ギルドのメンバー以外はいや、メンバーでさえ急に声を掛けられれば、それがユグドで

あることをすぐに思い出すことが出来る者はほとんどいないだろう。ただし、ファンタジアナイツにおいて、セカンドキャラクターというのはほとんど意味を成さない。

アイテムさえあれば、レベルはいつでも一に帰せるし、パラメータが気に入らないなら軌道修正も出来る。クラスもいつでも変更可能だ。全くの無意味とまでは言わないまでも、決して需要があるとは言いがたい。ユグドが放置しているのも、そういった理由からだ。

装備品は問題ないが、パラメータだって低いし、スキルもない。普段なら面倒くさいと言ってそうなのだが、

「そうだな。それも面白いかもな」

この時はそう言っていた。最後に「チケット使ったばっかだから勿体無いし」と付け加えて。

「それじゃ、細かいことを決めていこうか」

休止の期間や、復帰の際の連絡方法など、細かいことを決めていく。

この日以降、ユグド達を見たという話はなくなっていった。しばらくは、ネットで盛り上がりを見せたが、一ヶ月も経つころには、まるでユグド達のことなどなかったかのように、彼らの話題が出ることはほとんどなくなっていた。二ヶ月も経てば騒いでいるのは、ユグド達が黒だと信じて疑わない。そんな者達が騒いでいるだけとなっていた。

そして、夏休みも終わりが見えてきたある日

「この風景もなんだか久しぶりだねえ」

「それで、マスターの居場所は……？」

「大丈夫、ちゃんと聞いてあるよ」

「それじゃ、早速いくとするか」

## Chapter 5 - 3 (後書き)

ラシル(以下ラ)「今回も無事更新です」

ハルカ(以下ハ)「今回も見てくださってありがとうございます」

ラ「今年中に終わらせるとか、今月は二話アップするとか考えてたらしいけど、結局どれも達成出来てないな……」

ハ「この話の時点で、アップ予定が一週間ほど遅れてますからね」

ラ「そんな訳で、今回の話が今年最後の更新となります」

ハ「では、今回の話ですが、やっと時系列が元に戻りましたね」

ラ「本当はもうちょっと進めるつもりだったんだけど、意外とキリがよかったからここで終了させたみたいだな」

ハ「そういえば、ラシル君達のギルド名まだ出てきませんね」

ラ「本当は今回に出すつもりだったんだけど、そのシーンはカットされたからな」

ハ「実はまだ考えてない……なんてことはないですよね？」

ラ「それは大丈夫みたいだぞ。なんせ一番初めに考えたらしいから」

ハ「一番最後まで出てこないのに……」

ラ「まあ、考えてる段階では色々あったんだよ、多分」

ハ「で、本編ですが……これなんて無双？」

ラ「そこはまあ……突っ込んじゃダメだ」

ハ「え、でも……」

ラ「アーアーキコエナイ」

ハ「それじゃ、裏話的なものってありますか？」

ラ「実は今回の話、最初は冬休みって予定だったらしい」

ハ「それがなんで春休みに？」

ラ「気付かんか？じゃあ、ヒント。一話目は六月という設定です」

ハ「一話目っていうと私と出会ったところだから……あれ？」

ラ「そう、時系列が合わないというね……珍しく気付いた作者が一話目を読み返しまくって確認してたよ」



ハ「時間の流れる的なものは記録してないんですか？」

ラ「作者がそんなことするわけない」

ハ「……………」(汗)

ハ「それじゃ、気を取り直して、ギルド紹介です」

ラ「今回はウチのギルドだな」

ハ「ギルド結成から休止に至るまで本編に書かれてるし、一番わかりやすいギルドですよ」

ラ「だな。うーん、改めて紹介することもない気がするな」

ハ「ここまで出てきたのを簡単に纏めると、マスターはラシル(ユグド)君、メンバーは五人、全員がプレイヤースキル、レベル共に高いってぐらいだけ」

ラ「ホントにそんなもんだな」

ハ「ギルドの雰囲気とかはどうなんですか？」

ラ「空の円舞曲<sup>ワルツ</sup>に結構似てるんじゃないかな？ただ、まったりではないけどな」

ハ「それではギルド紹介はこれぐらいですね」

ラ「では最後にちょっと報告を」

ラ「今まで放置気味だった誤字修正ですが、今年中には直します」

ハ「もう残り少ないですよ。大丈夫なんですかね？」

ラ「これだけはきっちりやります。報告してくれた人にも申し訳ないし」

ハ「ホントですね。でも報告っていうからMUGENストーリー動画のことかと思いましたよ」

ラ「こっちではすっかりご無沙汰のネタだな。あつちはまだまだ当分先だ」

ハ「シナリオが思いつかないとか？」

ラ「いや、キャラが集まってない。こないだ作者がダウンロードはもう嫌だと言ってたぞ」

ハ「そんなにDLしてるんですか？」

ラ「全部解凍してあるみたいなんだけど、キャラデータだけで10

G Bはあるらしい。因みにフォルダ数とファイル数も聞きたい?」

ハ「いえ、いいです」

ラ「あと、最後に　今回で今年の更新は終了です」

ハ「来年ももう少し続きますので、もうしばらくお付き合いください」

ラ＆ハ「それではみなさん、よいお年を」

## Chapter 5 - 4

「オレ、ギルド抜けるわ」

突然のラシルの言葉に、その場に居た全員が言葉を詰まらせる。これまでそんな素振りは見せた事がないのだ。無理も無い。

そんな中、エルナだけは冷静に受け止めていた。ラシルの事情を知る数少ない人物だけに、いつかこうなることは予想していたのだろう。

「おいおい、ラシル。その冗談はちよつと笑えないぞ？」

アルタスが冗談っぽく言ってみるが、その表情は少し引きつっている。やはり、すぐにいつも通りとはいかないようだ。

「せめて理由だけでも教えてほしいな」

「ああ、それは――」

そこまで言った時だった。一人のプレイヤーが建物内に入ってくる。突然の来訪者に会話は途切れてしまう。

現れたのは、タイプのゴッドハンド。偶然入り込んだという訳でもないようで、何かを探すように、周囲をキョロキョロと見回している。間もなくして、目的の人物は見つかったようで、駆け寄っていく。そして、

「マスターはつけ〜ん。クラスが違つとなんか変な感じ」

ラシルにそう声を掛けるのだった。

「おま……なんでここに……？」

その人物は確かにラシルの知る人物だ。だが、その反応はありえないものを見た様なものだった。無理も無い。何せ、彼女は現在フアンタジアナイツ内にいるはずのない　かつて樹が立ち上げたギルドのメンバー、ミュシャなのだから。

樹自身が、復帰を告知した覚えはない。勿論、湊斗からもそんな連絡は来ていない。もしかして、見逃していたのだろうか？自身が使用している各種メールソフトから携帯電話に至るまで全てチェッ

クしてみる。だが、やはりどこにもなにか書いている様子はなかった。

湊斗がなにかしたのだろうということはすぐに予想がついた。とりあえず文句でも言ってやろうと携帯電話を手にとった時だ。更に三人のプレイヤーが姿を現す。そこに現れたのも、やはりかつてのギルドのメンバー達だった。

「あ、ルシフィスさん。マスター発見しましたよ」

周囲が啞然としている中、まるで何事もないかの様に、手を振るミユシヤ。あまりの温度差にある程度の状況は簡単に察せてしまい、思わず溜息が出る。

「ウチのメンバーが突然すみません」

「ああ、構わないよ。それで、アンタ達が？」

「ええ、そうです」

樹がラシルである理由を知るエルナには、この事態を察するにはこれだけのやりとりで十分だった。

ただし、他の空の円舞曲<sup>ワルツ</sup>のメンバーには当然ながらさっぱり理解出来ない。頭の中には疑問符が浮かぶばかりである。

「ルシフィス。お前たちがここに居るなんて、聞いてないんだけど？」

「そりゃそうだよ。言ってないし」

普段、学校で接するかのようになにかに答えるルシフィス。予想通りの返答だけに、ラシルは最早呆れるしかなかった。

「マスターをびつくりさせようってことになってさ。それで内緒にしてたって訳だよ」

ファティマが詳しく説明をする。

実を言うと、少し前からギルド再開の話題は出ていた。だからこそ、今回ラシルが脱退の話を持ち出したのだ。

しかし、詳しくは未だ決まっていなかった。はずなのだが、どうやら水面下で話は続けられ、それが今日となったようだった。「そろそろ私達にも説明してほしいんだけど？」

ソレルの言葉で、まだ自身が何の説明もしていないことに気付く。  
「ああ、悪い悪い。それじゃ、改めて」

ここで一呼吸置いて、再度口を開く。

「オレが抜ける理由は簡単にいうとこいつらだ」

そう言つてルシフィス達を指差す。

「パーペ……チュアル……ノクターン？もしかしてここが？」

「そう、昔オレが作ったギルド」

ギルド“perpetual nocturne”。これが、かつてファンタジアไนツ内を騒がせたギルドの名前だった。尤も、ハルカとソレルは気にした様子もない。

そもそも、件の騒ぎは彼女達がゲームを始めるよりも以前の話だ。それに加え、攻略や情報サイトの存在を知ったのもまだ最近のことだ。perpetual nocturneの名前を二人が知らないのも無理はないだろう。

しかし、他のメンバー達も同じ様かというとわけにはいかない。あの騒ぎの中でゲームをプレイしていたのだ。真偽はともかく、様々な評価を聞いてきた身としては、どう反応していいのかわからないといった様だ。

「なあ、ラシル。perpetual nocturneってあのperpetual nocturneだよな？」

「ああ、そうだ」

今更隠すこともせず、答えるラシル。

ラシルの性格から、実は冗談や名前をわざと似せたギルドというのを期待したが、やはりそう都合のいい答えが返ってくるはずもなく、再び黙り込んでしまう。

「ねえねえ、なんでこんなに空気悪いのよ。アンタらなんかしたの？」

この状況を見かねて、ソレルがメッセンジャーで聞いてくる。

「説明するのも面倒だから自分で調べてくれ。ウチのギルド名で検索すればいいから」

今から説明をしても長くなるだけなので、そう答えておく。

納得がいかないのか、ソレルの文句が聞こえてくるが、相手にするの面倒なので無視することにする。

「そういう訳でマスター。いきなりで悪いけど抜けるってことで」

「ちよつと待った」

ラシルの言葉が突然遮られる。声の主は意外にもルシフィスだ。友人の予想外の行動に、もしかして帰ってくるなどとも言つつもりではないだろうかと邪推してしまう。

「これからみんなで狩りに行こう」

実際に出てきたのは予想の斜め上をいくものだった。

この言葉にはラシルや、空の円舞曲の面々だけでなく、perpetual nocturneのメンバー達も呆氣にとられている。「この流れで一体なんでそうなるんです？」

いち早く我に返ったイーリスが問い掛ける。

「ウチは悪名高いからね。誤解を解く意味も兼ねて親睦を深めようかと思つてね」

「その理由は無茶苦茶すぎるだろ」

誰もが同じ事を考えたものの、それを口に出す者はいなかった。ラシルを除いては。付き合いが長いだけあり、言動に遠慮がないのは相変わらずだ。その様子にperpetual nocturneの面々は感心する。尤も、二人にしてみれば、ほぼ毎日夏休み中の今でも最低週に一度は顔を合わせているのだ。ネット上で会うのは久々とはいっても、そんな感覚はほとんどない。

「まあまあ、細かい事は気にしないってことで」

恐らくなにを言っても無駄だろう。ラシルはそう悟ると、最早出てくるのは溜息だけだった。

「ってな訳みただけで、マスター、いいか？」

「ああ、こっちは構わないよ」

周りから文句の一つでも出るかもしれないと予想していたが、そ

んな様子もない。ルシフィスの提案は承諾される。

（それにしても、ここまでなにも何も無いってのは予想外だな）

ラシルは、自身が *perpetual nocturne* のマスターだと知られたとき、もつと騒ぎになるのではないかと考えていた。

あの騒ぎとはなんの関係もないことや、未だ混乱しているというのはあるのだろうが、その辺りを考慮しても、やはりこの状況は予想外と言わざるを得ない。それほどまでに、ラシル達の評価は、世間的には最悪なものなのだ。

（ま、なるようになるか）

必要以上に深く考えたところで、事態が好転するわけでもない。

これ以上考える事を打ち切る。代わりに、

「そっいや、レベル差はどうするんだ？流石にお前達とは組めないぞ？」

とりあえず、無茶な提案をする友人に付き合う事にする。

「みんな転生すれば大丈夫じゃない？宝珠も足りるはずだし」

ミュシャが入って間もない頃、ギルド全員で集めに行ったの思ひ出す。ラシル自身が現在持っている分はその時に集めたものだ。

他のメンバーにも当然ながらその時に振り分けられていたので、同等数が、それ以上の数は持っていたはずだ。

尤も、ラシルは現在、二つ使用しているため若干減っているが、それでもここにいるメンバー全員分を補うには十分だ。

「みんなもそれで大丈夫か？」

今更ではあるが、他の *perpetual nocturne* のメンバーにも聞いておく。彼らから“転生の宝珠”を提供してもらわなければ全員でパーティーを組んでの狩りは無理なので 経験値やダンジョンを気にしなければ話は別だが 確認ぐらいは取っておいたほうがいいだろう。

ここで拒否をしたところで無駄なだけであろうことは十分に予想出来るため、一応という程度だが。

「今更だしな。こっちはそれでいいよ」

ファティマが答える。

気にしている様子もなく、むしろこの状況も楽しんでいるようだ。この様子を見てみると、余計な心配だったように思えてくる。

「そっちも大丈夫か？」

同様に、空の円舞曲側にも確認しておく。

エルナの承諾もあり、不満があればすぐに口に出すメンバーばかりなので、あまり心配はしていないのだが、状況が状況だけに、こちらも一応というぐらいだ。

「ああ、こっちもそれで問題ないよ」

エルナに続き、それぞれから返事が返ってくる。心配な三人リシュリー、アルタス、ウイシュナ　からも返事があったので、ラシルの心配はほとんど杞憂といっていいだろう。

「それじゃ、準備してこようか」

ルシフィスの言葉を合図に、ラシルとperpetual nocturneの面々は一旦溜まり場を後にするのだった。

準備を終え、一行がやってきたのは、南に広がる砂漠。この広大な砂漠の一角にあるのが今回の目的地“スイカズラ洞窟”だ。

レベル1来るにはあまりにも早すぎるダンジョンではあるが、全員が転生しているということと、なにより大人数という理由からここが採用となった。

「えっと、ラシル君……でいいのかな？」

声を掛けてきたハルカだが、どうにも歯切れが悪い。だが、それも無理のないことだろう。

準備を終え戻ってきたラシルは、それまでの姿とは異なり本来使用していたキャラクター、ユグドの姿で戻ってきたのだった。その為、どっちの名で呼べばいいのか迷っているのだった。

「いいよ、どっちでも。それで？」

「うん。ここってどんなところなのかなって」



「そうだな」

答えようとして、情報を思い出そうとするが何も出てこない。

よくよく考えてみれば、そもそもスイカズラ洞窟に来たことなどほんの数える程度だろう。どの街から遠く、モンスターもさほど強くないということで、自ら進んで来る事などほとんどないのだった。どう答えたものかと考え込み、漸く出てきた答えが、  
「ちよつとレベルが上がったら来るダンジョン……かな？」

この程度のものだった。

当然、まともな反応など返ってくるはずもなく、気まずい沈黙だけが二人の間に広がる。

「なんならまたソレルと二人で戦闘仕掛けてみるか？」

話題を逸らすためにそんなことを言ってみる。

「えつと、遠慮しておくね」

苦笑しながら答えるハルカ。恐らく彼女の脳内には、以前のボスモンスター討伐の際に訪れたスノーフレークでのことを思い出されていたのだろう。

あまりいい結果にならないであろうことは容易に予想出来たため、ユグドの提案は却下された。

ハルカの予想通り、二人で戦うには厳しい場所ではあるが、十一人もの大人数で戦闘をするなら話は別だ。

いかにレベル1のプレイヤーが来るには厳しいダンジョンといえど、そこはやはり初心者向けのダンジョン。数人で攻撃を加えるだけで、簡単に撃破できてしまう。

勿論、この程度で満足出来るはずもなく、一行はそのまま地下二層目へと足を踏み入れた。

「レベル1が大人数で攻撃しまくって敵を倒すつても凄い光景よね」

地下二層目に足を踏み入れて、早速戦闘となった。そんな戦闘の様子を見たソレルの感想がこれだった。

一層目ではこの人数故に、一切レベルが上がる事無くここまで来

た。結果、魔法系のプレイヤーを除いた全員でしばらく攻撃を仕掛け、漸くモンスターを倒すことが出来るといふ状況となっていた。

しばらくとは言っても、相手になにかされる前に撃破は可能という状況は、一層目と変わりはない。よほどの事が無い限り、安全に戦闘が出来る。そのことが確認出来ると、早速このフロアの探索を始めるのだった。

一行のレベルが低い事と、比較的効率よく戦える事　そしてなにより、人が居ないということもあり、三十分も経った頃にはレベルも10を数えるほどになっていた。

また、この間に人間関係にも変化が現れる。  
ルシフィス

湊斗という知り合いのいるハルカやソレル、ユグドのことを知っていたエルナは、出発したところから友好的だった。だが、リシュリー、アルタス、ウイシュナの三人はそうはいかなかった。それが今では打ち解けているとまではいかないまでも、普通に会話をする程度にはなっていた。

（単純にウチのやつ達が無理矢理話しかけてるだけって風にもみえるけどな）

そう思うと、苦笑しか出てこない。そして、あまり深く考えるのをやめるのだった。

そんなことを考えながら、後ろから一行を眺めるユグドだったが、その時、一人ユグドの元へと寄ってくる。アルタスだ。

「なあ、ラシル達の噂って結局どこまで本当なんだ？」

ユグドの横を歩くアルタスからの突然の質問。これまでは、perpetual nocturneのマスターと、そして現在はメンバー全員と行動を共にしているのだ。気になるのは当然だろう。

「うーん、九割ぐらいはデマかな？」

「一割は本当なのかよっ！」

ユグドの言葉に大袈裟に驚くアルタス。

「まあ、随分大袈裟に言われてるから、実際はそう大したことないよ。それともなにか？オレが噂で言われてるようなヤツに見えるか

？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら問い掛ける。これがリアルなら、ヘッドロックをかけて、頭に拳をグリグリと押し付けていただろう。「とりあえず、お前等がいいヤツだったのはわかったよ」

「そうか。まあ、もうしばらく付き合ってやってくれ」

ユグドの言葉に「わかったよ」とだけ答えると、アルタスは再び、集団の中心部へと戻っていく。

入れ替わるように、今度は二人　リシュリーとウィシユナだ。

この二人の組み合わせというのはなんとも珍しい。互いに相手と一緒に居る事が多い為、普段ではまず見かけることのないツーショットだ。強いて言えば。ギルドで出かけた際に、二人とも後衛を務めるため一緒にいるのを見かけるぐらいだろう。

「ウチの事なら他のヤツ等に聞いてくれよ」

何か聞かれる前に、そう言うておく。最後に「面倒だから」と付け加えて。

因みに、言いたくないからこう言っている訳ではない。あくまでそのままの意味　本心である。

「それならもう聞いたから大丈夫だよ」

「それよりも別の話」

アルタスに話したようなことをまた話さないといけないかと思っていたが、どうやらそれは杞憂だったようだ。案外、ユグドの反応を見透かされた上での反応かもしれないが、わざわざそれを確認しようとはせず、彼女達に先を促す。

「えっと、その……ごめんね」

とつぜん謝罪を始めるウィシユナ。

謝られるような事をされた覚えなど全くない。

「perpetual nocturneってあまりいい噂聞いたことないし、突然だったからなんて言っていていいかわからなくて……」  
「ああ、そのことが」

リシュリーの言葉で、二人の言いたいことが漸くわかった。

「気にすんな。それが普通の反応だ」

真偽はともかく、ロクな噂が流れていないのは確かだ。何も知らない第三者からすれば、たとえ嘘を大袈裟に言ったことでもそれは真実となり得る。嘘と見抜けたとしても、いい印象を与えないことは確かだ。

特にユグゴ達は弁明らしいことをしていなかったので、余計にその傾向は強いだろう。

そんなギルドのメンバーが突然現れたのだ。しかもその内の一人は同じギルドのメンバーというおまけつきだ。ユグドからすれば、今の状況ですら異様と思える。

「うん、ありがと」

「ねえ、やっぱり抜けちゃうの？」

「まあ、あいつらを放つとけないしな」

やれやれといった感じで答えるユグド。

そう話してるうちに、いつの間にか地下三層目への入り口に辿り着く。

レベルも上がり、ここでの戦闘も随分楽になっていた。だからといって「じゃあ、次の階層に」などとは誰も思っていないかった。流石にこれ以上は無茶というよりも無謀だ。

ここで一度引き返すのだろうと、誰もが思っていた。先頭を歩いていた約一名　ルシフィスを除いては。

周囲にモンスターが居ないことを確認し、全員が引き返そうとした時、ルシフィスは迷う事無く次の階層へと進んで行った。流石にこれには全員が啞然とするしかなかった。

「おい、ルシフィス。どこに行ってたんだ？」

「三階だけど？」

「無理だからさっさと戻って来い」

「まあまあ、折角だし」

なにが折角なのかよくわからない。思わず突っ込みそうになるのを堪える。

ルシフィスってこんなキャラだっけ？そんな考えが浮かんでくる。久しぶりのファンタジアナイトでテンションが上がっているのだろう。完全に悪ノリ状態だ。

そして、良くも悪くもノリのいい perpetual nocturneの面々は

「それはそれで楽しそうだし行ってみるか」

と、ファティマの一言を皮切りに、

「じゃあ、ボクも」

ミュシャが続き、

「もう、しょうがないな」

そんな言葉とは裏腹に、明らかに楽しそうなイーリスも続けた。つた。

結局その場には空の円舞曲の面々だけが残される。

「なんていうか……すごいアンタ達のギルド」

「あー、うん。……すまん」

出てくるのは、そんな言葉だけだった。

「ユグド、来ないの？」

「……すぐ行くよ」

溜息混じりにそう答えると、空の円舞曲の面々もルシフィス達を追うのだった。

ファンタジアナイトのダンジョンは、大抵の場合は、階層を一つ登る　もしくは降りる　度にモンスターの強さは格段に上がる。それは初心者向けと言われるここ、スイカズラ洞窟も例外ではない。二層目のモンスターですら、全員で攻撃を仕掛けて漸く撃破出来る状況の一行がこのような階層まで来るとどうなるのか。

「一瞬で半壊したな」

ユグドは、現在の惨状を見ながら呆れたように　しかし、どこか楽し気に言うのだった。

三層目に入って間もなくして、三体のモンスターとエンカウントした一行。早速攻撃を仕掛けるが、一瞬にして、半数以上の者がや

られてしまったのだった。

後衛組みは全滅。残っているのは、ユグドにルシフィス。あとはミユシャとエルナといった、僅かな前衛組みだけだった。Perpetual nocturneの前衛組が全員残っているのは、ブランクはあれど流石のプレイヤースキルといったところだろう。

「とりあえず、一旦立て直すぞ」

ユグドの言葉に全員が頷く。

現状で回復が出来るのはユグドだけだ。残りの三人でモンスターを退き付け、ユグドが回復して回る。幸いモンスターを退き付けていた三人もやられることなく、なんとか全員を復活させることが出来た。これで戦闘は振り出しへと戻った。戻ったはずなのだが……

「なんでこうなった」

再び壊滅状態へと追い込まれていた。しかも今度は残ったのがユグドとルシフィスの二人だけという状況だ。

「ホントなんでだろうね？」

慌てる様子もなく、ルシフィスはいつもの調子を保ったままだ。

そんな様子を見ると、最早反論する気も失せてしまう。

「しょうがない。とにかく二人でこいつら片付けるぞ」

仲間を復活させる余裕も、アイテムも、SPもない。更に言うならば、体制を立て直しても同じ結果になるのは目に見えている。

ユグドは目的を状況の建て直しから、モンスターの撃破に切り替える。

「こっちは久しぶりで、重いんだ。フォローは任せた」

守りに重点を置いたユグドと回避に重点を置いたラシル。樹の使用するキャラクターは全くの正反対の仕様となっている。その影響はパラメータだけでなく、操作にも現れる。

素早く軽快に動くラシルと違い、ユグドの動作は若干重く感じる。しかもついさっきまでラシルを使用していたのだ。半年近くラシルを使っていたことから、すっかり軽快な動きになれてしまい、余計に重く感じるのだろう。

「こつちも久しぶりでそんな余裕ないよ」

「最悪の組み合わせだな」

口ではそういうユグドだが、表情はこの状況を楽しんでいることを物語っている。

周囲の無茶に呆れながらも結局は付き合うだけに 勿論逆の場合もあるが 今回のような無茶は決して嫌いではない。そして、その無茶の最たるもののような現状は楽しくないはずがなかった。構える二人に、容赦なくモンスターが近付いてくる。ジリジリと距離が詰まり、ある程度近付いてきたところで、二人同時に一気に距離を詰める。

数回攻撃をしたところでユグドはバックステップで後方へ、ルシフィスはモンスターをすり抜け背後へと回る。

「相変わらずお前のドラゴン邪魔だな。一緒に居ると見にくい」

「今更言われてもね。こればかりはまた慣れてもらうしかないよ」  
ルシフィスのクラスはロイヤルガードと呼ばれる特殊クラスだ。騎兵クラスと飛兵クラスをマスターした末になれるこのクラスもやはり、騎乗することを前提にしたクラスである。ただし、このクラスは騎兵の特性を持つ馬か、飛兵の特性を持つ飛竜のどちらかを選び騎乗することになる。

ユグドのセリフにもあるように、ルシフィスは飛竜を駆るロイヤルガードなのだ。

「ユグドのその文句もなつかしいね」

扱いやすさの面でこちらを選択したのだが、ドラゴンのグラフィックが大きく、周囲のプレイヤーが隠れてしまうという仕様のせいか、ユグドがよく文句を言っていたのを思い出す。

二人でヒットアンドアウェイで攻撃を繰り返し、ダメージを受ければすぐさまユグドが回復を行う。完全にパターンが出来上がり、機能する。このまま凌ぎきれるかとも思わせるが、いつまで経っても終わる気配はない。与えるダメージが低すぎるのだ。

時間が経つごとに集中も切れ、次第にミスが目立つようになる。

ミスが増えれば当然回復も追いつかなくなり、十分ほど粘ったところで、二人ともついにやられてしまうのだった。

空の円舞曲を巻き込んだの、perpetual nocturne復活後第一回ギルド狩りは全滅という形で終えることとなった。

一行は空の円舞曲の溜まり場へと戻っていた。ダンジョンにいた時間もあまり長くはなく、アイテムもほとんど出ていないため、精算をすることもなくすっかり雑談ムードだ。

「ちよつといいかい？」

そんな中エルナから声がかかる。これまでリシュリーと共に特に反応がなかったため、裏で何かしていたであろうことは、全員簡単に予想出来た。

「オレ達は出ていようか？」

ギルドに関連することだろうと予想しての言葉だ。ギルド関連の話ならあまり部外者が居ないほうがいいだろう。そう考えてのユグドの提案だ。

「いや、むしろ居てもらったほうがありがたい」

だが、エルナからの返事は予想を裏切るものだった。

空の円舞曲に関連することで、尚且つperpetual nocturneが居たほうがいいような事など全く予想がつかない。ともかく、彼女の言葉を待つ事にする。

「さつき二人で話してただけで、ちよつと早いけどそろそろ休止することになったの」

「丁度、ラシルも抜けたことだしな」

リシュリーの説明に、エルナが付け加える。

「オレのせいみたいに言わんでくれ……」

「いや、お前のせいだ。だから責任取れ」

無茶苦茶だ。余りにも無茶苦茶すぎて、反論する気も失せてきた。ユグドには、何を反論しても無茶苦茶な反論を返される様子しか思い浮かばないのだった。まるで、酔っ払いの相手をしているような



気分になつてくる。

それなら、大人しく彼女の言う事を聞いておいたほうがいいだろう。

「で、何すりゃいいんだ？」

「ウチのメンバーの面倒を見る」

「はあ？このギルドどうすんだよ？」

「解散するから気にするな」

あまりにもさらっと　まるで何事も無いかのように言ったものだから、全員が聞き流しそうになる。

改めて思い出し、そして理解するまで数秒。

「……ええええええー……！？」

まるで、あらかじめ台本でも準備されていたかのように、空の円舞曲のメンバー全員が同じタイミングで、同じ言葉を発していた。

聞いていない。なぜ？……等等。

各々が疑問をエルナにぶつけるが、流石に対応が出来そうにない。「お前ら落ち着けて。マスターもちゃんと理由ぐらいは言ってくれ」

一人冷静だった　勿論、予想外ではあったが　ユグドがなだめる。

「ラシル、アンタなら理由はわかるんじゃないかい？」

「マスターのいないギルドは自然消滅する　だっけ？」

「そういうこと」

解散と言われて、一人冷静でいられたのもこの知識があったからだ。

尤も、正確には消滅というより衰退と言ったほうが正しいのだろう。マスター自身はギルドに残るのだから。

どちらにせよ、これはよく聞く話ではある。ネットではよく語られており、ユグド自身もなんだかこの様な書き込みを見た事はある。因みに理由も真つ当なもので、マスターがいないギルドはメンバーのモチベーションが段々と下がっていき、そのまま離反して行くと

いうものだ。言われてみれば確かに納得のいくものだ。ただ、これまでそんな場面に居合わせた事もなければ、直接話を聞いた事も無い。結局、ユグドにとっては説得力のある噂程度でしかなかった。「たかが噂だろ？そこまで気にする事もないんじゃないかねえの？」これは本心だ。

どんなに説得力があろうが、所詮は噂。そこまで気にする必要はないように思える。それに、空の円舞曲の面々を見ると、余計な心配に過ぎないとも思える。エルナとリシュリーが戻ってくる事は確かなのだから、余計にそう思える。

「そうでもないさ。まあ、保険程度に考えてくれればいいよ」  
どうやらエルナの意味は変わりそうにない。それなら、ユグドの方からこれ以上口を出すつもりも無い。

「そこまでいうならいいけど、結局あいつら次第だろ」  
そう言つてハルカ達を指差す。

二人で何を言おうが結局どうするかは本人達次第だ。ただ、ユグドは誰か入るだろうとは主ってはいなかった。

空の円舞曲の面々には誤解は解けているが、やはり他のプレイヤ―からすれば、あまりいい印象のあるギルドではない。厄介ごとに巻き込まれる可能性もある。そんなギルドに好んで入りたがる者など、まずは居ないだろうと考えていた。

「それなら　マスター達も入るって条件ならいいですよ」  
「ああ、構わないよ」

だが、ユグドの予想とは逆の提案がウィシユナから出される。しかも、エルナもそれをあつさり承諾する。

「おいおい、お前らそれでいいのか？」  
「なんか問題あるか？」

「みんな一緒に丸く収まる方法だと思っただけ？」  
気付いていないのか、それとも気付いた上で言っているのか  
アルタスとソレルが答える。

「ウチに入ると、割と高い確率で厄介ごとが付いて来るぞ」

念のために一応言ってみる。

「そういえば……」

「ラシル君達のギルド色々言われてるんだったね」

件の騒ぎを知らないハルカやソレルはともかくとして      アルタ  
スやウィシユナはすっかり忘れていたようだった。

予想はしていたが、余りにも予想通りすぎて思わず溜息を吐く。

「まあ、ウチは来るもの拒まずだ。好きにしろ」

色々と言いはしたものの、ギルドに入るといふのなら拒みはしない。それが perpetual nocturneのスタイルなのだ。  
だ。

ハルカ達も先ほどの忠告は余り聞く気はないらしい。話が纏まっ  
たと思うとギルドを解散させ、perpetual noctur  
neの方へと移ってきたのだった。

夏休みの終わりを目前に控えたある日。

長らく休止していたギルドが復活し、同時に      奇しくも一つの  
ギルドが消滅することとなった。

## Chapter 5 - 4 (後書き)

ラシル(以下ラ)「お待たせしましたやつと五話も終了です」

ハルカ(以下ハ)「五話が終わりつて……これって最終輪じゃないんですか？なんで私達がまだあとがきを任されてるんですか？」

ラ「一応まだエピソードもあるからだろ」

ハ「結局エピソードはやるんですね」

ラ「前半、はページ数が結構少なかったからな。そのシワ寄せが……」

ハ「ホント行き当たりばったりですねえ」

ラ「さて、話は変わってお知らせです」

ハ「いままで散々言われてきた誤字ですが、修正してきました」

ラ「報告していただいたみなさん、物凄く助かりました。どうもありがとうございます」

ハ「でもあの作者ですし、見落としとか大丈夫ですかね？」

ラ「多分大丈夫じゃないな……」

ハ「ダメだあの作者。早くなんとかしないと」

ラ「さて、報告も終わったし今回はこんなもんかな？」

ハ「随分短いですね」

ラ「ギルド紹介も終わって書くことないんだよ」

ハ「ああ、なるほど」

ラ「では、また次回もよろしく」

## エピローグ

夏休みの終わりに空の円舞曲ワルツが解散してから 同時に、petual nocturneが活動を再開してから、しばらくが過ぎた。

季節は冬。十二月も半ばを過ぎ、学生達には冬休み目前、世間ではそろそろクリスマスといったところだ。

すっかりクリスマスモードとなっている商店街にその姿はあった。なんとも珍しい組み合わせで。

「マスターがクリスマスにはログイン出来るって連絡が来てたよ」

「そっか。それじゃ、何か考えとかないとな」

遥歌と樹だ。

大抵はこの二人に湊斗や咲希、あるいは両方が居るという状態だ。二人だけというのは実はかなり珍しい。放課後、買い物があるということで、こうして二人で行動しているのだった。

因みに、エルナのことを未だマスターと呼ぶのは一種の癖のようなものだ。一度決めた呼び方はなかなか変えられず、結局“マスター”というあだ名の様になってしまっている。

「しかし、あの人達ゲームしてて大丈夫なのか？」

樹の言うあの人達とはエルナとリシュリーのことだ。二人は、受験生ということで、夏休みの終わりにギルドを解散させ休止中となっている。

十二月の末も近いクリスマスの時期ともなると、そろそろ追い込みも掛けていかなければならないような時期ではないのだろうか？ そんな疑問が浮かんでくる。

「元々余裕はあったみたいだし、少しぐらいなら問題ないんじゃないかな？」

遥歌の言葉に「そういえば、それで夏までやってたんだっけか」と納得する。

これまでほとんど意識する事無く　しかし、確かに認識はしていた。それが無意識に、だったせいだろう。そんなことはすっかり忘れていたのだった。

話題は他愛も無い話に移っていき、買い物も済ませてしまう。互いに目的のも買え、後は帰るだけとなったのだが、その時、丁度いつものバーガーショップの前に差し掛かる。

「腹も減ったし、なんか食っていくか？」

「ふえ！？」

樹の提案に遥歌は訳のわからない返事を返す。心なしか顔が紅潮しているようにも見える。

遥歌からすれば、同年代の男子と二人だけという状態すら逃げ出したい状況だ。相手が普段から仲のいい樹だからこそ、特に問題なくすごせてはいるが。だが、こういった状況は流石に戸惑ってしまふ。

（落ち着け私。神代君のことだから、絶対に言葉通りの意味しかないんだから……）

そう考えて落ち着こうとする。だが、同年代の男子に異性として全く見られていないと思うと、それはそれで悲しくなってくる。

一方、そんな様子を見ている樹の頭の中は疑問符で埋め尽くされていた、なにかマズイことでも言っただろうかとも思うが、心当たりはない。少し考え、一つの答えの辿り着く。

「金なら心配しなくていいぞ。オレが誘ったんだし奢るよ」

遥歌の心情とは全く無関係の答えに辿り着いたのだった。

そんな樹の様子を見ると、変に意識している自分がバカらしくなってくる、そして、小さく溜息を吐いた。

「大丈夫だよ。私もまだ持ち合わせはあるし」

どうやら吹っ切れたようで、遥歌の様子はすっかり元通りとなっていた。

「行こっ！」

そう言って一足先に、店内へと入っていく。

慌しく様子を変化させる遥歌の様子に、やはり疑問符しか浮かばない樹だった。樹がその疑問を解明することは恐らく無理だろう。地震の疑問をするには、彼は余りにも鈍すぎる。

「まあ、いいか」

いくら考えても答えは出ないという結論に達すると、そう呟き遥歌の後を追うのだった。

「そういえば」

いつもの様に注文を済まし、いつもの様に四人席を陣取り、しかしいつもとは違い二人だけで来ているバーガーショップ。

何か話題をと、思いを巡らせていた所に以前から聞いた事があったのを遥歌は思い出す。

「神代君達って前に……その……騒ぎを起こしてるじゃない？」

少し言い難そうに、言葉を選びながら話を切り出す。

空の円舞曲が解散してから、遥歌や咲希は樹達が起こした騒ぎについて調べていたのだった。perpetual nocturneに入る時に樹が「厄介ごとに巻き込まれるかもしれない」と、言っていた意味が漸く理解出来た。

人が言いと言われている遥歌でさえ「大変かも」という感想を抱いたぐらいだ。咲希に至っては、遥歌と延々とこの話題で話していたほどだ。

事が事だけに、話題に出すのは少し躊躇われる。

「ああ。それがどうかしたのか？」

気を使い、言い難そうな遥歌とは対照的に、全く気にする様子のない樹。

そもそも樹からすれば、件の騒ぎはもう過ぎた事であるし、経緯がどうであれ原因を作ったのは確かな事実である。自身から話を出す事は無いが、指摘されたところで気にするほどでもない。結局はその事実が変わる事はないのだから。

そう考えているからこそその態度だった。

「神代君が最初に“厄介ごとに巻き込まれるかもしれない”って言

つてた割には意外となにもないから、もしかして裏で色々と動いてくれてたのになって」

perpetual nocturneに空の円舞曲のメンバーが入るとき、確かに樹は厄介ごとに巻きこむだろうと予想していた。実際それを伝えもした。

だが、実際には掲示板などで話題に上がったぐらいだ。あとは、それに合わせて話しかけられることがあるぐらいだろう。

中にはネット上での噂を鵜呑みにするものや、少なからず悪意を持って接してきた者も居るので、平穩無事というには些が無理があるが、平和に時が過ぎているのは間違いない。

「まあ、結構時間も過ぎてたつてもあるんだろうけどな……」

そこで一旦区切ると、小さく溜息を吐く。恐らく何か心当たりがあるのだろう。

「お節介なギルドのマスターが一枚噛んでるつてとこだろっな」

そうは言うが確信はない。そもそも、掲示板などもほとんど調べてすらいらない。だが、この考えが間違っているという気もしない。

周囲からも話を聞くことはないの、全くの的外れなのか、それとも水面下でうごいているのか。ともかく、必要以上に騒ぎが大きくならないなら、樹自身も動きを見せるつもりはない。

そう話をしている内に、トレーの上は空になった容器とくしゃくしゃに丸められた包み紙だけになっていた。

「さて、そろそろ出るか。遅いと文句垂れるヤツも居るしな」

冗談っぽくそう言いながら、樹は立ち上がる。

遥歌はそんな樹の言葉に、思わず咲希の顔が浮かび吹き出しそうになる。

「もう、そんなこと言っちゃ可哀想だよ」

「特定してる時点で楠木も同罪だって」

どちらからともなく笑い出す。そして、わかりやすい性格の咲希が悪いという結論に達するのだった。



遥歌と別れ、家に着くと早速パソコンを立ち上げ、ファンタジアナイツを起動する。IDとパスワードを入力しログイン。この瞬間、樹はギルド perpetual nocturneのマスター、ユグドへと変わる。

初めにモニターに映し出されたのはどこかの建物の中。かつて空の円舞曲が、そして今ではperpetual nocturneが溜まり場として使用している、すっかり見慣れた場所だ。

先ほど別れた遥歌も既にログインしている様で、出かけているものもない。空の円舞曲のメンバーを引き取ったことによりすっかり増えたメンバーは、受験勉強で入れない二人を除き、今日も全員ログインしている様だった。

「お、全員揃ってるな。丁度いいから告知するぞ」

ユグドの言葉に、全員の視線がユグドに向けられる。

「クリスマスってことで何かするから、とりあえずクリスマスらしくプレゼントを用意しておいてくれ」

「何かって何するのさ？」

半ば告知とは言えない内容に、当然の様にこんな声上がる。

「まだ何も決めてない。リクエストがあるなら今なら受け付けるぞ」  
若干投げやりな内容だが、文句は出ないようだ。ユグドが定期的なイベントをするのが珍しいのか、今から何かリクエストをするために考えを巡らせているのか　ともかく、何もないのを確認すると更に続ける。

「あと、マスター達も戻ってくるみたいだから、あの二人に押し付けるものも準備しておくこと」

マスターであるユグドがマスターと言うとなんともややこしい。尤も、メンバー達は誰のことかわかっているらしく、混乱している様子もない。

特に意見もなさそうなので解散すると、いつの間にかすっかり出来上がっていたグループ同士が集まる。

グループは二つ。と言っても、よく組んでいるというだけで、常

にこのメンバーという訳ではない。

一つはアルタス、ウィシュナ、ルシフィス、ファティマの四人組。アルタスの無鉄砲ぶりに、人に教えるのが好きなルシフィスとファティマがくつついた形で出来たチームだ。

「アルタス、ウィシュナ。早速行くか」

「お前らと行くとスパルタだからな……」

ファティマの誘いに溜息混じりに答えるアルタス。

「ビシビシ鍛えてあげてね」

「リクエストも受け付けたことだし、今日は三割増しだね」

どうやら、アルタスを擁護する者はいないらしい。尤も、これがいつものやり取りなのだが。

いつものやり取りに、いつもの様にアルタスは溜息を吐くのだった。もう一つのグループは、ユグド、ハルカ、ソレル、イーリス、ミュシャの五人。

どういう訳か、ミュシャはユグドのことを気に入っているらしく、真っ先に合流して来た。そこに、元々組んでいたイーリスも加わり、いつの間にかすっかりこのメンバーで動く事が増えたのだった。

「私達も早速行こう」

「ちよつとは落ち着きなさいって」

早速、出かけるルシフィス達を見て、ミュシャが声を上げる。そして、それをイーリスが宥める。これもいつもの光景だ。

「ユグド、どうしたのアンタ？」

何の反応も見せないユグドを不思議に思っただ、ソレルが問い掛ける。

「ん、ちよつと調べ物」

そう短く答えると、新たに開いたウィンドウを閉じる。どうやら必要な情報は手に入れたようだ。

「それじゃ、オレらも早速行くか」

ユグドはそう言つと、漸く立ち上がる。

「アンタが一番遅いんだって」

そんなユグドにソレルが突っ込む。何か一言返してやりたい衝動に駆られるが、キリがなさそうなのでここは堪えておく。

「それじゃ、行こっか」

ハルカが纏め、彼女の言葉をきっかけにするかのようにユグド達も溜まり場を後にした。

かつてファンタジアナイツ中を騒がせたギルドは、新たなメンバーを迎え、以前よりも賑やかに、そして、以前よりも少しまったりとした空気の中で、この日もファンタジアナイツの世界を駆け巡るのだった。

## エピローグ（後書き）

ハルカ（以下ハ）「あの……なんでエピローグまで私達がここに  
いるんでしょうか？」

ラシル（以下ラ）「ん……あとがきだから？」

ハ「いや、そうじゃなくて……。最後ぐらい作者さんがここを書か  
ないんですか？」

ラ「あとキャラ紹介も控えてるしな。ヤツはそっちで書くらしい」

ハ「はあ、そうですか」

ラ「そうそう。ってな訳で気を取り直していくか」

ハ「なんか釈然としませんが、そうですね」

ラ「そんな訳で……ここまで見てくださった皆さん、今までありが  
とうございました」

ハ「最初に投稿したのが、2008年の3月だから二年もやってた  
んですね」

ラ「一時期書けない時期もあったから実質もうちょっと短いけどな」

ハ「なにはともあれ、無事終わってよかったですね」

ラ「ホントにな。よく途中で停止しなかったもんだ」

ハ「ここまで付き合ってくださいったみなさん、本当にありがとうご  
ざいました」

ラ「では最後にお知らせを」

ハ「冒頭にも少し書きましたが、本編と私たちのあとがきコーナー  
は今回で終了です」

ラ「次回キャラ紹介をアップして更新も終了となります」

ハ「キャラ紹介はこのコーナーで紹介した分を少し真面目に書いた  
分と、紹介してない人たちを書いただけの物になります」

ラ「あとは、普通のあとがきがあるだけなので、期待しても何もあ  
りませんよ」（笑）

ハ＆ラ「それでは皆さん、さよーなら」

## キャラ紹介（前書き）

あとがきにも何回か書きましたが、キャラ紹介です。

いざ書いてみるとただの誰得文章になってしまったので、あまりおすすめはしません。

あと、ネタバレも含んでいるので、本編未読の方にもおすすめしません。ホント誰が得するんでしょうね・・・（汗

## キャラ紹介

### キャラクター

神代 樹ノユグド ラシル

本編の主人公で極々普通の高校二年生。基本的に面倒臭がりで、二言目には面倒と言っていると周囲から言われるほど（実際はそれほどでもないが）

しかし、面倒見はいいせいか、周囲の者からは慕われている。

ファンタジアナイツ内ではユグド及びラシル名でプレイ。ユグドでは パーベチュアル ノクターン フルツ perpetual nocturne のマスターを務め、ラシルでは空の円舞曲の一員。

それぞれのキャラクター性能は魔逆とも言つべきもので、ユグドは防御を重視、ラシルはスピードを重視した仕様となっている。

楠木 遥歌ノハルカ

本編のヒロイン。若干空気気味（笑）樹のクラスメイトの少女。咲希とは親友と呼べるほどの仲だが、性格は正反对で大人しい性格をしている。

当初、樹や湊斗との付き合いは全くと言っていいほどなかった、ゲームも咲希に付き合っただけの程度。

樹とはファンタジアナイツ内で偶然出会ったことから付き合いを持つようになる。その流れで湊斗とも付き合いが出来る。

ファンタジアナイツでは、自身の同名のキャラでプレイ。因みに本名を使っているのは思い浮かばなかったから。

綾瀬 咲希ノソレル

樹のクラスメイトで友人。社交的で顔は広いが、深く付き合うことはあまりない。ただし、遥歌とは性格が正反对ながらウマが合うの

か常に一緒に居るほどの仲。

樹と湊斗の話を聞き、興味を持ったことからファンタジアナイトを始める。

偶然見かけた樹達に半ば無理矢理付いて行き、そのまま空の円舞曲に入るなど高い行動力を見せる。

使用するキャラクター、ソレルは攻撃力を重視した商人。

橘 湊斗ノルシフィス

樹のクラスメイトで一年来の付き合い。樹をファンタジアナイトに誘った張本人でもある。

傍目には人畜無害という言葉が似合いそうだが、親しい相手には容赦ない一面も。

ファンタジアナイトではperpetual nocturneのサブマスターとしてプレイ。樹同様、高いプレイヤースキルを誇る。

エルナ

空の円舞曲のマスター。姉御肌な性格で、メンバーからも慕われている。

イベント（というには少し大袈裟だが）もよくしており、樹よりもマスターらしい。

戦闘では前衛を務め、高い防御力から敵の攻撃を引き受けることが多い。

リアルでは受験を間近に控えた女子高生。成績に余裕があるということ、受験を控えながらもプレイしていた。また、リシュリーとは同じ学校の同級生。

夏休みの終わりに合わせ休止する。

リシュリー

空の円舞曲のサブマスター。因みにサブマスターは正式な役職ではなく、周囲が言っているだけである。本人も承諾していないのだが、

メンバーからもそう認識されているため、半ば諦め状態である。普段、エルナと組んでいる為か魔法系に特化している。僧侶系から魔術師系へとクラスチェンジをしてきた為、攻撃、支援どちらもこなせる、ギルド狩りではまさにパーティーの生命線とも言うべき存在。

リアルはエルナと同じ受験生。エルナと同じく夏休みの終わりに合わせ休止した。

アルタス

空の円舞曲のメンバーの一人。

蒐集癖を持っており、剣をよく集めている。

戦闘では前衛を務めるが、敵を見つけた瞬間突っ込んでしまうため（戦闘限定の）トラブルメーカーでもある。

ウイシュナ

空の円舞曲のメンバー。プリースト。

ギルドの雰囲気も相まって基本まったりのためレベルは消して高くは無い。だが、アルタスと組んでいることもあり、プレイヤースキルは高く、時折組んだメンバーからは一目置かれるほど。

ギルドで狩りに行くときはリシュリーと共にパーティーの生命線を握る。

ファティマ

perpetual nocturneのメンバー。

偶然ユグドとパーティーを組んだのを切っ掛けにギルドに入る事になる。

魔法による戦闘を基本としているが、杖による物理攻撃もこなす。

イリス

perpetual nocturneのメンバー。



ミュシャとよく組んでいるが、他のメンバーから見るとパートナーというより保護者。

perpetual nocturne 勢の中では珍しくプレイヤースキルを駆使して戦うタイプではなく、魔法による攻撃と属性の付与に終始している。

ミュシャ

perpetual nocturne のムードメーカー。

ユグドのことを気に入っているらしく、何故か懐いている（恋愛感情は無し）

ギルドに入って間もないが、やはり多分に漏れず高いプレイヤースキルを誇る。

トラデス

三大ギルドの一つ、ソニア 荆棘の森のマスター。

樹や湊斗の師匠でもある師匠にあたるエターナルエチュードのマスターとは知り合いだったようで、樹や湊斗、perpetual nocturne のことを気に掛けている。

ヨシノ

ソニア 荆棘の森のメンバー。三大ギルドに居る事を誇りに思っているようで、他者を若干見下したような態度をとる。

ギルド

空の円舞曲 ワルツ

エルナが立ち上げたギルド。

少数で構成された、まったり中心。

夏休みの終わりに、perpetual nocturne と合併

する形で解散となる。

ペーペチユアル  
perpetual nocturne

ユグド、ルシフィスが立ち上げたギルド。

少数ながらも全員が高いプレイヤースキルを持つ。

ファンタジアナイツプレイヤーで知らないものはいないほどの騒ぎを起こし、しばらく活動休止となるが、無事復帰。その際にメンバーが大幅に増える事となる。

ソニア  
フォーレスト  
荆棘の森

ファンタジアナイツにある、三大ギルドと評される特別大きく人数も多いギルドの一角を担っている。マスターはトラデス。

因みに本編中には出ていないが残り二つは「静寂の泉」と「ブレイブヴォルケーノ」

エターナルエチュード

ユグドとルシフィスが初めに所属していたギルド。

少数精鋭で構成されたギルド。全員がレベル、プレイヤースキル共に高く、同規模もギルドでは最強と歌われるほど。

現在は、マスターの引退に伴い解散した。

## キャラ紹介（後書き）

こんなとこまで見てくださった方ありがとうございます。以前から書いてたキャラ紹介です。割り込み投稿の機能がもつと前からあればエピソードできれいに追われたんですけどね。まあ、こればかりは仕方ないですね。

二年もの間、拙い文章で構成もまだまだ甘いこの小説に付き合っていたきありがとうございました。飽き性+モチベーションは下がりっぱなしなオレが最後まで書けたのも見に来て頂いた皆さんのおかげです。書き込みなんかホント励みになりました。

とりあえず最後に今後の予定など。

随分前からあとがきでネタにしていたストーリー動画の方をいい加減どうにかしていこうかと思っています。あと、実況とかもしたいですね。まあ、こっちはストーリーをどうにかしてからですがね。

小説の方はしばらく書くつもりはないですが、なにかあれば書くかも。マードーゲームの書き直しとか需要があるならこれの続きも書きたいと思います。……動画を作り始めるなら確実にそんな暇はなくなるでしょうね。まあ、期待は一切しないでくださいってことで。

それでは、またどこかで見かけることがあればそのときはよろしくです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8928d/>

---

ファンタジアナイツ

2010年10月8日13時05分発行